乙女の世界に飛び込んで

白い烏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
乙女の世界に飛び込んで

【Ｎコード】
Ｎ５９３１Ｐ

【作者名】
白い烏

【あらすじ】
この作品は、キャラメルＢＯＸ様の発表したゲーム、『処女はお姉さまに恋してる』の二次創作です。
※キャラメルＢＯＸが製作したデータを元に、二次創作者が自ら作成したデータ（プログラム・画像・音楽・音声・テキスト等）の使用は問題ありません。
とのキャラメルＢＯＸ様の二次創作ガイドラインに則り、執筆させて頂きます。

あらすじ。突然『おとボク』の世界にトリップしてしまった主人公。
主人公は原作の彼女達をどう関わっていくか。

処女作で、無謀な作品を考えてしまいました。
原作キャラと違う性格になってしまいますので、そう言うのを望まない方は、読まない事をお勧めします。

プロローグ1　異変の始まり（前書き）

宮小路瑞穂が卒業後、妃宮千早が入学してくるまでの、空白期間が物語の全てです。
オリジナルキャラが結構出てしまいます。
あらすじにも載せましたが処女作なので、御見苦しい点は多々あると思います。

駄作ですが、よろしくお願いします

プロローグ1　異変の始まり

何時もの朝が来た。

毎度毎度だが、何故か体が重い。

まあ、こんな事を言ってた所で、やらねばならない事もあるので、体を起こす。

記憶が正しければ、今日は一年遅れで入学する筈の高校の、下見に行く日である。

体の重さはまぁ、時間が経てば回復するから放置。

母さんに叩き起こされる前に、ベッドから出ましょう。

ふと新しい制服に目が行った。

工工エエェェ（。ロ。;）ェェエエ工工

私の行く高校ってブレザータイプじゃなかった?何でワンンピースタイプ?

しかも、胸の部分だけ、どこの十八禁ゲームですか?と聞きたくなる様な不思議すぎる制服。

まだ夢の世界の住人なんだろうか?とりあえず頬を抓って見る。

痛い。夢じゃない。幻覚でも見てる？

訳が分からない。とりあえず母さんに確認を取るしか無さそうだ。

謎の制服を手に取り、寝巻き姿のまま眼鏡を掛け、朝食の準備をしている筈の母さんの所へ行く。

「ねえ母さん」

「あらお早う司（つかさ）」

返事をくれた母さんは、何時もの母さんだ。

アメリカ生まれのブロンドヘアーの母さんだが、さすがに日本で十六年以上も暮していると、日本語は普通に返してくれる。

「うん、お早う。所で、私の制服って変なんだけど…」

料理の手を止め、母さんが振り返る。

「え？どこが？聖應女学院（せいおうじょがくいん）の制服でしょ？」

はい？今何と言いました？

「ええ？私が通う高校って公立海生学院でしょ？」

母さんが目を見張る。そしておもむろに私の額に手を当ててきた。

「何やってるの？」

「司が熱でもあるのかと思ったけど。熱は無いようね」

そしてさらに。

「司が頑張って聖應に受験して、かなり良い成績で合格したって言ったのは、貴女でしょ？司」

そう言って、ダイニングテーブルの上に置かれていた、合格通知を見せてくれた。

確かにそこには『聖應女学院合格通知』があった。

「……とりあえず着替えて来る」

「ええ。忘れてないと思うけど、今日は下見の日よ」

納得は出来て無いが、文句を言って母さんを困らせるつもりは無いので、とりあえず着替えて母さんの元に戻る。

「あら。似合ってるじゃない。何処がおかしいのか、母さんは分からないわ」

「そう？有難う」

食事を済ませ、聖應女学院に母さんと向かう。

通学時間が片道2時間は、さすがに辛すぎるので、学生寮から通う事で私は納得したらしい。

「運転手付きの自家用車で通学する娘もいる学園だけど、さすがに家では無理ね」

とは母さんの台詞。父さんじゃあるまいし、無理でしょう。

運転手付きの自家用車なんて、あぶない方々から狙ってくださいと言ってる様な物でしょう。私は二度目はごめんだ。

聖應女学院のある駅まで付いた。途中寝ていて、母さんに起こされる不始末。

駅から学園までが更に遠く、仕方なくタクシーで向かう事となった。

「うわあ、懐かしいわここ、変わってないわね…」

「え？母さんここに通ってたの？」

「あら、言ってなかった？二年間だけだったけど、私もここに通ってたのよ」

「へ～。ここのＯＧなんだね」

「聖應で流暢な日本語を覚えたと言っても、過言ではないわね」

それってまさかの、お嬢様学校と言う場所なのかな…

「ここは所謂、良家の娘さんが大多数通ってる場所で、礼儀作法は嫌でも覚えさせられたわね」

うわ～。そんな学園なの？ここに三年も通えと？

思わず逃げたくなったが、色々な問題により、近くに通える学校はもう無い。

これは開き直るしか無い。お稽古事をやっていたのが、こんな機会で役に立つのは予想外だった。

ここで話をしていても始まらないので、母さんの記憶を頼りに寮まで付いた。

前の寮生がまだ暮している場合もあり、とりあえず今日は外の見学のみとなった。

学院までの行き方も教えてもらった。

母さんの話だと、暮す寮の部屋の壁紙や家具については、限度はあるが自由に決められるとの事。

「母さんにその辺は任せる」

と言った事を、あとで後悔する事になるなんて、今の私に分かる筈も無かった。

入学式前の春休みなので運動部の部員がちらほら見えたが、一見す

ると普通の学生にしか見えなかった。

……

そう言う学院らしいが、今の時点では判断がしにくい。＞ｂｒ＜

プロローグ1　異変の始まり（後書き）

主人公設定については、プロローグが終わってから出す予定です。

プロローグ2　映画の様な夢　～その1～（前書き）

主人公が『おとボク』の世界を理解する為の前振りです。

あらすじにも載せましたが、
キャラメルＢＯＸが製作したデータを元に、二次創作者が自ら作成したデータ（プログラム・画像・音楽・音声・テキスト等）の使用は問題ありません
と言う事により、原作の台詞を引用させて頂いています。

プロローグ2　映画の様な夢　～その1～

とりあえず学院と寮の下見は終わらせ、母さんは用事があるとかで、駅で分かれた。

私は素直に家へ帰る事にする。考えたい事もあったから。

帰りの列車は空いていた。まあ帰宅ラッシュに巻き込まれるのも良い気がしないので、これはこれで良しとする。

座席に座った途端、酷い眠気が襲ってきた。

なんでだろ……夕べ夜更かしとかはしてないのに……だめだ瞼が重すぎる……

夢を見ていた。

夢なのだから、内容がさっぱりでもしかたない。

だからってこの夢は何？むしろ映画を見ている感じすらする。

「失礼します」

男の方。久石さんが『僕』の前にやってきた

ちょっとまて。久石さんって誰?『僕』って誰?突っ込める夢って何?

『久石さんは、亡くなった祖父の弁護士さんだ』

解説ありがとう…

「お久しぶりで御座います。ミ○ホ様」

何で伏字?いや、聞こえてないと言うのが正解なのかな?

「本日はその、光久様のご遺言の事でお話にあがりました」

又謎の名前だ。話は続いている。

久石さんは、鞄から一冊の入学案内書をテーブルに出した

「これは、聖應女学院の入学案内?…で、これがどうかしたのですか?」

「その…非常に申し上げにくいのですが…」

久石さんは非常に言いにくそうであった。

「ですから、ミ○ホ様には、この学院に編入して頂きたく…」

おいおいおい。流れが怖いんですけど。

「編入って、編入もなにも、ここは女学院なんですよ!?」

まあそう突っ込むでしょうねぇ

「そこであたしの出番ってわけ」

と隣にいた女性の声。

「出番って…まさか…」

「ふふ～ん。その、ま・さ・かV」

最後にハートマークが付いている様に聞こえたのは、決して聞き間違いでは無いはず。

「女装して通えって言うの？冗談じゃないよ！？」

普通に怒るだろうね、そりゃ。

「でも、お祖父様のご遺言って事だし、しかたないんじゃないの？」

正論かも知れ無いが、それって遺言？

「遺言って、ひょっとして、それが遺言なの？」

どうやら正解らしい。

「さ、左様に御座います…私といたしましても、前代未聞のご遺言では御座いますが、

生前光久様が『これは曲げてでも実現させろ』と、私に涙ながらにお託しになられた遺言なので御座います」

え〜。

「冗談…です…よね？」

まあ、そう聞きたい気持ちは分からないでもない。

「あ、ちなみに、六月から転校できる様に、手続き全般すっかりすませてあるから安心してね」

と女の子。どう言う詐欺ですかそれ…

なんだかんだでうまく説得させられ、ミ○ホは年代物の女学院寮に付いた。

あれ？あそこって、母さんと一緒に下見した寮？どうなってんのこの夢…

女の子に連れられて入った先にあった部屋は、なんて言うか、『アンティークのピンクドールハウス』だった。

そして女の子の言われるがまま、六十分後には完璧な女の子が出来上がった。

ついでに、シリコンパッドのブラを付けさせられる始末。

「ウチの学校はお上品で通ってて、お化粧してる子はそんなに多く無いから、なるべくお化粧はしない方向で行くけど、ミ○ホちゃんがいくら綺麗でも、ベースは男の子だからね。スキン

ケアくらいはしっかりしないと」

彼（彼女?）の部屋がノックされ、カ○オカ　ユ○リと言う子が自己紹介してきた。

だからなぜ、名前が伏せられるのだろう…

「あたし?あたしも学校行ったらお嬢様言葉だもん。これでも猫かぶり歴長いからね」

確信犯にしか見えませんが何か?

ミ○ホが一息付き外に出ると、一瞬、人間ではなく妖精か何かかと思える美女との出会いがあり、
階段では小さな女の子が大きなお盆を持って悪戦苦闘していた。

見ていられない為、後ろから手を出す。

女の子を助け、お盆を代わりに持ってあげる。

女の子はスオ○イン　カ○と名乗った。

そして部屋の中に入り、お茶（紅茶）を淹れてくれた。

「ミ○ホお姉さまは外からいらっしゃったのでしたね…下級生は上級生のお世話をするのが、この寮の仕来りなのですよ」

と、カ○は優雅に返事をしてくれた。

カ○ちゃんとしては、僕（ミ○ホ）がこなければ、余計な仕事は増えなかった。と言う事では…

と言う事を聞くと、カ○はちょっと驚いた顔を見せ、その後きりっとした表情になり、更に弱気な顔になった。

「いいえ！カ○、お姉さまみたいな方がいらして下さって、とっても嬉しいのです。お世話できるお姉さまが出来て…今まで、ちょっとユ○リちゃんが羨ましかったから…その…」

そう言う考え方もあるのか…

ミ○ホはこんな言葉でカ○をたしなめて、下がらせた。

「ふふっ…でも、今度からお茶を持ってくるときは、もっと小さなお盆で運んでいりゃっしゃい。ね？」

朝五時に起こされ、女性としての身支度を整え、朝食の用意されている部屋へ移動すると、下級生たちは既に席に付いていた様である。

「お早う御座います。お姉さま方」

「お早う御座いますなのです」

そして、寮での生活の説明がなされた。

「朝食は七時から。一応、特別の用事が無い限りは寮生が全員揃っ

て摂ることになってる。これは学校の無い日曜日も同様」

「まあ、あたしとユ○リは陸上部の朝練があるから、その時はカ○ちゃんと二人で食べてね。
これでやっと、カ○ちゃんも一人でご飯を食べずに済んで、万々歳だね」

「お昼は寮母さんにお弁当をお願いできるわ。今日の分はあたしが頼んでおいたから、
明日から必要な日には厨房のホワイトボードに名前を書いておいてね。
食堂で昼食を摂る事も出来るから、気分で選んでも良いわね」

ミ○ホは何処から来たのかと言う話に進み、開正学園からだと答える。

公立海生学院とヒジョーに似てる名前なのは、なんなんでしょう…

「か、かいせいって…進学校の中ではトップクラスって言われてる、あの開正ですかぁっ?!」

こっちの世界でも、公立海生学院はトップクラスらしいけど、偶然にしては出来すぎよねぇ…

そして、なぜこの時期に来たか?と問われ、遺言だとマ○アが説明する。

「ま、ミ○ホちゃんの場合、言葉以外はほとんどの所完璧なんだけど…なにしろ
昔から立ち方なんて仕込まれてるし、お茶にお花に日舞に薙刀。書

道に空手に合気道まで標準装備だから。
でもまあ、そのせでレディとしては今ひとつって言うか…だからまあ、今時珍しく修身とか礼儀作法とかの科目が残ってて、普段もお嬢様言葉が必要な聖應で修行してこいってことなんでしょう」

カ○が悲痛な表情をミ○ホに向けながら、

「そうだったんですかぁ…でも、折角のエリートの道を歩いていらっしゃったいましたのに…」

だがミ○ホは、

「…そうね、…でも私、お祖父様のことが大好きでしたから……その願いは叶えて差し上げたい。と思ったの」

と優しく返した。

食事は、学校の基本がイギリス式らしいので、日本式の朝食が欲しければ、自分で作れ。と言う事らしい。

そして学院の学院長部屋に移動し、挨拶や説明を行う。

「あなたが光久さんのお孫さん…そうね、顔立ちが幸穂（さちほ）さんにそっくりですね」

だから、幸穂ってだれ…

「学院長、母をご存知なのですか？」

どうやらミ〇ホの母親らしい。

「ええ、覚えています。私（わたくし）の教え子でしたからねえ…」

「母は、ここの卒業生だったのですか…」

え？母親から聞いてないの？

「そう…知らなかったの…いえ、知る事が出来なかったのですね」

「ふふ…それにしても、大変な事になりましたね、ミ〇ホさん」

話が飛んだな…『知る事が出来なかった』ってのは、つまりは物心付く前に…って事だろう。

「見たかったのですよ…幸穂さんの命がちゃんと受け継がれている…と言う事を、この目で」

「年寄りというのはね、過去の思い出にすがって生きていくものなのですよ」

そう言って、学園長は呼び出し用の小さなベルを二三度振る。

美形な女性の教師が部屋に入ってきた。

「失礼します」

学園長が彼女を紹介する。

「こちらが、カジ○ラ　ヒ○コ先生です」

いい加減、伏字はやめてもらえませんか?夢に文句言っても無理でしょうけどさぁ…

「……まぁ」

挨拶して、目が合って、返事までに約二秒。

「まぁまぁまぁ、可愛いｖ」

この夢の方々は、語尾にハートマークが付くのは仕様なのでしょうか…

とか言ってると、話が進んでいる。

「もし、何か困ったことがあれば、カジ○ラ先生に相談してください。私と教頭先生、カジ○ラ先生以外は貴方が男性である事を知りませんから、良いですね?」

学園長の部屋を出て、教室に向かう様だ。

「あなたのクラスはＡです。担任は私」

ご都合主義すぎませんか?さすが映画（なのか?）。あ、会話を聞きそびれてる。

「でも、気をつけないとダメよ?男の子と女の子って、些細なとこ

ろが違うから…なにか気になることや嫌な予感がしたら、
私かミ〇ドさんに相談するのよ？」

プロローグ２　映画の様な夢　～その１～（後書き）

プロローグはまだ続きます。
キャラメルＢＯＸ様からの、引用に対してのクレームがあった場合は、
直ちに当作品を削除・封印致します。

プロローグ3　映画の様な夢　～その2～（前書き）

前振りはまだ続きます。

「こんな前振りは不要だろ?」と思う方もいるとは思います。
構成上こうしないと、後に響く場面の保険だと曲解してお付き合い下さい。

プロローグ3　映画の様な夢　～その2～

舞台が変わった。ついに教室に入ることになったようだ。

ブラがむず痒い。スカートがスースーする。

……クラス中の女の子…いや女の子しかいないのは当たり前。が、全員の視線が僕の全身に集中して、
今まで気にならなかった所が、俄然気になりだした。

性別ごまかしてるからねぇ……どうでも良いんですが、この映画（夢？）はいつまで続くのですか？

「…というわけで、今日から皆さんと一緒に勉強することになりました、ミヤ○コウジ　ミ○ホさんです。さ、ご挨拶なさって？」

ミ○ホが姿勢を正し、みんなに見えないように深呼吸を一回行った。

「……ミヤ○コウジ　ミ○ホです。みなさん、よろしくお願いいたします」

ざわざわ…

…何このざわめき？

「まあ…なんてお美しい方なのかしら…」

黄色い声がクラス内を埋め出した。

「本当。同姓の私たちですら見惚れてしまうくらい…」

クラスの女性のほぼ全てが頬が紅い。

「お聞きになって？あのお美しさの上に、編入試験代わりの中間考査の成績…学年トップですって」

「…そうなんですの？それなのに柔和（にゅうわ）そうで、素敵ですわね…」

とりあえず、掴みは問題無かった模様である。

「『エルダー』というのはね、その年の最も素晴らしい最上級生に送られる、いわば称号ね。
生徒で構成される選出委員会によって、今月発表されるの。
我が校の生徒にとって、最高の栄誉と言われているのよ」

「え、ＭＶＰみたいなものですか…？」

と、ミ○ホ。どうやら『エルダー』って何かって話になっている模様だ。

「ふふっ、面白い例え方をするのね。まあ、当らずとも遠からず、かしらね。
今年は生徒会長のイツ○シマさん位しか候補に挙がっていなかったら、
ひょっとしたら、ミ○ホさん大穴かも知れないわね」

女装してる男の子にそれをやらせるのは問題無い…と？

マ○アがその話を聞いていたらしい。なにやら企んだ模様である。

教室の中でミ○ホが小さなため息を付く。

そのため息に気づかれ、隣の女性に声を掛けられる。

以前に合ってる妖精さんっぽい女性だ。

ジュ○ジョウ　○オンと言うらしい。

雑談をしていると、カ○オカ　ユ○リから取次ぎを頼まれた生徒に呼ばれた。

直接行くのも駄目らしい。

ジュ○ジョウ　○オンには、なんとなくミ○ホの正体がばれている気がする。

私が隠しているのと同じ雰囲気を出しているのが感じられる。

なんとかトイレを済ませ、戻ってきたら○オンが何気ない一言を言ってきた。

「ズボンのチャックが開いてましてよ?」

「あっ?えっ?すいません…」

反応しちゃ駄目でしょ…

「ミ○ホさんてやっぱり…」

あっさりばれた。

だが、彼女はそれを秘密にしてくれると言う。

何とも、不思議な魅力を持っている人だ。

学校が終わり、寮に戻り、カ○に『エルダー制度』について尋ねるミ○ホ。

「『エルダー』というのは、『エルダーシスター（Ｅｌｄｅｒ　ｓｉｓｔｅｒ）』…つまり、一番上のお姉さま、と言う意味です。長いので皆さん、エルダーと読んでいらっしゃるのですよ」

「『手本となる最上級生を生徒達自ら選出する』と言う目的のためにある制度で、年に一回、
六月末に生徒達による選考委員会から発表されますです」

生徒会長とは違うのか？と聞くと、

「ええと、ですね…生徒会役員は前の年度の終わり頃に、前期役員の指名推薦と信任選挙を経て決定されます。だから、全く別の物なのですよ～」

「別のもの…それって、選ばれるとどうなるの？選ばれる事自体に

は意味があるのでしょう？」

「どうなのでしょう？選ばれる事自体は名誉ですけど、意味…と言うのはわかりませんです」

それは一体、どう言う制度なのだろう…

「ただ、『エルダー』は全生徒の指示でのみ誕生しますから、その発言力は現職の生徒会長をすら凌駕する事もあるのですよ～」

「何しろ、エルダーになるためには、全生徒の７５％以上って言う、とんでもない得票数が必要で、達しない場合は空席になる事もあるのですよ～」

７５％だって？普通に無理じゃ…

「あ、ミ○ホお姉さま、今それは無理だとお思いになりましたですね？」

え、違うの？

「エルダー投票に於いては、ちょっと変わった制度があるのですよ」

「得票者が他の得票者を支持することによって、その人の持っている得票を支持した相手に譲渡する。と言うシステムなのです」

え～と、つまり、ＡさんとＢさんが７５％未満で候補に挙がった場合、

Ａさんの持ってる得票をＢさんに渡す事が出切る。って事かな。

「マ〇アお姉さまに聞いたところではほぼ毎回、誰かが７５％に達するまで票の譲り合いが行われるらしいのですよ。得票者同士の仲が悪い場合は別として」

問題は起こらないの？とミ〇ホ。

「問題が起きた事は無いようなのです。自分が推薦した人が、更に推薦した人と言う事になりますから、文句の付けようは無いと思うのですよ？」

なるほど。そう言う考え方もあるのか。

「エルダーに選出された生徒は、その卒業までの間、全ての生徒から『お姉さま』と、尊敬を込まれて呼ばれる事になるのですよ～」

「全てって…、最上級生にも？」

「無論です。それこそが『エルダーシスター』たる由縁ですから。名前を頭に付けずに『お姉さま』と言った場合、この学校ではエルダーのお姉さまただ一人を指しますのです。下級生が上級生を呼ばせて頂く時には、お名前をつけて『お姉さま』と呼ぶのが原則となっています」

仕来たりとは言え、凄い学校だな。だからカ〇はミ〇ホの事を『ミ〇ホお姉さま』と呼ぶのか。

カ〇の話は続く。多少遠くてもお抱えの車で通学するお嬢様もいるとの事。

なぜカ○は寮住まいなのか?と聞いたら、彼女は暗い表情を見せ、泣き出した。

カ○は寮内に限り、ミ○ホを『お姉さま』と呼ぶ事を許可してもらった様だ。

何度も言わせてもらうが、この夢はまだ続くのですかあぁぁぁぁぁ?

プロローグ3　映画の様な夢　～その2～（後書き）

会話が数行に渡った場合、間に1行空けた方が見やすいのでしょうか？
御意見等お願いします。

ちなみに、プロローグは次回で終わりです。

プロローグ４　映画の様な夢　～その３～（前書き）

後半がグダグダになってしまった。

文才のある方が羨ましいです。

プロローグ4　映画の様な夢　～その3～

文句が通じたのかは不明だけど、話が加速する模様だ。

カ○やマ○アやユ○リが、ミ○ホをエルダーに推挙する為の裏工作を行うらしい。

更に体育の授業があると言う事で、○オンやマ○アの協力で何とか着替えはごまかしてもらい、
事なきを得た。

体育の授業中に、あろう事かミ○ホは、スリーポイントシュートを決めてしまい。注目を浴びる事となる。

人はそれを『自爆』と言う。

「基礎体力の違いですから。言ってみれば、腕が二本の人たちの中で、
腕が四本ある状態でプレイしてる」

とはミ○ホの弁。

それも○オンに言わせると、

「腕が四本あっても、上手に動かせる事が出来なければ、たとえ何本あったとしても、
二本を上手に動かせる人には勝てませんもの」

と言う事らしい。

お昼は食堂らしい。一応、全校生徒が座っても大丈夫…らしい。実際に座った所は無い模様だ。

和食の予定が、なぜかハンバーグランチになると言う優柔不断さが出た。

そして、いつの間にか通い始めて二週間が経った。

さらに、エルダーの選出用投票用紙が届けられ、ミ○ホに投票する。と言う宣言される始末。

○オンに関しては、投票する資格が無いとの事。

理由は、彼女は留年していて、尚且つ去年のエルダーだったのだが、長期入院でエルダーを空席にさせてしまった過去があったとの事。

○オンは、ミ○ホがエルダーに選ばれそうな理由をこう語る。

「そうね…あえて理由を探すなら…六月と言うタイミングで転校してきて学院中の話題をさらい、
成績優秀、眉目優麗。本人は控えめで、友達達が声をそろえて彼女は素敵。と声を大にする」

ついでに、カ○やマ○アやユ○リが、ミ○ホの噂を広めて回っているらしい。

早い話が、マ○アと言う強力なプロパガンダによって、ミヤ○コウジ　ミ○ホと言う名の虚像は、
池の表面を埋め尽くす浮き草と同様に、見る見るうちに勢いを増やし、もうすでに学園全体に葉が生えてしまった。
と言う事らしい。

ついでに、○オンが昨年のエルダーであり、彼女と一緒にいて、彼女と対等に話をしているのも影響が出てるらしい。

噂は尾ひれや背びれ、胸びれまで付いていて、学校中を泳ぎ回っている。

ついにミヤ○コウジ　ミ○ホの噂は生徒会にまで届く事になる。

ミヤ○コウジ　ミ○ホが来なければ、
生徒会長であるイツ○シマ　タ○コがエルダーになる最適者だったらしい。

更に、イツ○シマグループは、ミ○ホの本来の名前である『鏑木グループ』との間のライバル関係らしい。

六月の末。エルダー投票の集計発表の日が来た。

３－Ａクラスは、もうミ○ホがエルダーになるだろうと言う様な空気と化している。

講堂内はさらに凄い熱気であった。

さしずめ、アイドルのコンサート会場だ。とは○オンの言葉。

有効投票数のうち８２％を獲得した生徒がいた。とヒ○コ先生。

そして、エルダーシスターは『ミヤ○コウジ　ミ○ホ』と名が伝えられた。

挨拶をする時に、タ○コから待ったが掛かる。

彼女の言い分では、

「私は生徒会長として、今回のエルダー選定に異議を唱えさせていただきます。

別段、私はミヤ○コウジ　ミ○ホさんの就任自体に異議を唱える物ではありません。

ですが、エルダーシスターは本来、我が校の代表、

我が校の伝統を受け継ぐ者としての代表を選出すると言う制度であったはずです。

それを人気投票と取り違え、

転校して間もない生徒がたまたま容姿端麗であったと言うだけで祭り上げられるなど、

あまりにも屈辱的ではありませんか？！」

「ミヤ○コウジさんが悪いわけではありませんが、どうかこの制度の伝統的な意義というものを、

皆様にはもう一度ご再考いただきたいと思います」

だがこの意見も、とめる人が現れた。〇オンである。

「確かにエルダー制度は、我が学院において伝統を以って尊ばれてきた制度です。
それは代々のエルダーが『理想の女性』を体現してきた、弛まぬ努力の結果である。
といえると思います」

「残念ですが私はその歴史に泥を塗ってしまいましたが…
ですが、だからこそ言わせて頂きます。エルダーの資格は、複雑なものではありません。
その原動力は生徒の自主的な推薦であり、それに伴う憧憬です」

「生徒多数によって選ばれ、生徒全てが目標とする対象。それがエルダーの誇りであり、
原動力であるはずです。
大事なのは、ここにいるミヤ〇コウジ　ミ〇ホさんが生徒達から絶大な支持を得た。
と言うその事実。それこそが、みなの憧憬の対象となるべきエルダーの本質であり、
又、唯一の必須条件ではないでしょうか?」

強く説明すると、〇オンはその場に倒れた。

それを抱きかかえ、保健室に走り出すミ〇ホ。

軽い常習的な発作らしく、命に別状は無いとの事。

〇オンはミ〇ホに、講堂に戻ってほしいと頼み込む。

そして講堂に戻ると、大歓声でミ○ホは迎えられる。

何はともかく、ミヤ○コウジ　ミ○ホは新規エルダーになり、全校生徒から『お姉さま』と呼ばれる事となった。

…どーでも良いが、ここまでの上映時間は何時間でしょう?

ここからの流れは、なぜか異常に展開が早くなった。

ミ○ホの部屋が『開かずの部屋』だった事が発覚したりとか。

あらかじめ設置してあったクローゼットの中から、やたら明るい幽霊が出てきた事とか。

幽霊をユ○リやタ○コは苦手だった事とか。

その幽霊にミ○ホが男である事をばらす事とか。

実はミ○ホの母親もエルダーで、ミ○ホが使っている部屋で暮していた事とか。

プール授業があるのだが、ミ○ホは風邪を引いて一回目は休み、二回目は生理休暇を取った事とか。

プールを休むのは、エルダーは泳げないのでは?と言う風聞が流れた事とか。

幽霊がミ○ホの体を乗っ取り（?）、無事にプール授業を受けた事

とか。

ヒ〇コの心の闇を、ミ〇ホが助けた事とか。

そんなこんなで、八月が終わった。

九月に入り、衣替えが行われ、カ〇の付けているリボンについて意見を生徒会が行い、

ミ〇ホが生徒会の意見を撤回させると言う、『聖應の十月革命』と言う伝説を作った。

そして学院祭が近づき、にわかに活気付いてきた。

生徒会主導の企画について、タ〇コが難色を示している。

本人が出るのが嫌な様だ。

「現在生徒会には、お姉さまを主役にした劇をやって欲しいって言うリクエストが殺到しているらしいです」

とユ〇リの弁。

降誕祭の話も出来た。

早い話がクリスマスのダンスパーティーらしい。

エルダーは、ダンスのパートナー（男性側のステップ）にて参加し、

パートナーのいない、
あるいは見つからなかった、エルダーと踊りたい。
と言う生徒の要望を出来るだけ叶えてあげるらしい。

カ○が主役の劇の話題が出た。

ケイ（何故か伏せらせなかった）が演劇部の部長で、カ○を主演にさせ、
ファンタジーらしき舞台にする模様だ。

ミ○ホ主演で劇をやって欲しいと生徒会からの正規な依頼が発生し、
○オンも一緒に劇を行いたいと言う事を言ってきた。

マ○アの様子もおかしい。なにがどうとは言えないが、しばらく距離を置く事とした。

そして数日経ち、マ○アはミ○ホを独り占めしたかった事を自覚する様にもなっていた。

学院祭では３－Ａは、エルダーを排出しているのでクラス単位で協力する。と言う事らしい。

ミ○ホは○オンやタ○コと劇の練習も行い始め、マ○アの事は心配してる余裕はない模様だ。

劇の練習中にキスシーンでタ○コが狼狽する。と言ったハプニングはあったが、おおむね問題は無い様には見えた。

マ〇アが風邪で寝込み、ミ〇ホが看病を行った際に、マ〇アの本音が少しは聞けた。

「ミ〇ホは変わって欲しくなかった。いつまでも私（マ〇ア）の事だけを見ていて欲しかった」

要約するとこんな事だった。

そして学院際の当日を迎える。

ミ〇ホはエルダーとして、いくつかの教室を見て回り、声を掛けてあげたりした。

カ〇の演劇も見てあげたりもした。

ミ〇ホ主演の演劇も、途中でタ〇コの衣装が破けてしまうハプニングはあったが、ミ〇ホの機転で無事終了した。

時は流れ、降誕祭の時期が来た。

悩みを持っている人の姿が二・三人出てきた。

それを裏に流しつつ、降誕祭の流れが加速する。

降誕祭当日まで日は流れた。

ミ〇ホはホストとして出席し、なるべく色々な生徒を一緒に踊ってあげた。

さらに時は流れ、冬休みを経て新学期となった。

…九月からの流れが異常に早いが、重要な事は無いと言う映画なのだろうか？

これでこの映画が終わったら、入場料返せの流れになるのでは…

政界財界人の家族を狙った組織的な誘拐事件が多発しているので、くれぐれも下校時には気をつけろ。と言う訓示が朝礼で出た。

それでもタ○コは生徒会の引継ぎ等、ミ○ホは図書室での居残りで遅くなり、

タ○コが誘拐犯に狙われる事件が発生する。

たまたま遅くまでいたミ○ホがそれに気が付き、タ○コをかろうじて救う事に成功する。

が、この事でタ○コに、ミ○ホが男性である事がばれてしまう。

タ○コは助けてもらった恩もあり、ミ○ホの事は秘密にすると言ってくれた。

更に更に時は流れ、ミ○ホは無事にエルダーとしてやり遂げ、卒業式を迎える事となった。

絶大な支持を得、タ○コやマ○アとも仲良くなり、伝説的なエルダーとして約九ヶ月の、

『女装して学園に行く』ミッションは、終わりを告げた。

長い長い夢と言う名の映画上映が終わった。

上映時間で体感三時間と言うオチ無し映画だった。

目が覚めておもむろに周りや腕時計を見て驚いた。

あれから五秒と進んでいない時計の時間がそこにあった。

この列車は途中で回送列車になる為、居眠りしていて丸々一日経った、などと言う事はありえない。

駅員が問答無用で起こすし、それでも起きなければ、何かしらの対処は行っていたはず。

例えば病院に担ぎ込まれる。とか。

ついでに言えば、腕時計の日付は下見に行った筈のその日を示している。

「どう言う事…？」

理解の範疇外でしかない。

あえて言うなら、『体感三時間の選択肢無しのアドベンチャーゲーム（？）をやらされて、
バッドエンドっぽい内容だが、それが実際には五秒で終わった』と言う、
自分で言ってて謎の現象だった。

「こう言うのをなんて言うんだっけ…フラッシュバック？」

エピソード記憶って言った方が近いのかな…それともフラッシュバルブ記憶？

心理学は学んでないので、正確には不明。

とにかく、ミヤ〇コウジ　ミ〇ホが女装して聖應女学院に通った。

と言うその理由とか、学院内での大まかな出来事等を見せ付けられた。

誰が？なぜ？何の為に？

ミヤ〇コウジ　ミ〇ホが今何処かで死に掛けてて、聖應女学院での事を思い出し、

その内容の電波を私が受けたとか？

親戚にミヤ〇コウジと言う、伏せられてはいるが、そんなご大層な名前はいなかった筈。

そんな友達も、ましてや恋人もいない。いればフルネーム位思い出すでしょう…

あの映画モドキが何年前の事だったのはは定かではないが、実際にあった事だと仮定するならば、

ここはその映画モドキの世界だと言える。

だって、聖應女学院は実在していたし、そして私が今でも袖を通しているあの制服を、
映画モドキの中でも生徒は着ていた。

いつ、どのタイミングでこの映画モドキの世界に入り込んだのは分からないが、
ここで私は生きていくしか無い。

のっけから憂鬱だ…

プロローグ４　映画の様な夢　～その３～（後書き）

プロローグはこれにて終了です。

次は主人公設定になります。

主人公設定

神加賀美　司　（ミカガミ　ツカサ）

名前の意味：
（長として）　農政を司る　宗派を司る　〈学会を〉牛耳る　司管
〈事業を〉掌理〈する〉　支配　〈雑誌〉を主宰〈する〉

女性

年齢　１７　（高校１年生で聖應女学院に入学）

身長　１６２ｃｍ

体重　３（ピー）？

スリーサイズ　…　スーパーモデル形

性格は普通　突っ込み気質　超低血圧

血液型　Ｒｈ－Ｏマイナス　９／１０生まれ乙女座

祖母がイギリス人でその血をかなり受け、髪の毛が白銀の三つ編みを腰まで伸ばす
髪の毛を切ろうとしたら、母が泣いて止める為、やむなく伸ばしてる

顔は母方の祖母と、母を合わせた超の付く美顔

容姿は、１００人中１００人が必ず『美形』と言うが、本人にその自覚まったく無し

日本人の父と、アメリカ人の母の間に生まれ、右目が青色、左目が金色のオッドアイ

肌色は欧米に多く見られる白い肌

オッドアイや白銀の髪の毛の所為で、子供の頃にイジメにあい、対人恐怖症に陥った過去がある

オッドアイを隠す為、度の入ってない薄い茶色の入った眼鏡を掛けている

紅茶について、結構な知識を持っている

家族構成について：

父親は有名な一流企業の幹部

母親は基本的には専業主婦　気が向くと近所のデパートの店員をやっている

主人公設定（後書き）

実際に神加賀美と言うお名前があったならば申し訳ありません。
悪意はありません。

１７で高校一年生って事は留年したのか？と言う疑問も出るでしょうが、
現時点では、それについては語る事が出来ません。
その辺については、いずれ話の中で出します。

次から本編です。

第一章　新しき伝説の始まり…かも？　第一話（前書き）

これより本編です。

ＰＣ版「処女～」及び「２人のエルダー」の彼女達と、一部オリキャラが出てきます。

ＰＣ版のイメージとは違った印象になってしまっています。

第一章　新しき伝説の始まり…かも？　第一話

西暦２０ＸＸ年４月某日。

聖應女学院
例の学院の入寮日が二日後となっていた。

母さんより、必要な物（着替えや私服等）は既に寮に届いているとの事。

それで、こっちにいてもやる事が無い為、学院の寮に今日行く事とした。当然向こう（寮）には連絡済みである。

いきなり行けば、当然何も準備出来てないのだから、食事すら摂れない可能性だってある。それは避けたかった。

早速学院に到着。無論例の制服は着てきた。この制服に慣れる日は来るのだろうか…

学院内の敷地へ入ると、何故か視線を多く感じ取られた。

なぜ？服の着かたが間違ってた？

私が気が付かないだけで、下着とかがどこかはみ出してるのだろうか…

チェックしてみたが、不振な場所は見つけられない。周りの生徒をちらっと見るが服装に問題は見つけられない。

仕方ないから、近くにたまたまいた生徒さんに聞いてみる。

「あの…すみません」

「は！はい。なんでしょうか？」

「私の制服か顔に何か問題があるのでしょうか？やたら視線を感じるのですが…」

聞かれた生徒は頬を紅く染め、しどろもどろになりながらも返事をくれた。

「いえ……あの……失礼かとは思いますが、貴女がとてもお美しく、見惚れてしまいまいた……／／／」

美しい？初めて言われた気がする。

と、言うか他の誰かと見間違っているのだろう。そう言う事にしておく。

が、そうでも無いのだが、本人はそれに気が付いてない。

「見てあのお美しいお方…新入生でしょうか？あんなお方と一緒のクラスになれたら、
どれだけ幸せなのでしょうか…」

とか…

「あの美貌を一言で表現するのは、私には無理です…」

とか…

本人には届いていないのだが、周りの生徒達からは、絶賛の言葉が出ている模様だった。

曰く、透き通る様な白い肌ですね…外国のお方でしょうか？

曰く、光り輝く肌と髪の毛は、妖精か天使が舞い降りてきたのかと勘違いしてしまします。

曰く、目を奪われる。呼吸が止まる。瞬きするのがもったいないです。

曰く、本当に彼女はそこにいるのでしょうか？実は幻覚を見ているのではないでしょうか？

誰かが小声でこうも言った。

「あの美しさはありえません……でも、話しかけられたら、私は思わず跪(ひざまず)いてしまうかもです……」

本人のあずかり知らぬ所で、司の噂は光の速度並に広がっていた。

母さんと一緒に下見に来た寮へ付いた。視線は未だに感じるが、そちらを見ると、何故か皆さん顔を紅く染め視線を避ける。

しょうがないので、寮の呼び鈴を鳴らす。第一印象が大事なので、似非でも良いから笑顔を作っておく。

「は～いなのですよ～」

小さな生徒が扉を開けた。大きなピンクのリボンが印象的な生徒だ。
身長は１５０あるかどうか・・・

「連絡を入れて置いた神加賀美（みかがみ）　司（つかさ）ですが…」

リボンの少女は、司を凝視してこう言った。

「て……天使様……」

「はい？」

この子は今なんと？私は難聴では無かった筈。

「あ。いえその……御免なさいなのです。お話は伺っていますのですよ。あぁ、自己紹介が遅れました。
私は周防院（すおういん）　奏（かな）と申します。こう見えても三年生なのですよ」

ｏ（。◇。ｏ）ぇ

ちょっと待った。その名前って『あの夢』に出てきたカ○って子？
夢の中ではせいぜい二年生。じゃあ、あの夢は去年か最悪でも二年前？

「あの～…なにか？」

彼女を見たまま固まっていたらしい。

「あ。いえ、申し訳ありません。似た名前の知り合いがいたものでつい…」

とりあえず似非笑顔全開で答えておく。

玄関で立ち話をしていても仕様が無いので、食堂兼リビングに案内され、そこでお話を、と言う事になった。

「改めまして、私が寮の寮監と言う事になっている周防院　奏と申しますのですよ。もう一人寮生で上岡（かみおか）　由香里（ゆかり）さんがいるのですが、部活に行っているので、もう少し後で来ると思うのですよ。あ、それと二年生が二人いるのですが、出かけていまして、晩御飯頃には戻って来ると連絡をもらっているのですよ」

「そうなんですか…一年生で、寮に住む方はどれほどいるのでしょうか？」

「残念ながら、一年生で寮に住む予定の生徒さんは、司さんだけなのですよ」

奏と言う上級生さんは、言葉の最後に「～なのですよ」とか付けるのは癖なのだろうか？

「あの……私は下級生なのですから、敬語を付けてお話しをしなくてもよろしいのでは…」

とりあえず突っ込んでみる。

「あぁ、これはもう癖なので、治りませんですの」

と、玄関から一人の生徒の声が発せられた。

「ただいま戻りました。奏さんそこでしたか……って……あ、あの…そ、そちらのお方は……？」

食堂兼リビングに来たもう一人の生徒は、司を見てほぼ固まったが、何とか声を絞り出す。

「ああ、今日からこの寮に住む事になる、新入生の神加賀美　司さんですのよ」

「ご紹介頂きました、神加賀美　司です。色々お世話になるかと思いますが、よろしくお願いします」

「は……はい。わわわ、私は上岡　由香里と申します。かかかか、奏さんと同じく三年生です。
ここここ、こちらこそよろしくお願いします」

どもってるよ由香里先輩。しかも彼女も敬語とか…

由香里先輩はスポーツ少女と言った印象があった。顔や手、ショートタイプのスカートから除く脚線は、見事に小麦色だ。

「はい。寮の事も学院の事も知らないのでご迷惑を掛けるかとは思いますが、よろしくお願いします」

似非笑顔で返事を返しておく。

「あ、それから、周防院先輩にも言いましたが、私は下級生なのですから、敬語を付けてお話しをしなくても…」

「あ～これは奏さんの癖が移ってしまったので、まあお気になさらないで…」

「それと」

と奏先輩が横槍を入れてきた。

「学院も寮も、下級生は上級生の事を、名前の後に『お姉さま』と呼びますのが仕来たりですので、お気を付けて下さいなのです」

「それは、奏お姉さまとか、由香里お姉さまと呼ぶのが仕来たりだと言う事でよろしいのですか？」

「そうなのですよ。あ、いけない。お部屋にご案内しますのですよ」

「はい。お手数をおかけします」

部屋は一階にあった。二階立ての寮なのでどちらでも問題は無い。

問題は入った後だった。

「っつ……」

何ですかこのヒラヒラとフリフリのピンクの部屋は？

天蓋が付いていても不思議では無いベッドとか、天井までピンクの壁紙とか、
トランプのダイヤマークの鏡とか、ピンクのノートパソコンとか…
あえて言おう。『なにこの夢に出てきたピンクドールハウス状態は…』

「可愛いお部屋ですのよ」

と奏。

「これはやりすぎでしょう…お母さん…」

「良いと思いますですよ。まるで路瑞穂お姉さまのお部屋の再来ですのよ」

路瑞穂？夢で出てきた『ミ○ホ』の事なのかな…

「その路瑞穂お姉さまと言うのは？」

「ああ、一昨年にエルダーのお姉さまになられましたお方ですのよ。詳しいお話は又後でしますのですよ。
夕食は七時ですので、ゆっくりして下さいなのです」

「分かりました。有難うございます」

そして奏は部屋を出て行った。

「あああああぁぁぁぁぁぁぁぁ……疲れた……誰が何と言おうと精神的に疲れた……とりあえず、荷解きしますか……」

路瑞穂と言う人がいたのが一昨年。と言う事は、あの夢映画はその時の内容なのか・・・

予備知識をもらったとは言え、こんな与太話をしても笑われるだけ。

同じ話しが出ても初めて聞いた振りをしなくてはいけない。

リビング兼食堂にて。

「な、何ですかあのお美しさは……路瑞穂お姉さまも凄いと思いましたが、司さんは更に上を行ってませんか…？」

「そ、そうですよねぇ。私、最初に司さんを見た時、思わず天使様が来たと勘違いしてしまいましたのですよ。あの透き通る様な白い肌と、それに輪をかけた白銀色の髪の毛。あれはもはや芸術なのですのよ」

「そうですね…新学期が始まったら、司さんにいきなり二つ名が付いている気がするのですが…」

「奏の我がままが通るのでしたら、是非とも演劇部に入れたいのですよ」

「いえ、それよりも、『妹』をどうするのか？が問題でしょう…今年の一年生で寮に入るのは彼女だけですし」

「あぁ、そうですよねぇ。薫子さんや初音さんもいる事ですし…困りましたのです」

と、司の話で盛り上がっていた。知らぬは本人のみ。

何とか荷解きを終え、食事の時間には間に合ったようだ。

司が食堂に行くと、四人程度の話し声があった。

「今日寮に入った娘は凄いですよ。薫子ちゃんや初音ちゃんも驚くと思いますですよ」

「奏お姉さま何ですかそれ…」

私なのか?驚かれる様な顔なんだろか…ちょっと自信なくしたかも。

とりあえず食堂に入るしかない。

「あ、来ましたね」

知らない顔が二人いた。後で来ると言っていた二年生らしい。

二人が司を見た途端、空気が固まった、いや凍りついた。

「え~と……改めまして、今日からこの寮でお世話になります、神加賀美　司と申します。よろしくお願いします」

似非笑顔を貼り付けながら、頭をさげた。

「え…っと……その……」

「天使様……いや、なんと言うか……凄い……」

二年生二人はしどろもどろになっている。

どう返して良いか分からない。私自身も固まってしまった。

「司さん。夕食の準備は出来ているので、空いている席へどうぞなのですよ」

奏お姉さま（しきたりなのでそう呼ぶ）にそう言われ、注目されながら空いている席へ座らせてもらった。

食卓に出ていたのは、英国式料理のビュッフェスタイルであった。

言い方を変えればバイキング料理。

好きな量だけ取ってくれって形だ。

だからってローストチキン丸々一羽ってどうなのよ…

その他牛肉、豚肉、鶏肉、魚介、野菜などなど。

ケーキや付け合せまであるとかどうよ?

これ余ったら明日の朝食になるのか?

「えと、見た目は若干悪いですけど、味は問題ないですよ?」

とは由佳里お姉さま。

まあバイキング形式にしか見えないので、適当に頂くとしましょう。
とは言え、バイキング方式は一回しか知らないので、無難な所でも、もらっておく事にする。

「どれを取ってもよろしいのですか？」

一応聞いておく。

「ええ、構いませんのですよ」

と、奏お姉さまから言われたので、適当に肉や魚を切ったりして、更にそれなりの形で揃える。

所で、二年生の紹介はもらってないが、食後が良いのだろうか…？

「あ、そうでした。二年生の紹介がまだでしたね。食事中にでもしてしましょう」

「わかりました」

祈りを済ませ。食事が始まった。

二年生は食事をしながら、ちらちら司を見ている。

『なにがそんなに珍しいのだろうか？』

そんな事を考えていたが、口には出していない。

「食事中ですが新入生及び、寮生を紹介しますのですよ。こちらが神加賀美　司さんですのよ」

と奏が司を示す。司は軽く頭を下げる。

「それでこちらが、皆瀬（ひなせ）　初音（はつね）さん。次期生徒会長候補かな」

「由香里お姉さま、まだそれは決まった事では…あ、ごめんなさい。皆瀬　初音です。始めまして」

狸目っぽい印象の生徒が頭を下げた。

「そしてもう一人、こちらが七々原（ななはら）　薫子（かおるこ）さん」

「ど、どうも…七々原　薫子です…よ、よろしく」

ストレートの黒髪を腰近くまで伸ばしているのが一番の印象だった。

「どうしたのですか薫子さん？顔が紅いですよ？」

「奏さん。去年薫子さんが寮に来たときにもなった、あれでは無いかと…」

「あ～、あれですか～。あれは私に言わせて頂くのなら、一種の病気だと思うのですよ」

「奏お姉さま、そ、その事については…」

こちらの知らない事に関して盛り上がられても困るのですが…

「と、所でその…ずっと気はなっていたのですが…」

困った様に由香里お姉さまが私の顔を伺ってきた。肌の色か髪の毛の色か目の色だろうなぁ…

「その髪の毛って染めているのですか？光り輝く銀白色って言うのでしょうか…」

髪の毛だったか。まあこれは説明は簡単だ。

「あぁ、父方の祖母がイギリス人で母がアメリカ人なのですが、祖母の遺伝子が隔世したらしいですね。

髪の毛だけだとクォーターですが、肌色は母とその祖母のが混ざったらしいです。

ただ、父は純粋な日本人ですので、四分の一と二分の一の混血、と言うわけの分からない遺伝の結果ですね。

祖父に言わせると、『髪の毛はお婆さん。肌と顔は母さんのハイブリッドだな』だそうです」

「なるほど……血筋だけだとハーフさんなのですね…」

「そうなりますか……まあ、お陰で色々大変な目に合ってますが…って余計な事を言いましたね」

しまった自爆した。

「大変って？」

と遠慮がちに薫子さん、いや薫子お姉さまになるのか…

「え～と、そのお察し下さいと言う事で」

そうは言ってみたが、バレバレだろうな。

「えと、お風呂の順番はどうしましょうか…？」

奏お姉さまが話題を変えてきた。これはありがたい。

「昨日まではどうしていたのか知りませんが、出きれば私（司）は最後でお願い出来ませんでしょうか？」

「それで良いのですか？」

「全然構いませんよ。結構宵っ張りな性格ですから」

「では、順番になったら呼びますのですよ」

これであの事に関しては回避できるかな・・・

とりあえず無難に食事を済ませ。お風呂の順番になったと呼ばれた。

お風呂は予想に反して大きかった。

小さめの大衆浴場に近い広さはあった。

これは寮生全員が一緒に入る事も仮定された作りの様だ。

誰もいない事を慎重に確認し、服を脱ぐ。

洗い場に入って自分の体を見た時に、どうしても気になるこの包帯。

しかも右足の太ももと、左手の上腕と言う二箇所ともなると中々に辛い。

まあ、ばれなければ済む話なのだが、学校なら必ずあるであろう身体測定や、体育の時間の着替え、

更にはあの夢で出てきたプールとか…

問題は山積みだが、担任の先生はいるのだろうから、先生に話してごまかす方向で行くのが無難かな。

「寮や学院の生徒には、何としても隠さないと…」

そうしないと又あの事件が発生する可能性が大きい。

誰も来ないまま入浴を終わらせ、夜具に着替えたのだが…

なにこの真っ白のぴらぴらのひらひらは!?どこの国の王女様の夜具ですかぁぁぁぁぁ。

恨むよ母さん…

「・・・と言うか、未だに姉さんの事を引きずってますね。母さん…」

翌日。遅刻ぎみで司は食堂に現れた。

「申し訳ありません。低血圧なので朝はぎりぎりになる事が多いと思います」

と誤っておく。実際問題、朝は弱い。

「いえ、気にしないで、私も朝は弱いから」

とは薫子お姉さまの弁。彼女も低血圧なのかな。

朝食時、奏お姉さまがこんな事を言ってきた。

「今日は入学式だけなので、授業はありません。誰が何処のクラスになるかの通知は、本日の朝に下駄箱前で書類が配られますのです」

更にこうも言った。

「昨日も言いましたが、この学院では先輩のことを親しみを込めて『お姉さま』、後輩の事を『妹たち』と呼びますのですよ。慣例でそうなってますから、寮でも学院内でもその様に呼んで下さいなのですよ」

「それと、寮内の仕来たりで、下級生はそれぞれ特定の上級生の世話係りに任命され、逆に世話を受ける上級生は、その下級生を指導する義務を負う。と言う慣例もあるのですよ」

「更に、寮の規則ですが、朝食は午前七時からです。部活などの特別な理由がない限りは、寮生が全員揃ってからの食事となりますの

ですよ。
これは、学校のない日曜日でも同じなのですよ」

「お昼は寮母さんにお弁当をお願いする事が出来ます。必要な時は前日にホワイトボードに名前を書いておいて下さいなのですよ」

「もちろん、学院内にある食堂で摂る事も出来ますので、気分で選んでもらって下さいなのですよ」

8割がたは夢で知ってます。が言わぬが華。

「今日は入学式だけなのはもう言いましたが、寮に戻れば昼食は用意してありますので、寮母さんに言って下さいなのですよ」

「正式な入寮式は本来は明日なのですが、司さんがもう入寮しているので、今日行うのですよ」

入寮式が『本来は明日』？なぜ明日なのだろうか。

「ええと、なぜ明日が本来の入寮式なのですか？」

「この学園は、新入生の入寮は一日遅いのですよ。それで、明日までに入寮すれば良いと言う決まりなのですよ」

なるほど…変わってるのはあの夢で理解出来ていたが、ここまでは見えなかった。

寮の中の呼び方関係図は、

周防院奏、上岡由佳里は三年生なので下級生全員から『奏お姉さま』と『由佳里お姉さま』。

七々原薫子、皆瀬初音はニ年生なので司からは『薫子お姉さま』と『初音お姉さま』。

司は上級生全員から見れば『妹』。つまりは呼び捨てになる。一部例外の呼び方はあるが・・・

寮生全員で学校に向かう事となった。司は全員より一歩引いて一緒に歩く。

二年生や三年生と一緒に横に歩く度胸はとりあえず無かった。

桜並木は何処にでもある風景なのだろうが、何か違和感がある。

具体的に何が、と言う説明は出来ないが、なにかがおかしい。

「司さん？どうかなさりましたか？」

「初音お姉さま。単純に緊張してるだけです」

そしてクラス分けの書類を寮の全員がもらった。

「さて、クラス分けはどうなったのでしょうか」

「私と由佳里さんは３－Ｄなのですよ」

「初音さんと、薫子さんは？」

「私は２－Ａですね」と初音。

「私は２－Ｃですね」と薫子。

「司さんは？」

「え～と…ああ、ありました。１－Ａですね」

階段でニ・三年生と別れ、自分のクラスの前にたどり着いた。

扉をそっと開ける。乱暴に開けて目を付けられるのは遠慮したかった。

司が入った瞬間、クラス内の空気が凍った。

なるべく丁寧な言葉を使おうと心がけていた司には、その空気は読めなかった。

「お早う御座います皆さん」

この言い方が正しいのかはこの学園では不明なのだが、無難な挨拶をした。

「え、と……お早うございます」

返事はきたのだが、空気は微妙におかしかった。

「あれ？お早う御座いますではダメなのでしょうか？この学院は…？」

「いえ！その…なんと言いましょうか。驚いてしまいまして…」

「その、何にと聞いて良いのでしょうか？」

「まるで、フラスコ画から出てきた王女様が教室に現れたかの様で…」

「いえ、王女様なんて生ぬるいですわ。天使様か妖精に、私には見えました」

「一年でこんなお美しい方とご一緒出来るなんて、私はこの為にここを受けたと確信できますわ」

などなどと、黄色い声がクラス中を埋め尽くした。

えーと、それって誰？と司は心の中で突っ込む。

「お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

遠慮がちに生徒の一人が司に聞いてきた。

「あ、私ですか。私は神加賀美　司と申します。外部受験でこの学院に通う事になりました。
よろしくお願いします」

聖應女学院は、言い方は悪いが、成績や出席日数等が問題なければ、エスカレーター式で（中学から高校の様に）上がれるのである。

聖應は幼等部、小学部、中学部、高等部、大学部、と存在する。

司の入学した高等部は、正確な名称は『聖應女学院高等部』となる。

座る席は事前に決まっていた。司は中央付近であった。

座った途端に周りを生徒に囲まれるが、都合よく担任が入って来た。

「はい。皆さんお早う御座います。私がこのクラスの担任の桃原（ももはら）詩鶴子（しずるこ）です。よろしくお願いします」

クラス全員の自己紹介は入学式の後に執り行う事となり、講堂へ移動。

入学式その物は特筆すべき問題は無かった。

ただし、携帯のカメラ撮影によるシャッター音が数回聞こえてはいたが…

教室に戻り、自己紹介の時に司の髪の毛の事が話題になり、寮で説明した事をそのまま行った。

「……祖父曰く、『髪の毛はお婆さん。肌と顔は母さんのハイブリッドだな』だそうです。」

「素敵ですわ…」

そして当日の行事は終え、司は担任に秘密を語る事とした。

話しは屋上でさせてもらっていた。

「……と言う事なのですが、身体測定とか体育とかプールとか、何とかならないでしょうか？」

「そうですか…先ず、身体測定ですが、家での急用を作って休む。と言うのが無難な方法ですね。
体育に関しては体が弱いと言う理由で見学が良いのでは無いでしょうか…
プールの授業もそれで行けると思いますね」

「そうですか。身体測定の方は掛かり付けの医師がいますので、そちらから情報を先生に渡す様に手配してもらいます」

「そうして下さい。所で、先ほどの件は、この学院では他に誰かご存知ですか？」

「いえ……現在の所、桃原先生のみです」

「私も教師の端くれですので、神加賀美さんの秘密は厳守します。が、学院長には報告しますよ？」

「それは致し方ないかと…」

第一章　新しき伝説の始まり…かも？　第一話（後書き）

聖應の設定もいじっています。
これは、小学部からお嬢様学校に入れている親御さんもいるのでは？と言う発想から、大学部までと言うオリジナル（？）設定にしました。

第一章第二話

入学式が済み、若干の時間を司やクラスメートは過ごしていた。

「あの、司さん…」

「あ、はい。何でしょうか？」

「あの……よろしければ…お、お友達になって頂けませんかっ！？」

いや、そこで叫ばれても…

「ああ、別段問題は無いと思いますが？と言うか、お名前お伺いしましたっけ？」

「私は足利（あしかが）　美紀（みき）と申します。どうぞ良しなに」

「足利って室町時代のあの足利ですか？」

「いえ…残念ながら、同じ姓をもらっていると言うだけですわ」

「私もぜひ！」

「私も！」

「私は受付嬢の東堂（とうじょう）　栞（しおり）です。とりあえず私の事は…」

などなど。

クラス全員が司に名乗りを上げてきた。覚えきれる訳が無い。

何とか自己紹介と言う名の嵐が収まり、学院を見て回りたいと言う理由を言い、教室から逃げた。

「はぁぁ…何と言うか、このパワフルさを他で生かして欲しいと切に願うわね。と、言うか助けて欲しいわね…」

独り言だったのだが、この一言が後に騒動を招く原因になるとは思ってもいなかった。

主要な場所を実際に見て回り、その後寮へ帰った。

「ただいま戻りました」

玄関に戻るや否や、司を待っていた人から声が掛かってきた。

「まっていたわ司ちゃん」

と薫子。

「え?あ、はい。何でしょうか?」

「ここでは何なので、リビングへ行ってくれる?奏お姉さまがお話しがあるそうなので…」

そう言われたので、リビングへ移動した。

そこには寮生全員が微妙な表情のまま座ってる姿があった。

なんだろう、この嫌な予感は。

「奏お姉さま、お話が在るそうですが…？」

「はいなのですよ。寮の規則と、決めなくてはいけない事もあるので…座って下さいなのですよ」

立ち話で済む内容では無い模様だった。

奏がお茶（紅茶）を全員に淹れて上げる。

「あ、そう言う（お茶を淹れる）のは、下級生の仕事なのでは…？」

「あぁ、良いのですよ～。今日は特別なのですよ。明日以降でそう言うのはやってもらいますのですよ。

それでですね、寮の規則の説明と、昨日も言ったとは思うのですが、『妹』決めをする為に集まってもらいましたのですよ」

「寮内の仕来たりで、下級生はそれぞれ特定の上級生の世話係りに任命され、逆に世話を受ける上級生は、

その下級生を指導する義務を負う。と言う慣例もあると昨日言われましたが、世話係りがその『妹』ですか？」

「その通りなのですよ。では最初に、寮の規則を言いますのですよ。

寮の門限ですが…」

まぁ普通にあるだろうな。しかも『え～』とか言いそうな早い時間と予測する。

「設定が無いのですよ」

は？嘘でしょ…あの夢ではこの学院の生徒が誘拐されかかった、何て事があったはず。

「無いのですが、近年の社会事情や、昨年に当学院の生徒が誘拐事件に巻き込まれかけた事がありまして、２２時までには帰ってきているのが望ましい。と、言う事になってますです」

誘拐騒ぎがあったのに２２時？大丈夫なのかこの学院…

「それと、近くにコンビニエンスストアーがあるのですが、出切るだけ２２時以降は利用しない方向でお願いしますです。それと、どうしてもコンビニエンスへ買い物に行く場合、２２時以降は必ず二人以上で行って下さいなのですよ。そして、淑女のたしなみとして、寝巻きやジャージ姿で買い物へ行くのは禁止なのですよ」

「例えば深夜零時にふと買い物に思いついた場合、誰も起きていなければ買い物は無理。と言う事ですか？」

そんな話し、あの夢にあったかな？

「そうなりますのですよ。そうならない様に準備は万端にするか、諦めるかしか無いのですよ」

「分かりました」

「…では、後は『妹』決めだけですね奏さん」

と由佳里。

「そうなのですよ……私が調べた限りですと、寮に一年生から三年生まで揃った事例が無いのですよ。しかも、二年生と三年生が二人づついて、なおかつ一年生が司さんお一人。どうしましょうか…」

「そうですね。去年は三年生が寮にいなかったので、初音さんと薫子さんは、ほぼ問題なく決まったのでしたね」

「そうでした。去年までは、私（奏）の妹に薫子さん。由佳里さんの妹に初音さん。まあこれは私達が卒業するまでは変わらない事ですので、後問題になるのが、司さんをどうするかです」

「初音さんと薫子さんのどちらかの妹になる。と言うのが良い様な気もするのですが、個人的には…そのぉ…」

「ゆ、由佳里さん。もしかして私と同じ考えなのですか？」

「えっ？！奏さんも？」

何に盛り上がっているか不明だが、きっとろくでもない事な気がする。

「つ、司さん。私の妹になりませんか！？」

「い、いえ、是非私の妹になのですよ！」

え～と。どうしろと…

「奏お姉さまと由佳里お姉さま。それは卑怯と言う物です。ここは通例通り私（初音）か、薫子ちゃんの妹になってもらうべきかと…出来れば…その…」

「ええっ！まさか初音も？」

と薫子。

「“も”って事は…薫子ちゃんもなの？」

初音が薫子に聞き返す。

え～～、逃げて良い？

「ど、どうしましょう…」

由佳里の困った声が出る。

「これは……そうですね。司さんの意見を聞くしか無いと思うのですよ」

そう言われても、こっちとしては誰でも良いんですよ…例の事がばれなければ…

「え・と…標準的な事例ならば、奏お姉さまか、由佳里お姉さまの下に就くのが伝統なので、どちらかに就くと言うのが無難かとは思います。

が、どちらかに就いても問題が起こる可能性があると言う事であれば、どちらにも就かない。と言う選択があっても宜しいのではない

でしょうか？」

初音と薫子の顔が明るくなり、初音が司にこう切り替えした。

「そ、それじゃあ、私と薫子ちゃんの両方と言うのは駄目…でしょうか？」

初音の小動物のすがるような目線で司に言う。

どうしても、誰かの元に就かないと話は終わらない様子。これは一種のイジメなのか？と疑ってしまう。

これはもう、なる様になれ。

「分かりました。前もって言わせて頂きますが、体質的に朝はもの凄く弱いので、それを承知して頂けるのでしたならば、初音お姉さまと、薫子お姉さま両方と言う事で、出切る限りの事はさせて頂きます」

そう言った後は、なぜかお祭り騒ぎ状態となってしまった。本当に大丈夫か？この学院・・・

第一章第二話（後書き）

薫子が初音を呼び捨てにしているのはＰＣ版「２人の～」で明白です。
そして、初音が薫子を呼ぶときは「ちゃん」つけになっているのも同様です。
どの時点からそうなったのかが、作者の知ってる範疇外な為、本作品内では、それに準拠します。
司に対しては、寮の上級生からは、全員「ちゃん」付けにします。
これは、ＰＣ版「２人の～」ので上級生達が、優雨や陽向をちゃん付けにしている事に準拠します。
＊呼び方などを修正しました。

第一章第三話（前書き）

後半が暗い感じの内容です。
これは主人公（司）の、いずれ後で語る、『とあること』に対する布石です。

第一章第三話

4月某日。

今日から学院内でクラブの勧誘が開始される。

と、奏お姉さまから言われていた。

まあ、所謂(いわゆる)お嬢様学校なので、大したことは無いだろう。

と、朝までは思ってました。

過去の自分を殴りに行きたい・・・

「野球部でーす。一緒に良い汗掻きませんか～？」

「天体観測部でーす。宇宙の神秘を私達と一緒に観測しませんか～？」

などなどなど

プラカードまで作り、自分の部員を増やそうと必死な状況。

あれぇ？お嬢様学校だからもっとおしとやかに勧誘するのかと思ってた。

第六感が囁きました。

『これはまともに帰れない』

登・下校の道は一本で、寮へ戻るにしてもこの勧誘合戦の中を通るしか無い訳で・・・

どこかで時間を潰すとか？いや多分無理だろう。目線が合った時点で波に呑まれるのは見え見え。

体が弱い理由をこじつけて、運動系の部はパス出来るだろう。

問題はそれ以外。

断る理由が思いつかない。

全部見て回って、それから考える。とでも言って逃げますか・・・

しかたなく一歩踏み出す。

ざわっ

－－－　ｓｉｄｅ　司　－－－

勧誘の声が途絶えた。

どうしたんだろ？校舎の屋上から身を乗り出す人でも出たとか？

だったら視線は上を向いているはず。

なんとなく、いや高確率で全部の視線が私に向いてないか？
そんな奇妙な表情とか格好してるのだろうか？

「まさか・・・」「そんな・・・」「嘘でしょう・・・」

何を言ってるのか良く聞き取れない。

ひょっとしたら私の頭上には？マークがいくつも浮いてるかも知れない。

――司ｓｉｄｅ　ｅｎｄ　――

――ｓｉｄｅ　勧誘していた三級生の一人　――

な、何ですかあの新入生は。

輝く髪の毛。白い肌。

一昨年の『お姉さま』に勝るとも劣らないあの美貌。

これは何とか我が部に入って頂かないといけません。

――　勧誘していた三級生の一人ｓｉｄｅ　ｅｎｄ　――

謎の空気が渦巻く一角に、司は入って行った。

「あ、あの！」

勇気を振り絞る様な声が司に掛かった。

「あ、はい。私でしょうか？」

「はいそうですっ！お名前をお伺いしても宜しいですかっ？！あ、ちなみに水泳部ですっ！」

いや、いちいち叫ばなくても、聞こえますって。

と、言うか、勧誘している人達全部集まって来てませんか？

「新入生の神加賀美　司と申します。部活動の御勧誘でしたら、こう見えても体が弱い為、運動系はご遠慮させて下さい」

そう言ったら、いくつかの部の人々からショックの擬音が聞こえて来そうな雰囲気が漂ってきた。

え？これどこのアニメ？

とか思っていると。

「運動系が駄目ならば、我が茶道部などは如何でしょうか？」

とか横から声が掛かってきた。

さーて、どうやって逃げよう。

「え～と。お気持ちだけはありがたくお受けしますが、部の名前だけでは雰囲気がうまく伝わらないと思いますし、体験などと言う方法も校風としてあるのかどうか判りません。困ってしまいます」

一一一　体験ですか。その手がありました。

と、誰かの声。

まさか、それってあり？それは予想外。言い回しを失敗したかも。

逃げ道が無い気がしてきた。

さあどうしましょう・・・？

体験ならば順番と体験する日取りを決めなくてはいけない。

それに学院の規則で、それはありなのかも確認しなくてはいけない。

更には生徒会（多分あるだろう）にもお伺いしないと後々厄介。

まてまてまて

なぜ体験をやる前提で考えている、私？

文科系だからって例の事がばれないと言う保障は無い。

どうしよう。

そんな時、不意に、

ーーー　おい。こいつ髪の毛が白いぞ！お前、宇宙人だな?！　ーー

過去の出来事を思い起こしてしまった。

ーーー　何だよその目の色?右と左が違ってるって、おかしいだろ！　ーーー

ーーー　見ろよこいつ。こんな所に包帯なんか・・・・・・なんだよこれ！・・・・・・気持ち悪いぞお前　ーーー

やめてやめてやめて。何でここで思い出すのよ・・・

「あ、あの・・・そんな泣きそうなお顔をなさらないで下さい。何も無理に入って欲しいなどと言ってる訳では無いのですから・・・」

その声は私には聞こえていなかった。

その後、どうやって寮に帰ったのか覚えていない。

気が付いた時は、ベッドの布団の中で、制服を着たまま丸くなっていた。

「今年も部活の勧誘は熱がこもってましたね～」

由香里が奏に勧誘の話を振ってきた。

「そうなのですよぉ。ただ、ちょっと気になった事が・・・」

と奏が表情を曇らせ気味で答えた。

「え?何でしょう?」

「文科系の方々の様子が、少し落ち込んでいる様に見えたのですが、どうしたのでしょうか・・・?」

「あ~」

由香里は何かしらの事情は知っている。と言いたげな顔を出した。

「由香里さん、何かご存知なのですか?」

「ええまあ・・・・・陸上の部員から少し聞いた程度ですが、どうやら司ちゃん絡みらしいのですが・・・」

体が弱いので運動系は遠慮させて欲しい。と司が言い、仕方なく諦めて他の新入生の勧誘をし始めたのだが、

文化系の誰かが司に何やら話をしたら、彼女が恐怖で泣き出しそうな表情をし、逃げる様に立ち去って行った。

と言う、陸上の後輩からの話をした。

「・・・何か嫌な言葉を言われたのでしょうか・・・?気になるのですよ」

「奏さん。とりあえず、司さんに話をきいてみますか?私としては暫くそっとしてあげておいても良いのかな。とも思っているのですが・・・」

「姉としては妹に何かあったとするならば、聞いてあげるのも役目だと思いますです。なので、話してもらえるのなら、相談に乗ろうと思うのですよ」

「確かにそうですね。やっぱり奏さんは、瑞穂お姉さまの影響を強く引き継いでいますね」

「私などはまだまだなのですよ」

二人は寮に戻り、司の部屋へと行く。

玄関の彼女の物と思しき靴はあったので、帰ってきてると予想はしている。

奏がそっと部屋のドアをノックする。

「司ちゃん。帰って来ていますか?」

―――　司ｓｉｄｅ　―――

制服のまま布団に入ってしまったのに気が付き、皺になるとまずいから起きあがろうとしたら、ドアがノックされた。

今私はどんな顔をしているのだろうか・・・

ひどい顔をしているのだろうな。

「はい。開いています」

自分が出した声なのに、他人の声に聞こえている。

――― side end ―――

「はい。開いています」

奏達が聞いた司の声は、何かに絶望、又は恐怖してる。そう聞こえた。

何かあった。と、直感的に奏達は感じ、二人の目線が合い、同時に小さく頷き、ドアを開けた。

「入りますですよ」

そして入った先に見た彼女は、制服を着たまま、弱弱しくベッドに腰掛けていた。

第一章第三話（後書き）

昕雅楽乃や冷泉淡雪や度會史（設定的に一年生）、
真行寺茉清や蒔田聖（設定的に二年生）については、
出すとグダグダになるのが非を見るよりも明らかなのを自覚しており、
話題にはしますが、表には出せません。申し訳ない。

ＩＦの無理やり小説なので、ある程度割り切ってもらえれば幸いです。

一人称。二人称。三人称。この辺の作り方が良く判りません。
だったらそう言う作りにするな。と言われればそれまでですが・・・
ｏｒｚ

第一章第四話

「司ちゃん。今日学院で何かありましたか？」

奏は司にストレートに聞いてきた。

一瞬司が身を硬直させる。が、奏達の方を見るでも無く、床を見つめていた。

『確実に何かありましたね』

由香里はそう感じたが、奏に任せる事にした。

「部活の勧誘の時に、何かあったらしい。とは聞き及んでいますが、話せる事なら、お力になれるかも知れませんよ？」

奏の優しい言葉が出る。

「申し訳・・・・・ありません・・・・・」

司から返ってきた答えは、謝罪であった。

「え、と、上級生の誰かと、口喧嘩でもなさったのでしょうか？お話し頂ける事だけでも聞きますよ？ですよ」

奏はそう言い、そっと司の隣に腰掛ける。嫌がるそぶりは無かったので、司を間に挟む様に由香里も腰掛ける。これも反応は無かった。

「その・・・上級生のお姉さま達が悪いと言うのでは無いのです。最初に、寮の皆さんには自爆した言い方をしたと思いますが・・・その・・・」

一一一『まあ、お陰で色々大変な目に合ってますが…って余計な事を言いましたね』

司が言った言葉が思い出された。

司が、ゆっくり言葉を続ける。

「・・・小さい子供は、思ったことをすぐ口に出すらしく、例えそれが相手を傷つける事、でもです・・・・・・あれは、小学校の一年生の頃でしたか」

そこまで言われて、奏や由佳里は、司の過去に何があったのかを、何となく予想出来てしまった。

「周りが全員、髪の毛が黒いのに・・・私だけ白銀色です・・・嫌でも目立ちます・・・それは奇異とか、異端に見えたのでしょう・・・クラスの全員が・・・敵に回るのに・・・そんなに時間は掛かりませんでした・・・」

「もう良いです司ちゃん。辛かったのでしょうね・・・私も似た様な経験はありますので、解りますですよ。この学院で、そんな事を言う方は恐らくいません。

二年生でアメリカから留学・・・だったと思いますが、陰口の類はありませんですよ。確か、一年生で金髪の方が入学していた筈ですが、

私の知る限り、その方もそう言った事はありませんですよ。もし、

何か言われる様ならば、三年生として、いえ、姉として司さんを守ってあげますですよ」

「私はこれでも生徒会長をしていますので、そう言った嫌な話とかは、すぐに情報として入ってきます。が、現状でそう言う話は無いので、
それを気にしない方が良いと思いますよ?もし、困った事があれば、生徒会側からもお助け出来ると思います」

奏に続き、由佳里も援護をする様に司にそう言った。

「有難う御座いますお姉さま方・・・」

「とりあえず、今日はなにもせず、ゆっくりすると良いですよ。世話係とか、そう言う事は考えなくて良いですから。ね?」

「はい・・・」

リビングに奏と由佳里は戻り、司に今日、何があったのかを話し合う事にした。

「司ちゃんのあの言い方は、奏さんが途中で止めましたが、苛め・・・ですよね多分・・・」

「そうでしょうね。恐らくですが、小学校の頃にそう言う嫌なことがあって、それがトラウマになっていて、部活の勧誘の時に、ふと思い出してしまい、
また苛められる。と言う様な錯覚に陥って、怖くなって逃げた。ではないでしょうか・・・去年似た様な演劇をしていますです」

「ああ、奏さん主演の変形型シンデレラ・・・でしたか?確か三人の姉に徹底的に苛められ、王子と結婚した後もトラウマに苦しむシンデレラを、
なんとか王子や側近が救って国は栄えた。・・・似てると言えば似てますね」

「そうですね・・・とりあえず、初音ちゃんと薫子ちゃんには、司ちゃんは体調不良だと言う事にしておきましょう」

「それが無難でしょうね」

初音と薫子が寮に戻り、司は体調不良で部屋で寝ていると思うので、上級生の世話は出来ない。
食事とお風呂で呼ぶ時以外は、寝かせてあげましょう。

と説明を奏と由佳里が行い、初音と薫子も、それなら仕方ない。と納得した。

奏と由佳里は、司が嫌な夢を見ない事を、密かに祈っていた。

翌朝、ここ数日の間だが、見慣れ始めていた表情がリビングにあった。

「お早う御座います、お姉さま方」

「あ、お早う御座いますなのですよ、司ちゃんはもう大丈夫なのですか?」

「ええ、昨夜は寝すぎた所為でしょうが、珍しく早く起きられたので、春っぽい紅茶を淹れて見ました。よろしければどうぞ」

そう言って司が出した紅茶は、ほんのり梅の香りが漂っていた。

「梅の紅茶ですか？・・・聞いたこと無いですね。では一口頂きます」

由佳里がそう言い、紅茶を一口飲む。

「うわぁ・・・コク深い紅茶に漂う梅の香り・・・合いますね・・・司ちゃん。これはなんと言う紅茶なのですか？」

「由佳里お姉さま、これは『和の春の紅茶　完熟梅のダージリンブレンド』と言います。正式名称ではありません。真面目に言えば、オレンジペコに梅をトッピングしたと言うだけですね」

「本当ですね、梅と紅茶が合うとは思いませんでしたよぉ」

と、奏にも好評だった模様だ。

香りに誘われたのか不明だが、二年生もリビングに来た。

「あ、お早う御座いますお姉さま方。変わった紅茶ですが宜しければどうぞ」

司が初音や薫子達の席にも紅茶を出す。

「有難う司ちゃん・・・梅の香りが紅茶に負けてないけど、だからと言って梅が主張してる訳でもない。
もしかして、司ちゃんって紅茶の事詳しく知ってたりしますか？」

初音がそう聞いてきた。

「専門家程では無いですが、まあ、それなりに、でしょうか・・・」

「へぇ・・・じゃあ司ちゃんは他に何が出切るの？」

と薫子。

「出切る・・・そうですね・・・お茶、生け花、立ち居振る舞い、礼儀作法、一般的な料理。その程度でしょうか」

「やっぱりそれ位はやるのか。あ～、私も習っておけば良かった」

「あれ？聖應の授業に家庭課ってのがあったと思いますが・・・薫子お姉さまは受けなかったのですか？」

「うん。私には合いそうに無いかな～と思って、受けなかったのよねぇ」

「ああ、なるほど」

「そう言えば、司ちゃん、今日のお昼は食堂になさるのですか？ホワイトボードには名前を書いてませんでしたが」

由佳里が聞いてきた。

「一応、昨日のお詫びも兼ねて、勧誘していた方々を何人か誘ってみようかと思ってます」

「それなら、勧誘申請書が生徒会に出ているので、クラスと名前は判るから、二時限目の休み時間にでも渡しますね」

「あ、いえ。私の方から行きます。三年生のお姉さまに来てもらった。などと言う変な噂は立てたくありませんし・・・」

「「そんな気を使わなくても良いですよ（なのです）」」

奏と由佳里がハモって突っ込む。が、司が行くと言う事で収まった。

これも、司の判断ミスではあった。

二時限目が終わり、約束通り司は３－Ｄに行き、そのドアをそっと開ける。

「失礼致します。１－Ａの神加賀美　司と申しますが、上岡　由香里お姉さまにお取次ぎをお願いします」

と一番近い生徒に言った。

「はい。少々おまち・・・・・・え？・・・・・・て、天使様？」

はい？又そのネタですか？

受付の生徒は心ここにあらず。の状態で由香里に近寄る。

「由香里さん」

「あ、はい。何でしょう?」

「て、天使様が・・・来ています・・・ど、どなたですか彼女は・・・?」

由香里は一瞬何を言われたのか理解出来なかったのだが、扉の所で待っている銀色の髪の毛が見えた時、彼女が来たと、とっさに理解した。

奏も『天使』の台詞で誰が来たのかを理解した。

奏が司と目線があったので、微笑みながら手招きをする。

司もそれに気付いたので、「失礼します」と断って教室に入って行く。

一一一　妖精?天使様?なんですか彼女は・・・

一一一　凄い。瑞穂お姉さまを上回るのでは無いでしょうか・・・

司にもその声は聞こえていたが無視をし、由香里の席の横に来た。

「由香里お姉さま。書類をお借りしに来ました。どの程度の量あるのでしょうか?」

「大丈夫ですよ。たった15枚です」

「それは何よりです。凄い量だったら泣いて逃げようかと」

「あはは。それはコピーなので、終わったら焼却するか、シュレッダーに処分してくれると助かります」

そう言って司にＡ４用紙を手渡した。

「承知しました」

司が軽くお辞儀をし、出て行こうとすると、

「あの、失礼ですが、お名前をお伺いしても宜しいでしょうか？それと、由香里さんとはどの様な御関係なのでしょうか？」

と声が掛かった。

「私は神加賀美　司と申します。一年生です。寮に入った関係で、そちらの奏お姉さまや由香里お姉さまに、良くしてもらってます」

「奏さんに由香里さんが羨ましいです」

等と言われ、そこそこもみくちゃにされながら、３－Ｄを出た。

「とりあえず、まだ時間はあるから数人は・・・行けるのか？」

部活の勧誘は二年生が主に行っているらしく、全ては二年生だった。

司が二年生のクラスで取り次ぎを依頼すると、決まって大騒ぎとなった。中には黄色い悲鳴？まで出るクラスも出る始末。

事情を説明し、もし宜しければお昼をご一緒出来ませんか？と聞く

と、

「是非行きますっ」と言う返事意外無かった。

三時限目の休み時間も大騒ぎと化してしまった。

そして昼休みになると、司のいるクラス（１－Ａ）の前の廊下は、凄い量の二年生がいた。

「こ、こんなに沢山なのですか・・・食堂入れるのでしょうか？」

「生徒全員が入っても大丈夫な作りなので、これだけいても大丈夫よ」

と言われ、食堂に行く事となった。

第一章第四話（後書き）

六月のエルダー選挙までが第一章なのですが、第十話まで行く予定です。

なげえよｗ

誤字を発見。修正しました。

第一章第五話

食堂では、円形に並べられているテーブルが中央にあった。

食堂は、設計的には中央の丸いテーブルを挟み、東西に六人が一緒に座れるテーブルが幾つも並んでおり、全校生徒が来ても大丈夫。な造りになっている。

実際に全校生徒が一挙に利用した実績は無いが・・・

司が始めて食堂に行く。と言う事だったので、奏や由香里も付いて来た。

どこで聞いたのか不明だが、話を聞きつけた初音や薫子まで付いてきて、総勢５０人と言う凄い状況になった。

司達とは無関係で、食堂で食事をしていた彼女達は、司の姿を見た途端、箸の手を止めてしまった。

「よ・・・・・妖精さん？ああああ、あれはどなたなのでしょうか・・・知っていますか？〇〇さん？」

「聞いた所では天使か妖精にしか見えない方が一年生で入学した。と言う冗談かたとえ話にしか聞こえない内容でしたので・・・」

「そんなたとえ話が実在していたのですね・・・私はこの学院に入れた事を、神に感謝します」

「これは、全員一緒のテーブルと言うのは無理ですね・・・どうしましょうか？」

と司が回りの生徒達に尋ねる。

ある生徒はその時の印象を後にこう語る。

『鈴振るような声。それでも自然と耳に染みいる。そして、透き通る様な白い肌。光り輝いて見える銀白色の髪。決して嫌になれないあの笑み。あの方を芸術と言えない方は眼科へ行く事をお勧めします。私はあの方こそが天使か妖精だと確信します』

こうも語る生徒もいた。

『純白の大輪が咲いたように麗しい肌、白銀の雫を纏ったように光り輝く髪の毛。瞬きするのがあまりにももったいないです』

「一緒の空間にいるだけで、幸せに感じる場合もあります。ここは、その幸せを皆さん一緒に噛み締めるべきかと」

と一人の生徒が司には聞こえない様に言い、ばらばらのテーブルに座り、雑談を交えながら食事を摂った。

「暖かい、天気の良い日には、一緒にお弁当を広げて食べる。と言うのも良いかも知れませんね」

司が一緒のテーブルになった奏や由香里、初音や薫子にそう言う。

その声が食堂中に届いていた事も知らず・・・

司にとっては理由は定かでは無かったのだが、毎日とは言わないが偶には一緒にお昼を食べましょう。

と言う理由で、部活動に入るのは免除された。

これには裏がある。

司は知らないが、１－Ａの生徒達や、一緒に食事をした二年生達が、司の隠れファンクラブを結成してしまい、ファンクラブの話の中で、

『彼女（司）がどこかの部活に入ると、その部活が優遇されている等と言う、要らぬ疑いが発生する可能性があり、それを回避する為にも、彼女は無所属が望ましい。が、本人が入りたいと言った場合に限り、それを許容する』

と言う決議が成された。

月日が二週間程流れた。

司の容姿等の噂話は留まる所を知らず、ありえない様な噂まで一人歩きしていた。

歴代トップ１０に入る成績で聖應に入学した。とか。

司が出来ない事は無い。とか。

本人が聞いたら「そんな事あるわけ無いでしょう」と、笑って否定する様な事柄まである始末。

体育の授業は、体が弱いと言う理由により見学を行っている。

見学でも体操服に着替えるのが校則なので、司は更衣室内では、全員が体育館に移動して、
欠席扱いにならないぎりぎりのタイミングで長袖ジャージ上下に着替え、見学である。

身体測定の日がやってきた。

司は担任の桃原先生に、事前に相談した内容で急病をする。と伝える。

「その件については学院長に既に報告しています。学院長も、『特に問題は無いとは思いますが、出来れば心許せる誰かに、ちゃんと話をした方が、
貴女（司）の背負った荷を軽く出切るのでは無いでしょうか』と言っていました。その様な方は見つかりましたか？」

「いえ、残念ですがまだ・・・」

「そうですか、こればかりは、焦ってもどうしようも無いことですね。司さんの身体データーについては、既に郵送で届いている。との事ですので、
明日は、例えば重い生理痛とか、言葉は悪いですが遠い親戚の法事

に参加とか、そう言う形を取った方が良いでしょうね」

「では法事と言う事で。家は遠いので、明日朝から家の往復をしただけで一日はほぼ終わってしまします。これなら誰かに咎められる可能性は低いと思います」

「分かりました」

そして翌日。

朝、司は朝食を摂りながら姉達にこう言った。

「今日は親類の法事があるので、学院はお休みします。帰って来るのは午後の5時か6時位になると思います。この事については、昨日担任の先生には伝えてあります」

「分かりましたなのですよ」

実際、司の家は列車の乗り継ぎを数度行う位に遠く、片道3時間は掛かる。

途中で食事や休憩を入れると、往復7～8時間。

新幹線で東京から青森へ行く位掛かる。

彼女の家には、その様に（法事と言う都合の偽造）を一応頼んでおり、母も事情は知っているので、もし連絡があればそう言う理由を言う様に口裏は合わせていた。

実際に駅まで行き、実際に列車に乗る。そうしないと、どこで誰が見ているか分からないからである。

そして司のいない学園は一日を過ごした。

後で司が聞いた話によると、１－Ａは灯の消えた部屋の様な雰囲気が一日中漂っていたとの事。

第一章第五話（後書き）

一部修正しました。

挿入話1　乙女達と初詣に行きましょう（前書き）

あけましておめでとう御座います。
今年も皆様に取って良い1年になりますように。

本編がまだエルダーシスターを選出まで行って無い為、
『エルダーのお姉さま』は出ません。

挿入話のみ、本編では出す予定の無いＰＣ版『処女は～』のキャラを出します。

挿入話1　乙女達と初詣に行きましょう

「司ちゃん。冬休みはどうなされるのですか？」

奏お姉さまがそんな事を聞いてきた。

父さんや母さんは、年末年始回り等で忙しく、家にいないのは既に連絡をもらっている。

「家に帰っても、父も母もいないのは聞いているので、寮で過ごそうかと思ってます」

奏お姉さまが一瞬悲しそうな表情を出すが、すぐに明るい表情に戻る。

そしてこんな事を言って来た。

「実はですね。私（わたくし）も、寮で過ごす予定だったのですが、瑞穂お姉さまと紫苑お姉さまから、瑞穂お姉さまの家へお泊りに来ませんか？とのお誘いをもらっているのですよぉ」

ミズホオネエサマ？

女装して聖應に通い、挙句の果てにエルダーになっちゃったあの瑞穂さん？

それよりも、由香里お姉さまはどうするのでしょうか？

更に問題は、私（司）は彼（瑞穂）が女装していた事を夢で知ってしまったが、奏お姉さまは?由香里お姉さまは?

知っているとも思えない。これは確認するべきなのだろうか・・・?

「あの・・・瑞穂お姉さまって、一昨年のエルダーだった方ですよね?」

「はい、そうなのです」

「瑞穂お姉さまが今何をしているのか知りませんが、いろいろな意味で問題がありませんか?」

「そうでしょうか?瑞穂お姉さまの方から『お泊りに来ませんか?』と聞かれているので、問題は無いと思うのですよ」

この答えだけでは微妙だが、奏お姉さまや由香里お姉さまは、知らないと言う可能性がある。

「それでですね、よろしければ司ちゃんもご一緒に如何ですか?」

え～。私にそこで振るのですか?例の件さえばれなければ問題無いでしょうが、

先方には夢でしか知らない相手が最低二人いて、奏お姉さまの口ぶりからすると、紫苑さん（紫苑お姉さまなのか?）も来るらしい。

紫苑お姉さまは、瑞穂お姉・・・さまが男性なのは承知していたはず。

女装の件がばれたらどうするんでしょ?と、言うか、由香里お姉さ

まは？

「由香里お姉さまはどうするのでしょうか？」

「あ～。由香里さんは。帰省するそうです。初音さんも帰省し、初音ちゃんの家に薫子ちゃんがお泊りに行くと聞いてますので、そうなると寮には司ちゃんだけとなってしまいます。一人ぼっちと言うのは中々寂しい物です。事情を話せば瑞穂お姉さまも快くお迎えして下さると思いますですよ」

あ～。これは連れて行く気満々の様だ。

向こうの家で、細心の注意を払うしか無いのかな。

「判りました。そこまで仰るのなら、ご好意に甘えさせて頂きます」

「はいなのですよ。瑞穂お姉さまには連絡しておきますね」

あれよあれよと言う間に話が決まってしまい、こちらで準備する物は、四日分の着替え、制服、歯ブラシ、寝具、その位で良いらしい。

もっとも私は、隠して包帯も持って行くけど。

そして迎えた当日。学院前までお迎えが来てくれるとの事。

奏お姉さまと私は、そこそこ大きい荷物を校門に置き、迎えを待っていた。

と、そこへ、黒塗りのリムジンが静かに私達の前に停車してきた。

ま・さ・か・・・これ？

リムジンの後ろのドアが開かれ、中から夢の中で出てきた宮小路瑞穂が降りてきた。

夢で見ていたが、実物はより一層綺麗に見えた。フラスコ画に描かれている王女、に見えるが、いかんせん男性。

私の心中は複雑だった。

そしてもう一人、いかにもメイドさん。と言う、これもまた美形の女性が降りてきた。

着こなしは違和感が無く、宮小路　瑞穂と並ぶと、姉妹の様にも見えてしまう。

あのメイドさんは、宮小路　瑞穂の性別を承知しているのだろうか？

ふと、そんな疑問が沸く。

「奏ちゃん。お待たせしたわね」

そう言って微笑む姿も絵にはなる。瑞穂さん（心の中ではそう呼ぶ）が、私を見た。

「え・と、そちらが連絡のあった神加賀美ちゃんね？始めまして。

宮小路（みやのこうじ）　瑞穂（みずほ）です。よろしくね？」

「始めまして。神加賀美　司と申します。この度は奏お姉さまのついでにでお世話になる事になりました。
ご迷惑かとは思いますが、よろしくお願いします」

うわ～。我ながら毒舌だ・・・とか思いながら、深々とお辞儀をする。

「そんなついでなんて・・・」

瑞穂さんがそう言って苦笑する。

「お二人のお荷物はこれだけでしょうか？」

奏お姉さまの隣のメイドさんが聞いてきた。

私と奏お姉さまが「そうです」と答えると、結構重い荷物のはずなのに、軽々と持ち上げ、リムジンのトランクへ運んでいった。

その様子を見ていた瑞穂さんが、

「こちらの女性は、家のメイド兼、私の母親代わりに育ててくれている楓さんと言います」

楓さんが私達に会釈してきた。

「楓と申します。どうぞよろしくお願い致します」

「楓さんは、今度の六月に私の父と再婚し、その時点で『義御母さ

ま』と呼ぶことになりますけどね」

「み、瑞穂さま！その様な事は言わなくても宜しいではありませんか！」

一一一　〇〇ちゃん！もうそんな事いわないで！　一一一

ふとあの人の言葉が思い出された。

「司ちゃん？どうかなさいましたか？」

「え？あ、いえ、大した事ではありませんよ。奏お姉さま」

「そうですか？なら良いのですが・・・」

荷物がトランクに入り、私と奏お姉さまは、楓さんに促されて車に乗った。

リムジンの中の座席は、６人がゆったり乗れる広さがあり、向かい合う様に座る設計がなされていた。

進行方向に対して、背を向ける側に客を乗せるのが宮小路家の仕来たりらしい。

急ブレーキを掛けた時に、衝撃を吸収するからだろう。

上座になる進行方向左側に奏お姉さま、右側が何故か私。

進行方向に顔を向け、右側が瑞穂さん、左側に楓さん。と言う座り

方で、私が気が付いた時には、外の風景が動いていた。
いつこの車は動き出したのだろうか？さすがリムジンと言うべきなのだろうか？
窓の外を見ていたら、不意に瑞穂さんに声を掛けられた。

＊＊　会話中心なので、誰が話しているかを判りやすくする為、記号をつけます。K＝奏・M＝瑞穂・KA＝楓・T＝司

M「司ちゃん。聖應はどうですか？」

T「どう？と聞かれましても・・・今までの学校には無い、珍しい雰囲気はあると思います」

M「え～と、それはどう言う事なのか聞いても良いのかしら？」

T「まぁ、何と言いましょうか。ご覧の通りの姿ですので、今までは大抵この髪の毛で拙攻されていました。
が、聖應はなぜかこの髪を悪く言う方が居ないと言う。今までに無かった校風ですね」

「それは・・・そう言う事が過去にはあったのですか？」

と楓さんが聞き辛そうに言って来た。

T「無かった学校が無かった・・・そう言う事です」

K「司ちゃん。以前にも言いましたが、聖應にはその様な方はいませんよ?言ってくだされば、姉として守ってさしあげますのです」

M「奏ちゃんもちゃんと『お姉さま』しているのね」

KA「瑞穂さま・・・それはちょっと奏様に失礼かと」

M「ああそうね。ごめんね奏ちゃん」

K「いえ、私などはまだまだなのですよ」

挿入話1　乙女達と初詣に行きましょう（後書き）

挿入話が一話で終わらなかった・・・―――●

所で、私は持っていない『やるきばこ』の話にあった、運転手の名前ってなんでしたでしょうか？高岡さんでしたっけ？

挿入話2　乙女達と初詣に行きましょう2

話は弾んでいたが、リムジンの運転手（西岡さんと言うらしい）、から「まもなく到着します」と言う言葉に、瑞穂さんの家、いや多分豪邸が目線に入った。

「あれが、瑞穂お姉さまのお屋敷です。相変わらずおおきいのですよ～」

奏お姉さまがそんな事を言って来た。

つまりは以前にも泊まり、又は遊びに来たことはあったらしい。

と、言う事は、奏お姉さまは、瑞穂さんが性別を偽って聖應に通っていた事を知らない。と言う事になるのだろうか。

豪邸にリムジンは音も無く滑り込み、西岡さんが運転席から後部座席のドアに回り込み、ドアを開けてくれた。

「お客様、そして瑞穂お嬢様に楓さん。到着しました。さ、どうぞ。紫苑お嬢様も既に到着なされています」

ミズホオジョウサマ？

その言い方からすると、瑞穂さんが性別を偽っている事は、使用人を含めて秘密にしているらしい事が判る。

玄関へ通されると、そこには夢の中でみた妖精さんがいた。

輝く黒髪をストレートに膝裏ま伸ばし、着ている洋服ですら、その美貌を際立たせるアクセサリーの一部に見えてしまう。

「いらっしゃい奏ちゃん。お久しぶりね。相変わらず可愛いわ」

そう言って、妖精さんは奏お姉さまをぎゅっと抱きしめた。

まさかの百合のお方なのだろうか？

今からでも遅く無いから逃げた方が良いのかも・・・

奏お姉さまを抱きしめていた妖精さんが、私に気付く。

「ああ、ごめんなさいね。奏ちゃんを抱きしめていてご挨拶が遅れましたわ。私、十条（じゅうじょう）紫苑（しおん）と申します。よろしくお願いしますね」

「神加賀美　司と申します。このたびは私ごときの為にお呼び頂き、感謝いたしております」

「そのような、ご自分を卑下なさることはありませんよ、司ちゃん」

紫苑さんが私の顔を見つめる。何だろう・・・

「あの・・・何か？」

「あ、いいえ。ここで立ち話もなんですので、瑞穂さん、お二人をエスコートして差し上げて下さいな」

「紫苑さん・・・では私のお部屋まで案内しますね。楓さん、申し訳ありませんが二人の荷物を西岡さんと一緒に運んでおいてくれませんか？」

「はい。承知しました」

瑞穂さんの部屋は執務室（5坪程度）の広さがあった。

事務的な部屋なので女性らしさとかは全く無い。

「私は楓さんと夕食の打ち合わせしてきますので、奏ちゃんと司ちゃんは、紫苑さんお願いします」

「はい」

「私お手洗い行かせてもらいますです」

奏お姉さまがそう言い、瑞穂さんと一緒に部屋を出て行く。

これで部屋に残ったのは、私と紫苑さんだけとなった。

「司ちゃん。ずばりお聞きますが・・・」

「何でしょうか？」

「私や瑞穂さんはともかく、奏ちゃんに何をお隠しになさってますか？」

「・・・・・質問の意図が分かりかねます。ですが、瑞穂お姉さま、いえ、宮小路瑞穂さんや、紫苑お姉さまも、奏お姉さまに隠し事をしているのは何故か?と、聞き返してしましますが・・・・・・」

私がそう言うと、紫苑お姉さまが目を見開いた。

「司ちゃん、貴女まさか・・・」

部屋のドアが開き、奏お姉さまが戻ってきた。

「もどりましたのですよ」

「お帰りなさい奏お姉さま」

「お帰りなさい奏ちゃん」

紫苑お姉さまと私の掛け声は同時だった。

瑞穂さんの部屋で四人で雑談をしていると、夕食の時間になったので、ダイニングの方へ案内するので来て欲しい。

と、楓さんがやってきた。

ダイニングは１２人が座れる大きな物で、所狭しと食事が並べられていた。

瑞穂さん曰く、

「家では使用人の方々も一緒に食事を摂るので、こんな大きなテーブルなのよ」

との事。

食事が終わり、お風呂へ入って欲しいと楓さんから言われた。

私は楓さんに最後に入らせて欲しいと頼むが、

「お客様を最後に入らせるなど、宮小路家の末代までの恥となります。ぜひお先にお願いします！」

と言われ、渋々奏お姉さまの後に入る事にした。

－－－　瑞穂・紫苑ｓｉｄｅ　－－－

「瑞穂さん。お気づきになってますでしょうか？」

「え？何をですか？」

「司ちゃんの事です」

「紫苑さんは、何に気付いているのですか？」

「かつて、瑞穂さんが聖應に来た頃に、私が瑞穂さんにカマを掛けた事は覚えておいででしょうか？」

「・・・あ～。たしかズボンのチャックがって・・・・・・まさか

彼女もそうだと？」

「いえ、ただ・・・」

「ただ、なんでしょう？」

「司ちゃんは、瑞穂さんを男性だとお気付きになっておいでの様で・・・」

「ええっ！？だって今日始めて会うのに・・・紫苑さんだって数日は間があったでしょうに・・・」

「そうでしたね。司ちゃんは、瑞穂さんとは異なる質の隠し事をしているのは確かな様です」

「それを僕、あっ、と。私に聞けと仰るのですか？」

「そこまでは言いません。奏ちゃんにも秘密にしている節があるので、聖應女学院ＯＧとしてなら話が聞けるかも。と思うのですが、瑞穂さんはどう思いますか？」

「自分の口から奏ちゃんに言うまでは、そっとしておいた方が良いのでは無いでしょうか。奏ちゃんの手に負えない事ならば、私達に相談してくると思いますし、紫苑さんだって傷口を広げたい訳では無いのでしょう？私達が今出切るのは、見守る事だと思います」

「確かにそうですね。瑞穂さんの事に関しても何も言って無いようですから・・・」

―――side end―――

特に誰かが風呂場に乱入してくる、等と言う事も無く、寝具に着替えて瑞穂さんの部屋へ入って行った。

「お風呂、お先に頂きました」

「まぁ・・・・・・可愛いネグリジェですね、司ちゃん」

と紫苑お姉さまから声が掛かった。

「私個人としては、派手すぎると思っています。母さんに委任したのが悔やまれます」

「お似合いだと思いますよ?」

紫苑お姉さまや瑞穂さんもお風呂に入り、就寝前に明日の話となった。

「明日ですが、みんなで初詣に出かけませんか?」

瑞穂さんがそう切り出した。

「まぁ!良い考えだと思いますわ。又奏ちゃんの晴れ着が見られますわ」

「し、紫苑お姉さま・・・」

「そう言えば、司ちゃんは晴れ着ありますか？」

と紫苑お姉さま。

「私は、物心付いた時から晴れ着の袖に手を通した事すらありません」

「それはもったいないですわ。採寸してこれから作ってもらうと言うのは如何でしょうか？」

「紫苑さん。今から作っても、とてもではないですが、明日には間に合いませんよ。業者に過労で倒れろ。と言っている様な物ですよ・・・」

瑞穂さんが止めに入る。

「私は制服で構いませんので・・・」

「いいえ駄目です。そうですわ！楓さんの晴れ着を借りるのはどうでしょうか？背丈は同じ位ですし。そうと決まれば楓さんに頼んできます」

言うが早いか、私が止める間もなく、紫苑お姉さまは部屋の外へ出て行った。

「紫苑お姉さまって、意外とアグレッシブな方だったのですね」

私がそう言うと、瑞穂さんと奏お姉さまは苦笑していた。

寝るまで紫苑お姉さまは戻って来なかった。楓さんとどう言う話し合いをしている事やら・・・

そして翌朝、朝食が済むまで、なぜか晴れ着の話題が出なかった。

そして出かける直前になって、思い出したかの様に紫苑お姉さまがこう言った。

「司ちゃんの晴れ着はちゃんと用意してもらいました。これがそうです」

桐の箱から出てきたそれは、楓が舞う様にちりばめられた、桃色の晴れ着であった。

それだけでも高価に見えたが、高級毛皮ショールっぽいのまで出てくる始末。

私が晴れ着に負けるだけでしょう・・・

「いえその、余りにも高級そうなので、ご遠慮させて頂く訳には・・・」

などと言って逃げる余裕ももらえず、あっと言う間に別部屋に連れて行かれ、着物を着せ付けられてしまった。

私の巻いている包帯を、楓さんや紫苑お姉さまは見たが、何も言わず着付けを続けた。

そして、別の部屋で、別のメイドさん達によって着付けられた、奏お姉さまとばったり出会った。

「奏お姉さま、お似合いですよ」

「つ、司ちゃんこそ・・・私も身長が欲しいです」

紫苑お姉さまや瑞穂さんも晴れ着でやってきた。

なんと言うか・・・私服も凄かったが、晴れ着になると、その輝きが数倍になっている。

声を掛けるのは芸能界のスカウトか、よほどの勇気がある人か、頭のネジが何本か飛んじゃってる人位だろ。

「お二方とも・・・一緒に歩く方の身になって頂きたい程お似合いですね」

「あら、司ちゃんも、奏ちゃんも、十分お似合いですよ」

神社は人以外の存在で近くに見えるのは、露天と足元の通路と言うくらいの大盛況であった。

「これは・・・スリとか痴漢があっても何ら不思議では無いですね」

「司ちゃん。そう言う怖いことは・・・」

瑞穂さんが突っ込んできた。

まあ実際には、何故か私達の周りだけ空間が開いている。
紫苑お姉さまや瑞穂さんの近寄りがたい神々しさの為、そう言う人達ですら寄れないのだろう。

「拝礼の方法は知っていますか？」

そんな事を紫苑お姉さまが聞いてきた。

「二礼二拍一礼ですよね確か・・・」

「礼節もちゃんとお勉強しているのですね。さすがです」

拝礼の順番になり、５円を奉納し、二礼二拍一礼を行う。
５円と言うのも意味があるらしい。『良いご縁に恵まれますように』と言う事らしい。
願い事はただ一つ。

『このまま無事に聖應を卒業出来ます様に・・・』

聖應に於いて、良いご縁が出切る事を、今の司は知らない。
聖應は奇跡の様な学院なのだから・・・

特別挿入話　上岡由香里が生徒会長になるまでの簡単な経緯（前書き）

お知らせにも載せましたが、
上岡由香里が生徒会長になるまでの経緯が無いのは不味いと思い、
第一章第一話～第五話の若干の修正・訂正を入れ、
特別挿入話と言う編成にさせてもらいました。

タイトルの経緯に関しては、
『乙女はお姉さまに恋してる　櫻の園のエトワール』
の中で詳細が載っている可能性が否定出来ません。

ですが、この話ではその設定が無い事になっている上に、
ＰＣ版「処女は～」の、周防院奏エンディングに於いて、
上岡由香里は、陸上部部長と生徒会長を兼任している。
と言う設定を準拠させる為には、避けては通れない内容になってしまいました。
一例としては、上岡由香里が生徒会長でないと、
この先の予定している話で、更に矛盾が発生してしまうからです。

だったら、根本からプロット見直せ＼（゜∀｀メ）／コラーッと言われれば言い返せません。

詳細は、盗作扱いされる危険性が否めないので、細かくはしません。
と言うか出来ません。

特別挿入話　上岡由香里が生徒会長になるまでの簡単な経緯

私の名は上岡由香里。今年聖應女学院の二年生になります。

去年はまりやお姉さまや、奏さん。あまりお話する機会はありませんでしたが、紫苑お姉さま。

そして何より、エルダーになった瑞穂お姉さまと一緒に、実りのある一年間になったと思います。

瑞穂お姉さまのお部屋は、今度入ってくる新入生の為に譲り渡すそうです。

それを聞いた奏さんは、一日中自分の部屋から出てきませんでした。

私は、その時は、将来奏さんの手伝いをする様な立場になる。などとは考えても見ませんでした。

2月には新規の生徒会長も誕生しました。菅原君枝お姉さまです。

私達が進級すると言う事は、今年の6月には新しい『エルダーのお姉さま』が誕生します。

奏さんはそれをどう受け取るのでしょうか・・・？

今年の寮には二人の新入生が入寮してきました。

一人は茶髪のボブスタイルって言うのでしょうか？それにポニーテ

ールをもっと頭上にしたって言う、
なんて言って良いか判らないスタイルでした。どことなくおどおどしてる印象が強いですね。
彼女の名前は皆瀬初音。聞くと、幼等部から聖應にいるらしいです。言い方は悪いでしょうが、生粋のお嬢様と言う所でしょうか。

もう一人は、アーモンド目のちょっときつめの瞳が最大の印象でしょうか。
何となくですが、暗い影が見え隠れします。多分気のせいでしょう。
彼女の名は七々原薫子。「親に無理に聖應（ここ）を入学させられた」と言っていました。

奏さんや私は、お互いの自己紹介を再度行い、寮則を新入生に説明し、仕来たりに則り、妹を決める事となりました。

私の妹は皆瀬初音さんになりました。

「よ・・・・・・よろしくお願いします・・・・・・ゆ、由香里お姉さま・・・・・・」

蚊の無く様な小さな声でそう言われた時、私はこの子を肉体的、精神的に鍛えてあげなくては。と硬く誓いました。

奏さんは、七々原さんのことを、なぜか「薫子ちゃん」と呼んでいます。

瑞穂お姉さまは寮でも学院でも、私や奏さんに対してちゃん付けでした。

その影響なのでしょうね。

七々原さんは異常なまでに朝が弱く、朝食の時間になっても起きてこない事や多々ありました。

その度に奏さんは、嬉々として毎回起こしに行っています。

それが学院にも知れ渡り、「逆転姉妹」として有名になってしまいました。

奏さんも、毎日楽しそうに起こしに行くので、最初は呆れていました。が、慣れとは怖いものです。

気が付いたら、それは日常の普通のひとコマになってしまっていました。

そんな毎日なので、薫子ちゃんも奏さんには頭が上がらなくなっています。

私の方は、私の方で大変でした。

事あるごとにおどおどする初音ちゃん・・・あ。いつの間にか奏さんの呼び方に感化されてます。

まあいいです。

で、その初音ちゃんを叱咤激励したり、私の得意分野である料理を教えてあげたり、妹の仕事である紅茶の淹れ方を教えたり、

陸上に説得して入れたりして、おどおどした性格を直そうと、私なりに頑張りました。

初音ちゃんのおどおどする性格は、すこしずつですが、改善されつつあります。

そして、クラスの中にも友達ができ、気が付けば6月になっていました。

お友達の名は烏橘（うきつ）　加奈子（かなこ）さんと言います。

6月のエルダー選ですが、去年の瑞穂お姉さまの事もあり、候補に上がったお姉さま達は、皆さん辞退をしてしましまいた。

「瑞穂お姉さまの様な、同じ立場のエルダーになど、私には余りにも不似合いですわ」

との事でした。そして慣例により、生徒会長である、君枝お姉さまがエルダーのお姉さまになりました。

奏さんはエルダーのお姉さまの事に関しては、割り切ってしまった様子です。

生徒会に所属していた加奈子さんが、余りにも多忙すぎる。と泣きそうな顔で私に愚痴をこぼしてきました。

はたから見てて、今にも倒れそても不思議ではない様に見えてしまった所為でしょうか。

私は不用意に、こんな一言を出してしまいました。

「部活があるので、毎日と言う訳には行きませんが、生徒会のお手伝いをしましょうか？」

その後、加奈子さんにクラスの中で泣いて喜ばれました。

だけど、場所を考えて欲しかったですね・・・あれは思い出すだけで恥ずかしいです。

去年瑞穂お姉さまがエルダーでいらっしゃってた時の様な、大きな問題は生徒会には届いてきません。

お手伝いをする様になって判ったのですが、生徒会は、学院内のおおよその情報は伝わる仕組みになっている様です。

生徒会は、少数精鋭を謳っているだけあって、お手伝いの私達を入れても６人でした。

月日が流れ、私が生徒会でのお手伝いをするのが、当たり前の状況になっていました。

生徒会長であるエルダーのお姉さまから、何かと相談される事が増えだしてきました。

お姉さまに言わせると、

「瑞穂お姉さまや貴子お姉さまは、この様な時にどうしたと思いますか？」

と、聞きやすかったのが私の立場らしいのです。

なんせ寮で9ヶ月は一緒に寝食を共にしていたのだから、瑞穂お姉さまの考え方を、多少は理解しているかも知れない。

とか何とか・・・私は瑞穂お姉さまでは無いのですよ？と何度言った事でしょうか。

私が生徒会を手伝っていた影響なのか、初音ちゃんも生徒会の手伝いをしてくれる事となりました。

最初は部屋の隅でウサギの様に小さくなっていたのですが、生徒会の気質に触れていく間に、
やがて自分なりの意見を言ってくれるまでに変貌してくれました。
これは嬉しい誤算でした。

更に月日が流れ、あっと言う間に1月も半ばになっていました。

生徒会長であるエルダーのお姉さまが、次期生徒会長をそろそろ決めたい。と生徒会室内で言ってきました。

去年も、だいたいこの次期から引継ぎを行っていたそうです。

そこで出てきた名前に驚きました。

「二年生ながら、『琥珀の君』と言う二つ名で親しまれている、由香里さんが良いのでは無いでしょうか・・・？」

「えええええ～～～～っ！！ちょっと待って下さい。その二つ名だって、知らない間に付いていたのですよ?!と言うか、私より適任はいるでしょう?」

と言う様な事を言ったと思います。混乱していたので実はよく覚えていません。

ですが、初音ちゃんも『頑張ってサポートさせてもらいます』と言い、乗り気になってしまい、全員一致で私が次期生徒会長に決まってしまいました。

寮でその事を話したら、奏さんは自分の事の様に喜んでくれました。後に、奏さんが『白菊の君』と呼ばれる事になるなんて、思ってもいませんでした。

来年度は、まりやお姉さまや瑞穂お姉さまに、恥をかかせない様にがんばるしかありません。

陸上部は、どうしましょう・・・二年生の誰かに副部長を頼んで丸投げしましょうか。

・・・・・いけないいけない。これでは、まりやお姉さまそのものじゃありませんか。

兼任するしかありませんね。手伝いをしましょうか?と言ってしま

った過去の私に、説教をしたい気分です。

私や奏さんさん、初音ちゃん、薫子ちゃん達がそれぞれ進級しました。

あの子や寮にやってきました。

天使とも、妖精とも言えるその子は、寮に咲いた一輪の、とても形容しがたい銀の美しい花でした。

少なくても私は、その花に一目惚れしてしまました。

今年は、すばらしい一年になると思います。

特別挿入話　上岡由香里が生徒会長になるまでの簡単な経緯（後書き）

日記方式（？）でやってみました。
盗作扱いにされないと良いなぁ・・・
ｐｓ.
由香里が生徒会に関わらせる為に、蒔絵と言う存在を作ってみました。
＊→ウィキペディアの設定に準拠し、烏橘　可奈子に訂正しました。

今後出てくる名前などに関しては、出切る限りウィキペディアに準拠させてもらいます。

第一章第六話　乙女の乙女による乙女の為の乙女代表選　～その1～（前書き）

一度出してる内容なのですが、若干修正し、意図的に日数を置いて出し直しています。

ＰＣ版「処女は～」「２人の～」の構成の様な形で、章ごとにしか基本的には
サブタイトルは付けられません。
第一章のメインイベントなのでサブタイトルを付けました。

第一章第六話　乙女の乙女による乙女の為の乙女代表選　～その1～

6月に入った。
何やらクラス内が浮き足立ってきている。

「美帆理さん。クラスの雰囲気が何やらおかしくありませんか？」

私は隣の席になった新田（にった）　美帆理（みほり）さんに聞いてみる。

こげ茶色の髪の毛をウェーブにして、肩まで伸ばしているのが一番の印象である。

笑うときに出切る笑窪（えくぼ）も、ちょっと可愛い。

「司さんは、外部受験でしたね。6月と言えば、やはりエルダー選の事しかありません。
今年はどの様なお姉さまがエルダーになるのか、楽しみです」

「美帆理さん。なにも候補は三年生のお姉さまだけではありませんのよ？」

美紀さんがそんな事を横から言って来た。

「ああ、そうでした。今までの慣例や伝統から逸脱しているので、その可能性を考えませんでしたわ」

え？え？三年生からエルダーが選ばれるのが習わしではないの？

美紀さんが私に向けて、こんな事を宣言してきた。

「司さん。もし許されるのでしたならば、私は司さんに投票いたしますわ！」

「「「「私もです！」」」」

クラスの皆も、それに同意してしまっている。

「お願いですから、そのパワフルさを三年生のお姉さまに注いであげて下さい・・・」

一一一　二年生のとあるクラスにて。

「お聞きになりましたか？１－Ａのクラスの事を・・・」

「ええ、何でもあのクラスにいる、妖精とも天使とも比喩されていて、尚且つ二年生の中で隠しファンクラブまである、『あの娘（こ）』に対し、１－Ａクラスのほとんどが投票宣言したそうではありませんか」

「ええ、事もあろうに、隠しファンクラブの中では、二つ名が既にあるそうですわ」

「私も、その隠しファンクラブに入って見たいですわ・・・」

一一一　生徒会室にて。

「由香里会長（お姉さま）、妙な噂が二年生を中心に広まりかけているのをご存

知ですか？」

「え？初耳です。どの様なお話なのですか？」

「１－Ａの神加賀美さんの事なのですが」

由香里はその名を聞いた途端に旋律が走った思いがした。

『まさか二年生が司さんを影で苛めているとか・・・』

女生徒は話を続けていた。

「聞く所によると、１－Ａのクラスほぼ全てが、神加賀美さんにエルダー選の投票宣言を行ったらしく、更には、二年生の間で、いつの間にか神加賀美さんの隠しファンクラブが出来てるらしいのです。その隠しファンクラブも、神加賀美さんに投票するかも知れない。等と言う風聞が囁かれています」

由香里は、聞いた内容が、思っていたのとは全然違ったので安心したが、更なる問題に思い至った。

「聖應の伝統で、一年生がエルダーになった。などと言う歴史は無いと思いますが、どうなのでしょうか？」

「それは私も思い当たったので調べました。が、過去６０年間、一度として三年生以外がエルダーになった。と言う事実は存在しませんでした」

「それはいけないかもしませんね・・・・・この年で伝統を壊す

のは、生徒会としても許容出来る内容では無いと考えます。
何より先生方やＯＧの皆様がそれを知れば、黙っていないでしょう」

「何か手を打った方が宜しいかと思います。由香里会長」

「そうですね。臨時の生徒総会を開いた方が良いかも知れません。
学院長に内容の説明をし、判断を仰ぎましょう」

「わかりました」

一一一　学院長室にて。

「・・・・・・・・という事で、生徒会としては見過ごすのは如何な物か。と言うお話になりました。それで、
臨時の生徒総会を開いた方が良いかも知れません。と言う由香里会長・・・いえ、生徒会長のご意見なのですが、
学院長はどう考えますでしょうか？」

「問題と言えば問題でしょうね。生徒会長である由香里さんの言い分にも納得出来る所ではありますね。
大学部に進級した方々などが意見を出す可能性は十二分にありえます。所で今年のエルダー選挙は、いつ行うのでしょうか？」

学院長にそう聞かれ、生徒が手元に持ってきた小さ目なスケジュール表を開いた。

「今年ですと、大安吉日が六月の二十三日、水曜日です。その日で先生方に既に許可を頂いています」

「・・・ああ、確かに連絡は来ていますね。選挙自体は、恒例行事なので口を挿むつもりはありません。
では、来週の金曜日に臨時の生徒総会を開くと言う事で、先生方には私から連絡を入れておきます」

「承知いたしました。それではこれにて失礼致します」

翌日、校内放送のチャイムが全校に鳴り響いた。

『生徒会より臨時のお知らせがあります。来週金曜日に、臨時の生徒総会があります。
よほどのご事情が無い限り、参加してくださる様にお願いします。
繰り返します・・・・・・』

校内ではエルダー選の話で持ちきりになっており、大きく分かれると三大派閥になっていた。

三年生中心の、三年生の周防院奏をエルダーにしようとする派閥。

彼女は、学院祭で演じた役名と抜けるような肌の白さで「白菊の君」と一部から呼ばれている。

同じく、魚住（うおずみ）　響姫（ひびき）をエルダーにしようとする派閥。

彼女は、その美しい声により、放送委員の委員長となっており、人気がある。「セイレーンの君」の二つ名を持つ。

そして、一年生（主に１－Ａ生徒）による、司を出来ればエルダー

に、と言う派閥。

表立っては、何ら問題は発生していないが、水面下では激しい攻防がなされているらしい。

らしい。と言うのは、水面下の攻防を確認出来た生徒がいないからである。

そして、臨時の生徒総会が幕を開ける。

第一章第六話　乙女の乙女による乙女の為の乙女代表選　～その1～（後書き）

魚住　響姫と言う名前はｗｉｋｉより使わせて頂いてます。
設定についても基本的に同様です。

一一一　〇〇にて　と言う作りに関して言い訳。
同軸の時間内で、他の人から見た目線、所謂一人称や二人称、三人称とは違い、
舞台がころころ変わるので、判りやすく作った結果、こう言う妙な形になってしましました。

生徒会の役員が、由香里の事を『由香里会長』と呼んでいる理由は、親しみを持ってそう呼んでいるだけです。

どうでも良い細かい話かもですが、
ＰＣ版「処女は～」の前半とＴＶアニメ版「乙女は～」では、学院長は生徒を苗字では無く名前で呼んでいます。
これは多分、宮小路瑞穂の家族の話なので、そう言った方が理解しやすいと言う配慮なのでしょう。
ＰＣ版「処女は～」の由香里ルートとかを見ると、生徒を苗字で呼んでたりします。
こちらは多分、大抵の学校でありそうな、苗字で呼ぶ方が判りやすいと言った配慮なのでしょう。
本作の中では基本的には名前で呼ばせました。
まあ、次話以降に学院長が出る予定は無いのですがｗ

第一章第七話　乙女の乙女による乙女の為の乙女代表選　～その2～（前書き）

『由香里はこんなキャラぢゃねえええ』と言う状態全開です。

生徒会長と言う立場的に、厳しい言い回しになってしまします。

第一章第七話　乙女の乙女による乙女の為の乙女代表選　～その2～

壇上に上がった生徒会の生徒により、以下の発表がなされた。

「本日は臨時の生徒総会にお集まり頂き、有難うございます。さて、本日の生徒総会の趣旨ですが、
今月の二十三日、水曜日に行われる、エルダー選に対する事です」

「エルダー選は、予定通り行われますが、生徒会側として、若干問題になるであろう風聞が届きましたので、それに対する苦言を言わせて頂きます」

「それでは、苦言に関してですが、これは生徒会長より言って頂きます」

由香里が壇上に上がり、マイクを受け取った。

「有難う御座います。私が生徒会長として任されて頂いている事は、みなさんご承知の事と思います。
それでですね、今回のエルダー選にて若干気になる風聞があったので、この様な生徒総会を、学院長の承認を得て行っています」

「内容なのですが、とある一年生をエルダーに推薦しようとしている動きがある。と言う事です。
生徒会で調べた結果、過去６０年間、三年生以外がエルダーになった事例がありません」

「この学院は伝統を尊ぶ事が慣わしであります。ある程度の伝統の変更は、時代の流れや社会事情で許容出来るとは思います。

しかし、ことエルダーに関しては、例外は認められるのでしょうか？これを認めてしまうと、最悪、中等部からエルダー選出。等という結果を生み兼ねません」

「とある一年生が誰なのかは言いません。事情がご理解出来る方々も、総会が終わってから当事者に対し攻める様な事はお止め下さい。これは、生徒会長代行としてでは無く、一人の節度ある人としてお願いします。長くなりましたが、私からは以上です」

そう言ってお辞儀をし、マイクを隣の生徒に返す。

「生徒会長、有難う御座いました。付属事項ですが、この件が大学部に知れると、高等部である私達に対し、なにかしらの苦言やお叱りを受ける可能性が捨てきれず、この様な形となりました。皆様、もう一度お考え下さる様、お願い致します」

「エルダーのお姉さまを選出する用紙は明日より配ります。各クラスの受付係りの方は、生徒会室まで取りに来てくださる様にお願いします。御意見、ご希望は所定の方法で生徒会までお願い致します」

臨時総会が終わり、生徒は全員各クラスに戻って行った。

１－Ａのクラスでは、無表情になってしまった司がいたが、周りは何時も通りに雑談等を交わしていた。

『出切ることなら司に投票したかった』と言う理想で、クラスの生徒達もはしゃいでいただけなので、
実際問題は無理なのは理解していた様である。

ただし、どこにでも天邪鬼や例外はいるのだが・・・

投票する相手は、大きく分けると司を除いて、周防院奏派と魚住響姫派、そして上岡由香里派に変わった。

蛇足ではあるが、

上岡由香里は二年生の半ばから、小麦色の肌や明るい性格、話し掛けやすい物腰などから『琥珀の君』と言う二つ名で呼ばれ、親しまれていた。

周防院奏は、『白菊の君』と言う二つ名が定着しつつあるのは既に述べている通り。

一一一　２－Ｃ　七々原薫子のクラス。

「薫子さんはどなたに投票なさるのですか？ああ、ごめんなさい。奏お姉さまですよね・・・聞いた私が愚かでしたわ」

「う～ん。実は困ってて・・・・・初音が由佳里お姉さまに投票するのは判り切ってるのですが、それで、私が奏お姉さまに投票した。

となると、寮内での妙な空気に耐えられなくなりそうなので・・・」

「ああそうなってしまい兼ねませんね。ですが、名前を書けるのはお一人です。どなたかのお名前をお書きにならないと・・・」

「そうなのですけどね・・・あああ～。何で奏お姉さまは候補に

なっちゃうのよ・・・誰の名前も書けないじゃないの～」

「さすが『騎士（ナイト）の君』、みなさんを平等にと考えるそのお志は、見習わせて頂きます」

「いや、その呼び方はやめて欲しいのですけれど・・・」

「そう仰られても、二年生はほぼ、そう呼んでいますわよ？」

「なんと言う事だ・・・」

そう言って、薫子は机に突っ伏してしまった。

「それに司ちゃんに嫌われたくは無いしね・・・」

誰にも聞かれない一言をぽつりと漏らした。

一一一　２－Ａ　皆瀬初音のクラス。

「初音さんは生徒会長に投票なさるのでしょう？」

「う～ん。実は困ってまいす」

「何にでしょうか？」

「由佳里お姉さまと、奏お姉さま、どちらも私が暮している寮のお姉さま達です。
それに、私と薫子ちゃんが寮内で敵対関係になるのはちょっと・・・」

「なるほど、初音さんはお優しいのですね」

「そう言うつもりでは無くてですね、私と薫子ちゃん両方の世話係ににになっている、
司ちゃんが板ばさみになってしまわないかと心配で・・・」

「やっぱりお優しいではありませんか」

「そ、そんな事は・・・それに・・・」

「？何ですか？」

「あ～いえ。何でもありません」

『司ちゃんに嫌われたくありませんから』

心の中で初音はそう言った。

一一一　１－Ａ　神加賀美司のクラス。

「司さんはどなたに投票なさるのですか？」

そう聞かれ、暫く考えて答えた。

「実は無記名で出そうかと・・・」

「ええっ！？どうしてでしょうか？」

「あえて言うならばですが、魚住響姫お姉さま・・・あ～この場合は、響姫お姉さまなのですか?は、
私は全く知りません・・・・・あ・・・言い方が悪いですね。
お声は放送で聞いていますが、それだけだと、どの様なお方なのかが判りません。」

一息付いて、話を続ける。

「奏お姉さまに投票しようが、由佳里お姉さまに投票しようが、寮の中で遺恨が残る可能性がゼロではありません。
さらに、寮での私の立場が、奏お姉さまと由佳里お姉さまの妹である、薫子お姉さまと初音お姉さま二人の世話係。
と言う非常に微妙な立場なので、どちらにも投票出来ない。と言う所でしょうか」

「司さんもお辛い立場ですね」

「まぁ、決まってしまえば、後は大丈夫でしょうけど、そこまでが・・・」

「そうですね・・・」

『寮内での争い沙汰は、勘弁して欲しいのが本音ですかね。丁寧語はやっぱり疲れるね』

と、司はそう思った。

一一一　魚住響姫のクラス。

「響姫（ひびき）さん。私は貴女に投票させて頂きますわ」

「「「私もです」」」

一一一　３－Ｄ　周防院奏と上岡由佳里のクラス。

このクラスの盛り上がりは凄いものがあった。

なんせ、栄えあるエルダーを、このクラスから出せるかも知れないからだ。

とりあえず、奏や由佳里は、余計に盛り上がらない様に自重するのみであった。

彼女達（響姫や奏）は、それを単に微笑んでいるだけで、クラスの行動を肯定も否定もしなかった。

これはエルダー投票が他薦なので、いくら本人が「止めてくれ」と言った所で、付いてしまった勢いが止まらないのは、判っているからであろう。

本人は、静かに結果を待つしかない。どんな行動も、『痘痕（あばた）も靨（えくぼ）』になってしまうからである。

＊痘痕も靨

恋する者の目には、相手のあばたでもえくぼのように見える。ひいき目で見れば、どんな欠点でも長所に見えるということのたとえ。

大辞泉より。

第一章第七話　乙女の乙女による乙女の為の乙女代表選　～その2～（後書き）

薫子が『騎士の君』と呼ばれている経緯は、「エトワール」の中で出ているのは、該当小説を手に入れたので既に知っています。

「エトワール」に拘った理由は、
初音が陸上に入り、生徒会を手伝う経緯。薫子が二つ名で呼ばれる経緯。由佳里が生徒会長になるまでの経緯。
この辺の経緯が、単純に被ってない様にしたかっただけです。

なので、薫子が『騎士の君』と呼ばれている経緯は、独自解釈の挿入話を、エルダー選後にでも入れようかと思います。
この時点では、もうその二つ名が定着されていると言う事で、納得して頂きたいと思います。

第一章第八話　乙女の乙女による乙女の為の乙女代表選　～その3～（前書き）

エルダーについての注釈は、あくまでも蛇足程度の物です。
Ｗｉｋｉより抜粋しています。

第一章第八話　乙女の乙女による乙女の為の乙女代表選　～その3～

「奏さん、いえ『白菊の君』。投票させて頂きますので頑張って下さい」

「『白菊の君』、私の心を込めた投票を受け取って下さい」

「『セイレーンの君』、貴女こそがエルダーにふさわしいと私は思います。ですので私は貴女に投票致します」

などなどなど

エルダー選に向けての熱は帯びてくる一方である。

――エルダー・シスター『Ｅｌｄｅｒ　Ｓｉｓｔｅｒ』について。

手本となる最上級生に贈られる称号で、毎年6月末に全生徒の投票で選ばれる。

通常は『エルダー』と略される。学院内では上級生を「○○お姉さま」と呼ぶのが習わしだが、エルダーは同級生も含めて単に「お姉さま」と呼ばれる。

エルダーとなるには７５％以上の得票が必要であるが、選挙では特に候補者も立てずに行われるので、

通常一度の投票結果でエルダーが決定することはほぼ無い。

エルダー選挙では譲与という制度が存在し、得票者同士で票を譲り合って、最終的に７５％以上の票を得た者がエルダーとなることが慣習である。

それでも決まらない場合は空席となるが、このようなケースはほとんどない。
候補者がいない場合、生徒会長がエルダーになる場合もある。
生徒会長のような公式の役職ではないが、学院に長年継承される伝統であり、その影響力は大きく、時に生徒会長を凌ぐ発言力を持つ。

一一一　寮の中にて。

食事が終わり、浮かない表情の奏がいた。

「奏お姉さま、表情が冴えませんが具合でも悪いのですか？」

奏司が奏に顔を向けてそう聞いた。

「いえ、そう言う訳では無いのですよ・・・・・・ただちょっと・・・・・」

「ちょっと・・・ですか・・・」

そう言いながら、司が全員の前に、静かに用意しておいたアールグレイを置く。

＊アールグレイ
「アールグレイ」とは　グレイ伯爵の意　人の名前。
まだ　紅茶が「銀」と同じくらいの価値があった１８３０年代。
英国から中国使節団として派遣されていた一行が持ち帰った「紅茶」、コレを飲んだ時の首相『グレイ伯爵』は、いたくこのお茶を気に入り、同じような茶葉を作るようロンドンの紅茶業者に依頼した。

色々試作の結果　地中海沿岸のベルガモットの香りを着香した紅茶が献上された。

紅茶を一口飲み、奏が口を開く。

「私・・・エルダーに選ばれて良かったのかと・・・」

「そんな奏お姉さま・・・」

薫子が口を開くが、上手な慰め方が無いらしく、言葉が続かなかった。

「似合わない・・・そんな資格が無い・・・そんな考えが頭の中でぐるぐる回ってしまっていて、どう言って良いか判らない。そんな所でしょうか？」

優しい司のその言葉に、奏がはっとなる。

司は言葉を続けた。

「奏お姉さま、お姉さまの名前の意味、考えた事はおありですか？」

そう言いながら椅子に座る。

「私の、名前の意味・・・」

「奏でる。と言う所からの意味なのでしょうね。楽器、特に管弦楽器を演奏する。と言う意味と、舞をまう、と言う意味になります。奏お姉さまは、演劇部の部長だったと思います」

「これは、推測ですが、奏お姉さまは『演劇を舞う』運命をその名前から頂いたのでは無いでしょうか？
そして、『エルダーを舞う』のも、周りが認めた。それだけではないでしょうか？エルダーに選ばれる事が名誉な事ならば、奏お姉さまが今まで見てきたエルダーの良かった点を、自分なりにエルダーとして舞えばよろしいのではないのでしょうか」

「司ちゃん、有難うなのですよ。何となく、言って欲しかった言葉をもらった気分です」

「そうですか・・・それは何よりです」

そう言って司が微笑む。

「所で・・・」

由香里が切り出した。

「私の名前の意味って、司ちゃんは判るの？」

「奏お姉さまのも、あくまで自論ですよ？違った意味もあると思いますが・・・」

「それでも良いから。ね？」

「まあ構いませんが・・・由香里お姉さまの里ですが、これは故郷とかの意味だと思います。
由は、そこから通ってくる、又は出てくると言う意味です。香は、かおり。におい。良いにおいをさすことが多いです。

これからすると、故郷の香りがにじみ出てくる様な人になって欲しい。そんな意味では無いでしょうか」

それを聞いていた薫子も、

「じゃあ、私のは？」　と聞いてきた。

「そうですね・・・・・薫は、顔などが華やかに美しく見える。つややかな美しさが漂う。と言う意味だと思います。子は、両親の間に生まれた者。つまりはそう言う風に育って欲しいと言う事では無いでしょうか」

「うわ～。私には不似合いすぎる・・・」

「じゃあ、私は？」　と初音。

「鳥や虫の、その年、その季節の最初の鳴き声。特に、鶯（うぐいす）の鳴き声を『初音』と言うそうです。初は、はじめてとか最初とかですね。音は、音楽のふし。ねいろですか。物事を始める時、最初に声を出して欲しい。つまりはリーダシップを取って欲しい。そんな意味でしょうか」

「が、がんばります」

何を？と聞きそうになった司であった。

「じゃあ、司ちゃんの名前の意味は何ですか？」　と奏が聞いてきた。

「私ですか・・・『長として』農政を司る。宗派を司る。『学会を』牛耳る。司管。『事業を』掌理する。支配。『雑誌』を主宰する。どこかの会社の社長にでもなってほしい。そんな意味なのでしょうね・・・」

その声色は悲しそうだった。

「なぜそんな悲しそうな顔をなさるのですか?良い名の意味では無いかと思いますよ?」

由香里にそう言われるが、司の表情は曇ったままだった。

「本来は、この名は私に付かない筈でしたから・・・」

「え?それってどう言う「申し訳ありません。いずれお話しなくてはいけない時期が来ると思います。それまでは聞かないで下さい」」

最後まで言われる前に、司が言葉を被せてきた。

「そうですか・・・・・・じゃあ、その時期が来たら教えて下さいね?」

そんな、何時(いつ)とも知れない約束を尻目に、投票の開票発表日が迎えられる。

第一章第八話　乙女の乙女による乙女の為の乙女代表選　～その3～（後書き）

名前の謂れを独自解釈してみました。異論は認めます。

第一章第九話　乙女の乙女による乙女の為の乙女代表選　～その４～

生徒達の興奮と言う名の熱は燃えに燃えまくり、四時限目開始時点で投票は締め切られた。

投票用紙は生徒会室に全て集められ、午後からの時間を使って、即日開票作業が行われていた。

そして投票結果発表の為、講堂に生徒が集まってきた。

講堂の中は、さしずめ、アイドルのコンサート会場並の熱気が帯びていた。

司のクラスの担任、桃原詩鶴子先生が壇上に上がっていく。

「あれ？なんで桃原が壇上に…？」

「ああ司さん、それはですね。選出委員会の生徒や、生徒会役員も選出させる可能性があるので、
発表は毎年先生方が行って下さる事になっているのです」

「なるほど…」

開票結果が記載されている用紙が、詩鶴子先生に手渡された。

「不正問題が無いようなので、発表を開始します…静粛に」

そのたった一言で、会場は嘘のように静まりかえった。

詩鶴子先生の説明が続けられた。

「エルダー・シスター　（Ｅｌｄｅｒ　Ｓｉｓｔｅｒ）　先行委員会による、集計結果が先ほど確定しました。選考規約に基づき、得票数が２０パーセントを超えた生徒を呼びますので、壇上へ上がって下さい」

この言葉から判る事は、現状で７５パーセント以上の生徒がいないと言う事である。

壇上に上がった生徒達による、獲得票の譲り合いが行われる。と言う事であろう。

「有効投票数７４６票。うち１９８票を獲得。魚住響姫さん、壇上に」

その名を呼ばれ、投票した生徒達からキャーと言う黄色い声が上がった。

２人の生徒に手を引かれ、響姫さん。いや、私（司）からすれば、響姫お姉さまが壇上に上げられた。

「１９０票を獲得。周防院奏さん」

やはり黄色い声が上がり、困惑顔の奏お姉さまが壇上に押し上げられた。

「１８５票を獲得。上岡由香里さん」

黄色い声はやはり上がるが、本人は冷静に壇上に上がっていった。

「最後ですが……規約違反ではありませんが……」

困った表情の詩鶴子先生であった。

「え～と、副会長さん。ちょっと良いですか？」

生徒会副会長のお姉さまが壇上に上がり、詩鶴子先生と何やら小声で話し合いが行われた。

そして、詩鶴子先生が再度マイクを取る。

－－－　副会長と詩鶴子先生の話し合いｓｉｄｅ

「副会長。これはどう言う事ですか？」

詩鶴子先生がそこに書かれている名前を、彼女に見せる。

「ええっ！？…桃原先生には申し訳ないとは思うのですが、こうなる予測は多少ありました」

その名を見て、彼女は詩鶴子先生にそう言う。その顔は微笑んでいた。

「言い方はどうかと思うのですが、これは、なるべくしてなってしまった結果だと思います、桃原先生。

選考規約上では、『聖應の生徒であること』、『投票数が２０パー

セント以上であること』、
『他薦でその結果が発生したしまった事』、『不正では無いこと』
のみで、学年までは記載事項ではありません」

「この前の臨時総会は、抑止力になり切れなかった…そう言う事ですか…」

「桃原先生、これは特例と言う事で、どうでしょうか？」

「しかたありませんね……」

ーーー　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

「特例事項と言う事で……最後の一人ですが発表します。１７３票を獲得。神加賀美司さん」

え～？と言う声とキャーと言う声が混ざって講堂内を埋め尽くさせた。

ぇ？？今、私の名前が出なかった？

いや、聞き間違いだろ…

「司さん。呼ばれましたよ。さ、壇上へ」

嘘だ…誰か嘘だと言って…

「残り票の獲得者に関しては、後日生徒会の掲示板に掲載させますので、そちらを確認する様にして下さい」

「では副会長、後はお願いします」

桃原先生がマイクを渡す。

「承知しました。桃原先生、ご協力ありがとうございました」

「それでは、これより得票上位者である皆様に、自身の持つ票を譲り渡す意思の有無を確認します。
意思無き場合は沈黙を以って答えて下さい」

「私は…」

私（司）はすぐに声を出す。

「私は、ここに上がるべき存在ではありません。慣例や伝統を尊ぶのでしたら、一年生ごときがここに上がる事自体ありえません。
それは皆様も、この前の臨時生徒総会でご理解していたと思っていました。
ゆえに、投票して頂いた方々には申し訳ありませんが、私の持ってしまった票を、周防院奏お姉さまにお譲り致します」

そう言って、票を譲る際の伝統に則り、奏お姉さまの右手の甲に口付けを行った。

「私は…」

次に声を出したのは、由香里お姉さまだった。

「私は現在、生徒会長と陸上部部長を兼任しています。これでエルダーになんてなってしまうと、肉体的、精神的に無理があります。従って、私は自身の持つ票を、魚住響姫さんへお渡し致します」

そう言って由香里お姉さまは、響姫お姉さまの右手の甲に口付けを行った。

これで残ったのは、３８３票となった響姫お姉さま。そして、３６３票の奏お姉さまとなった。

「…私が…」

その声に講堂内にざわめきを呼んだ。

そして、その声の主に視線が集まった。

「私が、敬愛してやまない、演劇部の『白菊の君』、貴女に、私の親愛の情を込め、私の票をお譲りいたします」

そう言って、響姫お姉さまは、奏お姉さまの右手の甲に口付けを行った。

この瞬間、第７４代エルダー・シスターが誕生した。

「「「お姉さま。おめでとう御座います」」」

講堂のあちらこちらから祝辞が飛んできた。

こうして、周防院奏お姉さまは、『（エルダーの）お姉さま』、又は『白菊の君』と呼ばれる事となった。

この後、由香里お姉さまは『琥珀の君』と言う二つ名が定着し、呼び親しまれる事となった。

そして、その妖精とも天使とも比喩させる容姿から、司は『妖精の君』と言う二つ名をもらってしまい、そう呼ばれる事となった。

翌朝からの挨拶は、

「お早う御座います、お姉さま」又は、「お早う御座います、『白菊の君』」　これは全生徒が奏をそう呼ぶ。

由香里に対しては、「お早う御座います、『琥珀の君』」

そして、司に対しては、「お早う御座います、『妖精の君』」

気が付くと、『妖精の君』のファンクラブや、『白菊の君』のファンクラブ、『琥珀の君』のファンクラブ、

更には、『セイレーンの君』のファンクラブまで結成されていた。

第一章第九話　乙女の乙女による乙女の為の乙女代表選　～その４～（後書き）

第一章はここまでです。

次話は七々原薫子が二つ名で呼ばれるまでの経緯を挿入させます。

特別挿入話2　七々原薫子が二つ名で呼ばれるまでの簡単な経緯（前書き）

「エトワール」の内容に被る部分はなるべく回避したつもりです。
基本的には私の独自解釈だと言う事で納得してもらえればと思います。
薫子が自分の事を『あたし』と言ってる設定は、「エトワール」の設定をそのまま使わせてもらいました。

特別挿入話2　七々原薫子が二つ名で呼ばれるまでの簡単な経緯

私の名は七々原薫子。

親にむりやり聖應女学院に編入させられた。ここの一年生となる。

「聖應女学院が嫌なら家の仕事を手伝え」

なんて言うから、仕方なく、軽い気持ちでこの学院に入った。

……なんと言うか……この学院は異次元だと思ったのが第一印象だった。

ぜったい無理っしょ…あたしには…

生徒が挨拶するたびに、その背中に何かの花が咲く様なオーラが見える。

がさつ者のあたしには、ここはきつすぎる。

とりあえずこれから住む事になる寮へ向かった。

寮に入ると、そこには頭に大きなピンクのリボンを付けた、白い肌のお人形さんがいた。

こんな綺麗と言うか、可愛い人も、世の中にはいるんだなと、しみじみ思ってしまった。

彼女の名は周防院奏先輩。…あれでも二年生だと言う。

同学年だと思ってしまった…

寮内にいるのは、あたしを含めて４人だそうだ。

二年生の周防院奏先輩、そして上岡由香里先輩。

一年生では、あたしともう一人、幼等部から聖應にいるらし皆瀬初音さん。

皆瀬初音さんの第一印象は、ウサギの様な人だと思った。いつも何かにおどおどしていた。

周防院先輩達やあたしは、お互いの自己紹介を再度行い、寮則を新入生に説明し、仕来たりに則り、『妹』を決める事になるらしい。

そこで判ったのだけれど、下級生は上級生の事を親しみを持って、「○○お姉さま」と呼ぶと言う仕来たりがある。と言う事だった。

つまり、あたしから周防院先輩を呼ぶ時は、「奏お姉さま」、岡由先輩は「由香里お姉さま」と為る。

そして、『妹』と言うのは、寮内の仕来たりで、下級生はそれぞれ特定の上級生の世話係りに任命され、逆に世話を受ける上級生は、その下級生を指導する義務を負う。世話係りがその『妹』と言う事らしい。

あたしが上級生の世話?!むりっしょ…自分の事だってちゃんと出切る自信が無いのに…

そんな事を言っても、決まりは決まり。

そしてあたしは、なぜか奏お姉さまの妹になってしまった。

奏お姉さまがそう言ってきて、由香里お姉さまが初音さんとの話し合いでそうなってしまった。

翌朝、目覚ましであたしは起きられなかった。朝だけは低血圧で起きられない体質なのだから仕方ない。

体を誰かにゆすられた。ついでに声が聞こえてきた。

「薫子ちゃん。朝なのですよ?」

奏お姉さまの笑顔がそこにはあった。それを認識出来たとき、あたしは恥ずかしくて顔を真っ赤にしていた。

こんな毎日が続いてしまい、気が付くとそれが学院にも知れてしまい、「逆転姉妹」と言われ有名になっていた。

どこの世界にも、秩序や仕来たりを守れない人を不快に思える人は普通にいて、聖應もそれは例外では無かった。

二年生のお姉さまがあたしのクラスへやって来て、こんな事を言って来た。

「貴女、上級生に毎朝起こしてもらってるそうでは無いですか？伝統を尊ぶこの学院では、そのような失態は早急に改善して下さいませんこと？
上級生を良いように小間使いにして、恥ずかしいとは思わないのですかっ？！」

カッとなったあたしは、

「奏お姉さまは、やりたくてそれをやってるだけですっ。貴女にそれを言う資格はあるのですかっ！？」

と喧嘩口調で言ってしまった。

そこから、口で言っても判らない様なので、試合でどちらの言い分が正しいかを決める事となってしましました。

試合は、あたしの知らないフェンシングだった。

上級生はその足で生徒会へ乗り込み、事の経緯を説明し、生徒達の前で決着を付けたいと陳情し、
あたしがフェンシングを知らないと言うのを知った生徒会は、フェアでは無いと言うが、上級生は、

「それならば、猶予を3週間与えます。これなら基本的な事は学べる筈です。これで問題は無いと思います」

と言い、生徒会に承認させてしまった。

事情を知った奏お姉さまはあたしを叱った。が、もう決まってしまった事なので後戻りも出来ず、奏お姉さまの上級生で、既に聖應を卒業していた、宮小路瑞穂お姉さまと言う方に、電話で助けを依頼した。

翌日、宮小路瑞穂お姉さまと言う方の紹介で、同じく聖應を卒業していた厳島貴子さんを紹介してもらった。

「瑞穂お姉さまからの、たってのご依頼とあって、私、厳島貴子が貴女にフェンシングをお教えします」

そこからのトレーニングは凄かった。でもあたしも負けられない意地があったので、体中に痣を作りながらでも頑張った。

あっという間に試合の日となってしまった。

試合当日。生徒会からの打診により、エルダーのお姉さまと言う方が仲介人としてやってきた。

審判はフェンシング部の部長であった。

「私はこの試合の審判に於いて、常に公平である事を、エルダーのお姉さまに誓います。ご不振な点があれば、即座に部長を降ります」

と言う宣言を行い、エルダーのお姉さまも納得した。エルダーのお

姉さまも、若干ルールは知っている様子だった。

3本試合で、2本相手に有効打を入れた方が勝ち。と言うルールらしい。

あたしは無我夢中だった。頭で考えるよりも、体が先に動いていた。

最初に1本取ったのはあたしだった。何をしたのか良く覚えていない。

次は、あたしが1本取られた。気が付いたら、相手のレイピアがあたしの胴をついていた。

これで1対1。

そして次。真っ白になったあたしの頭とは裏腹に、あたしのレイピアは相手のそれを弾き、有効打を入れていた。

「勝負あり。薫子さんの勝ちです」

勝った!!あたしが勝った!!

初めてあたしが奏お姉さまの為に何かをしてあげられた!!

これを期に、あたしは何故か『騎士(ナイト)の君』と呼ばれる事になってしまった。

＊＊フェンシングについて

・現在のフェンシングはエペ・フルーレ・サーブルの3つの種目に分かれています。

エペ

貴族の決闘は相手を殺すことに意味があるのではなく、傷つけられた名誉を取り戻すために行われるため、相手の体から血を流せば勝利という取り決めがありました。これが『エペ』の起源です。

フルーレ

剣術の練習では練習相手を殺しては大変なので、『攻撃をされたら先ず防御する』というルールがありました。このルールをそのまま適用した種目が『フルーレ』です。

サーブル

騎馬民族の戦いを元に作られたのが『サーブル』です。この種目だけは馬上の戦いが起源となっていますので、相手を『突く』のではなく、『切る』動作が主となっています。また、騎馬民族は馬に対しても尊敬の念を持っていたため、敵の馬であれ、傷つけることは不名誉であると考えていたようです。そのため、現在の『サーブル』の攻撃有効面も腰よりも上の上半身となっています。

・フェンシングのルール

電気による審判

数多くある格技スポーツの中で、フェンシングの最も特徴的な部分は、“電気による判定”が挙げられます。

剣道との対比によく持ち出されるフェンシングですが、全て人間の目で判定する剣道に対して、
攻撃箇所を電気で判断し、その他の判定を人間が行うフェンシングは、他の競技に比べて勝ち負けが明確化しているといえます。
台上の左右に立っている直方体が判定を表示します。
白・赤・緑のランプで相手のどの部分を突いたかが分かり、それを見て審判が得点を加えていきます。

――Ｆｅｎｃｉｎｇ　Ｃｌｕｂ　ＨＰより

特別挿入話2　七々原薫子が二つ名で呼ばれるまでの簡単な経緯（後書き）

次は本編第二章になります。

第二章　人魚になれない妖精の秘密　第一話

7月某日

エルダー選の影響もあってか、司の人気は上がっていく一方であった。

「一年で何か困った事があれば、とりあえず『妖精の姫』に相談しましょう」

などど言う風潮が出てくる始末であった。

ここにそれを実践している生徒もいた。

「あの……『妖精の姫』……ご相談があるのですが……」

「え～と、ここでお話出きる内容ですか？」

「できれば、どこかお二人で……」

顔を真っ赤に染め、なけなしの勇気を振りしぼったその声に、司も嫌とは言えなかった。

とりあえず、食堂で話を聞く事にし、移動をした。

二人は向き合う様に席に座る。

「とりあえず、お名前を聞いても？」

「は、はい！私は、朝比奈（あさひな）　麻衣香（まいか）と申します」

「それで、お話の内容は何でしょうか？」

司はそう聞き、彼女を見る。彼女は見た目は白光の美女だが、中身が違う。そう思わせる何かがあった。

「実は私……肺に疾病を抱えてて、早めに手術をすれば後遺症もほとんど無くて済むと、医者から言われてるのですが…」

「胸に傷が付くのが嫌。そう言う事ですか？」

「そ、それもあるのですが……」

それも？他にも理由が？

「“も”と言う事は、他に何かある。と聞こえます。それは？」

「あの……その……」

麻衣香さんは耳まで真っ赤になり、俯いてしまった。よほど恥ずかしい内容なのでしょうか。

「言ってもらえないと、お答え出来ませんよ？直球で言えないのなら、たとえ話で言うとかは？」

「……好きな人がこの学院に出来てしまいました。でも、手術すると二ヶ月ほど合えなくなってしまい、

さらに、その…告白する勇気も私にはありません。こう言う時はどうすれば…」

「恋愛話ですか……ちょっと私には荷が重過ぎます。それ以前に、そのお相手とは雑談とかのお話をした事は？」

「あ…ありません」

え～と。これは所謂あれですか？百合の世界のお話なのですか？そんなの私に振らないで。

「麻衣香さん」　なるべく優しく話す。

「は、はい」

「御免なさい。私は人の恋愛に対して、適切なアドバイスをしてあげられる様な人生経験を持っていないわ。エルダーのお姉さまに聞いて頂いた方が、何かしらの方針とかをもらえると思います。それで、逆に聞きますが、手術はするおつもりなのですか？」

「簡単な手術なので、失敗はほぼ無いと言われています。でも……」

「手術も怖いんですね？」

「はい」

麻衣香さんの目に涙が溢れ出す。

その涙をハンカチでそっと拭いてあげる。

「その手術をしなければ、好きになった相手と、永遠にお話は出来なくなる。と言う事なのですか？」

「いえ。だたこのまま放置しておくと、やがて体力が落ちて行き、女の幸せを実感出来なくなる可能性も…」

女の幸せ？好きな男性と結婚して子供を生む。そんな所なのかな？どう答えようかな…

「…その幸せが何かは、麻衣香さん自身の基準なので聞きません。そうですね……この学院で好きになった人と、他愛も無い話をする勇気、つまりはとりあえずお友達から…とお願いする勇気と、手術をしないと、お話すら出来なくなってしまうしかも知れないし、この学院で一緒に楽しい事も出来なくなるかも知れない恐怖。どっちが怖いですか？」

「っ一緒に一杯お話をしたいです！！」

「答えは出てるじゃ無いですか……一緒におしゃべりを楽しんだり、一緒にお昼を食べたり、一緒に登下校したり…
それを手術後にお願いすれば良いじゃないですか。手術が怖いのは判ります。でも、その恐怖を乗り越えないと、麻衣香さんの学院での明るい明日は来ないのですよ？明るい未来の希望を持って、辛い恐怖を乗り越えましょう」

そう言いながら、私は彼女の横に座りなおし、麻衣香さんの肩を抱きしめてあげた。

「ありがとうっ。有難う御座います。私、退院したら必ず、お友達になって欲しいと告白します！！」

私の肩に顔を埋め、しゃくり上げながら麻衣香さんはそう言った。

退院後、「わっ、私とお友達になって下さい司さんっ！！」と真っ赤な顔で言われるなどとは、夢にも思わなかった。

こんな逸話が何気ない会話から広がり、司に対して色々な相談事が来る事になってしまった。

司は、全部聞くのは無理と判断し、エルダーである奏に丸投げしたりもした。

奏もそれを快く承諾し、悩みがある生徒のクラスまで出向き、

「司ちゃんから簡単なお話は聞きました。私で良ければお聞きしますよ？」

と笑顔で言われ、全生徒の憧れの的と、二人でだけでお話をさせてもらう機会を作ってくれた司に対し、
更に人気が上がる結果を生み出してしまっていた。

とある日。

桃原先生が授業終了時にこんな事を全員に言って来た。

「来週から、体育の授業にプールがあります。学院指定の水着購入券を配りますので、今週中には購入しておいて下さい」

ついに来た。司はそう思った。

以前に桃原先生には、包帯の件で事情を話しておいた。

今日は再確認をしておこう。

桃原先生と屋上で再度話をさせてもらった。

「以前の件ですが、プールは見学で良いのですけど、やはり水着着用なのでしょうか？」

「生理が重い。とか、どこか怪我をした。とか、風邪を引いた。などの場合は、制服のまま見学と言うのは許されています。ですが、問題はそこでは無いかも知れません」

「え？どう言う事でしょうか？」

「神加賀美さんは、一年生ながら、二つ名で呼ばれています。もう一人二つ名で呼ばれている生徒もいます。その子は昵（さそう）雅楽乃（うたの）さんと言います。まあ昵さんの事は置いて置きましょう。

神加賀美さんも二つ名が付く有名人なので、エルダーほどとまでは行かないまでも、何らかの良くない噂が一人歩きする可能性があります」

「過去の亡霊は未だ健在……ですか…」

司は、無意識に左上腕に右手を添え、聞こえない様に独り言を呟いた。

「寮のお姉さまに相談して見てはどうでしょうか？」

「奏お姉さまや由香里お姉さまは、私を守ってくれるとは言ってくれました。ですがそれは、お姉さま達に話すことが出来たのは、この髪の毛の色で異端に見られて、魔女裁判にかけられた。と言った部分だけです」

「…そうですか…私が言える最善策としては、生理とか夏風邪ですね…言い方は如何な物かと思いますが、一生徒なら『ああそうなのか』で済むのですが、人気が付くと何とも…ぼかした言い回しで相談するのが良いかとも思いますね」

「最悪はそうします。有難うございました」

教室への帰り道、司はこんな考えを持った。

『心から受け入れてくれる人…ですか…聖應（ここ）で見つけられるのでしょうか…』

第二章第二話

桃原先生のアドバイスもあり、司は二日後に迫っていたプールを、意図的に風邪を引く事で見学と言う事にする為、入浴後、バルコニーで1時間程体を冷やし、無事風邪を引く事に成功した。

これが、後悔と失敗を招く事になる等とは思っても見なかった。

翌朝、熱でフラフラになりながら、寮のリビングに司は行った。

「つ、司ちゃんっ!?どうしたのですかっ!?」

あわてて由香里と奏が駆け寄る。

「も…もうしわけ…ありません…風邪を引いたらしく…」

「だったら、ベッドで大人しく寝てないと駄目でしょうっ」

初音や薫子も司に近寄り、初音が司の額に手を添える。

「凄い熱。体温は測ったの?」

「まだ…です」

「と、とにかくベッドへ」

薫子達に支えられながら、司はベッドに寝かしつけられ、体温を測る。

「初音ちゃん。悪いけど氷枕持ってきてくれる?薫子ちゃんは司ちゃんの着替えの下着とタオルを適当に出しちゃって」

「「はい」」

そんな事をやってる間に、電子体温計のアラームが鳴る。

奏が表示されている数値を確認した。

「３８．５度!司ちゃんの平熱は何度ですか?」

「３６だったかと…」

「由香里さん。お粥か何かは今から作れますか?少しでも食べてお薬飲まないと」

「うん判った。すぐ作ってくる」

そう言って、由香里が厨房に走って言った。

「そんな……皆授業があるでしょうに……」

意図的に風邪を引いたが、事が大きくなってしまっているので、申し訳ない気持ちで、そんな事をガラガラ声で言った。

「駄目ですっ!!人間は平熱より3度上がっただけで、予期せぬ弊害を起こす場合もあるのですよ」

「お水と、簡単なお昼だけ用意しておいて下されば…大人しく寝て

ますから…」

「駄目です。今日は付きっ切りで看病しますです」

「お姉さまが看病なんてしたら、学院中の生徒がここに来てしまします。ですからここは私が…」

と初音。

「いや初音は生徒会の方が忙しいでしょ？氷枕を換えるとか、汗を拭いてあげる位ならあたしにも出来るから…」

と薫子。

『汗を拭いてあげる』この言葉に司は戦慄した。そう言うのは予想していなかったからだ。

「いえ、そんな…お姉さま達のお手を煩わせる訳には…」

「初音ちゃん。両手がふさがってるからドア開けて」

ドアの外から由香里の声がし、初音がドアを開けた。

由香里は少な目の胃に優しい食べ物と、薬をお盆に乗せていた。

「司ちゃん。簡単で悪いけど、消化には良い食べ物作って来たから、一口だけでも食べて」

司は体を起こし、供えて付けていたスプーンを取ろうとするが、うまくつかめない。

「あ…あれ？」

視界が霞む。頭がぼ～とする。体の節々が痛い。

「な…ん…で…」

呂律も回ってこなくなってきた。

それを見ていた由香里が、スプーンに一口程度の量をすくい、料理の熱を冷ます為に2度ほどフーフーと口から息を出し、司の口元へ持っていく。

「はい。食べて」

思考が止まりかけてる司は、言われた通り口を開け、由香里からの食事を口に入れた。

「おいしい？」

由香里がそう聞いてきた。食事を何とか飲み込んだ司は、

「味が…わかりません…」

とかすかな声で答えた。

「まだ食べられる？」

奏が聞いてきた。

「むり…」

言葉を出すのも辛い様だった。

「じゃあ、解熱剤を飲んで寝ましょうね?」

「はい…」

奏が水の入ったコップを持ち、司の口に付け、水を飲ませる。水には解熱剤が既に混ぜられていた。

水を飲んだ司は、支えてくれていた薫子達になだれかかる様に倒れ来た。

「ちょっ!!大丈夫?」

薫子が何とか受け止め、ベッドに寝かしつける。

既に反応が無い。ゼエゼエと言う呼吸音のみ返って来た。

「不味いわね……保険医の先生かお医者さんを呼んだ方が良いかも知れないわ」

と由香里。

「そ、そんなに悪いのですかっ?!」

奏がが由香里に聞いた。

「いえ、素人対処では見落としがあるかも知れないでしょ?初音ち

ゃん。悪いけど学院の保険医の先生をここまで呼んで来て。
それと、薫子ちゃんは桃原先生に、司ちゃんが風邪で倒れたからとりあえず休むと伝えて」

「「はいっ」」

保険医の先生が、初音にせかされて寮にやってきた。

「熱は何度あったのですか？」

ベッドの横で様子を見ていた奏と由香里に、保険医の先生が質問した。

「薬を飲む前が３８．５度でした。つい今しがた測りなおしましたが、変わってません」

「平熱は？」

「３６だそうです」

保険医の先生は桃原先生から、司の事情は聞かされてはいた。

「…彼女は普段、と言うか最近何かの薬を飲んでるのを見たことは？」

そこにいた全員が首を振る。

「う～ん。思い当たる可能性はあるのだけれど…」

「な、なんですか?!」

「とある事情で、とある薬を神加賀美さんは常用している筈なのだけど、その薬を飲み忘れてしまい、今に至った。と考えるわ」

「その薬と事情は何なのですか?」

「医者は患者の秘密等に対して守秘義務があるの。本人の口から言わない限り、私は言えないわ」

そう言って、司の右腕の寝巻きをめくって注射を打った。

「これで少しは楽になるはず。もう授業は始まっているわ。学院に行きなさい」

「で、ですが先生…」

「心配なのは判るけど。それで体を壊したら、今度は神加賀美さんが心配する番になるのよ?どうしてもと言うのなら、お昼休みにでも見に来なさい。いいわね?」

「わ…判りました…」

心を司の部屋に残したまま、寮の皆はしぶしぶ登校していった。

「神加賀美さん。寮の皆が貴女の事を心配しているわ。そろそろ貴女の土俵へ誰かを立たせて上げなさい。
そうしないと、心労であの子達が倒れてしまうわよ…」

聞こえてないとは知りつつ、保険医の先生はそう言って部屋を出て行った。

第二章第二話（後書き）

＞人間は平熱より3度上がっただけで～

これに関しては、それ以上の大事の話に持っていくつもりでは無いので、突っ込まないで下さいｍ（；＿＿）ｍ

第二章第三話

一一一　３－Ｄ教室にて。

心ここにあらず。の状態の奏がいた。

「奏さん。心配なのは判るけど。心配しすぎは体に毒ですよ?保険医の先生が言ってたでしょ。もし心労で倒れたなんて事になったら、今度は司ちゃん達が心配するのよ?」

と由香里。

「判ってはいるのです…判ってはいるのですが…」

それを見ていた近くの生徒が声を掛けてきた。

「お姉さま、いえ『白菊の君』、どうかなさったのですか?」

「あ、いえその…一緒の寮に住んでいる司ちゃんの事で…」

「『妖精の姫』がどうかしたのですか?」

「風邪を引いてしまい、高熱で倒れてしまって…」

「そうですか。それは大変ですね。お薬はお飲みになったのですか?」

「保険医の先生に来てもらい、注射を打ってもらったのですが、どうしても心配です」

「だから、心配しすぎは奏さんが倒れるって…」

由香里が言うが、奏の表情は冴えない。

「とりあえず、お昼休みに様子を見に行きましょう？ね、奏さん」

「そ、そうしますです」

一一一　１１時３０分頃、寮の司の部屋にて。

ふと司が目を覚ます。自分の掻いた汗の所為で寝巻きや下着がぐっしょり濡れていた。

「汗が気持ち悪い…着替えないと…」

朦朧とする意識の中で、起き上がろうとするが、体が言う事を聞かない。

「抗生剤…最近飲んだの…いつだっけ…」

一日一回は飲んでおいた方が良い薬を、最近飲んでない事に、今更ながらに気が付く。

「どうしよう……」

大抵の病人がそうなのだろうが、一人ぼっちで寝ていると、気分がだんだん落ち込んでくる。

司も、まさに今その状態で、人恋しさが募っている上に、このまま死んだら、などと言う不安が頭を過ぎる。

「……お姉さま…寂しい…」

一一一　授業終了直前、３－Ｄ教室にて。

『…お姉さま…寂しい…』

授業中に司の声が聞こえた気がした。

突然席を立つ奏と由香里。

「どうしたのですか？お二人とも？」

先生が声を掛けるが、二人は外を凝視していた。その後、二人の目線が合う。

「奏さん」

「由香里さんもですか？」

「ええ。私達を呼んだわよね？」

「間違い無いと思いますです」

先生は何が何だかさっぱりの表情だった。

「先ほどから何のお話ですか？授業中「先生、寮で熱を出して寝ている妹が私達を呼びました。申し訳ありませんが早退させてもらいます」」

二人は、先生が止める間もなく、教室を出て行った。

２－Ａ、２－Ｃにも同様な事が発生していた。

下駄箱で４人全員が鉢合わせになった。

「え？初音も？」

「え？薫子ちゃんも？」

「貴女達にも聞こえたの？」

由香里が代表で二人に聞く。

「はい。寂しいとか何とか…」

と初音。それに薫子も同意する様に頷く。

「凄い…私達は司ちゃんと繋がってるんだ…」

歓心した様に奏が言う。

「私は生徒会の方へ行って、加奈子さんとかに事情説明して、生徒

が寮に大挙しないように対処してもらって置くわ。
それと、担任の先生方にもちゃんと話しておく。3人は寮に行って」
と由香里。さすがは生徒会長である。こんな時でさえ冷静さを失ってはいなかった。
「由香里さん。お願いしますです」
奏が由香里に大きくお辞儀をし、そのまま寮に走って行った。
初音や薫子も由香里に頭を下げ、奏を追って行った。
「司ちゃん。貴女は皆に好かれているのよ？いい加減隠している事を言ってね？少なくても私と奏さんは、貴女が何かを隠しているのを気が付いているのよ？」
3人の姿を目で追いながら、由香里はそんな独り言を呟いた。
奏や初音、薫子が寮に戻り、司の部屋にノックをして入る。
「司ちゃん。呼びましたよね？どうしたのですか？」
奏が代表して聞く。
司がゆっくり目を開ける。ぼんやりと見える姉達の姿を確認出来たからなのか、司が涙を流した。
「あああ～。ど、どうしたのですか？どこか痛いのですか？」

そう言いながらハンカチで涙をそっと拭いてあげる奏であった。

「ごめんなさい……凄く寂しくなってしまって……」

その後も何か言ったのだが、言葉になっていなかった。

「良いのですよ。病気で一人ぼっちになると、人恋しくなるものです」

と奏。

「ところで、お昼とか着替えとか水分補給とかしたの？」

薫子が聞く。

「出来ませんでした…」

「じゃあ私、お湯沸かして来ますね」

そう言って初音が部屋から出て行った。

入れ違いに由香里が入って来た。

「どう具合は？」

「着替えとか水分補給とか出来てないみたいです。あと、初音ちゃんがお湯を沸かしに行ってます」

由香里の質問に、奏が答える。

「ああ、今廊下で会いましたよ。お昼も消化に良い物を作っておきましょうね。お昼を食堂にする予定だったのは誰？」

返事は無かった。つまり、今この部屋でお弁当が無い可能性があるのは、初音だけだった。

「じゃあ司ちゃんのお昼は作るとして、飲み物は、紅茶…は胃に悪いか…ホットミルクにでもするけど皆良い？」

全員が頷いた。

初音もお弁当持参だったので、司の看病をして、部屋で一緒に食事を摂る事となった。

「じゃあ、司ちゃんも汗でネグリジェとかシーツが凄い事になってるだろうから、汗を拭いて着替えましょうね？」

意識が覚醒していない司はゆっくり頷き、初音と薫子の手を借りて起き上がった。

「シーツもネグリジェも汗でぐちゃぐちゃですね。寒いけど脱いでね？」

言われるがまま、ネグリジェの上半身を脱ぐ。

「えっ！？」

司の左上腕に包帯が巻かれてあったのが、嫌でも目に付いた。

「つ、司ちゃん？この包帯は何…？」

奏がそっと聞いてきた。

それを聞かれた司は、包帯に視線を当てると、一瞬で顔が青ざめた。

「いやあああああああ。見ないでえええええええ！！」

あっと言う間に布団の中に全身を隠し、そのまま震えだす司であった。

「つ、司ちゃん！」

「いや……苛めないで……嫌わないで……私は化け物なんかじゃない……」

これを聞いてた全員が、司には強度のトラウマがある事を悟ってしまった。

「司ちゃん。誰も貴女を苛めませんよ…そんな人はいませんから…顔を出して下さい？」

出切るだけ優しい声で、奏が言う。

「そうですよ司ちゃん。包帯位の事で、誰も嫌わないわ」

由香里がその後に続く。

初音と薫子は、姉達に任せるらしく、何も言わなかった。言えなかったのかも知れない。

「知って欲しくなかった……知られれば……また変な目で見られる……」

過去にどれだけの苛めをされると、ここまで恐怖するのか。それは当事者でなければ判らない苦しみであろう。

司が落ち着くまでに、かなりの時間を要した。

第二章第四話

なんとか司を慰める事に成功した。

が、彼女は、布団から顔を出すしてはいるが、奏や由香里達の顔を見ようとはしなかった。

「司ちゃん、とりあえず汗を拭いて着替えましょう？ね？」

初音に言われ、ゆっくり上半身を起こす司だが、その体は小刻みに震えていた。

部屋の暖房は効いている。寒いからではなく、恐怖に震えている。

優しい声を掛けられ、そうっと背中の汗を拭いてくれる姉達。

プールを見学する為の工作とは言え、司は二重に落ち込んでいた。

先ず第一に、風邪と言う手段を使ったら、優しい姉達がどう動くかを考えていなかった事。

第二に、本来一日一回は服用するべき薬を、色々悩んでいたとは言え、ここ数日服用を忘れ、見せなくても良かったかも知れない包帯を、見せるに及んだ、自分の失態をである。

包帯を見せれば、次がどうなるかなんて、過去に嫌と言うほど味わっていたいた筈なのに…

―――　包帯取って見せろ!!うあこいつ■■■■だぞ!!お前化け物だな!?　―――

―――　なにその右足!?包帯の■■■■■で、■■■■■なんて、■■■■■を■■■■たなっ　―――

―――　化け物!!お前ひょっとして■■■■■■なんだろ!?近寄るなっ■■■■■が移る!!　―――

―――　こいつの■を見ろ!やっぱりおかしいぞ。■■■だろ?
―――

―――　見て見て、あの子よ。■■■を■■して■■■で■■■■■らしいわ…　―――

―――　■■を■■して■■を■■しようとして■■に■■■■■らしいわね。なんて■■■なのかしら　―――

過去を思い出し、司が涙をぼろぼろ流し、しゃくりあげてきた。

「ど。どうしたの?どこか痛かった?」

背中を拭いていた初音が聞いてくる。

司が首を振りながら答えた。

「ちがいます…わ、私は…こんなに優しくしてもらう価値は無いんです…包帯の事だって…まだまだ隠している事だって…」

「価値？なにそれ価値って？ここにいる皆、司の事が好きだから心配して来てるのに…その言い方はおかしいよ」

少し怒った様に、薫子が言う。

「私はこの傷と、死ぬまで付き合わないといけなくて、ばれた後、優しい言葉をもらい、事情を細かく説明しても、翌日には態度が豹変するんですっ！！」

「隠せば今度は、何を必死に隠してるの？友達なのに悲しいわ。なんて言われるんですっ！！どっちに行っても苦しむんです！！なりたくてなった訳でもないのに！」

「司ちゃん……落ち着いて下さいね……例え世界中を敵にしても、ここにいる皆は、貴女の見方よ？」

司の流す涙を拭きながら、由香里がそう言う。

「ごめんなさい…愚痴なのは判っています…」

「とりあえず、包帯の事については見なかった事にしましょう。ね？」

司以外の全員が頷く。

これは司にとっては初めての事だった。

今までは、必ずと言って良い程、根掘り歯掘り聞いてきて、翌日には奇人や変人扱いされていたからだ。

「なんで…」

「え？なんですか？」

奏が聞き返す。

「何で何も聞かないのですか？今まで必ず聞いてきたのに…」

「さっきも言ったのですよ。ここの皆は、司ちゃんのことを好きだから。だから、いつまでも辛い顔を見たくない。ただ、それだけなのですよ」

奏にそう言われ、司は又泣き出し、そのまま眠ってしまった。

「泣き疲れて寝てしまった様ですね。一時はどうなるかと思いましたですよ」

「なんとか一歩前進と言う所でしょうね。思った以上に根は深い様ですね」

奏の言葉に由香里がそう返す。

「司ちゃんの心の闇は、私達で何とか出来るのでしょうか…？」

初音が誰とも無しに呟く。

「ゆっくり時間を掛けて、彼女の心の闇と言う氷を溶かすしか無いわね」　と由香里。

「そう…ですね…もっと沢山、司ちゃんとお話しないと…」と初音。

「それが良いか…暗い顔の司ちゃんは、何か似合わないからね」と薫子。

「そうですね。微笑んでいる時の司ちゃんが、一番似合っている気がしますですよ」

奏のその言葉に、全員が頷いて同意した。

翌日、熱は引いたが、相変わらず咳きが時おり出るので、大事を取ってもう一日休む事となった。

姉達三人は、じゃんけんで司の看病をする人を決める事となり、その座を掴んだのは初音であった。

「これで一杯お話が出来ます」

と喜んでいたが、由香里から、

「無理をする位までの話は駄目よ?後、包帯の件は司ちゃんが言ってくれるまで話題にしない事」

と注意をされた。

夕方帰って来た姉達に聞いた所、１－Ａのクラスは何となく暗かったらしい。

「司がいるといないだけで、そんなに変わるクラスって…なんだかんだで、司ちゃんはクラスの皆に慕われているみたいね」

とは薫子の弁。

それに苦笑で返す司だった。

一応の騒ぎも収まり、次のプールを見学する手段として司の考えたのは、生理が重いと言う事だった。

これなら姉達も大騒ぎにはならないはず。と言う考えからである。

予想通り、大事にはならなかった。

姉達やクラスの皆も気を使ってもらい、若干後ろ暗い司であった。

新たな火種は、ここから生まれてしまったが、まだ寮の皆はその火種に気が付いていなかった。

第二章第五話（前書き）

ＰＣ版「処女は～」「二人の～」及びＴＶ版「乙女は～」より、一部の台詞をそのまま引用させてもらっている部分があります。似ている設定にもなっています。

第二章第五話

桃原先生が予想していた事だが、一生徒であればプールを何度休もうが、それほど問題では無かった。

エルダーや二つ名が付いてしまうと、注目度が変わってしまい、プールの度に休むのは問題が出てしまうらしい。

どこから出た噂かは定かではないが、司がプールを休んでいる事に関して幾つかの流言・風説が出てきていた。

曰く、

「『妖精の姫』は、実は泳げないのでは無いか？」

「『妖精の姫』は、体が弱いと言う以外の理由を何か持ってるのではないか？」

など。

噂が噂を呼び、ひょんな事から本人にもそれが届いてしまった。

寮での夕食時、司の目には精気が無かった。

「司…ちゃん？」

呼ばれたが返事は無かった。

「司ちゃん？どうしたのですか？」

奏にもう一度呼ばれ、やっと反応する。

「いえ、寮で皆と一緒に食事出来るのは、後何日残ってるのかなぁ…なんて考えてしまいました」

「どう言う事ですか？」

「生徒会の方に、流言や風説が行ってませんか？私の…」

＊りゅう-げん【流言】
根も葉もないうわさを言いふらすこと。また、そのうわさ。デマ。流説。るげん。

＊ふう-せつ【風説】
《「ふうぜつ」とも》世間にひろまっているうわさ。とりざた。風評。「―を立てる」「―に惑わされる」

由香里に聞かれ、司がそう返した。

「初音ちゃん。なんか聞いてます？」

「実は…」

由香里に聞かれた初音は、俯き加減でそう言った。

「あるの？」

「はい。主に一年生から出てきたらしいのですが…その…」

初音は言い辛そうに言葉を濁した。

「はっきり言って構いませんよ初音お姉さま。既に噂の一端は私にまで届いてしまっていますから」

紅茶の準備をしながら司がそう言う。

黄金色の紅茶を姉達の前にそっと置きながら司は言葉を続けた。

「まったく苦味がなくて、上品なほのかな甘みを持つキャンディ紅茶です。砂糖無しで飲めます。
飲んだ後も、ずっと優雅な雰囲気が残るそうです」

そう言われて飲むと、確かに言われた通り、砂糖無しでもほのかな甘みがあるし、飲んだ後にも、
すごく上品な味わいが残るのが感じられた。

「凄い…こんな紅茶もあったんですね…」

「本当ですね…」

暗くなりかけた雰囲気を一気に吹き飛ぶ勢いが、その紅茶にはあった。

「これがお姉さま達にして差し上げられる、最後の紅茶になるかも知れません…」

「わ、私は姉として、司ちゃんを守ると言いました。何の噂か知りませんが、必ず守って見せます」

「「「私も（です）」」」

姉達に勇気をもらった司は、流言や風説の一端を言って聞かせた。

「…恐らくは明日には全校生徒の知る所となるでしょう…例の件以外にも、まだ言えない事が二つほどあります…」

「その…司ちゃん的には辛い話なのでしょうけど……」

薫子が口を挿むが、上手な言い方が思いつかなかった。

「何と言うべきなのか……包帯を巻いているのは…その…一箇所では無いのです」

それを聞いた姉達の目が見開いた。

「それって…話せる内容ですか？」

由香里が聞いてきた。

「話す…と言うより…怖いですが…実際に見てもらった方が…早いかも知れません」

小刻みに震えながら司が言う。

守ってあげる。その言葉を今度こそ信じて見ようと思った。

司は制服のスカートを捲くり上げ、履いていた黒のストッキングを

膝まで下ろす。

そして姉達が見たのは、彼女の右足太ももに巻かれているもう一つの包帯であった。

「詳しい事情はまだまだ怖くて言えません…だけどこれがばれて私は…「もう良いです司ちゃん、聞きませんからね？」はい…」

司が泣き出しそうだったので、奏が言葉を被せ、それ以上言わせなかった。

「とりあえず司ちゃんの事情は察する事が出切るわ。問題は、その事情以外で何処に目を向けさせるかよね」

制服を調えて座る司を見ながら、由香里が切り出す。

「そうですね…私にだって秘密はありますから……」

奏がそう言って続く。

「確かに…それが見えるか見えないかの差でしょうし」

同意する様に薫子が言う。

「では、何か手を考えないと…どうしましょうか？」

初音が姉達に聞いてきた。

「う〜ん。困りましたね…」

「そう言えば…」

「どうしたの初音ちゃん？」

「ここ最近、小物が紛失していると言う陳情が生徒会に若干あがっていました。
アクセサリとか髪留めとかビーズとか。これに司ちゃんのも混ぜて事を大きくしてしまうとかはどうでしょうか？」

「それだっ！！奏さん、いえ、エルダーからそれを言い、何かしらの一言を出してしまえば
生徒の目はそちらに向いてしまいます。卑劣な手段ですが、司ちゃんを守ると決めたのだから、
多少の事には目を瞑りましょう」

由香里のその提案により、翌日には生徒会から、司のも含めて小物が紛失している事を、発表する事にした。

エルダーである奏が翌日、クラスの皆に、

「小物が紛失しているらしいので、判る範囲で構わないので教えて欲しいのです。
紛失した物の中には、司ちゃんの物も混ざっていて、調査してみようと思いますのでお願いします」

と依頼した所、瞬く間に全校にその依頼が駆け巡り、あっと言う間に情報が奏と由香里の元に集まってきた。

げに恐ろしきエルダーの威厳。ここにあり、である。

「さすがエルダー。皆さんに慕われていますね」

とは由香里の弁であった。

第二章第六話

生徒達から集められた情報によると、紛失している小物は、１７件。
司の小物も無くしている事にしているので１８件であった。

奏だけに調査をしてもらうのは気が引ける。と、司のたっての依頼により、彼女も一緒に調査を行う事とした。

クラスの数箇所を見て調査して判った事は、窓際で無くなっているのが以外に多いこと。

廊下側で無くなっている生徒もいる事。

食堂で無くしたと思われるが、どこに座っていたかは覚えていない。なんて言うのもあった。

「窓際と言うのは、とある手段で可能な犯行説を仮定出来ます。が、通路側と言うのがその可能性を否定していましますね」

寮に帰り、調査した内容を説明し、司がそんな事を言う。

「とある手段それってどんな？」

と薫子。

「前提その１。晴れている事。前提その２。教室の窓が開いている事。前提その３。教室に誰もいない事。

これが揃っていれば…ですが、カラスでしょうね」

「あ～、確かにカラスって、光るものを集める習性ありましたね」

司の予想に初音がそう返した。

「ですが、いくら晴れているとは言え、廊下側まで日が差すはずもありません。秋ならいざ知らず…

この事によってカラス説は却下になってしまいました。後ありえるのは…」

「何ですか？」

由香里が聞いてきた。

「全く同じとまでは言いませんが、私と同じ理由により、紛失を捏造した…かも知れません。

または、複数犯説ですね」

「複数…生徒のなかに犯行（それ）をした人がいると…？ちょっと考えられないのですよ」

「そんな生徒は聖應（ここ）にはいない…調査中に必ず言われた言葉ですね…」

奏の反論にそう返す司だった。

「じゃあ食堂で、って言うのは？」

「『食堂で無くしたと思われる』と言う推測です。実際に食堂に行

く前に間違いなく手元にあった。
と言うのなら更に困ってしましいますが…まあこれも私の勝手な推論なのでしょうね」

薫子の質問に司がそう答えた。

「う～ん。困りましたですよ」

晴れた日に教室の窓がたまたま開いていて、日光に反射した光をカラスがたまたま見つけて、小物を取って行った。

ここまでならありえる話だが、シスターがランダムの時間に廊下を巡回しているのに、それを調査が出来ない状況で、廊下側の小物を取って行けるのだろうか。

さらに17回の内の1～2件の犯行を行ったとして、それが明るみに出れば退学処分にも成りかねない。

盗むリスクが高すぎるのである。

これらを総合すると、廊下側や食堂での紛失は、捏造・模造や愉快犯になってしまう確立が高い。

などの可能性を司が説明した。

＊ねつ - ぞう【捏造】
《「でつぞう（捏造）」の慣用読み》事実でないことを事実のようにこしらえること。でっちあげること。「記事を―する」

「もし、もしもですが、捏造だった場合、エルダーや生徒会長の立場でどうするのですか？」

「どうする…とは？」

「嘘を言っているのです。処罰しますか？」

司は暗に、『自分もその対象に入った方が、事を丸く収められる』と言っているのであった。

「そ、それは…」

「私が、自分の秘密を隠してもらう為に、渋るお姉さま達に泣いて頼んだ。
これでエルダーと生徒会長の立場的には大丈夫だと思います。疎まれるのは私だけです…」

「「だ、駄目ですっ！！それは容認できません（です）」」

奏と由香里はハモって言う。

「じゃあ、手段は無いって言うの？」

「主語が欲しいですよ、薫子お姉さま」

「え～と。紛失事件の犯人探しと、捏造だった場合の対応かな」

「落としどころはあるにはあります。ただ…これを私が言うべきかどうか…」

「あるの？」

「まあ…一応は…消極的ですが…」

「どんな方法なのですか？」

由香里が、薫子と司の会話に乗って聞いてきた。

「犯人を特定できないと詫びて、空き時間に皆で探してあげましょうとなど言う。
とか、ありえない犯人の虚像を作ってしまうか。ですね」

「虚像は矛盾が出る可能性があるから無理でしょうね…」

司の案に由香里が難色を示す。

「まあ、なんと言いますか…卑怯すぎる言い方は出切るのですが…」

「どんな？怒らないから言って？」

初音が司を促す。

「私の場合ですと、プール授業をボイコットしてでも、一人で小物を探していた。
と言う卑劣な言い訳です。そして、結局見つからなかったと言う…」

「…なるほどなのですよ。そう言う事にしてしまえば、変な流言や風説はとまってしまいますね」

納得するように奏が言った。

「それで良いのでは?その後で何かのフォローを司ちゃんがすれば噂は止まってしまいます。守ると言った以上、この事自体も言えませんけどね」

「それしか無いみたいですね…」

結局この案を実施する事にし、エルダーの謝罪が数日後に行われた。エルダーに動いてもらっただけでありがたいと思っていた生徒達は、

「お気になさらないで下さい。不注意だった私達にも、その責任はあります」

と逆に謝られる始末だった。

後日談。

結局探し物が見つからなかったと言う事で、司がクラスの皆に不快な思いをさせて申し訳ない。と謝罪した。

「いえそんな!大切な物なら尚更です。何ならまた探して差し上げますよ?」

と返されてしまい、

「いえ、ここまで探しても出ないのです。諦める事にします」

と言い、プールの欠席の事はうやむやになった。

第二章第六話（後書き）

小物紛失に関しては、ＰＣ版「２人の～」にスゲー被ってしまうので、
調査はしたが、犯人特定には至らなかった。
と言う事にしておこう…うん。

（読者の声）　読んだ時間返せ（ノ＃　；ｏ；）ノ＼。。。ヒ
ウヲォォォ！！

嗚呼、生卵を投げないで…

第三章　『絆　――　きずな　――　』　第一話（前書き）

挿入話の『初詣にいきましょう』とはリンクしていません。
従って、瑞穂や紫苑は司の包帯に関しては知らない事になっています。

第三章は全体的に暗い感じの内容になります。

第三章　『絆　ーー　きずな　ーー』　第一話

8月初旬。

「皆さんで夏休みに避暑地へ遊びに行きませんか？」

奏のその一言からその朝は始まった。

「避暑地って…軽井沢とか、那須とか、清里とかですか？」

奏の提案に、初音がそう聞いた。

「そうなのですよ～瑞穂お姉さまと紫苑お姉さまと、貴子お姉さまが『是非遊びにいらっしゃい』と、言って下さったのですよ～」

司が姉達の席の前に、赤茶色の飲み物をだして行く。

「司ちゃん。これは何？」

「冷たいルイボスティーです。ミネラル分を多く含んでいる健康茶です。カフェインも含まれていないので、どの年齢層にも飲めるお茶です。一説では、抗酸化作用や活性酸素消去除去作用があるらしいです」

＊抗酸化作用
鉄が錆びるのと同様に、人間の体も錆びる。これを防ぐ作用。
体が錆びるのは、人間が摂取した酸素が、体内で変質して出来る活

性酸素が原因。
活性酸素は、体内の毒物や細菌、ウィルスを分解するのに必要だが、
活性酸素の量が多いと体内で処理出来ず、
正常な細胞まで攻撃してしまう。これが酸化であり、体が錆びると
言う現象になる。

「へぇ～。匂いのクセもあまり無くて、渋みも無いですね。比較的
飲みやすいわね」

「それで奏お姉さま。幾つかお聞きしたいのですが…」

「何ですか司ちゃん？」

貴子お姉さまと言うのは、あの夢で出てきたタ○コと言う人なのだ
ろう、それは良いでしょう。

「避暑地は具体的に何処なのですか？」

「詳細は、瑞穂お姉さまと紫苑お姉さまと貴子お姉さまが詰めてく
ださるらしいので、今の所は何とも」

「寮で行く予定の方は？」

「もちろん全員ですのよ」

は？全員？私は承諾した記憶は無いですよ？

「え～と…『私はその話を今始めて聞いた』と思うのですが、いつ
の間に承諾している事になっているのでしょうか？」

「え？一緒に行ってはもらえないのですか？」

何ですかその強制参加フラグは…

「行く場所が海なら私は、例え明日で世界が滅ぶと知っていても行きません。それでも構いませんか？」

「……それなんですが司ちゃん……」

ぇ。もう海方面に内定してるとか？それなら私は帰省して家でゴロゴロしてますが何か？

「司ちゃんの例の件、瑞穂お姉さま達に言っては駄目でしょうか？」

それを聞いた瞬間、奏お姉さまも敵なのかと思った。

――　由香里　ｓｉｄｅ　――

「司ちゃんの例の件、瑞穂お姉さま達に言っては駄目でしょうか？」

奏さんがそう言ったら、一瞬で司ちゃんが真っ青な顔になった。

「待って司ちゃん」

すかさずフォローを入れた。

「何か勘違いしてない？」

「勘…違い…どこがでしょう…」

声に力が無い。完全に何か勘違いをいているわ。

「誰にだって秘密はあると思うわ。奏さんだってあるし、私だってある。

ただそれが見えるか見えないかの差だけなのよ？」

「例えば、司ちゃんに嘘でも良いから体に傷があるって、瑞穂お姉さま達に言えば、

海を回避してくれる。そう言う事を言いたかったのよ、奏さんは…」

司ちゃんは何も応えてくれなかった。彼女の根の深さは異常です。

今まで、どれだけ裏切られたり苛められると、こうなるのでしょう…

「ご自由に…なさって下さい……私は学院を去る覚悟はありますので…」

―――　由香里　ｓｉｄｅｅｎｄ　―――

「ご自由に…なさって下さい」

ここまでしか皆には聞こえなかった。最後の一言が聞こえなかったのは、幸運なのか不幸なのか…

それを決められるのは誰なのかも、知るよしも無い。

翌日。奏は瑞穂に電話を入れ、司の事情を話す事とした。

「…それですね瑞穂お姉さま…」

『どうしたの奏ちゃん？何か不都合でもおきたの？』

「寮の一年生の司ちゃんの事は、以前お電話でお話させて頂いたと思うのですが…」

『ええ聞いてるわ。妖精さんにしか見えない事から“妖精の君”と言う二つ名で呼ばれている子よね？彼女が都合付かないの？』

「いえそうではなくて…彼女の体には大きな傷があって、それを人目に晒すのを異常なほど嫌がっていまして…海の方なら絶対行きたがらないのですよ。それで、瑞穂お姉さま達の計画はどこまで進んでいるのか聞いておこうかと」

『海は駄目なのね？全然構わないわ。紫苑さんと貴子さんには、私から連絡を入れて調整をお願いしておくわ。詳しい事が決まったら、すぐに連絡を入れるわ』

「有難う御座いますです」

奏が司の部屋へ行き、海は回避してくれる事になった事を説明した。

「…と言う事のなので、海は無いと思うのですよ」

「例の件は瑞穂お姉さまには？」

「いえ言ってませんです。ただ、司ちゃんには悪いけど、大きな傷があると言う事にさせてもらいましたのですよ」

包帯の下にどんな傷や痣があるか判らないから、そう言う事にしたのでしょう。

ですが、ある意味それは、私の包帯の下に何があるのかと言う、正確な言い方なのですよ奏お姉さま。

「司ちゃんは一緒に来てくれますよね？」

私の胸の内を知らず、明るい顔で言って下さる奏お姉さま。

その明るい表情は、今の私には眩し過ぎます。

「計画を聞いてからお返事します」

それが、今の私に言える精一杯だった。

第三章第二話（前書き）

過激気味（かも知れない）の描写があります。
ご注意下さい。

第三章第二話

久しぶりに嫌な夢を見た。

左腕の包帯を外され、その下にある私の二つ目のトラウマ。

それを見て嘲る人達。

『見ろよこの傷。まるで○○○だぜ』

『よくそんな傷で生きてられるな。お前なんかがいると目の毒なんだよ』

逃げる私。追ってくるあの人たち。

どこまで逃げても、暗闇の空間。

追ってくる人達の数が徐々に増えてくる。

追ってくる人達から聞こえて来る呪詛の言葉。

『ほらほら逃げるなよ。俺たちが二度と人前に出られない体にしてやるからよぉ』

後ろを振り返ると、人ではない異形のナニカまで追って来ていた。

殺される。

私はここで殺される。

そう思った時、ふと目線の端に光が一瞬見えた。

そちらを見ると、小さな、非常に小さな火があった。

そよ風に吹かれただけで消えてしまう程の小さな火だった。

だがその火は、必死に燃えている。

その火が私を呼んでいる。そう思えた。

そこへ向かって私は走る。

後ろからは、言葉になって無い奇声を上げているナニカが追ってきていた。

どこからともなく、触手の様な物が左腕に張り付く。

腕に張り付かれた瞬間。そこから焼ける様な痛みが襲って来た。

そして

私の腕が

そこから

溶けてなくなった

「いやあああああああぁぁぁぁぁぁっ！！」

「司ちゃん。しっかりして！」

「腕が…私の腕が…」

「夢なのよ？ただの夢。怖い夢を見たのよね…もう大丈夫。私達が付いていてあげる」

何かに強く抱きしめられて、やっと現実に帰って来た。

－－－　初音　ｓｉｄｅ　－－－

今の時間は午前3時。普段なら熟睡しているはず。

なぜか目を覚ましてしまいました。

水でも飲もうと部屋を出ると。ふと司ちゃんの部屋が無性に気になりました。

以前の司ちゃんが風邪を引いた時、私達を呼んでくれました。

あれは心配しすぎで幻聴が聞こえてしまったのかも知れません。

でも今、また助けを呼んでいる気がしてしかたがありません。

どうしても気になってしまい、彼女の部屋に前にきてしましました。

…何か聞こえました。司ちゃんの声の様でした。小さくて聞き取れません。

『…めて……おねえ……かいぶつじゃ……』

部屋の鍵はかかっていなかったので、そっと彼女の部屋の中に入りました。

無断で入っているので、彼女に怒られても仕方ありません。

でも、もの凄く気になってしまうのです。

司ちゃんの寝ているベッドにそっと近寄りました。

彼女は夢でうなされている様でした。

「いや……こないで……だれか助けて……私を嫌わないで……」

どんな辛い夢なのか理解出来ません。

でも、涙をぼろぼろ流しながら魘されている彼女の、こんな姿を見たくありませんでした。

私は咄嗟に彼女を抱き締めました。

「司ちゃん。大丈夫だよ。寮の皆が貴女を守ってくれるわ。大丈夫

だから。目を覚まして」

抱き締めながらそっと言い聞かせますが、彼女はまだ魘されています。

私だけじゃ、司ちゃんを救ってあれられないのかも…そんな気持ちが沸いてきました。

でも、寝ている他のお姉さま達を起こしに行っている間に、もしも司ちゃんに何かあったら。

そんな感情がぐるぐる回ってしまい、私は司ちゃんを抱き締めて上げる事しか出来なくなっていました。

「司ちゃん。しっかりして……私はこんな時、何もしてあげられません……駄目な姉です…」

「いやあああっ」

司ちゃんが飛び起きました。

私は振りほどかれない様に必死に抱き締めました。

「司ちゃん。しっかりして！」

「腕が…私の腕が…」

「夢なのよ？ただの夢。怖い夢を見たのよね…もう大丈夫。私達が付いていてあげる」

そう私が言うと、目の光が戻り、私を見てくれました。

いま気が付きました。彼女は右目が青色、左目が金色のオッドアイでした。

その目の色も綺麗に見えました。

司ちゃんは、私をしっかり見て、震える手で私を強く抱き締めてくれました。

「お姉さま…」

「ごめんね勝手に入っちゃって。司ちゃんが夢で魘されているのが聞こえちゃって…」

「怪物が…二度と人前に出せない体にしてやるって言って……私の事を追ってきて…逃げても逃げても追ってくるんです…」

「うん」

「そして、逃げていたら、ふと小さな光の様な火が見えて、その火が私を呼んでいて…」

「そう…」

「それで…へんなのに腕を掴まれて…腕が溶けて……」

そう言い出すと、司ちゃんは震えだしました。

「もう大丈夫…もう大丈夫だからね？例え腕が無くても私は司ちゃ

んを受け入れてあげるわ」

やっと司ちゃんが落ち着いてくれました。

そしてこんなことを言ってくれました。

「怖いから、一緒に寝て頂けませんか…？」

私は、司ちゃんに受け入れてもらえた！！

こんな嬉しいことはありませんでした。

小刻みに震える司ちゃんの手を握り、朝まで一緒に寝てあげました。

この夜。司ちゃんが魘される事はありませんでした。

－－－　初音　ｓｉｄｅｅｎｄ　－－－

翌朝。

司と初音は同時に目を覚ました。しっかりと手は繋いだままだった。

二人一緒にリビングへ行き、いつのも挨拶がなされた。

「初音ちゃん…今朝は機嫌が良いけど何かありましたか？」

由香里が聞いてきた。

「はい！昨夜司ちゃんと一緒のベッドで、寝かせてもらいました」

「え～いいなぁ…でもどうして？１２時位には寝ちゃう貴女が…」

そこで初音が昨夜の顛末を聞かせた。

話が終わるのを見計らって、司がアイスミルクティーを全員に出す。

ふと、奏が司がどこかが変わった事に気が付いた。

「司ちゃん…何か変わりましたですよ」

「そうですか？自分ではよく判りません」

そっと微笑む司に、いつもかけている筈の眼鏡が無い事に、やっと気が付いた。

司は眼鏡のかけてない目を、姉達に向けた。

「司ちゃん…その目…」

「オッドアイです。これも隠していた事の一つです。あの眼鏡は、実は度は入っていません。色が入っているだけです」

「どうして急に…」

「初音お姉さまに言ってもらいました。『たとえ腕が無くても受け入れてあげる』と…私も一歩踏み出そうかと…」

司がそう言うと、初音の顔がほんのり赤くなった。

「そうですか…では、他の皆との距離も少しでも縮める為にも、次は私の部屋に来てくださいね？」

と奏。

「じゃ…その次は私の部屋に…」

と由香里。

「その次があたしの部屋…かな？」

と薫子。

「薫子お姉さまは、朝起こすのも私の仕事になるのでしょうか？あぁ、奏お姉さまが起こしに行ってるのでしたか？奏お姉さまの仕事を取ってしまいますね」

寮内に笑いが広まる。

やっと出来た小さな絆であった。

だが、再び事件は起こってしまう。

小さな絆を試される事が起こる。

第三章第二話（後書き）

節分記念の挿入話？
無理ですｗ

第三章第三話

瑞穂から連絡が入り、山の方の避暑地へ行く事となった。

今年の聖應の夏休みは、８月１０日より始まり、８月３１日までの２１日間である。

避暑地は、この休み期間全てを使うと言う、規模の大きい計画であった。

夏休みの課題については、瑞穂や紫苑や貴子がサポートするので大丈夫だろう。と言う事であった。

夏休みまで、残り一週間と言うこの日。

司は友達と買い物に付き合っていた。

司はクラスの皆にも、アッドアイの事をばらしていた。

「こんな目の人間でも良ければ、今まで通りに接して頂けると助かります。それと、隠していてごめんなさい」

とお辞儀をすると、

「吸い込まれそうな綺麗な青い目…素敵です。こんなお綺麗な目を隠していたなどはもったいないですよ」

などと言われ、あっさり受け入れてもらっていた。

今までの苦労ってなんだったのだろう…

司がそう考えさせられた時であった。

「そう言えば、司さんは夏休み、先々代のエルダーでいらっしゃった瑞穂お姉さまのお誘いで、山の方の避暑地へ行くそうですね？」

どこからその情報を手に入れたの？

「奏お姉さま、いえ、エルダーのお姉さまが嬉しそうに食堂でお話していたのが聞こえてしまいましたから…」

心の突っ込みにお返事有難う。

「２１日間の避暑地ですか…素晴らしい日々でしょうね」

「そうかも知れませんが、私的には、白菊の君とか、琥珀の君とか、騎士の君を独占してる。とか言われそうで怖いですよ」

司がそう言うと、美紀さんや美帆理さん達は少し微笑んで返した。

＊作者注
存在を忘れている人達の為に。
『足利　美紀』、『新田　美帆理』、受付嬢の『東堂　栞』、『北条　桜』
この子達は、司のクラスの友達になっています。
そこ。「そんなのいたっけ」とか言わないで。

クラス外でも『朝比奈　麻衣香』が出ています。
余り出ないけど、そう言う設定なんだよ…投石は痛いぞ…アーッ

「避暑地で着る服とかはもう揃えているのですか？」

桜さんが聞いてきた。

「余り考えていませんね…運動が出来ないからって、窓際の令嬢の様な格好もどうかと思いますし…」

「それはそれで似合っていると思いますよ？」

勘弁して下さい。

そんな雑談をしている時、栞さんが何かに気が付いた。

「あ。あの子…」

「え？」

彼女の視線の先には、歩みがおぼつかない小さな子供が歩道を歩いていた。

日射病にかかってしまったのか、よろよろとふらついていた。

「あの子…危ないわ。声を掛けて木陰にでも休ませましょう」

栞さんがそう言って、皆が近寄ろうとした時、その子は何かに躓き、

車道側に倒れて行った。

運悪く、そこに自動車が走って来ていた。

一瞬だった。

私はその子を庇う様に抱き、歩道へその子を突き飛ばした。

その後は覚えていない。

「司さんっ！！」

美紀や美帆理達が司に駆け寄る。

「動かしちゃだめ！救急車を呼びましょう」

携帯電話で連絡を入れている間にも、司の頭部から血が流れていた。

「血が…血が止まらない…」

全員がハンカチで司の頭部から出る出血を止めようと傷口を押さえるが、ハンカチはみるみるうちに真っ赤に染まっていく。

「駄目よ司さん…死んではだめ…」

数分後、やっと救急車がやってきた。彼女達にとっては非常に長い数分間であった。

付き添いは、代表で美紀であった。全員は乗せられないと言う救急

隊員の言葉に、しぶしぶ従った。

「病院の場所が判ったら、直ぐに連絡します」

美紀の言葉と共に、救急車は走り去った。

一一一　司の生家にて

明るい感じの電話の機械的呼び出し音が鳴り響いた。

「はい。神加賀美で御座います」

司の母が電話に出た。

『国立〇〇〇付属、〇〇中央総合病院です。神加賀美　司さんは、そちらの娘さんで間違いありませんか？』

「はい。そうですが…うちの娘が何か…？」

『そちらのお嬢さんが、自動車に轢かれ、こちらの病院に運ばれて来ています』

母親はそれを聞いた途端。思わず受話器を落としてしまった。

『もしもし。大丈夫ですか？』

「ご、ごめんなさい。そ、それで様態は？」

『くわしい事はこちらに来て頂いてからご説明します。いらっしゃ

いますか？』

「はい！すぐ行きます」

母親は、取るものもとりあえず、病院へ向かった。

向かう途中。父親に連絡を入れておいた。

「あなた…司が車に轢かれて病院に運ばれたと今連絡が…」

『何！？すぐに行く！どこの病院だ？』

「国立〇〇〇付属、〇〇中央総合病院です。私も今向かっています」

『わかった』

一一一　寮にて

電話のベルが鳴った。

偶々近くにいた由香里が電話を取った。

「はい。聖應女学院女子寮で御座います」

『わ、私、聖應女学院１－Ａの、東堂　栞と申します』

「ああ、司ちゃんのクラスの受付嬢さんね。どうかしましたか？」

『じ、実は司さんが…司さんが…』

「司ちゃんがどうしたの?落ち着いてお話して?」

『子供を庇って自動車に轢かれて…重態です』

それを聞いた由香里は、思わず受話器を落としそうになった。

『もしもし…?』

「あ!ご、ごめんなさい。で、病院は何処ですか?」

『国立○○○付属、○○中央総合病院です。私もこれから向かいます』

「わ、判ったわ。皆に連絡いれて直ぐに向かうわ」

『はい。それでは』

由香里はその足で奏の部屋へ行き、彼女の部屋をノックする。

「奏さんいます?」

「はいなのですよ」

奏が扉を開け、由香里を見る。由香里の表情にただ事では無いのを悟る奏であった。

「どうしたのですか由香里さん?」

「司ちゃんが…」

「彼女に何が!?」

「車に轢かれて重態らしいわ」

「ええっ!?」

「私は薫子ちゃんと初音ちゃんにも連絡を入れるわ。奏さんは瑞穂お姉さまに連絡を入れて?最悪避暑地どころでは無くなるわ」

「わ、わかりました」

由香里はそのまま薫子と初音にも事情を説明した。

一一一　瑞穂の家にて

電話が鳴り、使用人が電話を取った。

「はい。宮小路で御座います」

『グスッ、周防院　奏と申します…ヒック…宮小路　瑞穂様をお願いしますです』

泣きながら電話してきた様子から、ただ事では無いのを察して、瑞穂を呼ぶ。

「瑞穂様、周防院　奏様が泣きながら電話をかけて来ております。ただ事ではありません」

「奏ちゃんがっ！？判った」

そして電話に出た。

「瑞穂です。奏ちゃんどうしたの？」

『司ちゃんが…グスッ…司ちゃんが…』

「彼女がどうしたの？泣いていては判らないわ」

『く…車に轢かれて重態なのです…グスッ…これから向かいますが…避暑地どころではなくなるかもと由香里さんに言われ…』

「わ、判ったわ。こっちの事は良いから、行ってあげて」

『はい…それでは…』

第三章第三話（後書き）

重態と言う漢字について。
本来『重体』と言う言葉が適切なのかも知れませんが、
意味としては通る『重態』と言う方を意図的に使っています。

第三章第四話（前書き）

三章～四章まではひたすら寮中心です。

第三章第四話

一一一　紫苑の家にて

電話が鳴り、紫苑が電話を取った。

「はい。十条で御座います」

『あ、紫苑さん。ちょうど良かった』

「瑞穂さん。どうなさったのですか？」

『夏休みの避暑地の計画ですが、聖應の女子寮組は全員来られないかも知れません』

「まあ、どうなさったですか？」

『奏ちゃんから聞いてるとは思いますけど、一年生の神加賀美司ちゃんなのですが…』

「ええ聞いています。“妖精の君”でしたわよね…彼女が何か？」

『つい今しがた、奏ちゃんが泣いて電話をくれて』

「え！？奏ちゃんがどうかしたのですか！？」

『聞く所によると、司ちゃんが車に轢かれて重態らしく、最悪は避暑地どころではなくなるかも。と言って来ました』

「そうですか…仕方ありませんね…貴子さんの方には連絡は？」

『楓さんにお願いして、別の電話で連絡してもらっています』

「判りました。私も聖應女学院高等部のＯＧの端くれです。奏ちゃんの妹が苦しんでいる状況で、私達だけ楽しむのは出来ませんね。落ち着いたらお見舞いに行きましょう」

『それが良い可も知れませんね。では又連絡を入れます』

「はい」

一一一　病院にて

数名の聖應の生徒達が受付に駈け付けて着た。

事情を聞き、話を聞くと、未だに緊急手術中との事だった。

場所を教えてもらい、そこへ早足で向かった。

走ると入院患者の不安を煽る事もある。彼女達もそれは教養として知っていた。

手術室に着いた。

そこには既に、付き添いで先に来ていた美紀がおり、その反対側の椅子には、

目を真っ赤にしながら男の人に肩を抱かれながら泣いている女性がいた。

お互いに自己紹介を行った。

学院の寮で一緒に暮している仲間だと。友達だと。司の父だと。母だと。

母親は、確かに司に似ていた。父親にも面影がある。

母親が又大きく泣き出した。

「司……逝ってはだめよ……私を置いて逝かないで…」

それを聞いた学院の生徒は悟った。

真実なのだと。

危ないのだと。

数人がその場に崩れ落ちる。

それを周りが何とか支える。

「マリア様……司を連れて行かないで…お願いします…」

母親が小さな声で祈りを挙げる。

それは真剣な声だった。

めったに祈りを捧げない者も、いつも祈りを捧げている者も、その相手に祈る。

切に、切に祈る。

『司を助けて下さい』

必死に祈る。

手術室の扉が開き、看護婦が出てきた。

「Ｒｈマイナス○型の方はいらっしゃいますか？」

「私がそうです」

父が名乗り出る。

「献血をお願いします。出血が酷く、輸血をしないと危険です。病院のストックでは間に合いません」

「判りました！幾らでも使って下さい」

父親が手術室の隣にある献血室に入って言った。

時間はどの位過ぎたのだろうか。時間の感覚を忘れる程、全員が祈り続けた。

ただただ、彼女が戻って来てくれる事をひたすら祈る。

更に時間は無常にも過ぎて行く。

誰も動こうとはしなかった。

医師からの何かの言葉をもらうまでは動こうとも思わなかった。

更に数時間。外は夕闇が迫ってきていた。

遅れてきた学院の教師が、彼女達にもう遅いから帰る様に促す。

だが、誰一人として動く者はいなかった。

更に時間が経ち、日の光は西の彼方に沈み、空が暗くなりだした。

再度教師が帰る様に促す。

それでも誰も動かない。

手術中のランプが消え、医師がやっと出てきた。

「なんとか持ちこたえてくれた」

皆が待ち望んだ答えが返ってきた。

手術室から司がストレッチャー（移動式ベッド）で運び出されてきた。

首から下はシーツに被せられているが、顔色は青白く、右手には点滴が3個繋がっており、額には眉毛が見えない程の包帯が巻かれ、酸素マスクを付けられていた。

「このまま入院させます。頭を打っているので、再検査の必要がありますが、何らかの後遺症が出る可能性はあります」

「それでも…生きて返って来てくれました…有難う御座います」

両親が医師に頭を大きく下げる。

無事に戻ってきてくれた事に感謝しつつ、学院の生徒達は各々の家へ帰って行った。

「それで、娘はどの位入院になるのでしょうか?」

父親が医師に尋ねた。

「経過を見ないと何とも…最低でも1ヶ月は覚悟しておいて下さい。それと、左腕と右足大腿部の事ですが…」

「それは親である私達も承知している事です。掛かりつけの医師がいますので、そちらからカルテを送ってもらう様に手配してもらいましょうか?」

「そうして下さい」

第三章第五話

ふと目が覚めた。

真っ白な部屋だった。

そよ風が頬をかすめる。

多分私はまだ生きている様だった。

頭を動かそうとしたら頭痛が襲ってきた。

今日って何日なのだろうか?あの子供は無事だったのだろうか?

視線の右下に点滴が見えた。両手はある様だ。両足もかろうじて動く。

両手の指を動かしてみた。ちゃんと動く。

酸素マスクが付いているので匂いや味は今は判断出来ない。

ここは病室。しかも個室なんだな。と今更ながらに理解した。

母さんや父さんに心配かけちゃったかな…

病室の扉がノックされて開かれた。入って来たのは久しぶりに見る母さんの姿だった。

「つ、司!良かった……目が覚めたのね…心配したのよ」

母さんが私の左手を握ってくれた。

あの子供はどうなったのか聞いて見よう。酸素マスクが邪魔でうまく話せない。

「司？何？どうしたの？」

母さんがマスクを外してくれた。

「あの子供…大丈夫だった？」

「貴女が助けた子供ね。親御さんが来てくださって、『うちの子を助けて頂いて、こんな事になってなんとお詫びをすれば…』って言われてしまい、困っちゃったわ」

「そう…大丈夫だったんだ…ごめんね心配掛けちゃって」

長く話そうとすると息苦しい。喉か肺に損傷があるかも…

「ああ、無理に話さなくて良いのよ。司が生きていてくれて母さんは嬉しいわ。ただ、夏休みは全部入院する事になるわ」

夏休み？…あれ？

どこの夏休み？何かが記憶から抜けている。

私、学生よね？……どこの？……学校の名前は？

頭痛がするって事は、頭を打ったんだよね？

まさか……記憶喪失ってやつ？

「あの…母さん…」

その時病室の扉がノックされた。

「はい」

母さんが返事をしてくれた。

入って来たのは、見慣れない学生服を着ている、四人の生徒だった。

「あの、司ちゃんはまだ目が覚めませんか？」

大きなピンクのリボンをつけた生徒が聞いてきた。

私の事を知っている？

私が彼女達を見ているのに気が付いた様で、四人がベッドに駆け寄ってきた。

「司ちゃん！良かった…目が覚めたのですね…本当に良かったのですよ」

涙ながらにリボンの生徒が言って来た。

貴女は誰？何故私を知っているの？

「司。貴女は二週間も昏睡状態だったのよ。毎日毎日、貴女のお姉

さま達はお見舞いに来て下さっていたのよ？」

母さんにそう言われた。

二週間も目覚めなかった。それはまあ、夏休みと言う時期的には良かった？仕方ない？のかも知れないけど、問題は、私を見ているその『お姉さま達』を、私は覚えていない事だった。

お姉さまって何？私は何処まで忘れているの？何処まで覚えているの？

「あの…司ちゃんはまだお話し出来ないのですか？何も言ってくれませんが…」

隣の、いかにもスポーツ少女が言って来た。

貴女の事も覚えていない。私はどう返せば良いの？

大切な人だった気がするのに、何故思い出せないの？

そんな事を考えていたら、自然と涙が流れていた。

「司？どこか痛いの？」

「あああ、無理にお話しをしようとしないで…」

そんなんじゃない。忘れてしまった私が悪い。母さんも、そっちの生徒も悪くない。

「ごめん……なさい…ごめん……なさ、ゴホッ」

「だから無理はしないで「お願い母さん…」何？」

「話し…させて…」

「判ったけど、余り酷い様なら看護婦さん呼ぶわよ？」

母さんの言葉に頷く。

そして、制服姿の彼女達の方を向く。

「寝た…ままで…ごめんなさい」

「良いのです。気にしないで下さいなのですよ」

「聞きたい…事が…あります」

単語単位でしか言葉を紡げない。

「ゆっくり…しか…話せない…ので…ごめんなさい」

「大丈夫ですよ。ちゃんと聞いてあげますです。それで、聞きたい事って何ですか？」

「あの……貴女達は……だれ？」

彼女達の目が見開いた。

ーーー　奏　ｓｉｄｅ　ーーー

「あの……貴女達は……だれ？」

今、司ちゃんは何と言いましたか？

私には、『貴女達はだれ？』と聞こえました。

「司？何言ってるの？」

彼女のお母さんが司ちゃんに聞き返しました。

「ごめん…なさい…覚えて…ないの…貴女達は…私の…何？」

司ちゃんの目は真剣にそう聞いていた。

忘れてしまった…？

私達の事を？

まさか、事故の後遺症？

「わ、私は周防院奏。貴女が暮す寮の、司ちゃんの姉ですよ？覚えてませんか？」

やっとの思いで、そう答えた。

「すおういん…姉…思い出せません…」

司ちゃんがそう言うと。彼女の母親はナースコールを押した。

『はい。どうしましたか？』

「司が目覚めたのですが、記憶が…無い様なのです」

『判りました。そちらへ行きます』

話もそこそこに、看護婦さんがやってきました。

「ここがどこだかは判りますか？」

看護婦が聞くと、司ちゃんが病院だと答えました。

「自分の名前は判りますか？」

その問いに、フルネームで答えていました。

「ご両親のお名前は覚えていますか？」

ご両親の名前を答え。司ちゃんのお母さんも、間違い無いと答えました。

「では、こちらにお見舞いに来ている生徒さん達の事は、覚えていますか？」

そう聞かれ、司ちゃんが私達を見ます。

「覚えて…ません…」

そう言われ。頭の中が真っ白になる気が気がしました。

「そ…そんな…」

学院の事は?寮の事は?聞きたい事がたくさん出てきました。

「とりあえず、精密検査をしましょう。一時的な記憶障害かも知れません」

そう看護婦に言われ、司ちゃんはベッドに寝たまま連れて行かれました。

そして判った事ですが

司ちゃんは

学院と寮での事だけ

記憶がそこだけ抜けていた

と言う事でした

－－－　奏　ｓｉｄｅｅｎｄ　－－－

第三章第六話

夏休み直前に聖應の生徒に激震が走っていた。

「『妖精の君』が交通事故で入院し、聖應での事を全て喪失してしまった」

この事実は学院内をあっと言う間に駆け巡り、クラスの生徒等は、とっかえひっかえ見舞いに来ていた。

今までの４ヶ月間の、失ってしまった時間を取り戻す為に、皆色々なエピソードを持って来て司に話をした。

聞いている司も、自分の事なので真剣に耳を傾けるが、失った記憶がそうそう簡単に戻る筈も無く、
暗い顔で帰っていく姿に、司は謝ってばかりいた。

ショックが大きかったのは、寮の姉達も同様であった。

今までの出来事全てが、“無かった事”になってしまったからだ。

名前の謂れを教えてもらった事。

珍しい紅茶を出して楽しませてくれた事。

彼女の秘密の一端を打ち明けて暮れた事。

一緒のベッドで一夜を共にした事。

全てを忘れてしまっていた。

司が悪い訳ではない。

誰も悪い訳ではない。

子供を助けて事故に巻き込まれた、言わば偶発的な副産物が、記憶を失うと言う結果を生み出しただけである。

誰を攻める事も出来ない。

寮での色々な出来事を話しても、司は「思い出せなくてごめんなさい」と返って来るだけであった。

毎日の様に通ってた面会が、じわじわと疎遠になって行った。

寮の姉達も、聖應の生徒達も皆辛いのだ。

攻める相手がいれば、そこに怒りをぶつける事も出来たであろう。

やり場の無い憤りが、司に向くのを皆が避けただけなのだ。

辛い表情で帰って行く姿を見送る司も、また苦しかった。

たった４ヶ月。されど４ヶ月。

失った穴は未だに塞がらない。

「ここにいても何も思い出さない……私は聖應に行くべきなのかも

知れません。外出許可はもらえるのでしょうか？」

司は看護婦にそう聞いてみた。

会話は、既に普通に出来るまでに回復していた。

「そうね…その記憶が無いって事を除けば、目だった後遺症も出ていないから、大丈夫だと思うわよ」

「じゃあ、先生（医師）の許可が出たら、2～3日外出しても良いでしょうか？」

「良いとは思うけど、お母さんとかには連絡してね」

「判りました」

数日が経った。

一一一　聖應女学院女子寮にて

微妙な雰囲気が寮内には渦巻いていた。

司が入院している。それだけだったらまだ良かったのかも知れ無い。

記憶が無い。

この事実が寮生達に重く圧し掛かっていた。

話しだけでは思い出してもらえない。

一体何をすれば、彼女が失ってしまった物を取り戻せるのか。

そんな雰囲気が寮の空気を占めてしまい、何も出来ないでいた。

そんな時。

寮の呼び鈴が鳴った。

玄関に一番近かった初音が、その音に反応し、玄関へ行った。

「はい。どちら様でしょうか？」

その声に反応したのは、

「神加賀美司です。外出許可をもらって来てみました」

懐かしく感じる、彼女の声だった。

「司ちゃんっ！？今開けるね」

その声に反応する様に、寮生全員が玄関に駆け寄って来た。

玄関の扉を開けた先に立っていたのは

初めてこの寮に来たときの

彼女の雰囲気そのものだった

「ただいま……と言うべきなのでしょうか…お久しぶりです」

「お帰りなさい！！司ちゃん！！」

司の微笑みに感応する様に、初音が司を抱き締めた。

「あ……」

司が何かに気が付いた。

「どうしたの？」

「この匂い……覚えています…病室では気が付かなかったのに……どうして…」

匂い。予想外の手段だった。

「司ちゃん。私、何か匂うのですか？」

「香水とかでは無い何かがあります。人には固有の体臭の様な物があるとか聞いた様な…」

「そう。病室は多分、病院独特の匂いがあるので、気が付かなかったのですね…盲点でした」

奏がそう言う。

玄関に立ちっぱなしも体に悪いだろうし、ここでは何だから。と言う事で、リビングに全員で移動する。

リビングに付いた司は、周りを見回した。

「ここ…なんとなく知ってます。なんて言うか…懐かしい感じがします」

そう言いながら、何かに呼ばれる様にキッチンへ向かった。

「ここも知ってる気がします……」

「司ちゃん。貴女はここでほぼ毎朝、私達にお茶（紅茶）を淹れてくれたのよ？」

由香里がそう声を掛けた。

「お茶……無くしたパズルのピースが、たぶんここ（寮）にある気がします…」

司は、寮生全員の案内で、自分の暮していた部屋へ案内された。

「ここが司ちゃんのお部屋なのですよ」

そう奏に言われ、部屋を見回す司は、誰ともなしに一言呟いた。

「…母さん、やりすぎでしょう…」

それを聞いた奏の目が見開いた。

その言葉は、初めて自分の部屋を見た時の、あの台詞だったからだ。

「つ、司ちゃん。今……」

「え？今、私何か言いましたか？」

奏は確信した。

まだ私達の絆は切れていない。と。

続いて、由香里の部屋を案内した。

「この部屋で司ちゃんと一緒に一晩過ごした事があるのよ？司ちゃんは覚えていないだろうけど…
あの日は確か…「雷が鳴った？」そうよっ！！思い出したの？！」

「はっきりとは思い出せません…でも…雷がいきなり鳴って、直ぐに抱きつかれて…あれは…誰…？」

あの日のエピソードを思い出してくれた！

由香里はそう思った。

由香里も確信出来た。

絆は切れていないと。

初音の部屋に行った時も、母親の話をした気がすると言う断片的な事を司が言い、彼女も又、繋がっている事に感謝した。

薫子の部屋でも同様に、朝起きなくてくすぐった相手がいたと司が言う。

薫子も又、絆が切れていない事に気付かされた。

「ねえ司ちゃん…」

全ての部屋を回り、リビングに戻ると、奏が切り出した。

「何でしょう?」

「司ちゃんが学院で二つ名をもらっている事は話しましたか?」

実はこの事は、何故か誰も言わなかった。司に気を使って言わなかったのだろう。

「どうだったでしょう…」

「奏さん。あまり急いで思い出せようとすると、司ちゃんに負担が掛かりますよ。ただでさえ数日の外泊なのですから…思い出す切欠があっただけでも良しとしましょう」

司の顔色を伺っていた由香里が奏に言う。

「そ、そうでした。御免なさいなのですよ」

「いえ、お気遣いしてもらい、すみません」

「所で、今夜の夕食どうしますか?司ちゃんが来るなんで知らなか

ったから、四人分しか無いですよ？」

初音が思い出したかの様に言う。

「そこは私が何とかします。病院食ってどんなのですか？」

と由香里が聞いてきた。

「どんなの…って聞かれても…普通の病院食だと思います。普通に栄養のある食事とでも言うべきなのでしょうか…」

「う～ん。消化の良い物にしておけば大丈夫かな…リクエストはありますか？」

「血になる物でしょうか…」

「うん判った」

第三章第六話（後書き）

次の掲載は２／１４予定です。

第三章第七話

食事を済ませ。お風呂へ入らせてもらい。無理は禁物と言う事で、司は自分の部屋に行って寝てしまった。

「寝ちゃいましたね…」

「ええ…」

それを見守る姉達。

病院と同様に、何かあれば直ぐに駈け付けられる様に、ドアの鍵は開けておいてもらっていた。

「司ちゃん…私達の事、一度も名前で呼んでくれませんでしたね…」

思い出したかの様に薫子が言った。

「駄目よ薫子ちゃん。司ちゃんは私達以上に苦しんでいるの。何気ない食事中の会話だって、司ちゃんは必死に思い出そうと聞き役になっていたのよ?」

と由香里。

「そ、そうなんですか?…気が付かなかった…」

「でも、私達との間の絆は、ちゃんと残っているわ。私はそう思ったけど皆は?」

「「そう思います（です）」」

「私、思うのだけど…無くした絆より、新しい絆を作った方が良いのでは無いでしょうか…」

「それって、どう言う意味なのでしょうか？由香里さん」

奏が聞いた。

「なんて言うか…今までしてきた事を忘れるのではなく、もう一度やり直せば良いだけなのでは？と思って…」

「あぁ、なるほどなのですよ。一緒に寝てあげたり、司ちゃんの作った紅茶を再現して見たり、それを以前にあった思い出ではなく、新しい思い出として絆を深める。そう言う事ですか」

「そう。それを、司ちゃんが退院してからすれば良いわ」

「でも、実際にそれを行えるのは、夏休みが終わってからになりそうですよ？」

初音が由香里に言う。

「それは仕方ないわね。明日はお弁当作って、皆で近場へピクニックでも行きましょう。良い気晴らしにもなるわ」

「そうですね！！きっと司ちゃんも喜んでくれると思います」

翌日、薫子を含めた姉達全員が早起きしてリビングへ向かった。

所がリビングでは、姉達の定位置に紅茶を置いている司の姿があった。

「お早うございますお姉さま方。今朝はアイスのカサブランカを淹れてみました」

＊ＣＡＳＡＢＬＡＮＣＡ（カサブランカ）
カサブランカはモロッコのお茶をイメージしたお茶。簡単に風味を説明すると、緑茶のアールグレイ（ベルガモットがはいっているから）＋ミント。夏にぴったりのさわやかなお茶。

見慣れた司の笑顔がそこにはあった。

そして彼女は、『お姉さま方』と自分達を認識してくれている。

姉達はマリア様に感謝をした。

『司ちゃんの記憶を少しでも回復してくださって、有難うございます…』

昨夜の計画を姉達が話そうとした所、寮の電話が鳴った。

「私が出ます」

司がそう言い電話に出た。

「はい。聖應女学院女子寮で御座います」

その言葉は自然に出ていた。

『国立〇〇〇付属、〇〇中央総合病院です。神加賀美司さんはいらっしゃいますか？』

「あ、私です」

『ちょうど良かった。実は貴女の入院期間の件なのですが』

「あ、はい。伸びるのですか？」

『いえ逆です。今外泊中でしたよね？』

「ええそうです」

『そのまま退院して下さって構いません。ご両親にもその旨は連絡済みです。ただし、１・２ヶ月に一度は通院して下さい』

「判りました」

電話を切り、リビングへ向かう。

「司ちゃん何処からの電話でしたか？」

座った途端に初音が聞いてきた。

「病院からでした。このまま退院して良いそうです」

それを聞いた姉達の表情が明るくなった。

「そうですか。おめでとうなのですよ司ちゃん」

等と、姉達が口々に祝福を述べた。

「有難う御座います。まだまだ（記憶が）抜けている部分が多く、ご迷惑を掛けるかとは思います」

「司ちゃんがここにいてくれる。それだけで良いのですよ。あまり気にしては駄目よ」

「はい。由香里お姉さま」

「え？」

呼ばれて気が付いた。今、司は由香里の事をどう呼んだのか、一瞬理解できなかった。

「今……私の事、なんて…」

「え？由香里…お姉さま…あれ？…」

「わ、私は？」

正面にいた奏が聞いてきた。

「奏お姉さま…違いましたか？…」

「私は！？」

初音が身を乗り出して聞いてきた。

「初音お姉さま…ですよね？…」

「私はっ！？」

「薫子…お姉さま…」

思い出してくれた！！

姉達は感謝で胸一杯になった。

司が初めて寮に来て、初めて自分達を『姉』と呼んでくれた時のあの感動が蘇っていた。

表情にこそ出さなかったが、あの時は天使から『姉』と呼んでもらい、その夜は興奮で眠れなかったのだ。

予定通り近場へピクニックへ行き、そこで司は姉達に何気にこんな質問をした。

「そう言えば…今回の夏休みって、何処かへ行く計画がありませんでしたか？」

「思い出したのっ！？」

「そんな気がしたのですが…間違いでは無いのですね…私の所為で計画が崩れてしまい、何とお詫びをすれば…」

「いえそんな。気にしなくて良いのですよ。瑞穂お姉さま達も判って下さってますから」

「ミズホ…」

…あの時の夢が断片的に思い出された。

「ミヤノコウジミズホ…」

「そうですっ！」

少しづつとは言え、司は確実に記憶を取り戻していた。

新しい絆を作り、抜けた穴をゆっくり思い出させようとする姉達の、結束が固まった瞬間であった。

第三章第七話（後書き）

第三章は終わりです。
簡単に失った記憶が戻るとも思えませんが、その辺は御都合主義と言う事で納得して下さい。

バレンタインの挿入話？
時期外れの本編にてｗ

次の掲載予定は２／２１です。

第四章　彼女と夢と現実と寮の途中入寮　第一話

一一一周防院奏から見た司

私の名は周防院（すおういん）　奏（かな）と申しますですよ。

「なのですよ～」という口癖が特徴だとは良く言われますですよ。

最近は言ってないと思います。自分の口癖は、自分では判りませんです。

私は物心付いた時には、すでに孤児院に暮していました。

両親や本来の名前は、誰にも判りません。

孤児院の院長から、院長の養女となったときに『周防院奏』と名付けられたのですよ。

頭のリボンは亡くなる直前の院長から貰った物で、何よりも大事な宝物です。

あの孤児院が、瑞穂お姉さまの親族企業が運営していたと知ったのは、聖應に入ってからでした。

今は櫻の園と言われている、聖應女学院女子寮の寮長らしき事を伝統でやらせて頂いてます。

本当は、寮長は由香里さんがなる予定だったのですよ?

私がエルダーになるなんて知らなかったから、当時部活の部長さんと、生徒会長の兼任をしていた由香里さんだったので、これで寮長（本来は寮監と言いますです）なんてなったら、体が壊れてしまうと思い、私が変わって上げました。

私は演劇部の部長だけでしたから、寮監をしてもこれと言った大きな責任は持たなくても良かったのですよ。

エルダーに拝命されてしまい、全校生徒から『お姉さま』と親しみを持って呼ばれる事となってしまいました。

候補に挙がった時は、それは大変でした。

私なんかが、そう言う思いばかり考えさせられてしまって、かなり追い詰められていた気がします。

でも、あの子の言葉で気が軽くなりました。

あの子が寮に来たときは、大変驚きました。

透き通る様な白い肌。私も白いと言われていますが、私以上でした。

光り輝く肌と髪の毛は、天使が舞い降りてきたのかと勘違いしてしまいましたですよ。

思わず『天使様』と言って、彼女を驚かせてしまったのは、良い思い出です。

あの子は珍しい紅茶を時に出してくれます。

最初に出して頂いたのが、梅の紅茶でした。こう言うお茶もあるんですね…と感心してしまいました。

あの子とお話していて、ふと気付いた事がありました。

なにか大きな影を背負っている事にです。

由香里さんもその事は気が付いている様子ですが、何も言いません。

誰にだって話したくない事はあると思うのですよ。

ですが、それはひょんな事から発覚してしまいました。

クラブの勧誘の時に、それは起こったらしいです。見ていた訳ではないので詳しくは言えません。

寮に戻ってあの子の部屋に入った時、彼女は全てに絶望している様な表情でした。

彼女に話を聞くと、私達は綺麗な色だと思う髪の毛の所為で、色々辛い目に合ったと言う事でした。

彼女が泣くのを始めてそこで見ました。

泣く姿も幻想的でしたが、私は、彼女が泣いていると、胸が締め付けられる様な感覚が沸ました。

泣いている姿を見たくなくて、頑張って彼女を慰めてあげました。

翌朝、微笑んでいるあの子の姿を見て、私の些細な苦労は報われたと思いましたですよ。

風邪で寝込んだと聞いた時も、本物の妹を心配している様な私がいまいた。

心配で心配で、授業も上の空でした。

授業が終了する時、あの子から呼ばれた気がしました。

私達の事を、血の繋がった姉として見てくれていた事件だと思いました。

そして夏休み直前の、彼女の交通事故。

それを聞いた瞬間。心臓を鷲掴みされた程のショックでした。

病院へ急いで向かい、手術室の前で、彼女のご両親に合いました。

彼女は御母さん似だった様でした。

彼女の御母さんが必死に祈っているのを聞き、事実だったのだと、やっと理解出来ました。

思わず気が遠くなる感覚を覚えました。

長い処置時間が過ぎ、彼女は辛うじて、私達の元へ戻ってきてくれました。

あの時ほど、マリア様に感謝したことはありませんでした。

彼女が目を覚ました瞬間には立ち会えませんでした。

そんな事は問題ではありませんでした。

彼女は、私達や学院での事だけが、何故か忘れてしまっていました。

色々お話しをしました。

それでも中々思い出してもらえませんでした。

彼女が悪い訳では無いのに、私達に「思い出せなくて御免なさい」と言われた時のあの辛そうな顔は、見ている私達まで辛くなってしまうのでした。

彼女は思い切って外泊をし、寮にきてくれました。

そして、寮の中を案内する度に、パズルのピースを埋めていく様に徐々に思い出してくれました。

私達と彼女の見えない絆は、ちゃんと繋がっている事を実感しました。

いつの間にか、司ちゃんは私の中で大きな、とても大切な存在になっていました。

第四章　彼女と夢と現実と寮の途中入寮　第一話（後書き）

他の姉達からみた司の話も企画はあったのですが、一部を除いて同じような内容になってしまう為、奏ともう一人のみとしました。
もう一人が誰なのかは次回をお楽しみにｗ

次の掲載予定は２／２８です。
当分は週刊誌ペースになりますｍ（；　＿　＿）ｍ

第四章第二話

一一一皆瀬初音から見た司

私の名は皆瀬（みなせ）　初音（はつね）と言います。

幼等部から聖應女学院生徒です。

言い方は変でしょうが、由香里お姉さまに言わせると、私は箱入り娘過ぎるらしいです。

父のニューヨーク転勤により家族は海外に移ったのですが、私だけが聖應に残り、両親の希望もあって寮で暮す事となりました。

私は、自分でも判ってはいるのですが、極端な人見知りです。

相手の人となりを理解するまでに、その人との間に一歩も二歩も距離を置いてしまい、それが他人から見ると、おどおどした性格だ。などと良く言われます。

高等部の寮、櫻の園に入り、お姉さま達にご挨拶をして、寮の仕来たりに従って、私も奏お姉さまか、由香里お姉さまのどちらかの妹に成る事となり、奏お姉さまはもう一人入った私と同じ一年生の、七々原（ななはら）　薫子（かおるこ）さんの姉になり、私は、由香里お姉さまの妹となりました。

薫子さんの最初の印象は、とにかく怖かったです。
お話をすると、割と普通の人だったのに安心しました。

私は由香里お姉さまの推薦もあり、陸上部に入り、由香里お姉さま達に結構しごかれました。

そのお陰で、私は精神的に強くなった気がします。

由香里お姉さまが、クラスのお友達から依頼され、生徒会を手伝う事になり、私もそのお手伝いをする事が増えました。

由香里お姉さまは、周りの策略によって生徒会長にさせられてしまいました。

私も由香里お姉さまのお手伝いをもっと頑張ると言って、背を押してしまいました。

生徒会繋がりで、鳥橘（うきつ）　沙世子（さよこ）さんとも仲良くなりました。

後で判った事ですが、可奈子お姉さまと言う実のお姉さんがいて、そのお姉さんが由香里お姉さまの友達だったそうです。

可奈子お姉さまは、ほんわかして言葉が間延びしたりしますが、沙世子さんは対照的にキビキビした口調が印象的です。

そして私は二年生に進級しました。

今年寮に入る一年生は、一人しかいないと聞かされました。

薫子ちゃん…いつの間にか彼女をこう呼んでいます。と、今年入ってくる子はどんな子でしょうね？と話をしたりもしていました。

まさか、あんな子だとは思いませんでした。

「今日寮に入った娘は凄いですよ。薫子ちゃんや初音ちゃんも驚くと思いますですよ」

と言われ、どう凄いのかその時点では判りませんでした。

その子を見た途端、七色の色彩が全て彼女を中心に光っていました。

私にはそう見えました。

ファンタジーの世界の、光の精霊を全身に纏う妖精さんがそこにいました。

一目ぼれが存在するのを理解してしまった瞬間でした。

微笑んでくれただけで、灰色の世界が色ずく。そんな錯覚すら覚えてしまいます。

幻想的に輝く銀白色の髪の毛。

奏お姉さまも肌が白いとは思っていました。が、上には上がいると本気で言える程の透き通る様な白い肌。

聞けば、彼女は北欧の血筋と欧米の血筋のハイブリッドだそうです。
奏お姉さまが凄いと言った意味は、理解出来た気がします。
気が付けば、私は彼女の一挙手一投足まで目で追っていました。

＊一挙手一投足
こまかな一つ一つの動作や行動。「―に気を配る」　ちょっとした努力。わずかな骨折り。「―の労を費やす」

私はあの子が好きです。
ＬＩＫＥではなくＬＯＶＥの方かも知れません。
その違いを私は本質的に理解していないので、この感情を告白する勇気はありません。

彼女が風邪を引いた時、どうしてもそばにいたくなりました。
授業に出ても、脳裏に浮かぶのは彼女の苦しそうな表情だけでした。
ついには、彼女から呼ばれると言う幻聴まで聞こえてしまい、足は寮に向かっていました。
そこで知った彼女の心の闇。
私が看病を出切る事になり、彼女の闇をほんの少しでも取り除ける

様に、彼女と出来る限りお話をしました。

彼女が事故で危ないと知った時、それまでおざなりだったマリア様への祈りは、心の底から真剣な祈りになりました。

真剣に祈った事がない私の祈りを、聞いてくださるかどうか判りませんでしたが、その時はお願いする以外の手段がありませんでした。

無事に彼女が返って来てくれた時には、何度マリア様に感謝したか覚えていません。

二週間意識が回復しない間も、寮の皆さんは、私を含めて彼女に些細な出来事を話しました。

ちゃんと呼吸をしている彼女を見ているだけで、安心出来ました。

意識が回復し、彼女は私達を覚えていませんでした。

ショックはありました。でもそんな事で挫けてはいられません。

彼女の方が何倍も辛いのは判っています。

彼女は、外出許可をもらって寮に来てくれました。

お話をして、翌朝にはいつもの彼女の笑みと、お茶がありました。

嗚呼、私はやはり、彼女が好きです。

いつか
どこかで
私は
この感情を
彼女に伝える勇気を持とうと思います。

第四章第二話（後書き）

司の事を『彼女』とか『あの子』と呼んだのはわざとです。
わざとそうした意味？…無いっすｗ

次の掲載は３／７を予定しています。

第四章第三話

夢を見た。なんと言うか不思議な夢だった。

知らない二人の聖應の生徒が話をしている所から始まった。

「私はね…学院の中で味方が欲しいの」

「今の所はね、私は学院の中で一匹狼みたいなものなのよ」

もう一人の心の声の様な説明が続く。

『自らを悪と定義していた香織理さん。僕達に悪い噂が立たない様に、気を利かせて距離を置くこともあった』

ちょ。

香織理って誰?僕達って何?また突っ込めてる夢って何?!

『香織理さんの笑顔は、いつもどこかに憂いを隠してて……』

だから話を進めないでえぇぇぇ。

＊夢に突っ込んでも無駄無駄無駄

何今のナレーションは?

「香織理は、今の自分が弱くなったと思うかな？」

又別の生徒だ。誰この外国の生徒は？

＊ケイリ・グランセリウスです。

自称「夜に在り、数多星々を司る星の王女（星の王女）」

説明有難う…

「良くは解らないわ。ただ、この弱さが身を滅ぼす事がある…と言う事は知っているわ」

「運命ならば、受け入れようとは思うかい？」

「それは解らないわね。全てを運命で説明するなら、抗う事も運命なのだから、そもそも考えるのも無駄な事…でしょう？」

「感覚的経験の背後にある実在…って物を信じているからね」

何の話なのこれ？

一一一　聖夜に祈りを、聖者には安らぎを、貴女には警告を　一一一

誰？これは何を意味しているの？！

「そう言えば、嗅覚と言うのは五感の中でたった一つだけ、理性を通さず直接感情に働きかける力があるのだと。昔、そう教わった事

があるわ」

それって、香水で私は又あの悪夢を見るって言う啓示なの？この夢は…

ーーー　親の呪縛から卒業させてあげられるかも知れないのよ、司

ーーー

あなた誰？……いえそんな……まさかあなたは…？

ーーー　何時か又夢（ここ）で会いましょう。ね？司　ーーー

待って！ちょっと待って！！

舞台が崩れて行く感覚に襲われた。

体を揺すられている。

「…ちゃん！！司ちゃんしっかりして！」

誰？おこさないで。今の続きを見させて。お願いだから。

「起きてお願いだから…私達を置いて逝かないで…」

何言ってるのだろ…

私はゆっくり現実世界に戻された。

「お…おねえ…さま？」

ぼんやりと見た私の目の前には、今にも泣き出しそうな由香里お姉さまがいた。

そう言えば、今日は由香里お姉さまのお部屋で寝る事になってたんだっけ…

相変わらず私の、記憶と言うピースは全ては埋まっていない。

それについては寮のお姉さまも、クラスの皆も、気にならない様子だった。

「無くしたピースより、新しいピースを埋めましょう！」

とは桜さんの台詞だった。

「大丈夫司ちゃん？ひどい魘されかただったわ」

「何と言いましょうか……知らない聖應の生徒三人が出ていて、その三人が中心で話が進むのですが…」

「不思議な夢ね。司ちゃんはそこにはいないの？」

「私は、それをただ傍観してるだけでした」

「へ～。その知らない生徒って名前出たのですか？」

「一人はケイリ・グランセリウス」

「え？それって一年生で実在していたような…？」

「そうなんですか？面識は無い筈なのですが…」

「残りは？」

「二人目は香織理と言う生徒。名前だけなので同級生なのか上級生なのか…」

「聞いた事がある気がしますね…後一人は？」

「千早…そんな名前だった気がします」

＊作者注
千早は出ませんよ？時系列的にありえません。

「その名は聞いた覚えが無いですね。まあ、夢なのであり得ない名が出ても不思議では無いでしょうね。まだ夜は明けてもいません。もう少し寝ましょうね？」

「はい」

後で由香里お姉さまに聞いた所では、二年生で神近（かみちか）香織（かおり）理と言う生徒と、
一年生でケイリ・グランセリウスと言う生徒は実在していたが、

千早と言う名前だけは判別がつかなったとの事だった。

最も、私も千早と言う生徒に限っては、姿をはっきり夢の中で見ていない唯一の存在なので、多くは言えなかった。

これが、9月に来るちょっとした騒動の前置きになるなどとは、今の司達には知るよしも無かった。

第四章第三話（後書き）

何の前置きなのかは予想が付くと思いますので、お答えしません。

次の掲載は３／１４予定です。

第四章第四話（前書き）

このたびの災害により、被災、避難をされました
皆様におかれましては心からお見舞い申し上げます。
降雪の情報も入っておりますが、どうぞお身体に
気を付けられて、一日も早い復旧をお祈りいたします。

当ＳＳは世間事情の空気を読まずに、予定していた内容を出しております。

＊＊　ご注意　＊＊

障害を持ってる方には不快な内容となっている可能性があります。
私も生まれつき障害は持っているので、馬鹿にするつもりはありません。

ですが、それでも不快に思える内容になっている節があります。
従って、そう言う可能性がある方は、読み飛ばすか、四話を読まない事をお勧めします。
これは、主人公の設定的に避けされない事なので、申し訳ないのですが掲載させてもらいます。

第四章第四話

あの夢はおかしい部分がありすぎる。

聖應に入る前に見せ付けられたあの時は、五秒と進んでいない時計の時間があった。

あの夢も変だけど、今回はリアルに時間が過ぎている。

夢は見た者の将来に対する希望・願望を指すか、これから起き得る危機を知らせる信号と考えられているなんて言う説や、夢でみた現象がそのまま実現する夢を予知夢と呼び、可能性がある夢を詳細に検討する場合もある。なんて説もある。

普段の生活から興味がある現象について夢を見やすいといわれている。具体的には色に興味がある人は色が付いた夢を見る。

なんて事もある。

寝ながら見る夢では、その人の普段は抑圧されて意識していない願望などが如実に現れるケースも多いとされる。

ただ、それらは誇張されていることも多く、結果的に現実としては不可解な現象で表現されることが多い。

昨夜の夢は何だったのだろう…？

私が予知夢？

あり得ない。

私は未だにトラウマを抱えている。

その原因はあの包帯だ。

かたやそうなる運命で生まれてしまった事。

かたや偶発的に起こった事件。

この包帯の所為で、何度私は転校を繰り返した事か…

運命については、それを呪った事もあった。

怒りを両親にぶつけてしまった事もあった。

両親は悪くない。

恐らく、偶然か必然でそう生まれる星になってしまっただけだ。

そんな人間が、予知夢なんて考えられない。

「星の巡り……偶然であり必然である……そんな運命ですか…」

「占星学ですか？」

学院の屋上で考え事をしているうちに、独り言を言っていた様で、

それを聞いてしまった生徒から声が掛かった。

昨夜の夢で出てきたケイリさんだった。

「独り言になってしまった様ですね…お見苦しい所を見せてしまいました」

「いえ…私が聞こえたのも、貴女との星の巡り合わせでしょう。宜しければお話を聞きますよ?」

「それも一興かも知れませんね…ああ。申し遅れました、私は「存じてます。『妖精の君』ですよね?」」

「ええ、そう呼ばれていますね。貴女のお名前も宜しいでしょうか?」

「ああそうですね。私は、ケイリ・グランセリウスです。夜に在り、数多い星々を司る星の王女です。貴女と同じ一年生ですよ」

僅かに褐色がかった肌にブルネットの髪、エメラルドグリーンの瞳を持つ彼女がお辞儀をした。

ミステリアスな雰囲気の女性ではある。

「星の王女様ですか……所でお聞きしますが、体に障害を持って生まれた子供は、そうなる運命や宿命だったのでしょうか?そう言う星の巡りあわせで一生不幸を背負う事になるのでしょうか?」

＊運命

1　人間の意志を超越して人に幸、不幸を与える力。また、その力によってめぐってくる幸、不幸のめぐりあわせ。運。「―のなせる業」「―をたどる」

2　将来の成り行き。今後どのようになるかということ。

＊宿命

生まれる前の世から定まっている人間の運命。宿運。しゅくみょう。

「海に生きる―にある」「つらい―を負う」

「運命も宿命も、星の巡りあわせでそうなった。と言えなくは無いでしょうね。

それは、後に続く幸せを感じる為の、高いハードルを背負う星の下に生まれてしまった。

そう言う事では無いでしょうか」

「運命とは、得てして残酷ですね…」

「残酷な事にも、ちゃんと意味はあるのです。それを気付くか気付かないかの違いでは無いか…私はそう思いますよ」

「私はそれに気付けていない…又はその道が見えていない…そう言う事ですか…」

「ぶしつけで申し訳無いですが、『妖精の君』にもそう言う事はあると言う事ですか？」

「申し訳ありませんケイリさん。あるのは事実です。ですが、それを語れる時期では無い…と思います」

「そうですか……それでは、また星の巡りの接する時期にお会いしましょう」

そして、夢でみたその人が入寮してくるなどとは、それこそ夢にも思わなかった。

第四章第四話（後書き）

ホワイトデーイベント？
知らんがな（´・ω・`）

次回は３／２１に掲載の予定です。

第四章第五話（前書き）

小説内では、世間事情の空気は全く読んでいません。

ＰＣ版『２人の～』の香織理編のネタバレを含んでいます。

未プレイでこれからやろうと言う方は見ない方が良いかもです。

第四章第五話

9月某日。

「いきなりなのですが、明日より二年生の生徒が途中入寮してきますのですよ」

奏お姉さまのそんな一言から朝は始まった。

「へぇ…途中入寮とは珍しいですね。名前は聞いているのですか？」

由香里お姉さまがそう聞いてきた。

「神近（かみちか）　香織理（かおり）さん。と言うそうです」

ぇ

ナンデスト？

あの夢で出てきたあの香織理さん？いや、上級生だから香織理お姉さまなのか？

あの時の夢は何を言いたかったのだろう…未だに良く判っていない。

あの夢に出てきたあの人、あれって私の予想が合っていれば、■■さんのはず…

なんで今更？

笑って私の為に■■■■た筈なのに…

やはり私を恨んでる？

私は忌み子なのかも知れない…

「…ちゃん？司ちゃんどうしたの？」

思考の渦に飲み込まれつつあったのを、由香里お姉さまの声で現実に戻された。

「え？あぁ、申し訳ありません。ちょっと思考の渦に飲み込まれていました」

「又夢見が悪かったの？ここの所毎日じゃない。最近顔色も優れないから心配よ」

色々お姉さま達には目をかけてもらっているのに、未だに包帯の下に何を持っているかを語れない私。

「色々自己嫌悪してしまい、お姉さま達には申し訳ないとは思っています」

最近は毎晩、香織理お姉さまの夢を見せ付けられていた。

しかも内容が、アドベンチャーゲームの次の場面を見るがごとく、話が続いている。

香織理お姉さまの母親が花街の芸者だったとか、香織理お姉さま自体が不倫の果てに生んだ子だとか、

父親的存在は生活していく上での養育費を出してくれている事とか、その事を受け入れているが快くは思っていない事だとか…

「創造祭や降誕祭が後には待っています。体を壊すと寮だけではなく、学院の皆さんも心配するわよ?」

＊創造祭
聖應女学院で十一月に行われる学院祭。新入生、二年の各クラス（最上級生クラスの参加は任意）と、各部活動、同好会による模擬店や展示、活動発表が行われる。
中でも名物と云われているのは演劇部による公演と、生徒会主催で行われる各種イベントである。

＊降誕祭
降誕祭その物より、むしろその後に続くダンスパーティーの方がメインイベント。
エルダーは男性役（ホスト）として、女生徒の相手をするのが風習である。
…司が巻き込まれるのはデフォルトなのかも…

…嫌な電波が今届いてしまった。

私が何に巻き込まれるのだろうか。

今のうちに旅に出る準備をしておいた方が良いのかも…

そして、香織理お姉さまが入寮してきました。

最初にみた印象は…その…デカイです。

どこが？

その…胸とか胸とか胸とか…

FとかGとかあるんじゃ無いでしょうか。

薫子お姉さまは薫子お姉さまで、香織理お姉さまの姿全体を見惚れている様子でした。

クチナシのような香りがするお姉さまでもあった。香水を作る趣味があると、確かあの夢で見た気がする。

「私は神近香織理よ。途中入寮だけどこれでも2年生よ。これからよろしくね皆様」

それに続き、寮にいる全員が自己紹介を行った。

香織理お姉さまが私の事を結構気にする視線を送ってきます。

勘弁して下さい。私は百合の世界には興味ありません。

自己紹介が私の番になった。

「私は神加賀美司と申します。1年生です。『妖精の君』などと言う謎の二つ名が付いてしまいました。それといずればれる事なので言っておきますが、私の右腿と左上腕に包帯が巻かれています「司ちゃんそれは」…ええ、未だにこの包帯の事はトラウマです。いずれは言える時が来るとは思いますが、詳細は言えません。ですので

その事に関しては聞かないでもらえると助かります」

「判ったわ。それ以外の事は聞いても良いの？」

「まぁ、答えられる事なら…」

「その目と髪の毛の色の事は？」

私は香織理お姉さまに、入寮時にも説明した、血の繋がりを再度説明した。

「…とまあこんな事なので、銀色の毛とオッドアイになってしましました。この事で過去には色々きつい目には合ってます」

「それって…」

「奇異とか異端に見える。そう言う事です」

＊奇異
普通とようすが違っていること。不思議なこと。また、そのさま。
「―な服装」

＊異端
正統から外れていること。
また、その時代に多数から正統と認められているものに対して、例外的に少数に信じられている宗教・学説など。「―の説」

「ごめんなさい。聞くべきではなかったわ」

「いえ、香織理お姉さま以外の寮生全員が知っている事実ですので…」

その話はそこで打ち切られ、寮のルールの説明を奏お姉さまが行った。

「最後になりますが、妹を再度決めなおす事となりますのですよ」

あぁ、やはりそれは避けられないのですか…

第四章第五話（後書き）

意図的に伏字にしている部分があります。
主人公の秘密に関わるネタばらしについては、第七章まで引っ張ります。
次回は３／２８予定です。

第四章第六話（前書き）

小説内では、世間事情の空気を（以下略

妹決め選手権（？）はちょっと無理っぽいので諦めました。
楽しみにしていた方々には申し訳ありません。
m（；＿＿）m

第四章第六話

奏お姉さまが香織理お姉さまに現状までの『妹』と『姉』の立ち位置を説明した。

奏お姉さまの妹は薫子お姉さま。

由佳里お姉さまの妹は初音お姉さま。

私は薫子お姉さまと初音お姉さまの両方の妹と言う位置にはなっているが、色々な紆余曲折により、リビングで全員の紅茶を出したり、なかば習慣と化してしまったが、お姉さま達の部屋にお泊りしている事。等が語られた。

「そうなると、私だけで司を独り占めって訳には行かない訳ですね」

と香織理お姉さま。

だ・か・ら…百合属性は無いんですってば…

「そうですね…香織理ちゃんだけ除け者って訳にはいかないので、今まで通りリビングで全員の紅茶を出したり、皆のお部屋にお泊りに行くって事で良いのでは無いかと思いますですよ」

司がアールグレーとヴィクトリアサンドイッチケーキを出してきた。

＊ヴィクトリアサンドイッチケーキ

名前の通りヴィクトリア女王の為に作られたお菓子。
ヴィクトリア女王の夫であるアルバート公が腸チフスで亡くなり2年以上、喪に服された女王は別邸がある。
ワイト島のオズボーンハウスで公式に人前に現れる女王復帰の記念パーティーに、ヴィクトリアサンドイッチが作られたそうです。

「香織理お姉さまの入寮記念と言う事で、ヴィクトリア女王がお茶の時に好んで食べたと言うケーキ。その名もヴィクトリアサンドイッチケーキです」

「女王御用達のケーキなんて…あり難く頂くわ」

そして入寮記念と言う事で、何故か私は香織理お姉さまの部屋に招かれる事となった。

「香織理お姉さま」

「何司？」

「最初に言っておきますが、私は百合の世界に興味はありません」

「あらやだ。気が付いていたの？」

「ええまぁ…」

「理由を聞いても？」

「何と言いましょうか……世の中には信じられない事が沢山あって、

その一つを体験してしまった…とでも言えば良いのでしょうか…」

「良く判らないわね」

「判らなくても問題無いのでは？特にそれを知らないからと言って、明日世界が崩壊する訳でも、西から太陽が昇る訳でも無いのですから・・・」

「それもそうかも知れ無いわね」

「所で、香織理お姉さまは調香はなさらないのですか？」

「えっ！？」

＊調香
新たな香水などを作り出すために、複数の香料を調合すること
ＰＣ版『２人の～』の中では、香水とか香料を合成する事と説明されている

「なんでそれを知っているの？」

驚いたように香織理お姉さまが聞いてきた。

「夢の中でそれを見た……と言ったら信じますか？」

「予知夢？」

「嗅覚と言うのは五感の中でたった一つだけ、理性を通さず直接感

情に働きかける力があるのだそうです」

「どうしたのいきなり？」

「いえ…何かしらの香りで、私は過去のトラウマを掘り起こされるのでしょうね…」

――香織理　ｓｉｄｅ　――

「いえ…何かしらの香りで、私は過去のトラウマを掘り起こされるのでしょうね…」

司がそう言うと、彼女は私の前から今にも消えてしまいそうな程、おぼろげな存在に見えていまい、思わず抱き締めてしまった。

なぜだか判らなかった。

いえ、何となく理解してしまった。

母性本能。そう、まさにそれ。

私は司の事を、『守ってあげたい大切な存在』と認識してしまった。

新しい自分の面を見つけてしまった瞬間ね…

――香織理　ｓｉｄｅｅｎｄ　――

私は香織理お姉さまに抱き付かれていた。

嫌な感じではない。

言い方は悪いけど、母に抱き締めてもらっている感覚であった。

「香織理お姉さま…」

「あぁ、ごめんなさい。ちょっと司が消えてしまいそうに見えたので…」

「他のお姉さま達にもたまに言われます。私の存在は、たまに気薄いそうです」

翌朝。

何時もの様に、司が全員の席に紅茶を置いていく。

席に座っていないのは薫子だけであった。

「あら?薫子さんは?」

「あぁ…薫子ちゃんは朝はもの凄く弱いのですよ。さてと」

そう言って奏が席を立つ。

「奏お姉さまどちらへ?」

と香織理が聞く。

「あはは…まあ日常光景なので。すぐに慣れますよ」

由香里が香織理に説明している間に、奏が嬉々として薫子の部屋の方へ向かって行った。

「奏お姉さまと薫子お姉さまの逆転姉妹の噂はお聞きになってますか？」

司がそう言う。

「あれ本当だったのね…」

「3年生になったらどうするおつもりなのか…一緒に寝て差し上げると、あっさり起きる他人依存症的な癖も何とかして欲しいですね」

「それって、司が一緒に寝てあげれば…って事？」

「毎日は勘弁して下さい」

「そうですよ。司ちゃんは日替わりで寮生全員のお部屋にお邪魔する。って事で、誰か特定の妹でなくて良い。となったのですから」

初音が香織理にそう説明した。

そんな日常を過ごしながら、季節は１０月を迎えて来た。

第四章第六話（後書き）

ドタバタコメディー的な作りが出切る文才が欲しい…

次からは学院祭イベントの第五章となります。

次話は４／４予定です。

挿入話３　あり得ない（かも知れない）夢（前書き）

変な電波が届いてしまったので、突発予定外挿入話を出します。

提供は…ＭＦ文庫Ｊとかメディアワークスとか。

小説内では世間事情の空気を（ｒｙ

挿入話3　あり得ない（かも知れない）夢

「司」

電話口で父さんに真剣に突然呼ばれた。

「どうしたの父さん？」

「お前には黙っていたが……実はお前には妹がいる」

「ぇ？」

はあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？

なにそれ！？

「お前小さい時、養護施設にいたのを覚えていないのか？」

「左腕のあの事件の後に入った、病院らしくないあそこ？」

「そうだ。あそこでお前、かなりの人気者だったらしいじゃないか…」

「まてまてまて。あれは施設の子供達で、妹じゃないでしょ？」

「所が…あの子達は、血の繋がりは無いが、お前を本当の姉として慕っていたらしく…そのなんだ…」

父さんが何かを言い及んだ時、玄関の呼び鈴がなった。

「誰だろ…とりあえず又後で電話くれる？」

「ああ判った」

私は返事をして玄関に出た。

そこにいたのは可愛らしい女の子だった。１２～３歳位だろうか。

小さな三つ網を左右につけている子であった。

どこかで合った気がするが思い出せない。

「あ、あの…お久しぶりです。お姉ちゃん」

「……は？」

私は頭の中が真っ白になった。だ、誰？

てか、私をお姉ちゃん？

な、何か言わないと…

「お、お姉ちゃんって何？貴女は誰？」

「も、もしかして本当に忘れちゃったの……？」

見る見る間に、その娘はの瞳が涙で潤んできた。

「そんな…お姉ちゃんの事は、一日だって忘れた事は無かったのに

……」

「ちょ。ちょっと泣かないで可憐」

えっ？

今私、この娘の事を可憐って言った？

「あはっ、やっぱりお姉ちゃんだ。可憐達の事をお姉ちゃんが忘れるはず無いもんね。ごめんね、お姉ちゃん」

え～と…ここは話をあわせるべきなのだろうか？

いやいや。後でばれたらそれこそ、余計に傷つく事に成りかねない。

「お姉ちゃん。可憐達、ずうっと合える日を楽しみに待ってたの」

達？彼女以外にも誰かいるって事？

「咲耶ちゃんも、白雪ちゃんも、衛ちゃんも、千影ちゃんも、雛子ちゃんも、花穂ちゃんも、鈴凛ちゃんも、鞠絵ちゃんも、皆ずうっと待ってたんです」

今、何人の名前が出た？

「あっ、ごめんなさい。可憐、つい嬉しくて…お姉ちゃんを迎えに来ただけなのに、こんなに話し込んじゃって。ごめんなさい」

迎えに来た？

「それでね、お姉ちゃん。皆が待っているから来て欲しいんだけど…駄目ですか？」

「来てって…今から？」

「うん。だってお姉ちゃんの誕生日は、今日だけなんだから」

あるぇ？

今日って誕生日だったっけ？

「あ、ごめんなさい。お姉ちゃん着替えないといけないよね。それじゃ可憐。ここで待ってますから」

「え？ここでって玄関で？」

「はい」

そう言う訳にも行かなかったので、可憐と言う娘を上がらせ、ソファーに座らせた。

私のめくるめく忙しい日々は、こうして始まった。

暗転

「我が名はタバサ。五つの力を司るペンタゴン。我（さだめ）の運命に従いし、“使い魔”を召還せよ！」

杖の先端が指し示す何もない空間が突然、眩い光を放つ。直後、七色の光がゲートの中から照らされた。

そして出てきたのは、白銀の髪の毛を腰まで伸ばした純白の肌の少女だった。

「あれ……ここはどこ？」

その容姿に、声に、立ち居振る舞いに、全てを忘れてタバサは見入ってしまった。

いや彼女だけでは無い。

学院で召還の儀式に参加していた、全ての生徒が見入ってしまっていた。

「あの…そちらの方、ここは何処なのでしょうか？」

「あ、あのその…ここはトリステイン魔法学院です」

その答えに周りの生徒が目を見開く。

「あのタバサが敬語だと…？」

彼女は、ぶっきらぼうな性格なのか、先生に対しても敬語を使っているのを見た事が無い。

そのタバサが、召還した相手に対して敬語を使っているのだ。

「トリステイン魔法学院…聞いた事がありませんね。真に申し訳あ

りませんが、この中の責任者さんとお話しさせてもらっても構いませんか？」

あくまでも優雅に気品のある態度から、召還された存在は、人間なのか、妖精なのか、精霊なのか、下級天使なのか、判断出来なかった。

だが、もし他国の貴族以上の存在を召還してしまったとなれば、国際問題にまでなりかねない状況であった。

「私はジャン・コルベール。このトリステイン魔法学院の教師を務めている者です。レディ、えー、失礼ですが、お名前を伺ってよろしいでしょうか？」

コルベールと自己紹介した男性に、召還された存在は体を向ける。

「先生でいらっしゃいますか。私はミカガミツカサ。こちら風に言うと、ツカサ・ミカガミと申します」

その物腰で、コルベールやタバサ、周りの生徒も大きな勘違いをした。

『どこかの王族、又は貴族を召還してしまった』と。

「そ、そうですか、ではレディツカサ、こちらの質問に先に答えて頂けないでしょうか？」

「まぁ、お答え出来る事であれば…ああ、それと、ツカサでも構いませんよ？」

タバサはそのやり取りの横で、冷静になろうと自分に言い聞かせていた。

胸の動悸が治まらない。

ツカサの事を目線から外すのが躊躇われる。

「ではツカサさん、トリスタニアと言う単語に聞き覚えは？」

「ありませんね」

ツカサは考える。ここは異世界なのだろう。と。

「もうひとつ。貴女はどちらのお国の貴族でいらっしゃいますか？」

「…質問を質問で返すご無礼をお許し下さい。ニホンと言う国をご存知ですか？」

最悪だ。

コルベールはツカサが、ハルケギニアの外の国からの貴族だと認識してしまった。

暗転

「あの…ツカサ…」

「何ですかタバサ？」

「ツカサの事をお姉さまと呼んでも良いです…か？」

「私はタバサの使い魔では無かったのですか？」

「二人っきりの時だけでも…」

タバサはツカサに上目使いでそう聞いた。

タバサの方が身長が無いので、自動的にそう言う形になる。

「甘えん坊さんですねタバサは」

そう言ってタバサの頭を撫でるツカサ。

「お…お姉さま…」

そう言ってタバサは、ツカサの腰を甘える様に抱きしめた。

「タバサ」

「はいお姉さま」

「貴女にプレゼントを差し上げるわ」

「何ですか？」

ツカサは奏が付けているのと同じピンクのリボンを出し、タバサに付けてあげた。

「こ・これは…」

「可愛いわよタバサ」

「／／／」

「…と言う夢を見ました」

「不思議な夢ですのよ」

「具体的な名前が出てくる所がまた凄いですね」

学院寮での、そんなひとコマであった。

挿入話3　あり得ない（かも知れない）夢（後書き）

妄想が凄い事になってしまった…―'―●

勢いだけの一発毒電波ネタです。

気が向けば続くかも知れない…（かなり嘘っぽいw）

第五章　創造祭　ｓｃｈｏｏｌ　ｆｅｓｔｉｖａｌ　第一話（前書き）

なんだかんだでＰＶ１１万　ユニーク１万８千。
読んでくださっている方々に感謝です。

五～六章では司のトラウマについては出す予定がありません。
あくまでも『予定』です…

小説内では世間事情の（ｒｙ

第五章　創造祭　ｓｃｈｏｏｌ　ｆｅｓｔｉｖａｌ　第一話

創造祭

聖應女学院で十一月に行われる学院祭。
新入生、二年の各クラス（最上級生クラスの参加は任意）と、各部活動、同好会による模擬店や、展示、活動発表が行われる。
中でも名物と云われているのは演劇部による公演と、生徒会主催で行われる各種イベントである。

聖應演劇部はコンテストでも毎回高い演技力を評価されており、活動成績に対して寛容な聖應に於いては特異な存在で、過去の鬼部長の教えが未だに活きているのだと云われている。
一方の生徒会主催イベントは生徒たちのリクエストによって決められており、ここ数年はエルダーを主人公にした演劇をリクエストされるのが通例となっていて、どちらも高い人気を誇っている。

「……と言うのが１１月にある学院祭ですわ」

「へ～」

ここは１－Ａクラス内。

栞さんが学院祭について説明してくれていた。

何でも、去年や一昨年の聖應女学院の演劇等を、わざわざ中等部の時に見に来ていたらしい。

去年は、第７３代エルダー・シスターであった君枝お姉さまの演劇、『かぐや姫』の主役が大当たりしたらしく、『かぐやの君』と言う二つ名をもらってしまったらしい。

一昨年は、第７２代エルダー・シスターで、半ば伝説的な存在である瑞穂お姉さま…本当は『お姉さま』では無いのだが…

の演劇も中々すごかったらしい。

話によると、貴子お姉さまの扮するヒロインの衣装が劇中に破れてしまったが、瑞穂お姉さまの機転により回避されたらしい。

その機転が…劇中のキスと言う…なんともまぁ…

「聞いてますか司さん？」

「……あ、ごめんなさい。聞いてなかった」

「それでも悩み事とかを解決出来るのが凄いですよね…」

「あれはね…解決してほしいのではないの。話を聞いて欲しい。そして相手の話の内容に対して、『うんそうだね』とかって言う合意を求めてるだけなの」

「それでも満足して帰って行く生徒だらけじゃありませんか」

「ひょっとして栞さんも何か相談があるのですか？奏お姉さまに口ぞえしますよ？」

「や、止めて下さい。ただでさえこのクラスは、エルダーのお姉さ

まや、生徒会長のお姉さまが、しょっちゅう遊びに来ると言うので羨ましがられているのですから…それに…」

「それに？」

「『悩み事等の相談は１－Ａの妖精の君へ』なんてキャッチフレーズが３年生にまで浸透しているのを知ってますか？」

（╭　。д　。）アーアーキコエナイ

私が悪いのか？

「それにもまして、今年の演劇のリクエストは…」

え？何かあるの？

「それってどう言う…」

そこで授業開始のチャイムが鳴ってしまい、話が流れてしまった。

「栞さん」

「あ、はい」

「さっきの『今年の演劇のリクエストは』の続きは何でしょう？」

「噂が錯綜してまして…正確ではありませんよ？」

＊錯綜
物事が複雑に入り組んでいること。入り交じって混乱すること。錯雑。「事件に関するさまざまな情報が―している」

「まあそれでも良いので」

「そうですか？まず第一に、エルダーのお姉さまが演劇部所属なので、生徒会主催のイベントにお姉さまが出るのは難しいのでは無いか。
第二に『妖精の姫』が主人公の演劇を望む声があるらしいとの事。
第三に、お姉さまと司さんが一緒にでる演劇を希望する声が出るのでは無いか」

な……なぜに私が…

「そんな事いわれても…むしろ私的には、このクラスとかで何か出し物でも出した方が楽しめるのでは「それよっ！」どうしたの美紀さん？」

「妖精の君のその一言が欲しかったのよ。実は私も何かしたいとは思ってたのだけれど、中々踏み出せなくって…」

「それで私にその一言を言わせたかったと？」

「まあそうですね。なんせ司さんの鶴の一声で、エルダーのお姉さまや、由香里お姉さまが動いてしまうのですから。妖精の君の影響力は侮れないのですよ？」

おいおいおい…

「それで、どうしましょうか？」

と美紀さんが聞いてくる。

「学院際の出し物ですか？」

栞さんがそれに返す。

「ええそうです。どうせなら１－Ｂも巻き込んではどうでしょうか？」

「いやそこまで話を大きくしなくても…」

「え～。でも隣のクラスの麻衣香さんとか寂しがっていましたよ？」

そんな娘もいたっけ…

＊作者注

第三章第三話の設定をご確認下さい。

１－Ｂに朝比奈　麻衣香がいるなんて設定は無いですがね…

…カミソリを投げないで…

仕方なく、私は１－Ｂのクラスに行く事となった。

「失礼します」

「あ、妖精の君！！」

受付の子が声を荒げた為、あっと言う間に私の周りは人で埋め尽くされた。

「妖精の君、今日はどうなさったのですか？」

麻衣香さんが聞いてきた。

「じつは言い出しが私になったのですが、来月の学院祭について提案が」

「まあ、なんでしょう？」

「１－Ａと１－Ｂで合同で何か出し物はどうかなと思いまして」

「まぁ、すばらしい考えですわ！！」

「そうですね。先生の許可をもらって出し物の企画を話し会いましょう」

あれよあれよと言う間に先生の許可をもらい、話し合いが始まった。

第五章　創造祭　ｓｃｈｏｏｌ　ｆｅｓｔｉｖａｌ　第一話（後書き）

余計な事ですが…
おとボク２ＰＳＰ盤が出るとの事ですが、私はＰＳＰを持ってない為プレイ出来ません。
有り得ないとは思いますが、当小説内と偶然に内容が重なったとしても、無関係です。

次回は４／１１予定です。

第五章第二話（前書き）

小説内では（ｒｙ

第五章第二話

話はもつれにもつれた。

いくら去年の文化祭を見ている人がいると言っても、所詮は氷山の一角。

全部の出し物を見られる訳でも無い。

ましてや見た内容のメインはあくまでも演劇。

それ以外の全部を見るなんて時間的に不可能である。

よって、2～3箇所の出し物を見た程度の意見にしかならず、参考意見に留まってしまう。

「ここは定番の喫茶店とかは如何でしょうか？」

「定番過ぎて印象に残らないのでは無いのでしょうか…？」

「アルコール系は当然駄目ですよね…」

「パンなんてどうなのでしょうか？」

などなどなど。

一つ意見が出ても、難色意見が出たり。それをひっくり返す意見が出ても、校則と言う壁に遮られたり。

司は意見を出さなかった。

いや、出すとなし崩し的にそれに決まってしまうのが見え見えだったので、傍観を決めていた。

三日程は論議があったが、手詰まり状態であった。

そこで出た一つの提案。

「エルダーのお姉さまに相談しては如何でしょうか？」

と言う事になってしまい、しぶしぶ司は３－Ｄに行く事となってしまった。

「失礼します」

司が３－Ｄの扉を開ける。

「１－Ａの「あっ！！妖精の君！？白菊の君と琥珀の君、どちらに御用ですか？」」

もはや司は３－Ｄの顔なじみ状態であった。

なんせ司が相談を受けると、奏や由香里に丸投げする為に３－Ｄへ行くので、顔パス状態と化していた。

「えと、エルダーのお姉さまをお願い出来ますでしょうか」

司がそう言うと、受付の生徒は奏の所へ行き、「妖精の君が来てますよ」の一言で、司の待っている扉に奏や由香里両方が行き、その周りに人だかりが出来る、と言う、もはや恒例儀式と化していた。

「どうしましたか司ちゃん？」

奏お姉さまが嬉々として聞いてきた。

些細な事でも頼ってくれるのが、よほど嬉しい様だ。

「１－Ａと１－Ｂが合同で出し物を出す企画があるのですが…」

「そうなのですか？それは楽しみなのですよ」

「楽しみにして頂く以前の問題が今起こってて…」

「どうかしましたか？」

隣にいた由香里お姉さまが怪訝そうな表情で聞いてきた。

「もめにもめていて、ここは奏お姉さまに相談しては？と言う流れになってしまい…エルダーのお姉さまなら、何かしらの落とし所を見つけてくれるのでは？と言う状況になってしましました」

「なるほどなのですよ」

「奏お姉さまの方も大変なのに、こう言う話を出すのも如何かなと

は思うのですが」

「え？私ですか？何故でしょう？」

「は？」

栞さんの話だと、エルダーを主人公にした演劇をリクエストされるのが通例となっていて、今年も恐らく例外では無いはず。

「あれ？エルダーを主人公にした演劇の話は、どうなっているのですか？由香里お姉さま」

「あ～それですか…元々奏さんは演劇部の所属で、今年も部の方で出す物はあるのですが、
さすがに生徒会の方と掛け持ちは無理と打診を受けいて、
他の事で奏さんは出てもらうと言う方向性で手を打っている状態ですよ」

「いやそれでも二つやることがあるのですよね？…そこに余計な事を入れるのも…」

「そんな一ヶ月も掛かる様なお話でも無いでしょう？その位は大丈夫なのですよ」

「そうですか？無理はなさらないで下さい」

「大丈夫ですよ。今から行きましょうか？」

「え？良いのですか？」

「うちのクラスはエルダーを排出しているので、伝統的に生徒会イベントのお手伝いですから、その一環だと思えば問題無いですよ」

とは３－Ｄのお姉さま。

奏お姉さまと、なぜか由香里お姉さままで付いてきて、会議の行っている１－Ｂまで付いた。

「あっエルダーのお姉さま!!それに琥珀の君まで!!」

キャーと言う声がクラス内を埋め尽くし、勧められるままに空いた椅子に奏お姉さまと由香里お姉さまが座った。

「わざわざありがとうございますお姉さま」

「良いのですよ。それでどこまでお話は纏まっているのですか?」

奏お姉さまが聞くと、誰も何も答えなかった。

しかたなく私が代表して答える事にした。

「実は、何も決まっていないのです。方向性もまだです」

「それは困りました…何かしらの方向性でもあれば、アドバイスは出来ると思うのですが…どうしましょう由香里さん」

「ん～。生徒会の立場的には、アルコール類はご法度です。あとは良俗違反も駄目です。例えば、派手な衣装ですね」

「まあその辺は常識の範囲だとは思います。お茶でも出せれば一息付けて何かしらの建設的な意見も「それですっ！！」ぇ？」

奏お姉さまが話に割り込んできた。

やばい…地雷を踏んだかも。

「司ちゃんは寮で色々な紅茶を出してくれているじゃないですか…」

「あ～その手がありますね」

奏お姉さまの意見に由香里お姉さまが同意してきた。

核地雷を踏んだ気がしてきた。

「寮で司ちゃんが、四季折々の紅茶を出すのは、もはや寮の恒例となっています。司ちゃんお手製の紅茶喫茶で良いのでは？」

と奏お姉さま。

うわ～勘弁して…

「エルダーのお姉さまや由香里お姉さま、それに騎士の君にまで出してる紅茶…物凄く気になります」

と麻衣香が言ったかと思うと、あちらこちらから、エルダーの味わってる紅茶を飲んで見たいと言う声が上がってしまった。

翌日からは、『司の紅茶教室』が出来上がってしまった。

とほほ…

第五章第二話（後書き）

次回は４／１８予定です

第五章第三話（前書き）

世間事情の空気を呼んでいないのは何時もの事ですｗ

第五章第三話

おいしい紅茶を入れるためには、五つのポイントがあり、それはゴールデンルールと呼ばれています。
ゴールデンルールは茶葉がもともと持っている風味や香りなどを充分に引き出すために生まれた基本的なルールです。
この基本をマスターすればおいしい紅茶を楽しむことができるでしょう。

1、良質の茶葉を使う
この「良質の茶葉を使う」ということは、値段が高い茶葉を使うことを意味しているのではありません。
メーカー品の紅茶であれば品質の面で、まず問題は無いでしょう。
茶葉を購入する際に気をつけるべきことは、「賞味期限」や「製造年月日」を確認することです。

2、ティーポットを温める
茶葉を入れる前に、ティーポットに熱湯を注いであたためておくと、紅茶の香りが引き立ちます。
また、丸型のティーポットが一番、ジャンピングが起こりやすいといわれています。

＊作者注
ジャンピングについて語ると凄い事になるので、『ジャンピング』でググってくれ。

3、茶葉の分量を計る
茶葉の分量が多すぎると、濃すぎる紅茶になります。
反対に茶葉が少ないと味が薄くなり、どちらにしても、紅茶のおい

しさが半減するでしょう。
分量の基本として、ティーカップ一杯につき、茶葉は約2グラム、これが目安になります。

4、新鮮な沸騰している湯を使う
水道からくんだばかりの新鮮な水を使いましょう。
湯はしっかりと沸騰させます。
ミネラルウォーターを使う場合には、軟水を選んで、軽く振って酸素を含ませてから使うといいでしょう。

5、茶葉を蒸らす
茶葉の蒸らし時間の目安としては、大きい茶葉なら3～5分、細かい茶葉なら2～3分になります。
砂時計を使うと正確に時間を計ることができます。
また、茶葉を蒸らしている間に、ティーポットの温度を下げないようにするためには、ティーマットを敷いて、ティーコジーをかぶせておくと、保温効果があります。

「…とまあ、知ってる方は多いと思いますが、これがゴールデンルールです」

「次に使う水ですが、紅茶の本場である英国の水は硬水です。
硬水とは、マグネシウムやカルシウムが多く含まれている水のことをいいます。
硬水で紅茶を入れると、濁りやすく、香味も落ちるといわれています。
水中に含まれているカルシウムなどのせいで茶葉からタンニンが溶け出しにくくなるからです」

説明を真剣にメモしている生徒達の目の前で、私は教師の真似事をさせられていた。

「紅茶に入れる砂糖としては、グラニュー糖や角砂糖がオススメです。
その理由として、クセがなく溶けやすい種類の砂糖が紅茶に適しているからです」

エルダーのお姉さまや由香里お姉さま達に出して、それなにり好評だった紅茶をクラスの出し物にするのだ。

中途半端な物は出せない。と哀願され、私は皆の前で説明会を開く事となっていた。
次に私は、今までお姉さま達にだして来た紅茶の種類を説明した。

「最初に出したのが梅の紅茶です」

「梅ですか？初めて聞きます…」

そんなになじみは無いのかなこっちの世界では…？

＊こっちとかそっち以前に、知らない人は永遠に馴染みの無い世界ですよ。

謎の電波が届いたがまあ無視しよう。

「つぎはアールグレイでしたね。これは驚く様な事では無いと思います。その次がキャンディ紅茶だった筈です」

「キャンディ紅茶ですか…意表を付く出し物ですね」

「そうですか？次が夏向きの冷たいルイボスティーでした。次は確かアイスミルクティーでした」

「被って出してないのですね…流石です」

「ネタを探すのも中々厳しいですよ？次はアイスのカサブランカでしたね。流石にこの辺でネタが切れたので、ヴィクトリアサンドイッチケーキを出しました」

「女王御用達のあのケーキですか…素敵です司さん」

「素敵かどうかは置いて置きますが、ここまでが出した紅茶とケーキですね」

「じゃあ明日は道具をお母様にお願いするので、実物を再現して頂けませんか？」

ちょ。そうくるか？？

第五章第三話（後書き）

話が進まん…
ついでに短い。

次は４／２５の予定です。

第五章第四話（前書き）

小説内では（ｒｙ

もう良いってｗ

実在している紅茶とかの名前を結構出してますが、著作権的に大丈夫なんだろか…

第五章第四話

ウエルカムティーはローズジャムのロシアンティー。
デザートはアールグレイ風かぼちゃのプリンと柚子のロールケーキ。

道具を両親にお願いしてだしてもらったという１－Ｂクラスの娘(こ)の是非との依頼を断りきれず、
私は合同主催するクラス全員に紅茶とケーキ、そしてプリンを出す事にした。

当然必要な材料は、前もって教えておいた。

その子は、両親に土下座する勢いで頼み込んだそうだ。

何でも、

「（エルダーの）お姉さま御用達の紅茶やケーキを作って下さる方の為に必要なのですっ！！是非ともお願いします！！」

「…そこまで言うのなら、私達にもそれを味見させて下さい」

とＯＧである母親に言われ、１個でウン万円もするティーカップだの、ティーソーサーだのを惜しげもなく準備してくれたそうである。

ウン万円とか勘弁して下さい。

割ったらどうするんですか…

等と断ったが、ＯＧの母親やその子から、

「エルダー御用達なのです。それに似合うカップを使うのは当たり前です」

と論破され、噂を聞いて2年生や3年生の一部まで来る始末。

泣く泣く私は、冒頭の紅茶とケーキ、そしてプリンを出す事となった。

「素晴らしい味です…これが御用達の味なのですね…」

「この感動を本番で又味わえるのですね…一生の記念になります」

精神があっち行ってますよ?

早く戻っておいで?

「あの司さん」

「はい?」

「この紅茶やケーキは、お姉さまは味わっておいでですか?」

「あ～」

実はまだだったりする。

11月に合わせた紅茶とケーキにしたつもりなので、時期的には若干早い気がするから。

「奏お姉さま達にはまだですね…」

「「「「ええええぇぇぇぇ!?」」」」

そんなに驚く事?

「そ・そそそ、そんな…おおおお、お姉さまを差し置いてなんて、な・なんて恐れ多いことを…」

一部の生徒の表情が顔を青ざめて言った。

いや、ちょっと落ち着こうよ。

「奏お姉さま達は、当日までのお楽しみだと言って黙認してくれていますよ?」

「えっ!?そ、それなら良いのですか…」

「まあそれに」

「それに?」

「これはあくまでもサンプルです。他にも紅茶の候補はいくつか考えています」

「他にもあるのですかっ!?」

目を輝かせて一人の生徒が聞いてきた。

「まあ…候補ですが…」

余りの勢いに、引きながら私はそう答えた。

「キャラメル&ラムとか、苺ミルフィーユ・ロイヤルミルクティーとか…
イングリッシュミルクティーだとか…時期外れですがキャンドル紅茶とか…」

「「「「「全部お願いします!!」」」」」

センセー、材料ありません…

てか、全部作って余ったらど〜するの?

何人来るか不明な状況で、何種類も作るのはまずいんじゃ…

そんな心配をよそに、紅茶を作る係り、デザートを作る係り、接客係り等が決められて行った。

それは良いのですが、何故に私はチーフマネージャーなのでせぅ…

「失礼します「あっエルダーのお姉さま!?」」

奏お姉さまがクラスに来た瞬間、一気に取り込まれた。

さすがと言うかなんと言うか…

「司ちゃん。ちょっとお話良いですか？」

なーんとなく嫌な予感…

ここで断ってもクラス全員から送り出されるのは必至。

ドナドナが流れそうな気分だ。

創造祭の準備が何処でも凄く、学院中が授業なにそれ状態となっている。

教師も行き過ぎた内容には指導や注意、警告はするが、授業にならないのは伝統で知っているので生徒の自主性に任せている。

なので、本来の授業時間であっても、食堂で軽食を摘みながらの打ち合わせなんてのもあったりする。

食堂まで付いていくと、そこには３－Ｄのクラスの方々と生徒会の方々が待っていた。

席に着き、奏お姉さまの話を聞くと以下の内容であった。

演劇以外で奏お姉さまが生徒会のイベントに出てもらうと言う方向性で手を打っている状態なのは、以前話した通り。

そこで問題になったのが、どんなイベントにするか。と言う事であった。

「お話は判るのですが、何故に私は呼ばれたのでしょうか？」

「え～とですね、司ちゃんを生徒会イベントか演劇に出席させて欲しいと言う要望が凄くて…」

「……実家に帰らせて頂きます」

「待って待って待って」

席を立った私を、予想していたかの様に、由香里お姉さまや奏お姉さまが私の腰に抱きつき食い止められた。

ここで暴れる事も出来ないので、しぶしぶ席に付き直す。

「演劇はやってる余裕無いのですが…」

「奏さんや私が提案した、『エルダー御用達お茶』ですよね？毎日味見だけでも、と１－Ｂに生徒が来ているのは知ってます。生徒会にも情報は来ていて、当日は整理券でも配ろうかと真剣に考えています。

ですので、演劇にと言う話は生徒会権限で黙殺しました。そこまでは良かったのですが…」

「じゃあ、生徒会イベントに、って流れですか？」

「うん、まあそうなりました」

第五章第四話（後書き）

司「誰だこんな境遇にしたのは…」
作『半分以上自業自得＋作者の都合だｍ９（・∀・）ビシッ！！』
司「いつか殴ってやる」
作『アキラメロ』
司「せめて方向性を変えてくれ…」
作『無理ｗあんまり我侭言うと設定に無いあられもない話をだな、おまっ、何をする！？くぁｚｗｓぇｄｃｒｆｖｔｇｂｙｈぬｊみｋ、おｌ。ｐ；・』

次回は４／２９予定です。

第五章第五話（前書き）

世間事情の空気を呼んでいないのは（以下略
しつこすぎ？ｗ

第五章第五話

生徒会イベントは、本来は生徒たちのリクエストによって決められており、
ここ数年はエルダーを主人公にした演劇をリクエストされるのが通例となっているのは既に説明してる。

今回はエルダーである奏お姉さまが演劇部所属であり、その主役であり、その演劇の準備・練習がある為、
生徒会主催のイベントに演劇を出すのはほぼ不可能。

よって、べつの形での生徒会主催のイベントに奏お姉さまを出すと言う形で、生徒達に納得してもらう流れだ。

そこまで良いでしょう。

な～ぜそこに私の名前が出る…

「ですから、演劇が駄目ならせめてエルダーと一緒に生徒会主催イベントに、と言う生徒達の要望が凄まじく…」

由香里お姉さま、そんなすがる様な目線で見られても困るのですが…

「と、とにかくその生徒会主催のイベントは、何をするのですか？」

とりあえず、これを聞かないと判断できません。

「それがですね…」

「ま・まさか決まってないとか言いますか？」

「ええそうなんです…」

せーとかいちょおおおぉぉぉぉぉ

そこから何とかしろと言いますか？

「何の案も無いとか言いませんよね？」

「「……」」

何故黙る？

「…とりあえず、適当に案だしますね」

投げやりに言うと、なぜか奏お姉さま達の目が輝きだした。

ま・さ・か

狙ってた？

「『セイレーンの君』との合同イベント、なんてのはどうなのでしょう？」

「ほ・放送部とですか？」

「駄目ですか？…じゃあ他に「まって司ちゃん」はい？」

由香里お姉さまが話しに割ってきた。

「その放送部との合同イベントって、具体的に何ですか？」

「まあ例えばですが、『セイレーンの君』や『白菊の君』、『琥珀の君』でのミニドラマを放送するとか…？」

「その案もらって良いですか？」

３－Ｂのお姉さまが挙手をしてそう言った。

「私放送部していますが、それなら大した打ち合わせも無く、アドリブで済ませれば良いので問題無いと思います」

「そんなものですか？じゃあ後は『セイレーンの君』に生徒会が打診して了承してもらえば済みますね。
由香里お姉さまにそれはお願いします」

「いやここは司ちゃんにお願い出来れば…」

そう言う罠だったのかあぁぁ

断り切れなかった為、『セイレーンの君』こと、響姫お姉さまのクラスにたどり着いた。

＊作者注
魚住響姫（うおずみひびき）がどのクラスに在籍しているかの設定がなかったので、どのクラスと言う名言は避けます。

「失礼します。１－Ａの神加賀美と申します。響姫お姉さまにお取次ぎをお願いします」

受付のお姉さまが取り次ぐ前に、お姉さま達に取り囲まれてしまった。

「妖精の君からのお呼びなんて初めてですね。エルダー選以来でしょうか？」

「そうですね。ご無沙汰をしております。申し訳ありませんが、お時間を頂いてよろしいでしょうか？」

相変わらず響姫お姉さまの声は、透き通った優しい声であった。

「構いませんよ？どの様な事でしょうか？」

「生徒会主催イベントの事なのですが…」

私は今までの経緯をなるべく簡潔に説明した。

「…と言う事で、放送部の『セイレーンの君』や『白菊の君』、『琥珀の君』での放送イベントを行っては？と言う事になりました」

「エルダーのお姉さまや『琥珀の君』との合同イベントですか…とても素敵なアイデアですね」

「ええまぁ。それで承諾をするにせよしないにせよ、食堂で奏お姉さまや由香里お姉さま達が待っているので、ご足労をお願い出来ませんか？」

「判りました」

「『妖精の君』も色々大変ですね」

移動中に響姫お姉さまがそんな事を言ってきた。

「あ～。色々変な噂とか話題とか撒き散らしてしまった張本人ですからねぇ…響姫お姉さまの方にも変な話は行っているのでしょうね」

「いえ、そうではなくて、こんな言い方は失礼でしょうけど、何を必死に隠しているのですか？」

え？

私はそれを聞いて足が止まってしまった。

「な…なぜ…？」

「あぁ、ごめんなさいね。私小さい頃死ぬ一歩手前まで行った事があって、なんて言うか、隠し事のオーラと言いますか、そ言う物が見えてしますのです」

「そうなんですか…詳しく聞きたいとかおっしゃいますか？」

「いえ…私は司さんにこの質問をした自分に後悔しています…今の貴女は消えそうな位存在が薄く見えます。ここで踏み込んだら、私はエルダーのお姉さまに嫌われてしまいそうです」

「そうですか……それは助かります」

そのまま会話が途切れ、食堂に付いた。

食堂に付くと、由香里お姉さま、そして奏お姉さまと目が合った。

「「！！？？」」

途端に二人は私に猛ダッシュして来て、必死な形相で抱きついてきた。

え？

第五章第五話（後書き）

毎度の事とは言え、短けぇ…

４／２９～５／７の期間限定で、２日に１話パターンにします。

って事で、次は５／１です。

第五章第六話

「司ちゃん、何かありましたね？苛められたのですか！？」

「どこにも行っては駄目ですよっ！！ちゃんと私達の所にいてくださいですのよ」

なにこのカオス？

私は視線を響姫お姉さまに向ける。

響姫お姉さまは何故か苦笑していた。

「どうしたのですか？」

仕方なく私は由香里お姉さま達に聞いてみた。

「だ、だって今、司ちゃんが…」

私が？

「そこにいるのに、まるで陽炎の様に存在感が薄かったのですよ」

はい？

「私は今ここにいるではないですか…そう思うのですが、響姫お姉さま的には私はどう見えますか？」

「え？そこで私に振りますか？まぁ、ちゃんと司さんはお姉さまや由香里さんに抱きしめられている。としか言えませんよ？」

「と言いますか、誰か何とかして…」

「愛されてますね司さんは」

由香里お姉さまと奏お姉さまを何とか落ち着かせ、響姫お姉さまは放送部としてエルダー参加のイベントを快く受諾してくれた。

「さて、どう言う内容にしましょうか？」

と響姫お姉さまは奏お姉さま達に聞いてきた。

「私的には、ＣＤとかでよくある感じのミニドラマを、３０分程度やれば良いのかな、と思いますよ？奏さんは？」

「由香里さん。それは方向性の話で、内容のお話では無いのでは…」

「どう言う方向性を、どう言った内容で、どの位の時間で行うか。ですね、それは演劇であれ放送であれ同じだと思います」

響姫お姉さまや、由香里お姉さま、奏お姉さまがメインでの話し合いは続いていた。

私は参加しなかった。

いや、出来なかったが正しい。

話題に付いて行けないから仕方ない。

突然三人が私を見た。

「？何ですか？」

「いえその…なんと言いますか…司さんが寂しそうに見えたのでつい…」

そんな顔してたのかな…

「主役はお姉さま達なのですから、私は聞き役で構いませんよ？」

「何を言ってるのですか？司ちゃんもイベントに参加するのですから、ちゃんと意見を言わないとですよ」

な　ん　で　す　と　？

「……すいません。妙な幻聴が聞こえたのですが……私が参加するとか何とか…」

「言いましたが何か？」

。д。）　私は多分こんな顔をしているのだろう。

「ぷっ。何ですかその鳩が豆鉄砲くらいましたって言う表情は…」

「初耳です（嘘だけど）」

「心の声が聞こえてますよ?ちゃんと言いました」

「聞いてません。いや聞こえていません。むしろそういう事にして下さい」

「却下です」

食堂中の聞いていた皆がが笑い出した。

「こう言うのって良いですね」

響姫お姉さまが誰とも無しにそう呟いた。

確かに良い感じはします。

「ありがとう御座いましたお姉さま方」

話し合いが終わり、帰り道に私はお姉さま達にそう切り出した。

「え?私達何かお礼させる事しましたか?」

奏お姉さまが響姫お姉さまにそう聞いた。

「どうなのでしょうか?私達にとっては些細な事なのでしょうけど、司さんにとっては、お礼をしたい出来事があった。そう言う事では無いでしょうか」

「良くわかりません」

「気にしないで下さい。とにかくありがとう御座いました」

私は、心からのお礼と笑顔を向けていると思う。

お姉さま達。心休まる空間をくれて感謝しています。

「「「／／／」」」

あれ?顔が赤いですが大丈夫ですか?

ーーー　奏　ｓｉｄｅ　ーーー

「気にしないで下さい。とにかくありがとう御座いました」

そう言って私達に向けてきた笑顔は…とても比喩出来ない程綺麗でした。

あああ、顔が赤いのが自覚出来ますですよ。

その笑顔があれば私は頑張れます。

もっと笑って下さい。

貴女は私達のかけがえの無い宝物です。

ーーー　奏　ｓｉｄｅｅｎｄ　ーーー

ーーー　由香里　ｓｉｄｅ　ーーー

「気にしないで下さい。とにかくありがとう御座いました」

うわあああああ。綺麗過ぎる笑顔です。

天使の笑顔って、この事を言うのですね…

奏さんや響姫さんの顔が真っ赤です。

私も赤いのでしょうね。

惚れ直してしまいました。

――― 由香里 ｓｉｄｅｅｎｄ ―――

――― 響姫 ｓｉｄｅ ―――

「気にしないで下さい。とにかくありがとう御座いました」

なんと言う綺麗な笑顔なのでしょうか…

さすが『妖精の君』とまで言われている子です。

こんな笑顔を向けられたら、その気になってしまうではありませんか。

いえ違いますね。私は今、一目ぼれを体験してしまいました。

――― 響姫 ｓｉｄｅｅｎｄ ―――

第五章第六話（後書き）

次回は5／3です。

第五章第七話

文化祭の準備も徐々に進んできた。

私が懸念している状態としては、

？　奏お姉さまの演劇はどうなっているのか。

？　生徒会主催の私や奏お姉さま、由香里お姉さま、そして響姫お姉さま合同参加のイベントはどうなっているか。

？　１－Ａ・１－Ｂ合同主催のお茶室、通称『エルダー御用達のお茶室』の事。

この３点である。

？に関しては、茶器（ティーカップやソーサー）を貸し出して下さってる御両親がサンプルを味わった所、

あっさり気に入られ、噂を聞いた他の御両親達も是非味見を、と頼まれ、サンプルを出した所好評で、

「うちの道具も是非使って欲しい」と、１個ウン万円の茶器を出す始末。

これを見る限り、悪い印象は出てない模様である。

「失礼します」

１－Ｂに聞きなれた声が入ってきた。

初音お姉さまと、薫子お姉さま、更には準備中は来ないと言っていた筈の、奏お姉さまと由香里お姉さまだった。

更には響姫お姉さままでそこにはいた。

「エルダーのお姉さまっ!?そ、それに『騎士の君』や『琥珀の君』、更には『セイレーンの君』までっ!?」

１－Ｂの受付の子が驚く様に言うと、一斉にお姉さま達は囲まれた。

「ごめんなさいね皆さん、噂が凄くなっているのでどうしても味見をしたくなりましたですのよ。
それと司ちゃんには生徒会の方からもお話がありますので」

と言う事で、急遽エルダー達と一緒のお茶会と言う、突発イベントが発生してしまった。

「所で生徒会の方からのお話と言うのは何だったのでしょうか?」

「ああそれですか。奏さんと私達生徒会、そして響姫さん、更には司ちゃんが出る生徒会イベントですが、
大体の素案が出来たので、味見のついでに持ってきたのよ」

「私と薫子ちゃんはそれの便乗ですね」

そう言って由香里お姉さまは、私に袋に入っている１０ページ程の冊子らしき物を渡して来た。

「ここでは開けないで下さいね。生徒達には内容は極秘扱いですの

で」

「そんな物をここで渡さないで下さい…」

袋には大きく『極秘書類。関係者以外の閲覧を禁止』と書かれていた。

まあ見るなと言われると見たがるのが心情って奴なのですが、『見てはいけません』オーラが凄いので、おとなしくカバンにしまって置く事にした。

お茶会はエルダーのお姉さまや有名人勢ぞろいが来たため、合同クラスは蜂の巣を突付いた状態から始まり、終始浮き足立っていた生徒もいたが、とりあえずは何とか成功した。

「美味しいお茶でした。本番でもまた来ますね」

「はっ、はい!!是非来てください」

「お、驚きました…まさかエルダーのお姉さまや『騎士の君』や『琥珀の君』、更には『セイレーンの君』まで来るなんて…」

「そ、そうですね、ここまで注目されると、本番が緊張してしまいそうですわ」

「今から緊張してたら、当日に倒れますよ?」

「わ、判っています」

「所で演劇部の方では、どの様な演劇をするのかは、司さんの方に情報は来てますか？」

「若干聞いていますが、概要だけだし、一応秘密なので言えませんね」

「え～。それでも良いですから、お願いします」

私は先日、奏お姉さまの部屋に泊まりに行った時の事を話す事にした。

「司ちゃんがお部屋に来てくれるのも、もはや普通になってしまいましたね」

「そうしないとお姉さま達が不機嫌になるからじゃないですか…」

一度文化祭の準備で徹夜になった時、本来一緒に寝る筈だった初音お姉さまが、
翌日に物凄く不機嫌オーラを出しまくり、宥めるのに相当苦労した。

結局スケジュールを一日ずらすと言う事で、事は収まった。

「あれは私ではありませんよ？」

「体の良い抱き枕にされてる気がして仕方ありません。まあ良いんですけどね…」

「でも司ちゃんは、未だに悪夢を見るのでしょ？由香里さんから聞

いてますよ？」

「でも、回数は減っています」

「まあそれはゆっくりやりましょう」

「はい。所で話は変わるのですが」

「何ですか？」

「演劇は何をするのですか？」

「う～ん。決まってはいて、既に練習中ですが、内容は秘密にしていますですよ」

「なるほど…」

そこで会話が一旦止まった。

「聞きたいですか？」

奏お姉さまがそんな事を聞いてきた。

「いや、楽しみが減ります。まあ、独り言とか寝言で言ったとしても、私は運悪く聞いちゃったで済みますけどね」

「なるほどなのですよ。まあ寝ましょうか」

そして寝たと思ったら、奏お姉さまが独り言が言ってきた。

「演劇は、再婚した二人の間には連れ子がお互いにいて、妻側には双子の姉、夫側には男の子。
そして、双子の姉妹は男の子を好きになってしまい、双子のお互いが男の子を好きになり、男の子はどうするのか、
そんな内容です」

私は、それを聞いていない振りをして、そのまま寝てしまった。

「とまあ、こんな内容かも知れません」

「不思議なラブストーリーですね」

「そうかも知れませんね」

寮に戻り、生徒会イベントの事がふと頭をよぎり、カバンに入っていた袋を出し、中を見る事にした。

袋を開けて出した冊子のタイトルは、

『乙女（おとめ）はお姉（ボク）さまに恋してる』であった。

第五章第七話（後書き）

次回は5／5です。

第五章第八話（前書き）

トラウマはやはり出てしまいました。
祝ＰＶ１５０，０００アクセス超え
ユニークアクセス２３，０００人超え

だから？それだけだよコンチクセゥ

第五章第八話

『乙女(おとめ)はお姉(ボク)さまに恋してる』概要。

一一　主人公神加賀美瑞樹は、外交官である父親の納得できない行動等で人間不信なり登校拒否になってしまった。

最初に名前が出てきて驚愕した。

なんで私の苗字？瑞樹ってまさか、宮小路瑞穂から取ってるの？

ま～さか、私が主人公？

とりあえず続きを読んでみる事にした。

一一　それを見かねた母、妙子の強制により、妙子の母校である『聖應女学院』に『女装』して転校する事になった。

（　。д。）

（つд⊂）ゴシゴシ

（；。д。）

じょ、女装？！

なぜそのネタ？

――　無理矢理女装させられ男であることを隠して転入した女学院で、瑞樹はその美しい容姿と嫋やかな振る舞い、優秀な成績から次第に生徒達の注目を集めていく。やがて、男でありながら全校生徒を代表する『お姉さま』である「エルダー・シスター」として崇められることになってしまう。

ちょ、なにこのつっこみ所満載のシナリオは？

宮小路瑞穂の正体を知っていても不思議では無いこのシナリオ。

作成者は誰？

裏表紙等を見たが、作成者は書かれていなかった。

と、とりあえず続きを…

――　主人公設定

彼は右目を事故で失っており、義眼をはめている。

『事故』

この文字を見て、私は冊子を落としてしまった。

――――　薫子　ｓｉｄｅ　――――

あたしはちょっと浮かれていた。

今日は司があたしの部屋に泊まりに来る日だったからである。

早めに寮に帰り、部屋の片付けをしようと自分の部屋へ行こうと思った時、何気なく司の部屋を見た。

最初それは気が付かなかった。

扉が中途半端に開いていた。

珍しい事もあると思って、ノックをせずに中を見ると、

虚空を見たまま立ち尽くす司があった。

「え？」

あたしがそう声を発したのが切欠だったかは定かではなかったが、司はその瞬間に崩れ去る様に倒れた。

どどど、どうれば…

あたしはパニックに陥ってしまった。

とりあえず司に毛布を掛け、急いでお姉さま達に知らせようと、気ばかり焦った。

－－－　薫子　ｓｉｄｅｅｎｄ　－－－

－－－　奏・由香里・初音・香織理　ｓｉｄｅ　－－－

「演劇の練習はどうなのですか？」

由香里が奏に聞いてきた。

「順調ですよ。後は生徒会イベントの方の打ち合わせを司ちゃんとしないとですよ」

「まあ私も出る事になっちゃいましたしねぇ…」

「仕方ありませんよ由香里お姉さま。生徒からの要望ですし」

「降誕祭のダンスパーティーでも同じパターンになる気がするのですが…」

「奏さん、それは聞きたくない台詞ですよ」

「初音。貴女は来年同じ目に会うのを判っているの？」

「う」

香織理の突っ込みに答えられない初音であった。

寮まで付くと、血相を変えた薫子が玄関から出てきた。

「どうしたのですか？薫子ちゃん」

「つ、司が倒れました」

「「「「え！？」」」」

ーーー　ｓｉｄｅｅｎｄ　ーーー

「な、何があったのですか？」

奏が薫子に聞いてきた。

司は全員の手を借りてベッドに寝かされていた。

「たまたま司の部屋のドアが開いてたので、中を除いたら…」

「倒れてた。と？」

「あら？」

初音が落ちていた冊子に気が付いた。

「これって生徒会主催のイベントの冊子ですよね？」

そう言って由香里に手渡した。

「ええそうね」

そう言って中を確認した。

「あ」

そして何かに気が付いた。

「しまった…迂闊でした…」

「え？どうしたのですか？」

薫子が由香里に聞いてきた。

「香織理ちゃんも込みで、寮の皆は司ちゃんが包帯を巻いているのは知ってますよね？その理由は置くとして」

全員が頷く。

「概要を見て気が付くべきでした…こんなんじゃ姉失格です」

「言ってる意味が判りませんわ」

と香織理。

「例えばですが、司ちゃんの包帯の原因が。主人公設定の『事故』だったとしたら？」

「あ！まさかフラッシュバック？」

＊フラッシュバック

強いトラウマ体験（心的外傷）を受けた場合に、後になってその記憶が、突然かつ非常に鮮明に思い出されたり、同様に夢に見たりする現象。心的外傷後ストレス障害（ＰＴＳＤ）や急性ストレス障害に顕著である。

「有り得ますね…どうしましょう…」

「はっきり原因が掴めない上に、私達は精神科医ではありません。保険医の先生にご足労をお願いするしかありませんね」

保険医の先生が来て、寮の姉達（主に薫子）が状況を伝えた。

「う～ん。原因が判らないと、はっきりこうだとは言えないわね」

「そう…ですか…」

「所でこの子。薬はちゃんと飲んでるのかしら…？」

「司ちゃんは一体どんな疾病を持っているのですか？」

由香里がそう聞いてきた。

「前にも言ったと思うけど、医師には守秘義務があるのよ…言えるのは…」

「何ですか？」

「とある事件に巻き込まれて、心と体に深い傷を負ってしまった。これが限界よ？この子はＰＴＳＤを持っているわ」

第五章第八話（後書き）

次回は5／7です。

第五章第九話

ＰＴＳＤ

《ｐｏｓｔｔｒａｕｍａｔｉｃ　ｓｔｒｅｓｓ　ｄｉｓｏｒｄｅｒ》心的外傷後ストレス障害。
忍耐の限界を超えたストレス、たとえば、戦争・災害（地震など）・テロ・事故・犯罪事件などを体験した後に生じる心身の障害のこと。
不安・うつ状態・パニック・フラッシュバックなどが代表的な症状。
日本では、１９９５年の阪神大震災後に問題になった。

「司ちゃんが右腿と左上腕に包帯を巻いているのは本人から聞いています。ですがその理由まではまで至っていません」

保険医の先生に由香里がそう説明した。

「そこまでなのね…私が言っても同情を煽る話にしかならないのよ。本人がその恐怖を乗り越えないと意味は無いの。だから、本人の口から言ってくれるまで待つしかないわ」

「そうですか…それっていつなんでしょう…」

「判らないわ。これは本人の意思の強さや恐怖に打ち勝とうとする勇気。周りの支え。そう言った環境でも時間が掛かるわ。それに、状況次第では一瞬で元に戻ってしまう程のメンタルな部類なのよ。
無理に聞こうとすれば、心を閉ざしてしまう場合だって有り得るわ。映画とかテレビドラマで見たこと無い？目の前で御両親を殺害され、

自閉症になってしまった子供とか…
あれは判りやすくしているけど、現実はもっと残酷なのよ。ほんの些細な言葉や文字だけでも、
その場の体験を呼び起こしてパニックになったり、この子の様に全ての情報を受け入れない為に気絶したり…」

保険医の先生の言葉に、過去に司が受けた何かは、想像以上の物を全員が感じ取っていた。

「とにかく今貴女達にしか出来ない事をやる事ね」

「私達にしか出来ない事…？それって何ですか？」

「これは授業じゃないのよ？実践なの。自分で気が付かないと糧にはならないわ。寮とは言え姉と妹と言う繋がりを持つのならば、そこは暫定的であれ家族なのよ？ヒントはもう言ったわよ」

「良くわかりませんがやってみます」

「保険医の先生のヒントって何だったのですか？」

初音が誰とも無しに聞いてきた。

「他人どうしが暮らすとは言え、姉や妹として接するのならそれは家族と同じ。これでしょうね」

と香織理。

「伝統だからとか、仕来たりだからとか、そう言う義務では無く、

姉が妹を心配するのは家族なら当たり前。
何か問題を抱えているのなら、それを一緒に支え、助ける。それが普通の家族としてのありよう。そう言う事でしょうね」

奏が初音に対し、自分に言い聞かせる様に言った。

「問題はどうやって助け、支えるか。ですね…」

と由香里。

夢を見た。

――■■ちゃんまた会えたわね。

○○さん。貴女なのですよね？声だけでは判りません。顔を見せて下さい。

――ごめんね。私が誰なのかはまだ答えられる段階では無いの。

色々聞きたいのですが、答えは返って来ないのですか？

――そうだね。私は一種の啓示。貴女を見守ってあげられるけど、それが今は限界なの。

そうですか…

――ねえ■■ちゃん。右足の件は彼女は合意したのよ？傷は残ってしまったけど、心にまで傷を残す必要はないわ。

判っています。理解もしているつもりです。でも…

――　又苛められるのが怖いのね。

右足は判りませんが左腕が…

――　言い方は悪いけど、目が見えないとか、声が出せないとか、顔に一生残る火傷をしたとか、そう言う人達はどうするの？そう言う人たちだって、良い出会いに恵まれ、結婚し、子供だって生んだ人もいるわ。

私より酷い人も幸せになる権利はある。そう言う事ですか？

――　■■ちゃんは幸せに暮らせる切欠はもう掴んでいるのよ？それに気が付いていないだけ。

それって…

――　貴女を本当の妹として見ようとしているの。もう判るわよね？

うん。そうだね。

――　じゃあ又ね？■■ちゃん。

午前5時に目が覚めた。

この寮に来てから、朝が強くなった気がする。

お姉さま達に見守ってもらっているから？〇〇さんが守護してくれているから？

両方なのでしょうね。

私は果報者ですね。

そういえば、ミニドラマの冊子を見て気絶してしまったんだっけ…

寝巻きで寝ていたって事は誰かが着替えさせてくれたって事になる。

ハーブティーでも出してお返しさせてもらいましょう。

奏や由香里、香織理、薫子、初音が示し合わせた様に同じ時間に起き、司の部屋に様子を見に着たが、司はベッドに寝ていなかった。

全員がお互いの顔を見、一緒にリビングへ行くと、ハーブの香りが立ち込めていた。

「あ、お早うございます。お姉さまがた」

そこには何時もと変わらない姿の司がいた。

「だ、大丈夫なのですか司ちゃん」

「ああ、昨日の事ですか？多分疲れが溜まっていただけなのでしょう。それより、要らぬご心配をお掛けして申し訳ありませんでした」

「大丈夫なら良いのですが…」

「大丈夫ですよ奏おねえちゃん」

「は？」

不意打ちで『お姉さま』では無く『お姉ちゃん』と言ってみたが、効果は期待できなかった様だ。

「司ちゃん？今何と…」

由香里お姉さまがそう聞いてきた。

「格式ばった言い方を、柔らかくして見たのですが、反応が無さ過ぎて失敗しました。やっぱり駄目ですかね由香里お姉ちゃん？」

「お…お姉ちゃん…」

微妙な反応をされてしまった。

私は全員に『お姉ちゃん』発言をしてみたが、その後は再びカオスと化してしまった。

う～む。距離は縮まったけど、やり方は失敗したかも知れない。

第五章第九話（後書き）

次回は５／９予定です

第五章第十話（前書き）

ミニドラマの詳細や、演劇の詳細については、挿入話でいれるかも知れません。
ちょっと現状、その予定は未定です。

第五章第十話

『乙女(おとめ)はお姉(ボク)さまに恋してる』合同練習が始まった。

主人公、神加賀美瑞樹(みかがみみずき)役は奏。

クラスメイトの、石動紫苑(いするぎしおん)役は響姫。

受付嬢の、常盤(ときわ)こだま役は司。

生徒会長の、菊月碧(きくづきへき)は由香里。

母親の、神加賀美妙子(みかがみたえこ)は放送部員の藤本夏央(ふじもとなお)。

ナレーションは放送部員の生徒。

瑞樹を女装させる為に学院に転入してきた長谷川紀香(はせがわのりか)も、同じく放送部員。

基本的にはこの数人の会話で、３０分のミニドラマと言う事となった。

奏は演劇の練習もある関係で、カンペはありと言う事になった。

＊カンペ

「カンニングペーパー」の略。

テレビ放送などで、視聴者からは見えない位置で出演者に指示を出すためのボード。

「瑞樹。いつまでそうしているの？」

「瑞樹…」

『妙子の悲しそうな声が続く』

「ずっとこのままでは、貴女は前に進む事も出来ないのよ？判ってる？」

「……」

『瑞樹は答えを返せない。母の言ってる事は多分正しい。だがそれだけでは何の解決にもならない。
その答えを、自分で探さなくてはいけないのも判ってはいる……だけど』

「瑞樹……それでね、聖應に転入してはどうかしら？」

「…は？」

『母にそう言われた瑞樹は、素っ頓狂な返事をした』

「だからね、聖應に転入すれば良いと思うのよ」

「あの母上？何をおっしゃってますか？」

『二度も言われたが、そこは母の出身校の名前である。が、女子高だったはず』

「あのね母上。聖應は女学院ですよ？僕が入れるはず無いでしょう？」

「そんなこと……瑞樹は私から見ても美人だもの。きっと皆に大歓迎されるはずよ」

「そういう問題じゃな～～～～～～～～～～い！！」

「で、でも、ここままじゃ駄目な事は瑞樹だって理解しているでしょう？」

「そ、それは確かにそうでしょうが、それとこれとは話が根本的に違うでしょ！！」

「瑞樹！！聞き分けの無い子はお母さん嫌いになっちゃいますよ！？」

「いやあのね…聞き分けの無いのは母上の方でしょ…」

「くくくっ…」

ミニドラマの最初が行き成りコントだとは思わなかった。

私は笑いを抑え切れなかった。

「司ちゃん。そこで笑わないで…」

「いや、だって…っぷ…」

完全にツボにはまってしまった。

「なんて言うか…本気で笑った司ちゃんの表情を見るのが始めてな気がしますのですよ」

奏お姉さまがそんな事を言ってきた。

似非笑顔を作る事は多かったかも知れないが、それが普通になってしまっていたのかも知れない。

距離を縮めようと色々してくれているお姉さま達なのに、私がその距離を広げようとしている。

なにやってるんだろ私…

「司さん、どうかしましたか？」

と響姫お姉さまが聞いてきた。

「あ、いえ、大した事ではありませんよ、お姉ちゃん…あ……」

なんて自爆。

「な、何ですかその『お姉ちゃん』は？」

「幻聴です。そう言う事にして下さい」

「司ちゃんは寮内では、私達上級生を『お姉さま』では無く、『お姉ちゃん』と呼んでくれるのですよ」

あああ、余計な事を言わないで…

「な、なんて羨ましい…」

は？

「何ですかその『羨ましい』ってのは…？」

響姫お姉さまに聞いてみた。

「え？だって格式や伝統や恒例行事と言う決まりからでは無く、自然に普通の家族の一員として『姉』や『妹』をやっているのですよ？一人っ子の私にはとても羨ましい…」

その表情が、泣きそうに見えてしまった。

私は響姫お姉さまをそっと抱きしめながら、思ってもいなかった言葉を出していた。

「響姫お姉ちゃん。私が学院にいる間はそう呼んであげる。だから泣かないで…」

「司さん…いえ、本当の妹同様に接してくれるのなら、奏さんの様に呼んで良いのね？」

「良いですよ、響姫お姉ちゃん」

「司ちゃん…」

響姫お姉ちゃんは私を抱き返しながら、感極まった様に声を絞り出

した。

これはしばらく練習にならないかな…

第五章第十話（後書き）

司「もうちょっと一話毎を長く出来ないの？」
作「ごめん無理」
司「短編の連続って見やすいかも知れないだろうけど、待ってる時間がどうなんでしょね…」
作「そんな我侭言うと１８禁の話にするぞコノヤロウ」
司「出来る力量無いんでしょ？どうせ…」
作「……旅に出ます。探さないで下さい…」
司「作品を中途半端で逃げないで」

次回は５／１６…かな？

第五章第十一話（前書き）

２人のエルダーのＴＶアニメ版が出来るらしい。
と言うか２０１０年１２月には発表されているから、
既に放映されているのかな…
キャラメルＢＯＸ公式の中では、詳細が載ってない罠中。
まだだとしたら、どう言う話になるか楽しみです。

第五章第十一話

「瑞穂さん。今年の創造祭の噂は聞いていますか？」

「奏ちゃんの方ですか？それとも例の…」

「奏ちゃんからさんざん聞かされている『妖精の君』の方です。聞く所によると、彼女のクラスは『エルダー御用達の紅茶』を出すそうではありませんか。その紅茶を味わって見たいとは思いませんか？」

「紫苑さんらしいですね…貴子さんは誘っているのですか？」

「それは私からより、瑞穂さんからお誘いになった方が喜ぶのではありませんか？」

「……私の知らない所で、話は進んでいる様な気がするのですが……」

「どうせならまりやさんも呼びましょうか？」

「紫苑さん無理ですって…まりやは今海外ですよ。転々と場所を変えるから連絡のしようが無いですね」

「相変わらずの様ですね。とりあえず当日までは奏ちゃんには内緒にしておきませんか？」

「まあ聖應ＯＧなので入るのは問題無いでしょうが、当日のパニックが目に見える様です…」

等と瑞穂や紫苑が話し合ってる事など、奏や由香里、司達は知る由も無い。

瑞穂や紫苑が来ればどうなるか。

第７１代エルダーの十条（じゅうじょう）　紫苑（しおん）。

第７２代エルダーの宮小路（みやのこうじ）　瑞穂（みずほ）。

そして当時の生徒会長である、厳島（いつくしま）　貴子（たかこ）。

彼女達を知る３・２年生は、その姿を見たらただでは済まない騒ぎになるのは必須。

所変わって司達のクラス。

合同で出す『御用達』の紅茶だが、ここに来て問題が発生していた。

「材料が無い…ですか？」

「はい。生産地の方で事故が発生したらしく、流通出来る状態では無い。との事です」

事故と聞いて司がよろめく。

「だ、大丈夫ですか？！」

「ごめんなさい、平気です。それで見通しは立つのですか？」

「かなり難しい様です。どうしましょうか…？」

「無い物は仕方ありませんよ。メニューから外しましょう」

「ですが味見の時はあったのに…」

そんな事を言われても…

材料が無ければそもそも作りようが無い。

別なメニューと言うのも手だが、用意している時間的余裕がもはや無い。

そうなると、メニューから外す以外方法が無い。

『素材が入手困難な為、〇〇はお出し出来ません』とでも、記載しておけば大きい混乱は起こらないはず。

以上の様な説明を行い、一品減る事となった。

それでも出す数は凄い事になっている。

梅の紅茶。アールグレイ。キャンディ紅茶。冷たいルイボスティー。アイスミルクティー。

アイスのカサブランカ。ローズジャムのロシアンティー。ブルーベリーのフレーバーティー。

そこにデザートが更に加わる。

ヴィクトリアサンドイッチケーキとか、レアチーズケーキとか、メロンショートケーキとか、柚子のロールケーキとか、

アールグレイ風かぼちゃのプリンとか、ジャムや生クリームを添えたスコーンとか、デザートメイプルキャラメル等。

デザートや紅茶の糖分については、当然の如くノンカロリーを選んでいる。

ちょっとしたケーキと紅茶の出る喫茶店状態になってしまっている。

味見の生徒達は、生徒会や司達のクラスメイトの手によって、来るのを差し止められていた。

あまり味見をさせてしまうと、当日の楽しみが無くなってしまうからである。

メニューが1個消えたとは言え、数が数なだけに、司は『この数は無理でしょう』と言ったのだが、

1－Aと1－Bのクラス全員が『翌日倒れてでもやり遂げます』と息巻いてしまっているので、止められなくなっていた。

そして、ついに創造祭本番を迎えた。

今年の創造祭は、過去に前例が数回しかない二日に跨る規模となった。

理由は意外と簡単。

その１。司達が出す『エルダー御用達』のお茶室に、全生徒が来ても何ら不思議では無い程の事前人気がある事。

その２。奏や由香里達がその『御用達』に来るのは確定の為、奏の行う演劇や、響姫と奏達の合同イベントを一日ずらした事。

その３。『御用達』にはＯＧ（生徒の御両親や卒業生）も来るのが目に見えていた事。

これらの理由による。

生徒会は、『御用達』にどれだけの規模の来客が来るかを事前予想はしていた。

生徒総数８４０人。職員総数４０人。これに更に両親全てが来ると計算すると、単純計算で１７２０人。

そこに更に、卒業生が来る可能性がある。

２千や３千来ても不思議では無い。

そんな状況が予測出来てしまった為、前代未聞の整理券の事前配布を行う事とした。

そこまで生徒会が準備していても、予想外の事態は発生してしまうのだが…

「エルダー御用達のお茶会部屋は、事前に整理券を配っています。整理券の無い方は初日は基本的に入れません」

校門や、下駄箱前で、生徒会役員は朝から拡声器を使って整理券を配っていた。

事前の大人気や、味を占めた生徒達、その両親等はこぞって整理券をもらっていた。

整理券にはこう記載があった。

『素材や茶器は、有志によって提供なされています。願うことならば、町の喫茶店や食堂で行う様に、料金を出して下さい』

まあ予測出来る文面ではある。

生徒達も、エルダー御用達をただ(無料)で頂けるなんて思っている不届き者はいない。

司達の合同クラスは、朝から準備にてんてこ舞いであった。

なんせ、生徒会から通達された来客予測数が、

『4～5千来ても、不思議では無い』と言う事からである。

実際にそんな数が来たならば、とてもでは無いが捌き切れる量ではない。

だからと言って『来るな』とは言える筈も無く。

午前9時に始まる創造祭にも関わらず、司達の合同クラスは午前5時から準備を開始していた。

それだけ全員、気合が入りまくっていた。

そしてそこへ、三つの花がやってきた。

第五章第十二話

「エルダー御用達のお茶会部屋は、事前に整理券を配っています。整理券の無い方は初日は基本的に入れません」

何度も拡声器で通達している生徒に、三人の姿が近寄ってきた。

「その整理券、３枚頂けませんか？」

「あ、はい。って…ま、まさか…紫苑お姉さま。そ、それに瑞穂お姉さまや貴子お姉さまっ！？」

その声を切欠に、周りの生徒の黄色い声と生徒達によって、彼女達は取り囲まれた。

「校庭が騒がしいですね。何かあったのでしょうか…」

「さあ？そんな事を気にしている状況では無いと思いますよ？」

「そ、そうですよね…」

司達のクラス合同主催は１－Ｂで行う事になっている。

１－Ａ側は基本的に調理場と言う形にしており、関係者以外の立ち入りは禁止と言う立て札まで掲げてある。

１－Ｂの黒板側の扉を入り口とし、もう一つの扉を出口としていた。

こうすれば、無用の混乱を避けられるからである。

学院祭が始まってまだほんの数分なのだが、１－Ｂには既に長蛇の列が出来ていた。

客として入る生徒は、とりあえず紅茶を1品ほど頼み、デザートを1～3品程頼むのだが、友達数人で来て、お互い違ったメニューの紅茶を頼み、お互いの紅茶やデザートを交換して味わったりする為、回転率が上がらないのであった。

だからと言って早く出て行けとも言える筈も無く、長蛇の列は伸びていく一方であった。

「司さん、これは講堂とか食堂を使った方が良かったかも知れませんね」

「それをしたら、恐らく合同クラス員の全部が給仕をする羽目になって、作る方が手が回らなくなるでしょうね」

「ああ～。その光景が目に浮かんで来ます」

そんな話をしていたら、廊下が騒がしくなった。

「つ・つ・つ・司さん！」

「どうしましたか？」

「エルダーのお姉さまが並んでいます」

―――　奏　side　―――

由香里さんから、司ちゃんのクラスの出し物、『エルダー御用達のお茶』の整理券を朝にもらっていました。

私がもらった整理券は、他の生徒の皆さんのとは違うらしく、『特別招待券』だと言う事です。

もらったは良いのですが、私だけ特別扱いはしてほしく無かったので、響姫さんや由香里さん。薫子ちゃんに初音ちゃん香織理ちゃんを誘って、
一緒に普通の整理券をもらって並ぶ事にしました。

「お・お姉さま!?なぜお並びに!?」

「私はエルダーと言う立場である前に、聖應の一生徒なのですよ。響姫さんや由香里さん達と一緒に、普通に司ちゃんの出し物を味わいたいだけなのですよ」

「そそそ、そんな…」

1－Bのクラスの子が私の所へ飛んで来ました。

「お、お姉さま。響姫お姉さまや由香里お姉さま達も優先させますので、来て頂けませんか?」

「それは駄目ですよ。皆ここでは立場は一緒なのですから」

「いえっ！お姉さまを並ばせたなどと、どんな手違いがあったにせよ、させる訳には参りません」

そんな話をしていたら、懐かしいあの方達が私の肩を叩きました。

―― 奏 sideend ――

「奏お姉さま達は並んでいるのですか？」

私がそう聞くと、

「一生徒として並ぶと仰ってまして…それに…」

それに？

「響姫お姉さまや由香里お姉さま。そして、薫子お姉さまと初音お姉さまと香織理お姉さま。
さ、更には…」

え？まだ何か？

「一昨年のエルダーであられた瑞穂お姉さま、その御学友でいらっしゃられた紫苑お姉さま。
当時の生徒会長でいらっしゃられた貴子お姉さま。と言う蒼蒼たる方々が…」

チョットマテ。何だそのパニック間違えなしのオールスター状態は…

この場を他のスタッフに一旦任せて、私は奏お姉さまの並んでいる

所に向かった。

「奏お姉さま」

「あ、司ちゃん」

「『あ、司ちゃん』じゃありませんよ…並ぶとか、一種の嫌がらせにしかなりません。お願いですから特権を使って下さいませんか？お・ね・え・さ・ま？」

奏お姉さまは、何故か私が『お姉さま』と言うのを嫌がる。

すべてが美しすぎる女性が奏お姉さまの横に立っていた。

その横には、例の夢で見た瑞穂さんがいた。

瑞穂さんを挟む様に金髪の美しい女性も佇んでいた。

三人共に凄い。皇女の品格とでも言うのだろうか。

宝石の美しさすら霞んで見えてしまう人達であった。

「あ、司ちゃんは初めてですよね？中央のお姉さまが、一昨年のエルダーだった宮小路瑞穂お姉さまです。黒髪のお姉さまの方が、3年前のエルダーだった十条紫苑お姉さまです。そして、もう一方は」

「私は瑞穂さんがエルダーいた年の生徒会長を勤めさせて頂いていた、厳島貴子と申します」

と貴子お姉さまは、奏お姉さまの紹介を遮る形で自己紹介してきた。

「わざわざの紹介恐れ入ります。が、ここでは余りにも目立ち過ぎます。
私達のクラスにＶＩＰとして優先しますので、来ていただけませんか？『お・ね・え・さ・ま』」

私は夢で瑞穂さんの事や、紫苑お姉さまの事も、貴子お姉さまの事も知ってはいる。

と言っても瑞穂さんが転入してきてから卒業するまでのダイジェストを見ただけ。

詳細に知っている訳では無い。

初めて会った。と言う事で話をしても問題は無い筈。

「会うのは初めてですわよね？お噂は奏ちゃんから聞いています」

と紫苑お姉さまが話しかけてきた。

「どの様なトンデモな話を聞いているのかは知りませんが、私の方も話は何度か聞いています」

第五章第十三話（前書き）

とりあえず…

（＊；ω人）ゴメンナサイ

第五章第十三話

「こちらがメニューとなっています」

奏お姉さまが来ているだけでも緊張物なのに、そこに更には響姫お姉さまや由香里お姉さま。

更に、2年前のエルダーと3年前のエルダーが同席しているのだ。

緊張するなと言う方が無理かも知れない。

接客係りは、もはや完全に石化していた。

エルダー御用達のクラスの客で入った生徒が、そこにいる瑞穂様や紫苑様達、貴子様や響姫お姉さま。

更には現エルダーまでいる状態。

その姿を見て失神する生徒。サインを求める生徒。握手を求める生徒。

混沌の坩堝と言える状況だった。

奏お姉さまや響姫お姉さまや由香里お姉さま、薫子お姉さまや初音お姉さま、香織理お姉さまは私の態度にご不満な様子。

普通に接客している筈なのですがねぇ…

「何やらご不満があるようですが、どうなさったのですか？お姉さま」

奏お姉さまに代表で聞いてみる。

「むう…なんで『お姉さま』なのですか？」

は？怒る所はそこ？

「学院の代表であるエルダーなのですから、お姉さまと言うのは普通では無いのでしょうか？」

「どうして何時もの様に呼んでくれないの…」

奏お姉さまの目尻に涙が浮かんできた。

仕方なく、私はお姉さまを正面からそっと抱きしめる。

「そう言う甘え方は、お隣の瑞穂様や紫苑様にするべきなのではありませんか？…奏お姉ちゃん」

奏お姉さまが私を抱き返してきました。

「一人だけ取り残された感じは嫌なのですか？特別視されるのが嫌ですか？」

「両方です。私は司ちゃん達の良いお姉さまであればそれでも良かったのです。それなのに…」

鬱憤が溜まっている様ですね。

でもそれを対処出来るのは私ではありませんね。

「瑞穂様、紫苑様。聞こえていたとは思います。先代エルダーとして何か言ってあげて下さい」

「そこで私達に振るのですか？私としては拗ねてる奏ちゃんをもっと見たかったのですが」

紫苑お姉さまはそんな爆弾を私に投げて来た。

「困ったお姉さま達ですね。感情に折り合いが付かない事なんて、幾らでもあると思いますよ？
私達は聖人君主でも神様でも無いのですから、ゆっくり歩きましょう？ね、お姉ちゃん」

そう言って無意識に奏お姉さまの髪の毛を梳いてあげた。

「素敵ですわ司ちゃん。美しい姉妹愛を見た気がします。奏ちゃんがファンになるのも判る気がします」

紫苑お姉さまは笑みを浮かべながらそんな事を言って来た。

奏お姉さまはよほど恥ずかしいのか、私の肩に顔を埋めたまま固まってしまっています。

「奏お姉さまが固まってしまったのですが…何とかしてくれませんか？響姫お姉ちゃんか由香里お姉ちゃん」

「「え？そこで私達に振るのですか？」」

教室は笑いに包まれた。

ＶＩＰを除いた客（生徒）は、３０～４５分程度で回転しながら何とか捌いていた。

ＶＩＰ達は、と言うと、

「私達も手伝って良いですか？」

などと言う始末。

「無茶言わないで下さい。客が失神しかねません」

と言い返すと。

「これも経験です。私は2年前はただの客でしたし。その前は…」

「紫苑さん・・・」

瑞穂さんが寂しそうな声を出した。

貴方男でしょう。と言いたかったが、ここで奏お姉さま達に正体をばらす訳にも行かない。

「紫苑様、お姉さまの余裕をここで出して頂かないと、奏お姉さまに示しが付きませんよ？」

私は紫苑様に耳元でそう囁いた。

「そうでしたわね…」

どうしてもやらせて欲しいと紫苑様が駄々を捏ねる為、仕方なくウェイトレスとして手伝ってもらう事になった。

その後の騒ぎは、もう想像を絶する状況だったとだけ言って置く。

奏お姉さまの演じる舞台も、問題なく見学する事が出来た。

生徒会と響姫お姉さま、そして奏お姉さま達のミニドラマも好評で終わった。

「嵐の様な初日でしたね…」

祭りが終わって寮に戻った時、最初に言ったのがこんな一言でした。

紫苑様は、瑞穂様と貴子様に断って、寮でもう一泊してから帰ると言い出していた。

その目的は、奏お姉さまでは無く、私だったと言うのだから驚きだ。

「どうして奏お姉さまでは無く私なのですか？」

紫苑様を部屋に通し、ベッドに座りながらそう聞いてみた。

「そうですね…貴女が本物の天使か妖精に見えた。そう言う事では無いでしょうか…」

そんな事を言いながら、私の隣に座ってきた。

「奏お姉さまと一緒に寝て差し上げた方が喜ぶと思うのですがね」

「奏ちゃんはいつでも会えますから…それに…」

「それに？何ですか？」

「私も『お姉ちゃん』と呼ばれて見たいな…と思ってしまいましたので…」

はあああ？

「何を仰ってますかね……第７１代エルダーのお姉さまが…」

「わ・た・く・し・は、司ちゃんとお話しているのですよ？」

「は？今お話しているのでは？」

「一人の姉として見て欲しい。そう言ってるのですよ？」

「……あ～……紫苑様？いや違いますね、紫苑お姉さま、でも無いんですね？」

「はい」

「奏お姉ちゃんは何処まで話をしているのやら…」

「奏ちゃんや、由香里ちゃん。初音ちゃんに薫子ちゃん。そして香織理ちゃん。更には響姫ちゃんまで、『お姉ちゃん』なんですってね」

「…ちょっと奏お姉ちゃんとＯＨＡＮＡＳＩしてきます」

「だ・め・よ。今は私が先です」

「はいはい。我侭なお姉ちゃんですね…」

「『はい』は一回だけ……今何と？」

「我侭な紫苑お姉ちゃんを姉にしていると、奏お姉ちゃんも大変ですね」

紫苑様が私に抱きついてきた。

「ありがとう司ちゃん」

「なんの事やら…ですが、一つだけ良いですか？」

「何ですか司ちゃん？」

「瑞穂様だけは、個人的にそう呼べませんよ？理由は知っていますよね？」

紫苑様の目が驚いたように見開かれた。

「なぜ…？」

「信じなくて結構ですが、かつて私は予知夢を見ました」

そう前置きし、この学院に入る前に見た夢を掻い摘んで話した。

「…と言う内容です。笑ってくれても良いですよ？」

「瑞穂さんの事を奏ちゃんには？」

「言える筈もありません。卒業して交流が途絶えているのらまだしも、未だに交流がある状況でそんな事を言っても、混乱するだけしょう」

「…なぜそれを私に…？」

「紫苑お姉ちゃんは、未だに瑞穂様の事を奏お姉ちゃん達には言っていない。奏お姉ちゃんからすれば、瑞穂様は今でもお優しいお姉さまです。関係を崩したくなければ、黙っていれば良い。そう言う事かと」

「あぁ、なんて良い妹を持ったのでしょう…マリア様。こんな子に合わせて下さって感謝します」

大げさですって。

そして舞台は１２月に移って行く。

第五章第十三話（後書き）

瑞穂や紫苑、貴子の来園に関しての騒ぎは、これが限界でした。
ご期待に沿える様な形にはなってない文才の無さを、ご容赦下さい。

ついでに…

ミニドラマを作ってみて思ったこと。
３０分？……無理ぢゃんｗ
３～４話行きそうな雰囲気バリバリ。
最終章まで終わらせてから考えます。

次から第六章です。

第六章　降誕祭　Ｂｉｒｔｈ　ｆｅｓｔｉｖａｌ　第一話（前書き）

体育祭…そんなイベントもあったねぇ…（‥）遠い目

第六章はプロットが短い上に長引かせるつもりも無かった為、
３話で終わります。

第六章　降誕祭　Ｂｉｒｔｈ　ｆｅｓｔｉｖａｌ　第一話

「皆様お早う御座います。さて、新入生の皆様以外は御存知とは思いますが、今年も降誕祭ダンスパーティーに向けて、生徒会主催によるソシアルダンスのレッスン会を放課後、体育館にて行います」

「指導に当たるのは、生徒会にて御依頼したダンスの先生、それからダンスの得意な先生方です。参加は自由。参加費用はありませんので、ソシアルダンス経験の無い新入生方だけではなく、踊り方に不安のある方、忘れてしまった他の学年の方の参加もお待ちしています」

全校集会で由香里お姉さまがそんな連絡を行っていた。

もう１２月ですか…早いですね…

「創造祭の次は降誕祭ですか…お祭り好きの人達が多いですね」

「これも伝統ですから…」

私の呟きに、由香里お姉さまがそう返してきた。

「瑞穂様や紫苑様達は、又来るとか言いませんよね？」

「……瑞穂お姉さまはともかく、紫苑様お姉さまはあれで結構おちゃめな所があるので、あるいは…」

と奏お姉さま。

「勘弁して下さい。創造祭でどれだけ失神者が出たと思っているのですか」

「あれは見ていて笑えたわね。何時の時代の女学生なのかと思ったわ」

と香織理お姉さま。

「1個数万もする茶器が無事だったのが奇跡ですね…あれが割れたりしていたら、私は体で返すしか無かったですからね」

「か、体って…まままままさか」

うろたえる様に初音お姉さまが言って来た。

「どう言う勘違いをしているのか、是非ともその脳内発想を見せて欲しですね…」

「うっ」

裸電球1個だけしかない薄暗い場所。

それが何処にある場所なのかは不明。

司令官の召集によりで行われる秘密会議が、今まさに始まろうとしていた。

「え～諸君。ここに集まってもらったのは他でもない。今度行われるダンスパーティーについてである」

「由香里お姉さま。だからと言ってこんな狭い場所に大勢閉じ込めなくても」

「私は由香里などと言う名前では無い！！司令官と呼びなさい。そしてこれも伝統行事です！」

「そ、それでゆか…じゃない、司令官はダンスパーティー何をしたいと言うのですか？」

「そう！まさにそれです。今年はエルダーのお姉さま以外にも、人気がある生徒が二人もいて、尚且つそのうちの一人は1年生です」

「響姫さんと……司ちゃん？」

「ええそうです。そこで考えました。この二人をホスト役に出来ないだろうか。とね」

「「「「「おぉ～」」」」」

「響姫さんは生徒会長が頼めば何とかなるのでは？」

「いやどうでしょうか…響姫さんはエルダーのお姉さまのファンなのですよ？『エルダーと踊りたい生徒』の一人になる可能性は十分に考えられます」

「あ～言われてみればそうでした…」

「司ちゃんも泣き落としすれば行けるのでは？」

「あの子は未だにトラウマ抱えてるので、参加自体が怪しいですね」

「トラウマですか？初めて聞きます。それって聞いて良いのでしょうか？」

「それって例の包帯？」

「香織理ちゃん！」

「あ。ごめんなさい。口が滑ったわ」

「それって…「ごめんなさい。詳細は黙秘しますね」…そうですか」

「と、とにかく。何か手を打たないと」

その頃の１－Ａ教室。

「なんで誰もいないの？」

司の愚痴は風に流されていた。

「その台詞は違うでしょ…」

そんな突っ込みされても知らんがな。

そして再び謎の部屋。

「司ちゃんに関しては、出ざるを得ない状況にするとか…」

「例えばどの様な？」

「例としてはかなり悪いですが、エルダーのお姉さまを出汁（ダシ）に使うとか」

「ごめんなさい。それでは判りません」

「あくまでも例えばですからね？……エルダーのお姉さまに体調を崩してもらって、それでも伝統だからと言う事で出席してもらう。そのサポートに回れるのが、司ちゃんのみと言う状況を作る…とか…」

「う～ん。生徒会長や役員で、寮にいる生徒は不可能。ここまでは

良いわ。
それ以外の寮生で司ちゃん以外の生徒をどうするのかが問題よね」

「と言うか、結構司ちゃんは寮の上級生に甘い部分があるから、エルダーのお姉さまが例えば風邪気味だったりしたら、助けてくれるのでは無いかしら？」

「それで行くとしても、問題はあるのよね…」

「そうね。エルダーのお姉さまをどうやって体調不良にさせるか…よね」

その頃の３－Ｄ教室。

「っくしゅん。誰か私の噂でもしているのでしょうか……と言うか。何故誰もいないのですか…？」

奏も教室で取り残されていたりする。

そして三度目の謎の部屋。

「…体に良いアロマを、逆転の発想で体に悪いアロマにする…と言う方法もある事はあるわ」

「それってアロマコロジーですか？」

＊アロマコロジー【ａｒｏｍａｃｈｏｌｏｇｙ】

芳香心理学。香りが人の心理に与える、ストレス緩和、リラックス、眠気をさます、などの効果の研究。

「そうね…ただこれは、精油には経口毒性があり、飲むと最悪の場合死に至ることがあるから、さすがに無理ね。薬事法にも違反する可能性もあるし…」

＊薬事法

日本では、精油による人体の治療・改善効果をうたう場合には当該精油商品が医薬品の承認を得ている必要があり、承認がないものについては一切治療・改善効果などをうたうことができない。

仮にこうした効果を標榜し広告・販売すれば、未承認医薬品の広告・販売として薬事法違反になる。

また、入浴剤としての使用や皮膚への塗布による使用によって肌の保湿などをうたう場合や、基礎化粧品としての使用を意図している場合は、当該製品が化粧品として届出済みとなっている必要がある。

薬事法第四章第二十二条。

医薬品、医薬部外品、化粧品又は医療用具の製造業の許可を受けたものでなければ、

それぞれ業として医薬品、医薬部外品、化粧品または医療用具の製造（小分けを含む）をしてはならない。

「当たって砕けたくは無いですが、正攻法をするのが無難ですね」

「それって何ですか？」

「響姫さんと司ちゃんもホスト役になってくれと言う要望が凄いと言う」

「「「「「あぁ～なるほど」」」」」

第六章　降誕祭　Ｂｉｒｔｈ　ｆｅｓｔｉｖａｌ　第一話（後書き）

瑞穂や紫苑達の登場は？

とりあえずノーコメント。

次回は６／８

第六章第二話

「もうすぐ降誕祭ですね…」

「私はエルダーなので、ホストとしてやらなきゃいけなんですぅ…」

そんなジェ○ソンがやってくる見たいな事を言わなくても…

「司さんは、ソシアルダンスはしたことはおありですか？」

ここは１－Ａの教室。

昼休みになると、毎度の如く奏お姉さまや由香里お姉さま、更には響姫お姉さまや初音お姉さまと薫子お姉さま、香織理お姉さままで１－Ａに襲撃にくるのは、もはや常識と化してしまっていた。

＊ソシアルダンス
社交ダンス（しゃこうダンス）は、ｓｏｃｉａｌｉｔｙ ｄａｎｃｉｎｇ の誤訳から出来た語で、国内では Ｓｏｃｉａｌ Ｄａｎｃｅ（ソシアルダンス／ソーシャルダンス）という日本独自解釈英語が最も流通している。
国外では英語ではＢａｌｌｒｏｏｍ Ｄａｎｃｅ（舞踏室の踊り）と表すのが一般的である。
広義では、社交目的ではない競技ダンスや、その場のアドリブではなく振付に則って踊るデモダンス／ショーダンスも含まれる。
社交ダンス（しゃこうダンス）は、儀式や舞台用ではなく一般人が

男女のペアになり楽曲にあわせて自由に、
男性がアドリブで考えた動きを女性に伝えて、二人で一緒に楽しむダンス。
ソロ・ダンスでもなく、群舞でもなく、ペアー・ダンスと呼ぶ。

”ｓｏｃｉａｌ　ｄａｎｃｅ（ソシアルダンス）”　は、ダンスの種目やジャンルを指す言葉ではない。
２人で踊るダンス（ボールルームダンスなど）だけではなく、大勢で踊るダンス（フォークダンスなど）、
１人で踊るダンス（クラブダンス、ディスコダンスなど）全てが、目的によってはＳｏｃｉａｌ　Ｄａｎｃｅに含まれてしまう。
英語では、親睦（主に男女間など）を深める事を目的として踊ることを、
ｓｏｃｉａｌｉｔｙ　ｄａｎｃｉｎｇ（およびそれの発生語として　ｓｏｃｉａｌ　ｄａｎｃｅ）表記が、今日のボールルームダンスが出来上がる以前の、昔から存在していた。

ダンス動画はＳｈａｌｌ　ｗｅ　ダンス？　とか、王様と私とかの映画を見てくれ。

「説明乙ｗ」

「誰に言ったんですか？」

「あぁ、気にしないで。独り言だから」

「はぁ…」

「それで、司ちゃんはソシアルダンスの経験は？」

と響姫お姉さま。

「残念ながら皆無ですね」

「生徒会主催のソシアルダンスのレッスン会に出た方が良いですよ？」

と由香里お姉さま。

「う～ん…出ると個人的理由から問題が…」

「それって何かって聞いても？」

と麻衣香さんが聞いてきた。

彼女がここにいるのも、最早お約束。

「響姫お姉ちゃんとか、１－Ａのクラスの皆とかにはまだ知らせて無いですが……私には結構トラウマ持っているので」

「つ、司ちゃん。それここで言っちゃうの？」

「あまりごちゃごちゃ言っても、同情を誘うだけに聞こえるので問題はありますね」

「司さん……あの…」

美帆理さんが遠慮がちに口を開いた。

まあ、言いたい事は予想できる。

「聖應（ここ）では見かけない事ですが、外部…しかも小学生の頃は凄かったですね…例えばこの髪の毛。
周りが全員黒髪です。私だけ銀色です。白く見られたでも良いのですが…宇宙人だ、とか言うのは可愛い言い方でした。
化け物だとか罵られ、バケツに入ってる汚れた水を頭から被せられるとか…「もう良いです。聞いた私が愚かでした」…そうですか」

無言で奏お姉さまや響姫お姉さまが私に抱きついてきました。

今私はどんな表情なのでしょうね。

「まあそれとは無関係に、私の右足はもらい物なので…」

「「「「「ええっ！？」」」」」

「詳しくは言えませんが、右足に包帯を巻いています。その中身が問題で、又色々と「司ちゃん、お願いだから止めて」」

初音お姉さまが私の言葉を制してきました。

「食事中にする話では無かったですね。御免なさい」

「いえその…話を振った私たちの方の落ち度でした…」

「気にしないで下さい。これでも結構乗り越えてきた自負はあります。寮では何かと気にかけて下さるお姉ちゃんズとか、
学院でも普通に接してくれているクラスの皆とか、なんだかんだと学院内で顔を出してくださる某お姉ちゃんとかいますので」

「某お姉ちゃんって…」

え？名前言って欲しいのでしょうか？

「話はそれまくってますね。ダンスパーティーの練習の事でしたか？」

「ええそうなの……心苦しいけど、本当の事を言うわ」

と真剣な顔で由香里おねえ様が言い出した。

「何ですか？」

「生徒会に、とある依頼が殺到しているの。内容は『司ちゃんと響姫さんをホスト役にして欲しい』よ」

＼（＾ｏ＾）／人生オワタ

まぁ言いすぎかも知れないが、；。д。）こんな顔をしているかも・・・

「怒っても良いわ。嫌いになって欲しくは無いけど…全校生徒の７割近い数字で要望が来ると、さすがに…」

なんと言うかもう…

「駄目…？」

そのいかにも拾って下さいと言わんばかりの、子犬の様なつぶらな

瞳で私を見ないで下さい。

「……今日のダンスレッスンは何時からですか？」

「司ちゃんんが行くなら、姉として同行しないと駄目ですね…」

「司ちゃん。響姫さん。有難う御座います」

「後で私も行かせてもらいますですよ」

ダンスレッスン会場。

「『セイレーンの君』、それに『妖精の君』まで！！ダンスのご練習ですか？」

「生徒会に来た凄まじい数の希望がありますからね…つぶらな瞳に負けました。それに後でエルダーのお姉さまも来るそうです」

「お姉さまもですかっ！？これはやりがいのある日々になりそうです」

「あ～あ。浮かれちゃって…エルダーの威厳。ここにもあり。ですね」

舞い上がっている生徒を尻目に、私はそんな独り言を呟いた。

「自覚が無いのも困り者ですね…」

それはどう言う意味でしょうね？響姫お姉さま？

「1・2・3、1・2・3…」

寮の中ではお姉さま達を相手にし、学院内では、クラスメイトに頼んでお昼休み等に練習をする事が多くなった。

美紀さんや、美帆理さん。栞さんや、桜さん等に頼み、臨時のダンスレッスン会になる事がしばしば。

その度に、「私もお相手して下さいっ」とか言う横槍が入って来たり。

お昼休みに遊びに来るお姉ちゃんズからは、「私達も相手にして下さい」とか拗ねられたり。

私の体は一つしか無いんですよ？知ってます？

そして、嵐になる予感は、一本の電話から始まった。

「司ちゃん。電話よ」

「私にですか？母さんかな…」

相手が誰かを聞かなかったのは、今思えば失敗だった。

「お電話変わりました。司です」

『お久しぶりね。司ちゃん。私です』

な、なぜにこの人なんでせぅ…

第六章第二話（後書き）

ソシアルダンスの動きを文章にしようかと考えましたが、無理・無茶・無謀すぎました。

次回は６／１０

第六章第三話

『お久しぶりね。司ちゃん。私です』

え～～～と。

どう反応しようかな…

「私（わたくし）などと言う名前の知り合いはおりません」

さあどう出る？

『まあ嫌ですわ。私と甘いひと時をベッドの上で過ごしたではありませんか…』

そうくるかぁ？

「で、御用向きは何でしょうか？私様（わたくし）？」

『あくまでも私に名前を言わせたいのですね…拗ねた声も中々…』

こ・この人は…

「はいはい。それでどうしたのですか、紫苑お姉ちゃん？」

『やっとそれを言ってくれましたね。実は降誕祭の事なのですが…』

チョットマテ。

まーさかとは思うが…

「つかぬ事をお伺いしますが」

『何ですか？』

電話の向こうで笑っている表情が見える気がしてきた。

「瑞穂お姉さまとか貴子お姉さまがまた来るとか言いませんよね？」

『あ、それは考え付きませんでした』

しまったあああ。

「お、お願いですから来ないで下さいね。創造祭がどうなったか忘れたとは言わせませんよ？」

『どうしましょう……先ほど私の名は出なかったから、私は良いのですよね？』

センセー。お姉ちゃんが反抗期です。

「来ても一切無視して差し上げましょう」

『構いませんのよ？私は奏ちゃんと踊りますから』

どーしろと言うの…

「どうしても来る、と？」

『来るなと言われれば、行きたくなるのが人情と言う物ですわ』

どうやら本気の様だ。

どうしよう…

「何か代替が要る。と聞こえてるのは気のせいですか？」

とりあえず誤魔化しで聞いてみた。

『あら、判っちゃいました？』

誰かこの人をとめてくれ…

「そ・れ・で？私にどうしろと？」

『怒った声も中々に甘美ですわ。聖應に行かない代わりに…』

代わりに？

『ウエディングドレスを着て私と踊って下さいませんか？』

Σ（　。Д。）

うん。幻聴だ…そうに決まっている。

「すいませんが、聞いてはいけない毒電波が届いてしまった様です。電話を切っても良いですか？」

『やはり駄目ですか？』

やはりだと?

何を期待しているんだこのお姉ちゃんは…?

会話のキャッチボールを楽しんでいるのか、私を言いくるめたいのか、よく判らない。

「結局、どこまで本気なのですか?し・お・ん・さ・ま?」

『……』

なぜ黙る?

あれか?様付けには答える気にならないと?

『ごめんなさいね司ちゃん。からかったつもりが、本気で怒っちゃった様ね』

「最初からやらないでくれませんか?」

『司ちゃんの声を一杯聞きたくてつい…』

まったくこの人は…

「奏お姉ちゃんや、瑞穂お姉さまとか貴子お姉さまとは結構お話をしている筈ですよ?本物の姉妹の様な掛け合いに飢えているのですか?」

『……』

また無言。

電話の向こうで泣いている気がしてきた。そんな超能力は無かった筈。

「紫苑お姉ちゃん？」

『はい』

鼻声になっている。そんなに寂しかったのだろうか？

「今度の土日、必ず空けて下さい。そっちに行きます」

『！！』

「体調が優れない。家庭の事情。それらの急を要する事が無い限り、空けておいて下さいね？」

『はいっ！！約束ですよ？』

「それと気になったから言っちゃいますけど、妹に敬語を使う姉って変じゃないですか？」

『これはもう地ですから。奏ちゃん達も同じ筈です』

「判りました。まあそれは良いです。前日になって急用は思い出さないで下さいね？二度と行けなくなります」

『はい』

そして紫苑お姉さまの家へお邪魔し、紫苑お姉さまを第一印象で驚かせる事には成功した。

私はタキシードで行ったからである。

「そう言う手でくるとは予想外でしたわ」

とは紫苑お姉さまの談。

そして紫苑お姉さまの家で、本当の姉妹がしそうな雑談を行い。お茶を頂き、有意義だった土曜日も終わり、一緒の布団で寝てあげる事にした。

「一緒にお風呂に入って背中の流し合いを出来なかったのが悔やまれます」

「理由は言ったと思いますよ？」

奏お姉さまや、寮のお姉さま達には言っておいた、私のトラウマを説明はしていた。

本当の姉妹ならば、隠せる事では無いからだ。

「それでもですわ」

「明日、お昼を頂いたら戻りますね。寮にいるお姉ちゃんズが拗ねますから」

「お姉ちゃんズって…」

「それと」

「はい？」

「明日紫苑お姉ちゃんにちょっとしたプレゼントを差し上げます」

「今では駄目なのでしょうか？」

「明日のお楽しみです」

「判りましたわ。明日が楽しみです」

そして翌日。

朝食を摂った後、今や遅しと待ち構えていた様に紫苑お姉さまが切り出した。

「今日の楽しみとは何ですか？」

「待ってられないのですか？」

「ええそれはもう」

「仕方の無いお姉ちゃんですね」

私は席を立ち、紫苑お姉さまに対してタキシードを着たまま恭しく一例をしてこう言った。

「私と一緒に踊って下さいませんか？お嬢様」

紫苑お姉さまは驚いた様に目を見開き、次には微笑んでこう返してくれた。

「はい。喜んで」

降誕祭における伝統。

男性役（ホスト）は冬服を着用。これは男性側の踊りを覚えました。と言う意味を持つ。

それに対する、ホストと一緒に踊って欲しい生徒は夏服。つまりは女性側の踊りを覚えましたと言う意味を持つ。

体育館でのダンスレッスンはかなり熱が入っていた。

演劇の練習も時期的に無い奏お姉さまが毎日練習に来てたり、ホスト役として参加する事になった響姫お姉さまが来てたり、毎日の様に相手を代えてのレッスンを行っている。

当日は無理でも、せめて練習中は一緒に踊ってもうらおうとする生徒の群れ。

ペアになってないのは、恐らく私と奏お姉さまと響姫お姉さま位では無いだろうか。

「奏お姉ちゃん」

「どうかしましたか司ちゃん？」

「響姫お姉ちゃんと踊ってあげて下さい。貴女にあこがれた生徒の一人なのですから」

「司ちゃんのお願いですから、聞いてあげましょうですよ」

そう言って奏お姉さまは、響姫お姉さまの所へ行き、何か話しかけた後踊りだした。

「まぁ……エルダーのお姉さまと『セイレーンの君』の競演ですわ。これは見逃せません」

あの二人は絵になってますね。

何か私がここにいること自体が場違いなんじゃ…って気になってきますね。

二人が満足出切るのなら、それだけでも良いかも知れませんね。

結果から言えば、降誕祭は大盛況で無事に終わった。

ハプニングらしき事も起こらなかった。

約束した？かどうか不明だが、紫苑お姉さまの乱入も無かった。

そろそろ私の身の上話に付き合ってもらう時期なのかも知れませんね。

第六章第三話（後書き）

――――――――　予告　――――――――

「司ちゃん。年末の御予定はありますか？」

そこから始まった司の知られざる過去。

「実は…」

姉達は…

第七章

『司の右足と、隠していた秘密』

右足に巻かれた包帯の中身とその意味。

６／１３開始予定

第七章　司の隠していた右足の秘密　第一話（前書き）

ＰＶ１９４，５６９アクセス　ユニーク３０，４２８人

いつの間にかスゲー数字に…

読んで下さってる方々に感謝です。

主人公のネタばらしその１。

がこの章のテーマです。

今までの雰囲気をぶち壊す可能性大です。

第七章　司の隠していた右足の秘密　第一話

１２月ももうすぐ終わりを向ける。

寮では気の早い、ささやかなクリスマスパーティーが行われていた。

私は正月になったら家に帰るつもりだった。

母さんのあの電話さえなければ…

『司は正月こっちに来るの？』

「うん。そう思ってたけど…どうかした？」

『父さんの会社の北欧支部が難問抱えちゃったらしくて、父さんと私もそっちに急遽行く事になっちゃったの。だから家に帰って来ても誰もいないのよ』

「まあそれは仕方ないでしょう？爺様に厄介になるから気にしないで」

北欧と言う国は多分無い。

アイスランド。　スウェーデン　。デンマーク。ノルウェー。フィンランド。オーランド諸島。グリーンランド。フェロー諸島。これらを北欧と呼ぶらしい。

広義にはバルト三国や　ブリテン諸島、北ドイツ等を含むらしい。

「所で司ちゃん」

「はい？」

「正月は帰省なさるのですか？」

「その予定だったのですが…どうしようかなと考えている状況ですね」

「予定だった？」

「父の会社の北欧支部がトラブルに巻き込まれたらしく、父と母がそっちに行く事になってしまい、帰省しても誰もいないんです。それでも行くつもりですがね」

あの人の墓参りもしたいしね。

「「「「「司ちゃんの家に行っても良い？」」」」」

皆してハモらなくても…

「来てもたいしたおもてなしは出来ませんよ？まあそれでも良いと言うのなら５人や１０人は何とかなると思います」

「「「「「行きます（わ）（です）」」」」」

だからなぜハモる。

「来るのは良いのですが、奏お姉ちゃんは紫苑様や瑞穂様からお誘いは来ないのですか？」

そう。それがあっても不思議では無い。

「今の所来てないので大丈夫だと思いますですよ。それに、事情を話せば紫苑お姉さま達も判って下さいます」

だと良いのですが…

当日。

寮のお姉さま達は荷物を抱えたまま校門の前で私を待っていた。

気が早いことで…

「司。ずいぶんとゆっくりね？主賓が遅いと困るわ」

と香織理お姉さま。

「場所が遠い為列車は厳しいので、お迎えが来ますからね。急いでも仕方ありません」

「お迎え？そう言えば司の家の事情すら聞いてなかったわね」

薫子お姉さまがそんな事をぽつりと呟いた。

そんな事をしていたら、目の前に純白のリムジンバスが音も無く停車してきた。

ちょw

6人の為にリムジンバスとかするのかあのじい様は・・・？
しかも純白とかどんなイジメ…

「あの司ちゃん？」

初音お姉さまが私の顔色を伺うかの様に言って来た。

まあ、言いたい事は判ります。

「これがお迎えか？と聞きたいのでしょうけど、私ですら予想外すぎてどう答えるべきか悩んでます」

リムジンバスから運転手と3人ものメイドが降りてきた。

「お初にお目に掛かります。司さまと御学友の皆様を大旦那様よりの御用命により、お迎えに上がりました。私は運転手の加治川と申します」

「それは有難いのですが、なぜ純白なのでしょう…？」

「さあその辺は何とも」

そんな会話をしている間に、メイドさん達はてきぱきと荷物を貨物室に運び込んでしまっていた。

「お荷物はこれで全部でしょうか？」

「あ、あの」

奏お姉さまが口火を切った。

「はい。何で御座いましょうか？」

「もう一人、いえ、ひょっとしたら二人来る筈なのです」

は？聞いてないですよ？

「誰と誰ですか？」

奏お姉さまに聞いてみた。

「紫苑お姉さまと、響姫さんです」

「……あ～。申し訳ありません。待てますか？と言うか人数が増えるのは爺様の方は大丈夫なのでしょうか？」

加治川さんに聞いてみる。

既にメイドさんの一人が携帯電話で連絡を取っている。

「司様」

メイドさんに呼ばれた。

「はい」

「大旦那様からの伝言です。『例え３０人に増えても一向に構わない』との事です」

３０人とかどんだけ…

「御免なさい。遅れました。バスが渋滞に巻き込まれて…」

紫苑お姉さまはそう言って、リムジンバスを見て絶句した。

「お荷物をお預かりします」

メイドさんにそう言われて正気に戻った様だ。

「司ちゃん？」

「奏お姉ちゃんから何をどう聞いてるか知りませんが、これが私達のお迎えです」

「純白のリムジンバスなんて初めて見ましたわ。司ちゃんは一体何者？」

「まあその辺の話は乗ってから」

数分遅れて、響姫お姉さまもやってきて、やはり同じ反応だった。

第七章　司の隠していた右足の秘密　第一話（後書き）

次回は６／１５（予）

第七章第二話

リムジンバスに乗り込むと、中は改造しているのが丸判りであった。
作りとしては、ふかふかの超ロングタイプのソファー椅子の背を左右の窓に付けた、言い方は微妙だが、
屋形船の作りをリムジンバスの中に再現した様な形だった。

＊屋形船
屋形船（やかたぶね）とは、和船の一種で、主に船上で宴会や食事をして楽しむ、屋根と座敷が備えられた船のこと。
楼船（ろうせん）ともいう。

中央にはガラス張りの巨大なテーブルが鎮座しており、飲み物などが用意されている。

「司様の家はここから遠いので、このリムジンバスで空港までお送りします。
その後大旦那様がご用意なされた、自家用ジェットに乗り換えて頂きます。むろん手続きなどは無用です」

と加治川さん。

「自家用ジェットとか…なんて事を…」

「司様の御両親が出かけるのに、それでも帰ると仰られたと聞いて

おります。その為、御両親が大旦那様にお願いした。
と聞き及んでいます」

「だからって…何ですかこのＶＩＰ待遇は」

「私どもは大旦那様の御用命に全力でお答えしている使用人ですので」

「お飲み物は紅茶で宜しいですか？」

メイドさんが私たちに声を掛けて来た。

「私達は客室乗務員兼、皆様のお手伝いをと大旦那様に頼まれましたので、これも仕事です」

「ごめんなさいねお爺様が…」

「いえ、身に余る程のお給金を頂いている身ですので、これくらいしないとお返し出来ません」

そう言って礼をして、お茶を淹れに運転席側へ歩いていった。

「司ちゃん。司ちゃんの家って相当な資産家なのですか？」

と響姫お姉さまが聞いてきた。

まぁ、こんな待遇を見ればそう思われても仕方ない。

「正確には、私の家がでは無く、お爺様が資産家です」

いつの間にかリムジンバスは動いていた。

エンジンの音すら聞こえない程である。だからと言って静かなのかと言うと、会話の邪魔にならない程度のＢＧＭが流れていたりする。

「そのお爺様はどの様なお方なの？」

と紫苑お姉さまが聞いてきた。

「お爺様の戸籍情の本名は、神加賀美・ジャン・クリスティー。日本に帰化して神加賀美　幻重郎（げんじゅうろう）。と名乗っています」

「クリスティーって、ヨーロッパ方面では１０本の指に入るかも知れないと言うあのクリスティーですか？」

「そうらしいですね。日本ではそんなに有名では無いと聞いています」

「でも、そのクリスティー財閥と司ちゃんの繋がりが判りません」

と由香里お姉さま。

「幻重郎お爺様の一人娘である、ジョセフィーヌが私の母なのですが、なぜか父に一目ぼれをしてしまい、
父と結婚させてくれないなら手首を切って自殺する。
とお爺様達に脅迫まがいの事をして、無事に私達が生まれ、お爺様に私とかを抱かせた瞬間から、
親ばかならぬ祖父馬鹿と化してしましました」

「それでこの超待遇なのですか？」

「最近会ってなかったから尚更なのでしょうね。私が小学生の頃はイジメにあったと聞くや否や、
その学校を町ぐるみで潰そうとかする勢いがあった位の凄さはありましたね。それに比べればまだ可愛いたぐいです」

「あれ？結婚したら普通はお父様側の苗字になりませんか？」

と奏お姉さまが聞いてきた。

「父は鏑木グループの会社の重役だったのですが、母と結婚するに当たり、
婿入りすると言うことでクリスティー財団の会社に入る事になったと言う経緯があります。
それが１７年前、いや結婚する前だから２０年程前ですね」

「今、聞き捨てなら無い事を聞きました。司ちゃんは今何歳ですか？」

と紫苑お姉さま。

「１７です」

「え？失礼に当たるけど、受験浪人と言う事？」

と香織理お姉さま。

「私はとある理由から5年間、入院とリハビリ生活をしていた関係上、1年遅れの入学となりました」

第七章第二話（後書き）

次回は６／１７（予）

第七章第三話

雑談をしている間に空港へ付き、加治川さんの言った通り、何の手続きも無く自家用ジェットの元まで付いた。

と言うか、滑走路へのフリーパスとか何をやったんだろう…

まるで国賓級の扱いになっている。

自家用ジェットの中でも、メイドさんはなんだかんだと気を配ってくれた。

後から聞いたが、メイドさん達は、客室乗務員資格を保有しているので、ＣＡとして働いても問題無いとの事だった。

＊ＣＡ
かつては船舶の司厨員に由来する「スチュワード」（女性はスチュワーデス）の呼称が広く用いられていた。
現在では、ＴＶドラマ等の影響で「キャビンアテンダント」（Ｃａｂｉｎ　Ａｔｔｅｎｄａｎｔ）、またそれを略して「ＣＡ」とも呼ばれているが、
英語圏では「フライトアテンダント」（Ｆｌｉｇｈｔ　Ａｔｔｅｎｄａｎｔ）もしくは「キャビンクルー」（Ｃａｂｉｎ　Ｃｒｅｗ）と呼ばれるのが一般的で、
「Ｃａｂｉｎ　Ａｔｔｅｎｄａｎｔ」という組み合わせは自然ではない。
初期には男性の場合には「スチュワード」「パーサー」（「パーサ

ー」はその便に乗り組む客室乗務員達のリーダーの事である）、女性の客室乗務員は、「エアホステス」「エアガール」、最近まで「スチュワーデス」と呼ばれていたが、１９８０年代以降、アメリカにおける「ポリティカル・コレクトネス」（この場合は性表現のない単語への言い換え）の浸透により、性別を問わない「Ｆｌｉｇｈｔ　Ａｔｔｅｎｄａｎｔ（フライトアテンダント）」という単語に言い換えられた影響で、この和訳である「客室乗務員」という言葉が正式とされるようになった。

なお、日本航空においては１９９６年９月末日で「スチュワーデス」という呼称は廃止された。

しかし、その後も日本の大手航空会社自身が「スチュワーデス○○」など、「スチュワーデス」という呼称を女性の客室乗務員に対して様々な形で使い続けていることから、「スチュワーデス」という呼称がマスコミなどでも多用されており、消えるような気配はない。

現在では「客室乗務員」の名称を採用することにより一応の沈静化がもたらされている。

乗客（利用者）の中では一般的に、女性の客室乗務員＝スチュワーデス、男性の客室乗務員＝スチュワード・パーサーと呼ぶ人も多い。

なお客室乗務員に対する社内での呼称は会社によっても相違があり、日本航空では単に「アテンダント」（ＡＴ）、全日本空輸では「キャビンアテンダント」（ＣＡ）を用いている。

到着した飛行場では、又白いリムジンバスが出迎えていた。

爺様は何台あのバスを持っているんだ…

「長旅お疲れ様で御座います。後１０分程度で屋敷に到着致します。なお、お帰りの再も同じ方法で送らせて頂きます」

とメイドさん。

屋敷前の門は、相変わらず巨大だった。凱旋門をモチーフにしたらしく、存在感は凄まじいの一言であった。

運転手さんが、門にいた数人のガードマンに一言何やら言うと、観音開きの門が屋敷内側に向けて音も無く開いて行き、
リムジンバスはそこを無音に近い状況で滑り込んでいった。

屋敷に続く一本道は５分程度で終わった。が、これも徒歩で歩くと数十キロある。

子供の頃に、このやたら広い庭で迷子になった事もあった。

「このお屋敷の敷地って、どの位広いの？」

「１０万平方メートルあるとか無いとか…」

「凄い…」

「下手に庭に散策などには行かないで下さい。迷子になる事請け負いです。私も何度なった事やら…」

「き、気をつけますですよ」

玄関前には数十人のメイドさんや執事さんが出迎えていた。

ーーーーー　玄関　ーーーーー

爺様

メイド　執事

メイド　執事

図解するとこんな感じ

私は一番先にリムジンバスを降り、爺様に向かって行った。

「さっちゃん。良く来た！！」

「お爺様。しばらくはその名は使わないでもらえると助かります。学院では『司』ですので…」

「ジョセフィーヌにも困った物だ…いい加減現実を認めてほしいな」

「まぁその話は又今後と言う事で」

そんな話をしている間にお姉さま達が降りてきた。

当然の如く、荷物は待機していたメイドや執事さん達が問答無用で運んで行った。

「お爺様。御紹介します。聖應女学院高等部の先輩、いや、お姉さま方です」

「御初にお目に掛かります。聖應女学院大学部1年生。十条紫苑と申します。お見知り置きを」

最初に挨拶したのは紫苑お姉さまであった。この辺の順番も年功序列の様だ。

「おぉ、十条の所の娘さんか。お話は御門や、鏑木の方々から聞いておりますぞ」

「恐れ入ります」

「わ、私は聖應女学院高等部の現エルダーをさせて頂いてます、周防院奏と申しますのですよ」

「私は聖應女学院高等部、現生徒会長を勤めさせて頂いております、上岡由香里と申します」

「私は聖應女学院高等部、放送部員長を勤めさせて頂いております、魚住響姫と申します」

「私は、聖應女学院高等部2年生、七々原薫子と申します」

「私は、聖應女学院高等部2年生、生徒会所属、皆瀬初音と申しま

す」

「最後になりましたが、私は、聖應女学院高等部2年生、神近香織理と申します」

「皆様、御丁寧な挨拶、恐れ入りますじゃ。ワシは当屋敷の最高責任者で、さ…いや、司の祖父に当たる、幻重郎と申す。気楽に接してくださって構わぬよ。ささ、立ち話もなんじゃ、客間へご案内しよう」

屋敷の中も異常な程広く、玄関を入った先には、『屋敷内見取り図』なんて物が付いてたりする。

日中は廊下を必ずメイドさんや執事さんが巡回しているので、迷う心配は皆無に等しい。

蛇足だが、爺様には専属秘書としてメイド長さんと執事長さんが付いている。

客間へ通されたが、相変わらず壮観であった。

プラチナ層張りの巨大なテーブルとか、そをれを挟むベージュ色の高級ソファー椅子とか、
私やお姉さま達に出された紅茶のティーカップなんてプランド品だったし。

シャンデリアに宝石っぽいのがぶら下がってるとかどうなのよ?

見方を誤ったらただの成金さんじゃないか。

学院での生活はどうだ、とか、寮ではどうだ、とか、ここ最近何があったか、とか、
爺様は今どんな事をしているか、とか、話は多岐に渡って弾んだ。

「そう言えば、司ちゃんの部屋って何処なのですか？」

紫苑お姉さまがそんな事を聞いてきた。

「この屋敷と、もう一軒の家がくっついてる様な造りがあって、そちらの一室を使っています」

「客人達にも個別の部屋を用意してある。一緒が良いと言うのなら。大部屋を用意するぞ？」

「どうします？」

私はお姉さまに聞いてみた。

「せっかくですから大部屋でお願いしたいですわ」

響姫お姉さまがそう言い、それに同調した様に全員が頷く。

「そうか…すまないが夜具に関しては持ってきてもらっていると思うので、そちらでお願いしますじゃ。
済まぬがノムラ、頼めるか？」

「かしこまりました」

ノムラと呼ばれた執事さんが一例して部屋を出て行った。

――　衝撃の告白まで残り数分　――

第七章第三話（後書き）

次回は６／２０（予）

第七章第四話　～暴露～（前書き）

巨大な屋敷と言う設定にしていると言うのも、それなりの理由があります。
が、その理由についてはまだ語れません。

未だにはっきり語っていない左腕の秘密の時に、明らかにします。

第七章第四話　～暴露～

私の部屋に付く前に、一箇所難問がある。

今は使われていない、あの人の部屋がそこにある。

その部屋には未だにネームプレートがぶら下がっている。

『●●●の部屋』

名前の部分が、黒塗りされている開かずの部屋である。

「司ちゃん？」

「何ですか？奏お姉さま」

「このお部屋は何方のお部屋なのですか？」

「故あって、今は開かずの部屋です」

私はそう言葉を濁した。

察してくれたお姉さまが何人かいる様だが、今すぐには言えない。

どの様に察して下さったのかは判らない。

かつて、瑞穂様が使っていた寮の部屋も、開かずの部屋だった。

瑞穂様のお母様が使っていた部屋らしいが、仲の良い後輩がその部屋で他界してしまい、その部屋は封印されていた。

と言う話を例の夢で見た気がする。

とりあえず、落ち着いたら話しましょう。

――　それをどう受け取るのか。

それはお姉さま達にどの様に聞こえるか、どの様に響くか。

全ては私の話し方なのでしょう。

「ここが私の使っている部屋です」

メイドさん達がこまめに掃除をしてくれている様で、埃などは付いていない。

「中々素敵な部屋だと思いますよ」

と由香里お姉さま。

「そうですか？有難う御座います。ただ、皆さんがこの部屋で集まって話をしたりするには狭過ぎますがね」

「それはあるでしょうね。ここ４坪位でしょ？」

と香織理お姉さま。

「およそそうですね」

＊坪
１８２０×１８２０の大きさが１坪。およそ３．３㎡。畳２枚分に相当する大きさ。
４坪なら８畳間相当である。

－－－　ここより司目線では無く、第三者目線となります　－－－

部屋を見回していた初音が、机の上で写真面を伏せて寝させていた写真立てを見つけ、その写真を見て疑問が湧き出た。

「ねえ司ちゃん」

「何ですか初音お姉さま」

そこに写っていたのは、二人の人物だった。

満々の笑みを向けている二人の少女。

一人は銀色の少女。

もう一人は黒髪の少女であった。

「この写真…銀色の髪の子は司ちゃんだと思うけど、もう一人はど

なた?」

「あぁ……見ちゃったのですか……いつかはばれるとは思っていました」

「えっ!?見ちゃいけなかった?」

「いえ、遅かれ早かれ、説明しなくてはいけない時期は来た筈です。それが今日で、しかも今だった。それだけです。ここでは込み入った話も出来ませんので、先ほどの客間に戻りませんか?」

客間に戻り、司はメイドにハーブティーを出してもらう様に依頼した。

「これからお話しする事は、事実です。妄想でも狂言でもありません。先ほども言いましたが、避けては通れない道なので、お話はします。お聞きになりますか?無理にとは言いません」

「どんな話か知りませんが、聞く義務がある気がします。私は聞かせてもらいます」

と紫苑。

「私も聞かせてもらいますですよ」

と奏。

他の姉たちも、同様に聞くと言い出した。

メイドの手によってハーブティーが配られた。

「ここの屋敷の人々は、総じて私の幼少の時から働いている関係上、これから話する事については知っています」

と司が前置きをし、話を続け出した。

「まず。響姫お姉さまには、教えていない事があるお話があります」

「何ですか？」

「私の右足太ももには包帯が巻かれています」

「それが、先ほどの写真のお方と関係あるのですね？」

「ええあります。とりあえず、双胎間輸血症候群と言う病があるのをお姉さま達はご存知でしょうか？」

＊双胎間輸血症候群（そうたいかんゆけつしょうこうぐん）

一卵性双胎児が胎盤を共有した状態（一絨毛膜双胎）のときに、共通胎盤上の吻合血管をとおして引き起こされる血流移動のアンバランスによって両児の循環不全を生じる病態を指す。

胎児は臍帯動静脈を介して胎盤の小部分である胎盤小葉でガス交換や物質交換をしているが、

一絨毛膜胎盤の胎盤小葉では一方の児から流れ込んできた血液が、他方の児の側に戻っていくことがしばしばある。

すなわち両児間で血液が行き来し、循環を共有しているということになる。

このような場合、全例ではないが、それぞれの胎児への血液供給のバランスは往々にして取りにくくなり、
一方の胎児からもう一方の胎児へ胎盤を通して血液が流れることがある。
すると受血児（血液が流れ込む先の胎児）は多血症からうっ血性心不全、浮腫、羊水過多等を生じ、
供血児（血液の流れの元となる方の胎児）は循環血液量の減少によって羊水過少になり、
悪化すると発育不全を起こして小さくなる。
このように両児の間で血液の流れが生じるので、
「一方からもう一方へ輸血しているようなものである」という考え方が病名の由来である。

司は双胎間輸血症候群についての症例を姉達に説明した。

「そして私は、生まれた時に、その影響と思われますが、右足が奇形と言う形になってしまいました」

「説明してお分かりかとは思いますが、一卵性双生児の片割れが私で、もう一人が先ほどの写真の黒髪の少女です」

「黒髪の少女が先に生まれているので、姉と言う形になっています」

「お姉さんは今どうなさっているのですか？」

初音が聞いてきた。

「姉の名前は『司』と言います」

「「「「「えっ！？」」」」」

第七章第四話　～暴露～（後書き）

次回は６／２２（予）

第七章第五話　～暴露その2～（前書き）

暗い話になるとは思います。

どの程度暗い雰囲気になったかは、読んで下さっている方々の受け取り方ですので、
作者がどうこう言うのは止めておきます。

それでも、暗い話は似合わないなどと言う方は読み飛ばす事をお勧めします。

体の不自由な方等には無礼な文書が入っている事を謝罪します。

第七章第五話　～暴露その2～

「姉の名前は『司』と言います」

「「「「「えっ！？」」」」」

姉達は一瞬、何を言われたのか理解出来なかった。

姉達からすれば、今まで学院や寮などで一緒に過ごしてきた筈の人物の名前が、写真に写っていた黒髪の少女だと言われたのだ。

納得や理解が出来る訳も無い。

「な……何を言っているのですか？」

紫苑が聞いてきた。

「ですから、先ほど見た写真の黒髪の女性、彼女が血を分けた姉で、名前を『神加賀美　司』と言います」

「じゃあ、今私達の目の前にいる司ちゃんは、誰なのですか？」

奏がそう聞いてきた。

「その話は、私の右足太ももに巻かれている包帯の話に関わります」

表情が消えてしまった司が説明を続ける。

「先ほど、私は生まれた時に、右足が奇形と言う形になってしまし

まいた。と言いました。
極端な言い方になりますが、足を切って義足にする位しか、見た目を整える方法はありませんでした。
他の手段もあるにはありました。いわゆる生体移植です」

「生体移植は基本、本人又は両親の同意があれば、同系移植として可能でした」

「言ってる意味は判るけど、それと司ちゃんの右脚との繋がりが判らないわ」

由香里が口を挟んできた。

「姉は、原因不明ですが、非常に体が弱く、外で遊べるのはせいぜい月に一・二度でした。
その一・二度の時に撮った写真が先ほどの物です。ここまで言えば、なんとなくお解かりかと思います」

「まさか……お姉さんは……」

響姫が目に涙をためながら言って来た。

「姉は、7歳の時に他界しました。そして、その姉の脚を私が受け継いだのです」

「移植そのものは問題無く成功したのですが、何故か接続した部分の皮膚だけ、紫色の筋の様に残ってしまい、
皮膚移植を繰り返したのですが、完治に至らず、私はもう諦めて受け止め、抗生剤を飲む生活となっています」

「そんな事が……じゃあ、司…じゃなかった、本当の名前は何？」
香織理がそう聞いてきた。
「私の、戸籍上の本名を語る前に、そうなった経緯を説明させてもらいますね」
「司姉さんが他界してしまった時に、母はその事実を受け止められませんでした。心が拒絶したのでしょう。
それで、葬儀とかも入院して参列出来ず、現在に至ってもその事実を忘れています。
そして、忘れる代わりに母は、私を『司』と呼び、本来の私は元々存在しなかった。と誤認識しています」
「「「「「そんな…」」」」」
「それで心の平穏を保てているのです。私は、父とお爺様に対して、母が普通にしてくれるならそれで良いと言い、
納得してもらい、戸籍証明を取る際は、偽造した書類を取ったりする事で今まで問題無くやってきました。
ですので、お願いです。この件に関しては波風を立てないで下さい」
そう言って司が深々と頭を下げた。
「家族の事ですから、部外者がどうこう出来る事では無いのは判ります。ですので、貴女の本来の名前を教えて下さいませんか？」
奏が泣きそうになりながら言って来た。
「私の、戸籍上の本当の名前は、『神加賀美　咲（さき）』です。が、今ま

で『司』と通っていますし、学院でもそう言っています。ですから、今まで通り司で構いません」

しばらく無言の時間が過ぎた。

「ねぇ司ちゃん。いえ、咲ちゃん。本当にそれで良いの？」

紫苑が司（咲）に抱きつきながら聞いてきた。

「１０年です。１０年もそう言われ続ければ、いい加減慣れます」

「それでも、それでも貴女は幸せ？」

そう聞かれて、司（咲）は強くは言えなかった。

「……『お母さんとお父さん達をよろしくね？』姉の最後の言葉でした。今でも覚えています。今更母を精神的に不安定には出来ません。

お願いですから、この事は胸に秘めておいて下さい」

搾り出す様な口調で司がそう言った。

「家庭の事情なのは理解出来ます。でも納得出来ません。私達はこれからどう司ちゃんと接すれば良いの？」

「その答えは私は出せません。お姉さま達で出して頂くしかありません」

メイドに呼ばれ、司が部屋を出て行った。

残された姉達は、神妙な顔でおのおの思案に暮れていた。

今まで司と呼んでいた妹は、実は他界している彼女の姉の名で、本来の名は咲。

本人は１０年の月日が経っている事もあり、司と言う名前で自分を納得させ、定着させてしまっている。

学院では司で通っており、それ以外の名を呼ぶ事はほぼ不可能。

それ以外の名前、二つ名で呼ぶのは姉としては出来ない。

だからと言って、事情を知った今、司と呼ぶのは躊躇われる。

彼女の家でも、司と呼ぶしか無い。

いくら家族同様だと言っても、血の繋がりは無い。

ましてや、突き詰めれば所詮他人の家の事情。

自分の名を捨ててまで、母の平穏の為に１０年やってきた事。

今更、仮初の姉達がどうこう言って、家庭の危機を迎えるのは筋違い。

それでも納得出来ない。

どうしたら良いのか、答えを出せずにいた。

第七章第五話　～暴露その２～（後書き）

次回は６／２４（予）

第七章第六話　～暴露その後～（前書き）

主人公は、便宜上『司』と表記します。

ちょーと長いです。

祝６０話　（＊＾＾）／／。・：＊：・゜★,。・：＊：♪・。

-☆パチパチ

第七章第六話　～暴露その後～

屋敷のメイド達によって大部屋に用意された布団に姉達は移動した。
大部屋に入ったが、誰も口を開こうはしなかった。
司も気を利かせて、姉達のいる部屋には入ろうとしなかった。

－－－　ｓｉｄｅ　幻重郎の書斎　－－－

「お爺様…」
「なんじゃ？」
「右脚の件と。『司』と『咲』の関係に付いて、お姉さま達に説明しました」
「そうか……彼女達は何と？」
「『貴女は幸せ？』『本当にそれで良いの？』だそうです」
「ジョセフィーヌ達が悪い訳でも、ましてや、お前達が悪い訳でも無い。めぐり合わせや運だったのじゃろう…
これからどうするつもりなのじゃ？」
「それが問題ですね…お姉さま達も、学院の皆様も、私に良くしてもらっている方々です。
中学校までの反応が全く無いのは、もはや奇跡に近いと思います。

そう言う意味では、今回の事は無駄に十字架を背負わせてしまったかも知れません」

「そうは言うがな…左腕の事だって未だに秘密なのじゃろ？ワシに言わせれば、そっちの方がもっと辛くならないか？彼女達の事を考えるのなら、選択は二つしか無いぞ？」

「どの様な？」

「第一に、今日の事を綺麗さっぱり忘れてもらって、今まで通り暮らす。当然左腕の話は、聞かれても今回の事をダシにして黙秘じゃろうな」

「二番目は転校ですか？」

「良く判るな。お前の言う無駄に背負った十字架は、時間（とき）が経てば忘れるじゃろう」

「もう数日で年が明けるって言うこのタイミングは、大失敗でしたね…」

「後悔しても過去は変えられんよ…失敗は成功の母とするか、臭い物には蓋をするか、お前と彼女達次第じゃよ」

「……そうですね。とりあえずお姉さま達の様子を見てきます」

そう言って司は部屋を出て行った。

―――　幻重郎の書斎　ｓｉｄｅｅｎｄ　―――

―――　ｓｉｄｅ　大部屋　―――

「紫苑お姉さま…」

「なぁに奏ちゃん？」

奏の泣きそうな声に、やさしく紫苑は返事をした。

「司ちゃん…いえ、咲ちゃんと私達はどうするべきなのでしょうか？」

「ごめんなさい奏ちゃん。その質問は答えられないわ。だって奏ちゃんは、義務でこれから司ちゃんと卒業まで関わるつもり？」

「奏さん。聞き方の問題だと思います。『どうするべきか』ではあの子のまだ秘密にしている事に対しても、又義務になってしまうわ」

由香里が割って入った。

「え？他にも何かあるのですか？」

響姫が由香里に聞いた。

「あります。聞きますか？」

「はい」

「司ちゃん…あえてそう呼びますが、司ちゃんの左腕にも包帯は巻かれています。

今回の件もそうですけど、左腕の時も、『どうするべきか』になってしまうわ。
そうじゃないと思う。
ここにいる私達は、みんな司ちゃんが好きなはず。
好きになった理由は様々だと思うけど、理屈で好きになったのでは無かったはず。
そしてそれは、これからだって…」

「好きになったからって、この事とそれは違うんじゃ無いのですか？」

と薫子。

「確かに違うでしょう。でもね？突き詰めれば他人の家庭の事情なのよ？納得する以外の方法ってあるの？」

香織理が諭す様な言い方をしてきた。

「じゃあ、なんでこんなタイミングで…」

「あの子が言ったでしょ？『遅かれ早かれ、説明しなくてはいけない時期は来た筈です。それが今日で、しかも今だった。それだけです』
って」

初音の質問に、そう香織理が説明した。

「時期が悪かった。そう言う事なのでしょうね……何か答えは出ましたか？」

―――　大部屋　ｓｉｄｅｅｎｄ　―――

大部屋に司が付くと、会話している姉達の声が聞こえてきた。

「じゃあ、なんでこんなタイミングで…」

「あの子が言ったでしょ？『遅かれ早かれ、説明しなくてはいけない時期は来た筈です。それが今日で、しかも今だった。それだけです』って」

私は名前ですら呼んでもらえなくなったのかも知れない。

そんな考えが司の頭を過ぎった。

そして静かに襖を開きながら言った。

「時期が悪かった。そう言う事なのでしょうね……何か答えは出ましたか？」

姉達が一斉に司の方を向いた。

姉達の表情は、微妙であった。

怒るでも無く、悲しむでも無い。だからと言って笑える内容でも無い。

それを見ながら司は姉達のそばまで行って床（畳）に座った。

「聞くべきでは無かった。そうお考えですか？」

司が姉達を見回しながら聞いた。

「どうなのでしょう…複雑ですわ。とりあえず、理解と納得は別物で、『どうするべきか』と言う意見が出た所ね」

代表で紫苑が言った。

「そう来ましたか…私の意見を言っても?」

そう言った司の表情は、何かを悟った様でもあり、覚悟を決めた様にも見えた。

「聞かせて下さい」

と由香里。他の姉達も反対はしなかった。

「方法は多分二つ…いや三つかな……第一に、今日屋敷で話した事を、全て忘れる。第二に、私が学院を去る。三番目は、医学的な方法で私が入学してから8ヶ月間の全てを無かった事にする。お勧めは二番目です」

「何でそうなるんですかっ!?」

奏が目に涙を溜めながら聞いてきた。

「これ以上お姉さま達を苦しめたく無いからです。学院に着てから、お姉さま達には色々良くしてもらいました。今まで辛い事も、苦しい事もありました。でも、お姉さま達の思い出を糧に、私はこれからも生きていけます」

聖應女学院高等部に着てからの日々は、ほとんどが良い思い出だった。

右脚や左腕の件を除けば、不快な思い出はほとんど無い。

お姉さま達に言った様に、私はその楽しい思い出と、仮初とは言え、お姉ちゃんを又持つ事が出来た。

その思い出を背負って、他の場所で暮らせる。

「駄目ですっ！！そんな事は許容出来ませんっ！！」

「何故ですか奏お姉さま？私はそうするべきだと思ったのですが…」

「何の為の姉ですかっ！？問題があれば共にそれを乗り越える。それが姉妹と言う関係じゃありませんか？」

司がゆっくり首を左右に振りながら言った。

「義務で姉をしてもらうのは、お互いの負担が増すだけですよ…」

「奏ちゃん。貴女はどうしたいの？」

横から紫苑が奏にそう聞いた。

「え？」

「ですから、『どうするべきか』では無く、『どうしたい』の？由

香里ちゃんも、響姫ちゃんも、薫子ちゃんも、
初音ちゃんも、香織理ちゃんも、皆に聞くべきかしらね」

年齢的な立場で紫苑は話している。

紫苑が長女と仮定した場合、奏・由香里・響姫は次女的は立ち位置。

薫子・初音・香織理が三女。

司が四女となる。

「どうしたい…ですか…今まで通りに司ちゃんと学院生活を暮らしたいです」

「それは……義務感でおっしゃってますか？」

司が奏にそう聞いてきた。

「違いますっ！！」

「では同情からですか？」

「司ちゃんが好きだから！！私は姉だからっ！！妹が苦しんでいるのに、姉として何かしてあげたい。これは義務とか同情じゃないはずです」

司はその言葉を聞き、他の姉達を見回した。

『絶対見捨てません。貴女が好きだから、妹を捨てる姉なんていません』

そう、姉達の目が語っている。

司が無言でため息を付いた。

「余計な十字架を背負わせてしまったのに、なんで皆さんはそうも懐を広く出来るのでしょうね…左腕の件をこれで有耶無耶に出来ると思ったのですが、どうやら言わないと駄目なのかも知れませんね…」

目に涙を浮かべながら司はそっと微笑み、姉達を一人一人抱きしめて行った。

――　受け入れてくれた　――

その時は、姉達はそう思っていたであろう。

朝が来るまでは。

深夜

眠っている姉達の傍に、物音一つ立てないでメイドが数人近づき、姉達の腕に何らかの注射を打って行った。

『申し訳ありません。死ぬ事は決してありません。お嬢様の未来に関わる為と、大旦那様のご命令ですので…』

言葉に出さずに、メイド達が頭を下げ、適切な処置を行って部屋を出て行った。

翌朝

「司ちゃん。この辺はお参り出来る場所ってあるの？」

なんて会話が食卓で出ていた。

右脚の会話が一切無いのである。

『お爺様、昨夜何かしましたね？』

司がそう目で訴えるが、幻重郎は何の反応も示さなかった。

姉達が会話に花を咲かせているちょっとしたタイミングで、司は幻重郎に近寄り、そっと囁いた。

「昨夜お姉さま達に何をしたのですか？」

「昨日の重要な内容だけ封印した」

「なんて事を…」

「お前の為に良かれと思った事。幾らでも文句は受けよう」

「封印という事は、思い出す可能性もあると？」

「お前が左腕の事を言った後になるじゃろうな…」

「どうして？」

「背負う十字架は一つで良い。二つも背負わせるな」

「……ありがとう御座います」

幻重郎も司も、その事は口に出さず、年末は無事に明けて行った。

第七章第六話　～暴露その後～（後書き）

次回は６／２７

だったら良いなぁ…

次回より又週一回ペースに戻します。

挿入話4と言う名の電波放送（前書き）

挿入話としていますが、本編とは何の関わりもありません。
謎の毒電波放送なのでスルーして頂いて構いません。

暇だから見てやるぜっ
って方のみどうぞ

挿入話4と言う名の電波放送

体が寒くて目が覚めた。

まだ秋だよね？

なんでこんなに寒いの？

目を開けてみた。

あれ？

ココハドコ？

周りを見渡す。

え？

なんで森の中？

頬を抓って見た。

痛い。

夢じゃない。

３６０度見渡す限り森。

誘拐された？

いやそれなら目隠しとか、手枷や足枷があっても不思議じゃない。

ふと目の端に不思議な色が見えた。

私の…髪の毛だよね？

束にして手のひらに乗せて観察した

（　。д。）

（つд⊂）ゴシゴシ

（；。д。）

（つд⊂）ゴシゴシ

｜　，．　｜

（；。Д。）…？！

どうみても7色です。本当に（ｒｙ

脱色？

違うだろ。

どこぞの小説にある異世界トリップ？

まてまてまて

じゃあなんで7色？

誰か説明をおおおおおおおおおおおお

と叫んだ所で周りは森。

返事は来ない。

虚しい…

仕方ないので適当に歩いて見る。

しばらく歩いていると、やっと開けた場所に来た。

なんと言うか、幻想的な湖がそこにはあった。

太陽が上にあるわけでも無いのに、湖面が輝いてるってどう言う事？

これが御伽話なら、湖面の上に妖精さんが踊っていそう。

ま～さか、ここって所謂『神域』って場所？

まずい。非常にまずい。

予想が当たっていたら、見回りとかが来て、「貴様そこで何をしている！？」とか言われそう。

３６計逃げるに…って、何だあれは…？

湖畔より数メートル離れたところに白い物体があった。

馬…？

最近の馬って額に角なんて生えてたっけ？

ハリー〇ッターの映画で出てきた（はず）のユニコーン？

伝説が正しければ、あの子は処女か王家に連なる者か、自分が認めた相手しか乗せない。

少し近寄って見た。

馬がこちらに気が付いた。

威嚇された。

その子をじっくり観察すると、左前脚に弓の様な物が刺さっていた。

それを見た途端、私は何も考えずにその子に駆け寄った。

「何この矢？」

ユニコーンは私の腕に噛み付いてきた。

「痛っ。ごめんね？多分人間がこれやったんだよね？痛いよね？人

間なんて嫌いだよね？でもこのままじゃあなたが痛い思いするだけだから、せめて手当てさせて？」

言葉が通じたのかどうかは不明だが、ユニコーンは噛むのを止めてくれた。

刺さっていた矢を抜き、傷口の血を吸い取ってから吐き出し、着ていた寝巻きの端を破いて湖の水に浸し、水を絞ってから傷口に巻いてあげた。

「これで多分大丈夫だと思う。あなたみたいな子は初めて見るし、人間とは違うから本当に正しいのか判らない。薬草でもあれば違うのかも知れないけど、私がその知識無いのよね」

ユニコーンは私を見ながら話を聞いている。

その目は吸い込まれそうな緑色だった。

「さて、ここは私なんかが立ち入ってはいけない場所みたいだし、人里見付けないと…あなた判る？
って言葉判らないよね…」

ユニコーンを驚かせないようにそっと立ち上がった。

「じゃあ私は行くね？下手な手当てで御免ね？バイバイ」

手を振ってその場を立ち去ろうとして、

『待って』

そんな声になってない声が聞こえた。

それがこの子との出会いで、私の運命が変わった瞬間だった。

挿入話4と言う名の電波放送（後書き）

続かないよ？

リアルで利き腕の腱鞘炎になってしまった為、次回に関しては『未定』とさせて頂きます。

楽しみに待って下さっている方々には、申し訳ありません。

第八章　バレンタイン　Ｖａｌｅｎｔｉｎｅ　第一話

裸電球１個だけしかない薄暗い場所。

それが何処にある場所なのかは不明。

司令官の召集によりで行われる秘密会議が、今まさに始まろうとしていた。

「え～諸君。ここに集まってもらったのは他でもない。まもなく来るパレンタインデー（Ｓｔ．　Ｖａｌｅｎｔｉｎｅ'ｓ　Ｄａｙ）についてである」

＊バレンタインデー（ばれんたいんでー）　Ｓｔ．　Ｖａｌｅｎｔｉｎｅ'ｓ　Ｄａｙ

２月１４日。後顧の憂いを絶つため遠征する兵士の結婚を禁じたローマ皇帝クラウディウスに反対したバレンタイン（ウァレンティノス）司祭が処刑された２７０年２月１４日の記念日と、この季節に木々が芽吹き小鳥が発情することとが結合した風習といわれる。

初めは親子が愛の教訓と感謝を書き記したカードを交換する習慣だったが、

２０世紀になって、男女が愛を告白して贈り物をしたり、とくに女性が男性に愛を告白する唯一の日とされるようになった。

日本では１９３６年（昭和１１）と５２年（昭和２７）ころに、神戸の「モロゾフ」がチョコレートを贈る風習の移入を計画したが

発展せず、
一方関東で１９５８年、東京の洋菓子商「メリーチョコレートカムパニー」により、
女性が男性にチョコレートを贈る風習が始められ、年ごとに盛んになった。

聖應女学院内での伝統、と言うか風習に於いては、一般生徒が憧れている生徒に対し、チョコレートを色々な手段で渡す。
と言う事が普通になっている。

憧れている生徒。とは、言わずもがだが、エルダーである奏が最たる存在である。

「ゆか……いえ、司令官様。このネタはもうやっています」

「そんな事は知らないっ！！」

「はいはい。で、バレンタインがどうだと言うのですか？」

「私が思うに、今年のバレンタインは、大きく分かれると３大勢力になると踏んでいる。
第一に、言わずもがだけど、エルダーのお姉さま。第二が『セイレーンの君』こと、響姫さん。
そして最後が、『妖精の君』こと司ちゃん？である」

「なぜ司ちゃんの名前は疑問符なのですか？」

「いや…この前彼女のお爺様の屋敷に遊びに行ったのだけど、そこ

で何かがあったのだけれど、
覚えて無くて…それで、司ちゃんと呼ぶのが何か違う気がするのよね…」

「ゆか…じゃない司令官も？」

「え？香織理ちゃんもですか？」

「名前を出さないで下さい。とにかく、紫苑お姉さまも首を傾げていましたわ」

「なるほど……何かあったのは事実ですが、それを皆さんが忘れている。よほど大した事では無いのか、あるいわ…」

「何ですか？」

「あ、いえ、ただの思い過ごしでしょう。それより！バレンタインをどうするか。が先決です」

「一昨年の紫苑お姉さまや、瑞穂お姉さまの時も凄かったと聞いています。昨年の君枝お姉さま、いえ、『かぐやの君』も凄まじかったのは知ってます」

＊菅原（すがわら）　君枝（きみえ）

『かぐやの君』という二つ名で呼ばれる生徒会長兼『第７３代エルダー・シスター』となっている人物。
生徒会主催の演劇、『かぐや姫』の主役を行い。似合いすぎていた為その二つ名が付けられた。

「まさかとは思いますが、一昨年の瑞穂お姉さまの時の再現を…とか考えていらっしゃるとか？」

「伝説のケーキですか…それも手ですね」

キラーン☆

司令官の目が光った（かどうか不明）。

「ちょっと司令官殿、伝説のケーキを3人分とか言うのですか？」

「ほほぉ？そう言う手もあるのですね…ふっふっふ…」

「初音。この子を何とかして」

「む、無理です…」

その頃の３－Ｄ

「…っくしゅん。又変な噂でもされてるのでしょうか…前回は創造祭でしたが、今度は何の企みなのでしょうか…」

同じく１－Ａ

「まーたいない……今度は何の悪巧みなんですか…？」

そして響姫のクラス（設定が無いんだよっ）

「え…と…何故誰もいないのでしょう…？…これは新手のイジメなのでしょうか？…学院の皆さんを信じなくては…
でも実際誰もいないと言うのは…司ちゃん？の所に行って慰めてもらうのも手かも」

そして誰もいなくなった。

舞台が変わって謎の部屋。

「ケーキを作るのは百歩譲ったとしても、３人分となると凄い事になりませんか？」

「その為に関係者全員集まったのですよ？」

「いや、だからってこの部屋に１００人以上詰め込むのは無理過ぎませんか？」

「この部屋は○次元ポケットの中だから大丈夫です！！」

「貴女はドラ○モンですか…」

再び１－Ａ

「司ちゃん」

「あ、響姫お姉ちゃん。どうしました？」

「私のクラス誰もいないの……ここもなの？」

「そうですね。まぁ、どこかで何かの悪巧みを又話し合っているのだろうと言う事だけは予測出来ます」

「え？又って…」

「前回は創造祭でした。今度は何を企んでいる事やら…」

そんな話をしていると、奏までやってきた。

「司ちゃん、遊びに…ってここも誰もいないのですか？」

「も、って事は、奏お姉ちゃんのクラスもですか…」

「私のクラスも誰もいませんでした」

と響姫。

「3つのクラスが誰もいないって…どうなっているのでしょう？」

「私と奏お姉ちゃんと、響姫お姉ちゃんのは知らせずに、何かをやろうと企画中なのでしょう」

「え～？、又ですか…」

「その様ですね」

第八章　バレンタイン　Ｖａｌｅｎｔｉｎｅ　第一話（後書き）

腱鞘炎に関しては、医者から湿布と痛み止めはもらっていますが、長引く可能性もある為、次回予定は７／１１…かも知れないって次元です。

文字を打ち込むだけで手首が痛むのが笑える…

（ノД`、）シクシク

基本左手のみの入力してます。

だからって訳でも無いのですが。

誤字・脱字・突っ込み　（ゲ゜∀゜）ゲ　カモーン

第八章第二話

「所でその企画って何なのでしょう？」

「話聞いてましか？響姫お姉ちゃん」

「何ですかその私が難聴なのかと言いたそうな顔は…」

え？ばれてます？

「…ここで泣いて良いですか？司ちゃんに苛められたって…」

ちょw

「響姫さん。あまりやり過ぎると司ちゃんに『お姉ちゃん』って呼ばれなくなりますよ？」

「そ、それは嫌です……御免なさいね司ちゃん」

「まあ別に良いのですが…何の企画かでしたか？何となく予測は立てられるのですがね」

「「そうなのですか？」」

響姫と奏がハモって聞いてきた。

「ヒントは、来月が2月だって事ですね。去年や一昨年の2月に何があったか、よ～く思い出して下さい」

「まさか……バレンタイン？」

「そうですね。バレンタインデー。心の内に秘めた想いを、大切な人に打ち明けるための素晴らしい日ではあります」

歯の浮きそうな台詞を司が言う。

「／／／た…確かにそうですね…」

耳まで真っ赤にした響姫が答えた。

響姫が司に呼ばれ、寮に来た。

「手作りのケーキでもどうですか？」

と司に言われたからである。

「行きます」

答えは即答だった。

「何を作るのですか？」

キッチンに立った司に由香里が聞いてきた。

「チョコパウンドケーキです」

そう言いつつ、薄力粉と純ココア、ベーキングパウダーを合わせて、ふるっていた。

横にはバターは室温に置いてあった。柔らかくしておく為だ。

型にバター（分量外）を薄く塗り、薄力粉（分量外）をふるって、冷蔵庫に入れておく。

違う鍋には、チョコレートは湯煎して溶かしてあった。

卵白にメレンゲ用のグラニュー糖を加え、シッカリとした角が立つまで泡立てて、固いメレンゲを作る。

別のボールにバターを入れ、クリーム状に練る。

卵黄とグラニュー糖を加え、しっかり混ぜ合わせる。若干のラム酒も混ぜておく。

そこに、溶かしたチョコレートを加え、混ぜ合わせる。

メレンゲの１／４と、ココア入り薄力粉の半量を加え、シッカリと混ぜ合わせる。

残りのメレンゲを加え、白っぽいものが残らない程度に混ぜ合わせる。

残りのココア入り薄力粉を加え、粉が残らない程度に混ぜ合わせる。

型に流し入れて、１７０度のオーブンで約４５分焼く。

全ての工程を、姉達は微笑んで見ていた。
司の手作りが欲しかったので、途中で手を貸す訳には行かなかったのである。

「司ちゃん。ケーキも作れるんだ…」

とは初音の談。

「創造祭の時も幾つか出したと思いますが？」

そう言って切り分けたケーキを姉達に配った。

「美味しくなければ捨てて下さいね」

「そんなもったいない事はしません」

「……十分美味しいわ」

一口食べた香織理が、そう感想を述べた。

「司ちゃん……いつも有難う御座います」

「そんな改めて言われる事では無いかと…私だってお姉ちゃん達にご迷惑やご心配をかけてばかりで申し訳ありません」

そう言いながらオレンジティーを出して来た。

「今月はオレンジティーですか…こうしてほぼ毎月紅茶を変えて出

してくれているのが楽しみで仕方ありません」

「毎月ですか…なんて羨ましい…」

拗ねた様に響姫が言った。

「明日のお昼のお弁当を作って上げますから、拗ねないで下さい」

「はいっ！！」

見えてないが、犬だったら尻尾を振っているのだろう。

「他のお姉ちゃん達も要りますか？ちょっと早いバレンタインプレゼントと言う事で…」

「「「「「「良いの？！」」」」」」

「まぁ、要らないのなら響姫お姉ちゃんの分だけ「「「「「「下さいっ」」」」」」…はいはい。

明日の分はホワイトボードに書いちゃいましたか？」

しまった。と言う顔をする数人。

「書いちゃったお姉ちゃん達は、明後日にでもしましょうね」

翌日。

響姫は満面の笑みを浮かべながら、昼食を摂っていた。

「このお弁当は司ちゃんの手作りなのです」

と、零れる様な笑顔でクラスの生徒に説明して羨ましがられたらしい。

第八章第二話（後書き）

腱鞘炎？

湿布と痛み止めで誤魔化してますがナニカ？

次回？

７／１８…だろう…タブン…キット…

第八章第三話（前書き）

第一話を出してから早7ヶ月。
読んで下さっている方々に感謝を。

八章の第二話と似たネタが入ってます。
（´Д｀；）、　モウシワケナイコノトオリデス
ノノZ乙

第八章第三話

「聞きましたわよ司さん」

ここは１－Ａクラス。

「？何をですか？」

「とぼけても無駄です。『セイレーンの君』へ手作りお弁当を渡したそうではありませんか？」

「あ～。あれは昨日寮に遊びに来たときに、『是非作って欲しい』お強請られまして…」

実際には違うのだが、弁当を渡す時に、そう言う事にしておいて欲しいと司が依頼していた。

「なんて羨ましい…」

「お弁当欲しいのですか？チョコレートの方が良い？」

「「「「「え？」」」」」

クラスのほとんどが反応した。

「バレンタインデーに手作りチョコ差し上げましょうか？」

「「「「「そ、それは…」」」」」

本音では皆欲しいに決まっている。が、司に隠れて何かをしている為、後ろ暗くて言えないのであった。

裸電球１個だけしかない薄暗い場所。

それが何処にある場所なのかは不明。

司令官の召集によりで行われる秘密会議が、再度始まった。

「司令官」

「何ですか？」

「『妖精の君』が、バレンタインに手作りチョコを作ってくれるそうです。私達の目論見がばれているとしか思えません」

「な、何ですって…」

「そう言えば、昨日寮で手作りのチョコパウンドケーキを司ちゃんは作ってくれましたね…あれは一種の牽制だったのかも…」

「ま、まずいですね…どうしましょう…」

「エルダーのお姉さまの分だけでも作るしか…」

「それしか無いのかな…クラスの全員があげたら、拷問にしかならないですし…」

響姫のクラスと奏達のクラスが、合同で家庭科実習をする事となった。

先生が体調不良と言う事で自習になったのだが、ここで奏がとんでもない事を言い出した。

「響姫さん」

「何ですかお姉さま」

「司ちゃんのお弁当を作ってあげませんか？」

「それは良い考えですね。どうせならちょっと早いバレンタインプレゼントと言う事で、チョコレートケーキとかはどうでしょうか？」

「さすが響姫さんです。一緒に作りましょう」

それを聞いていた回りのクラスメイト達も、一緒に作ると言い出した。

「それでは、突発イベント。エルダーのお姉さまと一緒に、チョコ生ケーキを作りましょう」

響姫の号令の元、全員がチョコ生ケーキ作りを開始した。

材料？そんなものは御都合主義だからあるに決まっている。

「まず下準備をしましょう。薄力粉とココアを合わせ、ふるっておいて下さい。

チョコは細かく刻んでおいて下さい。鍋にシロップ用の水にグラニ

ュー糖を加え、煮溶かしておいて下さい。
ケーキ型にバター（分量外）を塗って下さいね。オーブンシートを張っても構いません」

セイレーンの君の声は部屋内を透き通る様に響き、皆聞き惚れながらも指示通り準備を手早く行っていった。

「オーブンは焼く行程に入るときに設定温度になるように予熱しておくと良いでしょう。飾り用のチョコレートは、
金属製のクッキーの型などで表面を引っかくように削り取っておいて下さい。ここまでが下準備です」

そう言いながら、彼女も下準備をこなして行った。

「皆さん。下準備は終わりましたか？」

奏が聞いてきた。

「「「「「はい。お姉さま」」」」」

「では作りましょう。響姫さん、又指示をお願いしますね？」

「承知しました、お姉さま。ではまず、卵を約４０度のお湯で湯煎しながら、
ハンドミキサー高速で泡立てグラニュー糖を3回に分けて加え、モッタリとするまで、よく泡立てます。
爪楊枝を１．５ｃｍほど挿してみて、倒れない程度に、シッカリと泡立てます。シッカリ泡立てた後にミキサーを低速にし約1分、
大きな気泡を消す為に泡立てるのがコツです」

雑談などはほぼ入らないが、皆笑顔であった。

エルダーと一緒に作業を行うのが、よほどうれしいのだろう。

「続いて、ココアを加えた薄力粉を加え、ヘラをゆっくりと動かしながら、「の」の字を書くように、生地を底からすくって上に被せる動作をボールを廻しながら繰り返します。

注意としては、薄力粉が見えなくなってから、ゆっくりと更に１５回ほど混ぜる事です。

ただし、ヘラを早く動かしてしまうと、卵の泡が潰れてやすく、焼いた時に膨らみにくくなるので注意が必要です」

「意しておいた型に流し入れ、１７０度のオーブンで約２５～３０分焼きます。

ここまでは休憩を入れずに一気にやってしまいましょう」

焼いている間や冷やしている間は、奏や響姫を中心とした雑談会が開かれた。

主に寮で何をしているか、とか、司や妹達との事に会話は花を咲かせていた。

「スポンジは出来た様ですね。次はチョコクリームの作り方です。

生クリームを鍋に入れて中火にかけ、フツフツと沸騰してきたら火を止め、チョコと砂糖を入れて溶かした後、

ボールに移して粗熱を取り、冷めてから、軽く角が立つ程度まで泡立てます」

「続いて。ココアスポンジを横に3枚にスライスし、切り口にシロ

ップを塗り、チョコクリームを塗って重ねます。
上面と側面にもチョコクリームを塗り、残りを絞り袋に入れて絞り飾り。出来上がりです」

由香里は出来上がって喜ぶ皆の姿を見ていて、あの企画は企画倒れになるだろうと言う事を予想してしまった。

そして運命（お祭り）の日はやってきてしまった

第八章第三話（後書き）

次回は

7／25…でしょう（天気予報かいw

第八章第四話

奏が寮を出る時、由香里がこんな事を言い出した。

「エルダーのお姉さま。今日は鞄は私が持ってあげます。代わりにこれを持って下さい」

そう言って出したのは、１０個の大きな手さげ紙袋だった。

「え？」

「昨年の君枝お姉さまや、一昨年の紫苑お姉さまや、瑞穂お姉さまがこの時期にどうなったか忘れましたか？」

「…あ…」

「手伝えませんので、せめて鞄は持ちます」

そこに司もやってきた。

「今日一体何が…？」

「ごめんなさい。行けば判るわ。それと。悪いけど司ちゃんにもこれをあげる」

そう言って大きな手さげ紙袋を１０個渡した。

「これは？」

「私の予想が正しければ、必ずそれが必要になります。忠告だと思って持っていって」

「はぁ…」

奏と司が寮を踏み出した次の瞬間。

ガサガサと言う音と共に、一人の生徒が茂みから飛び出してきた。

「あのっ！！お姉さまと『妖精の君』！！これ受け取って下さい！！」

二人に小さな袋に入っている何かを渡し、風の様に走り去った。

「い、今のは何ですか？」

司が後ろにいる由香里に聞いた。

「今日は２／１４。これだけ言えば判るかしら？」

「え？…まさかバレンタインチョコですか？」

「そうよ。私は手伝えないの。受け取ったら直ぐに手さげ袋にしまって」

「は、はぁ…」

言われた通りに袋にしまう奏と司であった。

そして数歩進んだ。
次は木の裏から生徒が飛び出してきた。
「お姉さまっ!!お慕いしています!!これ受け取って下さい!!」
そして再び風の様に走り去って行った。
「え～と。これはもしや教室まで続くのでしょうか？」
司がそう聞いてきた。
「そこで終われば良いけどね…」
そんな話をしていると、又生徒が飛び出した。
「司さん!!何も聞かずに受け取って下さい!!」
顔を真っ赤に染め、司が何かを言う前にその場から走り去った。
「え～と…」
「すぐにしまって」
「は、はい」
それからも生徒達からの手渡し攻撃は猛威を振るった。

下駄箱に付くまでに、2袋が既に消費されていた。

奏と司、更には響姫の下駄箱は、チョコの包装で溢れ返っていた。

「上履きを発掘しないと…」

教室にたどり着くまでも、手渡し攻撃の猛威は収まらず、奏と司と響姫は、両手に8個の手さげ袋を持つ事となってしまった。

ー ー ー　響姫の場合　ー ー ー

「なんでこんなに…」

「響姫さん。鞄を持ちます」

「手さげ袋は持って下さらないのですか?」

「申し訳ありません。皆様のお気持ちが入っているプレゼントを、私達が持つ事は許されません。
応援する事しか出来ない不甲斐なさをお許し下さい」

「こんな事は予想外すぎました…」

そして自分の席を見て絶句した。

机がチョコで埋もれていた。

「嘘でしょう…」

一一一　司の場合　一一一

司は手さげ袋を引きずる様に歩っていた。

歩いている最中にも手渡し攻撃が襲って着ていたりしていた。

「司さん。鞄を持ちますね」

「鞄より袋をお願いしたいのですが…」

「ごめんなさい。自分の差し上げたプレゼントを、他人が持っていれば、どう思うかと考えてしまうと、うかつに手が出せません」

「はあ…」

思わずため息が出てしまった。

そして教室に着くと、その先にあった物を見て固まってしまった。

自分の机がカラフルな包装紙にに埋め尽くされ。見えないのである。

「机を発掘しないと…」

一一一　奏の場合　一一一

教室に付くまでは司や響姫とほぼ同じであった。

違ったのは教室内であった。

奏と由香里の席は隣り合わせなのだが、両方の机がチョコで埋め尽くされ、
更にはエッフェル塔並みに天井近くまで積み上がっていたのである。

「こ、これは…」

これには由香里も絶句した。

「エッフェル塔並みに積み上がって行く様子は、芸術的に見えました。その後から机がチョコで埋まり始まりました」

とはクラスの生徒の弁。

「あはははは…」

もう笑うしかなかった。

第八章第四話（後書き）

次回は7／27

かも？

第八章第五話

――　ｓｉｄｅ　３－Ｄ　――

「はい。皆さん席に…って無理ですねこれは…」

担任の先生がこう言って笑った。

「申し訳ありません先生…」

「いえ。まぁ、エルダーがこのクラスから輩出した時から予想されて然るべき事だったのでからね。
周防院さん。この量を全部食べようなんて思わないで下さいね。
過去のエルダーで、申し訳ないからと言って全部食べようとして、自律神経失調症になった子がいますので」

＊自律神経失調症
交感神経と副交感神経の２つから成り立つ自律神経のバランスが崩れた場合に起こる症状の総称のことである。
症状としては、めまい、冷や汗が出る、体の一部が震える、緊張するようなところではないのに脈が速くなる、
血圧が激しく上下する、立ち眩みする、耳鳴りがする、吐き気、頭痛、微熱、過呼吸、
生理不順といった身体症状から、人間不信、情緒不安定、不安感やイライラ、抑うつ気分など精神的な症状が現れることも多い。

「エルダーは貰ったチョコ全てを必ず一口は食べ、残りはクラスメ

イト全員がチョコを贈った生徒の名簿作成等を手伝う代わりに手間賃として配られるようになっているのが伝統です。では皆さん。名簿作成をお願いします」

「「「「「「「「はい」」」」」」」」

――― side 3―D end ―――

響姫のクラスでも、司のクラスでも、同じことは起こっていた。

「エルダーが出たクラス以外でこう言う事が起こるとは、前代未聞ですね」

とは先生方の言葉であった。

――― 再び3―D ―――

「だ、誰よ　トリュフなんて持ってきたのは…」

「ショコラティエの生チョコ……」

＊ショコラティエ
フランス語で、手作りチョコレートを作る職人さんのことです。また、手作りチョコレートのお店をいうこともあります。

「うわぁ…ガドー・オペラだわ。初めて実物を見ました」

＊ガドー・オペラ
ガトー　ショコラの代表的なものをあげると、ガドー・オペラと言うチョコが出る。
ビスキュイ・ジョコンドという特別に焼いた生地に、チョコレートガナッシュやコーヒーシロップを何段にも塗り重ね、
表面に金箔を添えるチョコレートケーキの事。フランスの高級菓子店にはなくてはならないもの。

１８９０年代、ガトーオペラを初めて作ったダロワイヨ本店が、パリのオペラ座近くにあり、金箔が、
オペラ座のドームの上にあるアポロンの掲げる黄金の琴のように輝いて見えることから、名づけたと言われている。

「ジャンドゥーヤ・チョコレート…これ1個で数千円とかしなかった…？」

などなどなど。

チョコレートの見本市的な状況と化していた。

「おおおおおおお姉さま」

「ど、どうしました？」

「こ、これ…プラチナチョコレートです。どどどどうしましょう…」

「えええええ？1個で5千円とかってあれですか？送り返して下さい。

そんな高級品は受け取れません」

「こっちのもＮＯＫＡのチョコセットがあるのですが…」

「イギリスのテレビ番組「世界でもっとも贅沢なチョコレート」の１位に選ばれた他、２００４年の米ゴールデングローブ賞の候補者に贈呈されるなど、世界のセレブリティに愛されているあのチョコですか？」

「その様です。これも１箱で８千円とかしています」

「なんなんですかこれは…」

―――　司のいる１－Ａ　―――

「ジャンジュジャ・ヴェイス・１Ｋｇ・クーベルチュール…１Ｋｇって…どこのお中元ですか…」

「ミルクマシュマロアーモンドチョコ…うわぁ…これって並ばないと買えないチョコですわ」

「こ、これってまさか…Ｗｉｓｐａ　Ｇｏｌｄ…嘘でしょう…」

「なんですかそれ？」

「１本９６１．４８ポンド（約１５万５千円）のチョコレートバーです」

「はぁ？！そんなのもらえません。丁重にお返しをして下さい」

「うわ。こっちはＮＯＫＡのダブルハートＢＯＸではありませんか…注文してからおよそ１ヶ月はかかると言われてる…」

「どんだけ気合はいってるんですか皆さん…高価なのは返品して下さいね」

「わ、判りました」

「…司さん…」

クラスメイトが真剣な顔で言って来た。

「何ですか？」

「これ、ヴィタメールです…ベルギー王室御用達チョコです。これを見逃したら二度と手に入りません。何卒…これはおすそ分けを下さい。何卒…」

「…そこまで言われると断れないじゃ無いですか…わかりました。後で皆さんで分けて下さい」

「有難う御座いますっ！！」

「こ、こっちはスペイン王室御用達のカカオ・サンパカ…世界最高峰のプレミアムカカオを使っていると言う……司さ～ん」

「泣きそうな顔で言わないで下さい。判りましたから…」

「あの～」

「まだ何か？」

「１日限定１００個のチョコが…」

「どうやってそれを買ったのか本人に是非聞きたいですね…」

「並んで買ったのでは？」

「大抵のお店は午前１０時開店です。光の速度で帰って来たとしても無理でしょう…」

「昨日買っておいて冷凍しておいたとか…」

「どんだけ…」

そしてお昼には、お約束のチョコケーキタワーが３－Ｄには聳え立った。

「伝説のケーキチョコタワーを再現して見ました」

とは由香里の弁。

第八章第五話（後書き）

次回は7／29（予）

第九章　～予告編～

あの時期が来た。

左腕のこれがある限り、決して忘れる事が出来ないあの時期が…

父が悪い訳では無い。当然母も悪く無い。お姉ちゃんは論外だ。

全ては運が悪かった。

きっかけを作ったのは父だ。

だがそれも正確では無い。

あいつが悪い。

あえて言えばそう言える。

私の心の弱さもあったのかも知れない。

「お姉さま達の中で、心臓の弱い方はいらっしゃいますか？」

そして始まる司の独演。

「お父さ～ん。お母さ～ん。助けて～」

「煩いぞガキ！」

彼女の左腕に何があったか。

封印されていた姉達の記憶が戻る時。

「咲ちゃん…」

姉達は司をどうするのか？

司は正気を保っていられるのか？

第九章

彼女の左腕・隠された最後の秘密

残酷な描写が入ります。

内容やタイトルは変わる可能性があります。

近日公開予定。

挿入話5　迷子の白い物体

とある昼下がり。

天気も良く。暖かかったので、外でお昼を食べようと言う事になり、中庭の木陰でお昼を摂る事にした。

食事を取りながら、何時ものメンバーで雑談を挟みながらのお昼になっていた。

そこまでは、大した問題にもならない。

司が何がに気が付き、茂みの方を振り返った。

「どうしました？」

響姫が聞いてきた。

「何か聞こえませんでしたか？」

と司が全員に聞く。

「いえ何も聞こえませんでしたよ？」

「そうですか……幻聴とはなんともはや…」

そう言って弁当に箸を付けようとしたが、再び茂みに目をやった。

「やっぱり聞こえた…」

「え？」

そこにいた全員が、茂みの方に神経を尖らせ、何かを聞き漏らさない様にしていると、

「ミィ～」

そんな泣き声が微かに届いた。

「奏お姉さま。聞こえましたか？」

「ええ確かに。行って見ましょう」

広げていた弁当を巾着袋に一旦しまい、微かな泣き声がした茂みに入って見ると、

そこには真っ白な物体が横たわっていた。

「猫…しかも子猫ですね…」

そう言いながら司がそっと白い猫を抱き上げた。

「ねえあなた。お母さんはどこ？」

そんな事を聞いても答えは返って来る筈も無い。

それどころか、見知らぬ相手に抱かれていると言うのに、身じろぎ一つしなかった。

「もしかして病気?」

横で見ていた由香里がそう言う。

「どうなのでしょう…」

キュー

そんな音が子猫から聞こえてきた。

「まさか……動けなくなる程お腹が空いている…と言うパターンですか?」

みんなが一旦しまっておいた弁当を、少しづつ分け与えると、必死で食べる食べる。

「よほどお腹空いてたのですね…何と言いますか…癒されます」

「もの凄くその気持ち判ります」

「この子…スコティッシュフォールドでは無いでしょうか…」

「血統書が付くあの猫ですか?だったらブリーダーさんとか、それなりの家のお方が探している筈なのですが…」

司が子猫をそっと抱き上げた。

「あんまり食べ過ぎると、お腹壊しますよ?」

まんまるの目が司の目をじっと見つめていたが、直ぐに司の腕の中に体を丸めれ収まってしまった。

「嫌がらないって事は…少なくても野良では無い様ですね・・・ってどうしましたかお姉さま達？」

「いや…その…なんと言いましょうか…司ちゃんが子猫を抱く姿が、異常な位に似合う物で…」

「え。」

後に、『コハク』と名付けられた子猫の、そんな出会いの１コマであった。

挿入話5　迷子の白い物体（後書き）

本編に入れる予定だったのですが、諸般の事情から差し引いてしまいました。

続き？知らんがな（・ω・）

第九章開始時期に関しては、
腱鞘炎と脳内開発部隊の夏バテにより、
８月中旬頃には出せると思います。
だが、未定ｗ

第九章　彼女の左腕の秘密・そして最後の秘密　第一話（前書き）

意図的に行間を空けている部分があります。

予告にも入れましたが、一部に過激な描写が入ります。

主人公（司）の、最後のネタばらしが入っています。

ご注意。

今まで季節は時系列に出来るだけ合わせた物語を挙げていました。
6月ならエルダー選挙。7月ならプールの話題。と言う感じにです。

9章に限っては、2月後半～3月の間の出来事と言う形にはなっていますが、
時系列的に矛盾が発生する場面が多々起こる場合があります。

2～3年生の姉が司を呼ぶ時は、基本的に『司ちゃん』とさせてもらっています。

第九章　彼女の左腕の秘密・そして最後の秘密　第一話

あの時期が来た。

左腕のこれがある限り、決して忘れる事が出来ないあの時期が…

父が悪い訳では無い。当然母も悪く無い。お姉ちゃんは論外だ。

全ては運が悪かった。

きっかけを作ったのは父だ。

だがそれも正確では無い。

あいつが悪い。

人の責任にしたくはないけど、被害者的にはそう言ってしまう。

私の心の弱さもあったのかも知れない。

そして、悪夢は恐らく数日以内に始まってしまう。

この事をお姉さま達にどう伝えるべきなのか…

ただでさえ、右脚の件を封印してもらっているこの状況で、左腕の事を言うのは躊躇われる。

でも、あの悪夢は嫌でも出てしまう。

一人で寝る事が出来たとしても、悪夢に魘されれば、お姉さまの誰かは高確率で部屋に飛び込んでくる。

そこから左腕の事を何か口走る事だってありえる。

私はどうすれば良いのだろうか。

「…ちゃん。司ちゃん」

香織理お姉さまに呼ばれていて、はっと我に返った。

「え？あ、はい。何でしょうか」

「司ちゃん。顔色悪いわよ？何度も呼んだのに反応が無いし、具合

が悪いのなら今日は休んだ方が良いのでは？」

「も、申し訳ありません。ちょっと思考の海に飲み込まれていました」

「どんなって聞いても？」

その問いに司は沈黙で答えた。

最近、司の様子が異常な位におかしいのは、寮の姉達も気が付いていた。クラスメイトも同様である。

時には、司の目の光が濁っていたり、

時には、やたら左腕を気にしたり、

時には、顔の表情が完全に消えていたり、

何を話しかけても上の空の時が数分間続いていたり、

鞄から何気なく出し、手が滑って落としたコンパクトの音を聞いた瞬間、恐怖に顔色を真っ青にしたり、

お手洗いで手を洗うのが神経質な位長時間手を洗っていたり、

１－Ａのクラスの人に聞いた話では、科学の実験で使うビーカーを見た途端に教室から逃げ出した。

なんて事もあったり。

ここ数日、姉達と一緒に寝ても、何かを恐れて熟睡出来ていなかったり、

一緒にお昼を摂っても、数口食べると戻してしまったり、

日に日に謝せ衰えて行く司がそこにはあった。

誰が何を聞いても、明確な答えを司が出してくれない。

そんな司を見守っている姉やクラスメイト達は、危機感を覚えていた。

「…どうして…」

奏が口を開いた。

「どうして司ちゃんは何も言って下さらないのですか？一体何をそんなに思い悩んでいるのですか？」

「…申し訳ありません」

「誤って欲しい訳じゃ無いのですよ。何故私達に何も言ってくれないのですか？」

「話すのが怖いのです」

「怖い？」

薫子が聞き返してきた。

「話すと……恐怖が蘇ってきて、それに伴って、周りまで鬱が飛び火して、落ち着くと、周りが敵になってしまいます。聖應は、そう言う事が無い。と言われても、過去の亡霊は、私の中で未だに健在なのです」

そう言いながら、司は左腕上腕を爪の色が白くなる位、強く握り締めていた。

「父も、私も、母も、祖父も、誰も悪くない。でも、起こってしまった事実は消せない。
あいつさえあそこに来なければっ！！」

その目は何処も移していないが、激しい憎しみが篭っていた。

「あいつさえっ！！あいつさえ来なければっ！！転校を繰り返さなくても済んだかもしれない。ひどい目にあわなかったかも知れない！！

眠れない日々が来なかったかもしれないっ！！私はっあいつを…コロシテシマイタイっ」

激しく憤ったかと思ったら、次には気が抜けた様に地面にぺたんと座り込んでしまった。

「司ちゃん！？」

「ごめんなさいお姉さま……今優しくされると、無関係なお姉さま達を詰(なじ)ってしまいます。怒りのぶつけ所を皆さんにしてしまいます」

姉達は、司の精神が、非常に不安定な上、壊れやすい状態なのを悟ってしまった。

「今日は…休みます…」

そう言って寮に帰っていく姿は、話しかけただけでも崩れ去ってしまうと思える位、影が薄かった。

第九章第二話（前書き）

総合ＰＶ２７９，２３９アクセス　ユニーク４１，５６８人

何か凄い数なんですが…

第九章第二話

突然ガラスの割れる音。

目と口しか見えない覆面がわたしの前にやってきた。

「大人しくしてろカギ。てめえの親父は何処だ!?」

そいつは左手に何かの液体が入っているビンを持ち、右手には拳銃らしき物を持っていた。

何を聞かれたのか一瞬判らなかった。

でもこれは理解出来てしまった。

私は殺されるんだ。と。

外で鳴り響くサイレンの音。

空に飛んでいるヘリの音。

「〇×△◆ｘすぇｄｃｖｔｇｂんｍひゅｊｍ、きぃ。、。・ぽくぁｚｘうぇｒｘｃｇｈｒｒｈｖｋｈｌｊｇ」

何を言ってるのか良くわからない。

私は怖くて、怖くて、ひたすら父や母に助けを呼んで呼んでいた。

「やかましいっ！！てめえ公開処刑してやろうかっ！？」

覆面の男に蹴られた。

『子供に罪はないっ！！要求を聞くから子供を放してやってくれ』

そんな声が外から聞こえた。

「ハッ！！どうせガキを開放すれば強行突入するんだろ！？死なばもろ共って言葉知ってるかっ！？」

そう言って男は、私の左腕に液体をかけて来た。

腕が熱い。

焼ける様に熱い。

殴られるより、蹴られるよりもっと酷い。

男は私の体に足を乗せ、暴れるのを防いでいた。

そして又液体をかけて来た。

痛い。

熱い。

自分で何を叫んでいるのか判らない声が出る。

なんで？

どうして？

私が何をしたの？

ふと左腕に目線が行った。

液体が落ちている所にある筈の私の腕に、

白い何かが見えていた。

「いやあああ！！」

――― 響姫　side　―――

朝から非常に嫌な胸騒ぎがします。

今まで感じた事の無い、嫌な胸騒ぎです。

誰かに呼ばれている。

そう感じているけど、そうじゃない気もします。

何でしょう…

助けを求められている？

その方が近い気がします。

誰に？

何故？

判りません。

どうしても何かしなくてはならないと言う焦りだけ募ります。

誰に対して何をして良いのか。

何処へ向かえば良いのか。

まったく判ってません。

多分、私に何かをして欲しい。

しかも早急に。

これを逃せば、大切な何かを失ってしまう。

そんな焦りと危機感だけが私を突き動かしています。

誰？

私に何をして欲しいの？

あなたは今何処にいるの？

直ぐに何かをしないと、心臓を抉り取られるほどの空虚な恐怖が襲って来そうな、

この感情は何なのですか？

私はどうすれば良いの？

『一一一ちゃん』

！！

呼ばれました。

確かに呼ばれました。

聞き間違える筈がありません。

まさか……あの子の身に何か！？

『……けて…』

又聞こえました。何を言いたいのか判りません。

私は、逸る気持ちで周りを見ている余裕すら無くなっていました。

『……たす…けて…』

あの子が、

私に、

助けてと、

必死に呼んでいます。

そうとしか聞こえません。

行かなくては!!

「セイレーンの君!?どちらへ行かれますか?!」

返事は出来ませんでした。

一刻の猶予も無い程焦っていました。

わき目も振らず、私は寮へ走っていました。

すぐ行きます!何か判らないけど待ってて!

走る。ひたすら走る。

呼吸が苦しい。足が鉛になった感じがする位重い。

それでも走るのを止めない。

止める訳には行かない。

あの子が泣いている。

そう肌でひしひしと感じているから。

あの子が泣くのを止めてしまったら、多分二度と笑ってくれない。

そんな予感まで感じている。

長い道のりでした。

距離的には大した事無い筈なのに、今は1分が1時間に思える位歯がゆい。

とにかく寮に付きました。

そしてあの子の部屋に付き、見た光景を、私は忘れないでしょう。

――― 響姫 sideend ―――

第九章第三話

――　響姫　ｓｉｄｅ　――

あの子の部屋にノックもせず入りました。

気ばかり焦ってしまい、普通のマナーですら忘れてしまっていました。

そこで私がみた光景は、悪夢で魘されている。

と言う次元を通り過ぎている。

としか表現の出来ない状況でした。

「あ〝あ〝あ〝あぁぁぁぁぁ」

悲鳴。

いえ、叫び声？

ベッドを掻き毟っていながら、体中が痙攣を起こしている。

こ、怖い…

友達と恐怖映画で見たワンシーンで、悪霊に取り付かれた人の悶える姿。

まさにそれに近い状態が目の前で起こっています。

わ、私は恐怖で身がすくみ、何も出来ませんでした。

「た…」

あの子がそんな状態の中、何かうわ言で言ってきました。

「…・・助けて……姉さん・・・・・・」

!!

司ちゃんの切なる声が、ちゃんと私の耳にも届きました。

でも、姉さんって誰?

私達の事は『お姉ちゃん』と言ってた筈…

ーー　姉の名前は　ーー

ぇ?今のは何?

私は何かを忘れてる?

そ、そんな事より、司ちゃんを何とかしてあげないと!!

彼女を見直すと、あの子は泣いていた。

でも

でも

目から流している涙が赤いってどう言う事？

思わず自分の目をこすって見直してしまった。

テレビドラマとか小説、漫画などでは見た事あるけど、実際にこの目で見るなんて・・・

一体、この子はどんな辛い夢を見ているの？

「いやああ！！」

司ちゃんがこの世の物とも思えない程の恐怖を含んでいる声が、部屋中に響く。

私は、司ちゃんが壊れるのが嫌で、必死に彼女を抱きしめてしました。

それはもう、無我夢中でした。

「司ちゃん！！しっかりしてっ！！夢なのよ！？現実じゃないの！！起きて！！私を見て！！」

自分で何を言っているのか良くわかりません。

例えようも無い悪夢を見ているのだと言う事位しか分かりません。

それでも

それでも

かけがえの無いこの子の、心が壊れるのを許容する訳には行きません。

そんな時に、不意にドアがノックされた。

これは助けてもらうしかありません。

「どなたか知りませんが手を貸して頂けませんか!?司ちゃんが大変なのですっ!!私だけではちょっと無理です!!」

そう言うと、入ってきたのは何と、紫苑様だった。

私が司ちゃんを押さえつけている状況を驚きながら見ると、紫苑様はおもむろに、

司ちゃんに口付けをしてきました。

え?

なぜ?

私が混乱していると、暴れていた司ちゃんがやっと治まってくれました。

「ショック療法ですよ響姫ちゃん。意外とこれが効くって知ってましたか?」

紫苑様はウインクしながら、そんな事を言って来ました。

いや、それはどうなんでしょう・・・

キスですよ?

ファーストキスだったらどうするんですか?

しかも相手は同じ女性ですよ!?

その辺どう考えているのでしょうか?

そんな事を、しどろもどろに私は聞きました。

「場合が場合です。海で溺れた人を助ける時に、それを気にしている状況では無い筈ですよ?」

等と説明を受けていると、司ちゃんが目を覚ました。

「紫苑お姉ちゃんに、響姫お姉ちゃん・・・どうしてここに・・・」

「「嫌な胸騒ぎを覚えたので、大至急来ました」」

私と紫苑様はそう言って、お互いの顔を見合わせました。

「紫苑様もなのですか?」

「そう言う響姫ちゃんもですか?これは偶然では無いでしょうね・・・」

不謹慎でしょうけど、二人で微笑み合ってしまいました。

「所で司ちゃん。どんな酷い夢だったの？」

私はそう聞いて見ました。

「あれは悪夢です。あれ以上の悪夢を私は知りません。毎年毎年、この時期が来ると襲ってくる悪夢です」

司ちゃんの顔色は、あまり良くありませんでした。

毎年来る悪夢。一体どんな内容なのでしょうか？

聞いて良い話なのでしょうか？

「司ちゃん？その悪夢、私達に話せますか？」

紫苑様はそんな事を言って来ました。

ーーー　響姫　ｓｉｄｅｅｎｄ　ーーー

第九章第三話（後書き）

リアル事情により、やっとこさ第九章第三話ＵＰ出来ました。

次回予定は……ノーコメントでｗ

第九章第四話

「司ちゃん？その悪夢、私達に話せますか？」

紫苑お姉さまがそんな事を言ってきた。

あれを言えと？

あのトラウマを？

言えません。

言えるはずも無い。

言えば私は、自分がどうなるか判らない。

いや違う。

あいつのやった事なのに、その責任の所在を、お姉さま達にぶつけてしまう。

唯でさえ、右足の件で記憶を封印させていると言うのに、これ以上重荷を背負わせる訳には行かない。

「そんなに辛い内容なの？」

そんな事を響姫お姉さまは聞いてきた。

「あれは悪夢です……実際に起こった悪夢です……5年前の今頃に起こった……私にとっての地獄です……それに…」

「それに？何ですか？」

「神加賀美の家として、お姉さま達に罪を犯しています。その罪すら償えていないのに、又罪を重ねろと言うのですか？そんな事…出来る訳無いじゃありませんか！！」

「「罪？」」

そう罪。

足の件を言えなくなった状況で、腕の話なんて無理に決まっている。

「司ちゃん…」

ドアの方を見ると、何時の間にか奏お姉さま達がそこにいた。

「お姉さま達……学院はどうなさったのですか……？」

「司ちゃんが心配で早退してきましたのですよ」

そんな事を奏お姉さまが言って来た。

「どうしてっ！？何故言えないの？」

と初音お姉さま。

「私の問題だからです……個人的な事なのに、お姉さま達にこれ以

上の負担は掛けられないからです」

「でも、貴女このままだと精神病になってしまうわ。言うのは非常に辛いのだろうけど、一歩でも前に進まないと、私達まで心配で眠れなくなってしまうのよ?」

香織理お姉さまの言ってる事は多分正しいのだろう。

それでも、罪に罪を重ねる、私の立場はどうなるの?

「私達は生まれも育ちも環境も違うのは判っています。でも、聖應では、卒業しても一生姉妹なのですよ?妹が、異常な位何かに苦しんでいるのに、それを見過ごす事は出来ないのよ?それこそ許容出来ない事ですわ」

紫苑お姉さま…

「どうか司ちゃん。辛いこともうれしい事も、皆で分け合いましょう……それが、本当の姉妹だと思います」

私は…

話せるのか?

あの話を……

足の件はどうするのか?

最悪、学院を去る事で責任を取るしか無いのかも知れない。

「お姉さま達の中で…」

「はい？」

「心臓が弱い方はいらっしゃいますか？」

「えっ！？そんなに凄い事なのですか？」

「私的にはそうですね……」

「さすがに、今日は聞ける内容では無いと思います。明日も授業がありますし、紫苑お姉さまの御都合もあるでしょうし…」

「そうですね…では、今度の土曜日はどうでしょうか？」

「良いですか？司ちゃん」

「細かく言っても二つの事があるので、覚悟はしておきます」

「何のですか？」

「全て言えば判ってもらえる事だとは思います」

そして、私は辛い過去を、言う時がやってきた。

第九章第四話（後書き）

構成上、ちょっと短くなりました。

第九章第五話から過去編です。

第九章第五話　～過去～（前書き）

設定的な御注意。

司の父親と本編内のとある人物との関わりありを付けるに至って、
ＰＣ版『処女は～』の宮小路瑞穂と厳島貴子が恋人になっている。
と言う設定を準拠させています。
この設定にした理由は、深い意味は無いのですが、
そうした方が説明しやすいからです。

第九章第五話　～過去～

寮のリビングに全員が集まり、普通の紅茶を司が全員分配り、話は始まった。

「まず先に、私が悪夢を見る切欠と言うか、原因になった経緯からのお話になります」

司は、ぽつりぽつりと言葉を紡いで行った。

その表情は堅く、冗談で言える内容では無いと言うのは見て取れた。

「私の父は、現在は鏑木（かぶらぎ）グループ企業の重役になっています。が、現状の立場ではなく、過去の立場から始まっています」

「過去の立場は何だったのですか？」

紫苑が聞いてきた。

「元は、厳島プループ企業の役職でした」

「え？厳島プループは鏑木グループと敵対関係では無かったですか？」

「紫苑お姉さま？ちょっとお耳を・・・」

そう言って、司は紫苑にだけ聞こえる様に、

「宮小路瑞穂さんと貴子お姉さまが婚約なさってるのは知っていますか？」

と聞いた。

それに対し、紫苑は無言で頷いた。

「申し訳ありません。ちょっと個人的な質問を紫苑お姉さまに確認しました。

鏑木グループのとある男性と、厳島プループのとある女性が婚約され、

まぁ、その関係で父が鏑木グループにヘッドハンティングされた。

と言う経緯です。

この事は直接的な関係は無いので端折ります」

「では何なのですか？」

と奏。

「元厳島プループ企業の役職であった父は、それなりに部下の面倒は良い人だったそうです。

その部下Ａさんが全ての始まりです。名前は出すつもりはありません」

「それでも構いません」

紫苑の言葉に、他の姉達も異論は無い様であった。

「では続けさせてもらいます。その部下Ａが、仕事の中で企業の痛

手になりかねないミスをしてしましました。
しかもそれが数回に至ってしましました。一度や二度ならば、父や仲間がなんとかフォロー出来たのですが、
『仏の顔も三度まで』と言う言葉もあり、社長の耳にまでミスの件を報告せねばならない様な事まで起こしてしまいました」

＊仏の顔も三度
《いかに温和な仏でも、顔を三度もなでられると腹を立てるの意から》どんなに慈悲深い人でも、
無法なことをたびたびされると怒ること。

「さすがに、社内での降格とか減棒で済まない様な致命的な事をやってしまい、社長の鶴の一言で解雇されてしまいました」

「それのどこに問題が？」

と由香里が聞いてきた。

「会社としては、恐らく普通の対処だったのでしょうね…問題は…」

「「「「「問題は？」」」」」

「それを普通と見なかった、部下Ａの狂った行い…それが、私の悪夢の始まりでした…」

第九章第六話　～過去その2～

「狂った行い…」

姉達は、その部下Aが司に何かしたのだろうと予測を立てていた。

「一般的には恐らく、そのミスを反省し、新しい職場で生かすのでしょう。
でも、そいつはそれを行いませんでした」

「どうしたのか…と聞くべきなのですか？」

響姫が恐々聞いてきた。

「止めるのなら今のうちだと思います。私も、何処まで自制出来るか自信はありませんので…」

「私は言いました。『妹が、異常な位何かに苦しんでいるのに、それを見過ごす事は出来ないの』と。
こうも言いました。『辛いこともうれしい事も、皆で分け合いましょう……それが、本当の姉妹だと思います』
とも…」

と紫苑。

「そうでしたね……」

「それで、その部下さんは何を…？」

と奏が聞いてきた。

「何をどう考えた結果、そう言う経緯になったのかは定かではありませんが、
そいつは、私の父に対して逆恨みを持ってしまったのです」

「え？なんでそうなるのですか？社長さんの一言で解雇されたのでは？」

驚いた様に、奏が言って来た。

「それを私に聞かれても困ります。直接そいつに勧告したのが父だったから。そんな事では無いかと思います」

「それが司ちゃんと、どう関わるの？」

と香織理。

「我が家族からすれば、父に逆恨みする事自体、迷惑この上無いのです……
ただ逆恨みしているだけなら良かった……
恨みを晴らしても、又新たな恨みを呼ぶ。なんでそんな事すらあいつは考えなかったのか……
私の！！私の悪夢の５年間を返して欲しいっ！！」

「司ちゃん…どうか落ち着いて…実際に何があったのか、まだ教えてもらってないの…
事情を聞いてから、一緒に怒ってあげる…一緒に泣いてあげる…だから…ね？」

司の背中をそっと撫でながら、紫苑が優しく語りかけた。

「申し訳ありません…」

「良いのですよ。独りで苦しんで欲しくないと言う、私達姉の我がままから始まった事です。
妹の、司ちゃんの事も、ちゃんと理解するのが姉の権利でもあり、義務でもあるのですから…」

「はい…」

「では、続きをお願いしますね？」

「止めないのですね……判りました」

司は、大きく深呼吸を行い、言葉を紡ぎ始めた。

「私にそれが起こったのは、５年前の今頃の時期でした…当時私は１２歳でした」

当時１２歳。中学生の時の話に戻る。

第九章第七話　～過去その３～（前書き）

一話毎が短いのは、もはや仕様ですｗ

第九章第七話　～過去その３～

「あれが始まったのは、１２歳の今頃の時期でした……」

姉達は、静かに司の言葉を聞いていた。

「天候は曇り時々晴れ。小学校時期が終わり、中学校はどんな生活になるだろうと、期待と不安があった時期でした。
その日、たまたま家に誰もいませんでした。父は仕事で、母は買い物に出かけていて、普段いる筈のメイドさんも席を外していました。
運が悪かったのか、良かったのかは、今となっては判りません」

「私も、特にやる事が無かった為、ベッドで横になっていて、何時の間にか寝ていた時に、『それ』は起こりました」

「家の窓ガラスが突然割れる音で目が覚めました。一瞬夢かと思いました」

「え？と思っていたら、顔をマスクで隠していた男が、私の目の前にいました」

「抵抗する暇も無く、手足を縛られていました」

「男は私にこう聞きました。

『やいガキ！！てめえの親父はどこにいるっ！？』

私は、何が何だか判らなく、答えられないと、顔等を殴ってきまし

た」

「どの位殴られたのかは、時間の感覚が判らなかったので不明です」

「酷い……」

姉の誰かが同情的に言葉を出すが、司は独白を続けた。

「どの位たったのかは不明ですが、外が騒がしくなっていました」

「後で知った話ですが、私が人質に取られて、１５分程度で警察が周りを囲んでいたそうです」

「警察が説得をしている様でしたが、私にはうまく聞き取れませんでした。
殴られた時に、一時的な難聴になってしまっていた様でした」

――　元部下Ａ　ｓｉｄｅ　――

なんだよ？ミス位だれだってするじゃないかっ！！

ちくしょう。せっかく良いポストに付けそうだったのに！！

神加賀美の野郎、俺をクビにしやがってっ！！

この恨み、家をめちゃくちゃにしてでも晴らしてやるっ！！

あいつの家は既に見つけてるんだ。

後はタイミングだ。

例の液体も苦労して手に入れた。

これを、あいつの顔にでもぶっ掛けてやらんと気が済まねぇっ!!

お?母親が出かけたな?

これで家にいるのはメイドとガキだけのはず。

よしっ、今がチャンス!!

俺はガラスを用意しておいた金槌で勢い良く割り、家に侵入した。

警報装置?そんなの知るかっ!!

家に入ると、ガキが寝ているのが見えた。

絶好のチャンスじゃねぇか!!

これも用意していた業務用ビニールテープでガキを簀巻きにし、頬を殴って起こした。

「やいガキっ!!てめえの親父は何処だっ!?」

親父が何処で働いているかを知っていようが、いまいが、俺には関係ない。

俺は恨みを晴らせばそれで良いだけだからな。

何度もガキを殴り、俺の怒りをぶつけまくってやった。

ざまあみろ！！

気が付くと、周りが騒がしくなっていた。

メイドが警察でも呼んだか？

ガキが人質だ、これで親父を呼び出してやる！！

――　元部下Ａ　ｓｉｄｅｅｎｄ　――

第九章第八話　～過去その４～（前書き）

会話記号の「」を意図的に外しています。

第九章第八話　～過去その４～

私は恐怖しか感じられず、父や母の名をひたすら呼び続けていました。

それが癇に障るのか、『やかましいっ！！てめえ公開処刑してやろうかっ！？』と言われ、
お腹や胸等を蹴られたりしました。

どうやら、何を言ってるか聞こえなかったのは一時的な事だった様です。

警察が、外から説得するする様な言葉がありました。

『子供に罪はないっ！！要求を聞くから子供を放してやってくれ』

そんな台詞だったと思います。

『ハッ！！どうせガキを開放すれば強行突入するんだろ！？死なばもろ共って言葉知ってるかっ！？』

この男は、かなりの覚悟を持っているのは理解出来ました。

だからと言って、

私にその後した事を、

許せる訳ではありません。

あいつは

その後

私の左腕に液体をかけて来ました。

最初は熱湯を掛けられた様な熱さでした。

でもの後、鼻に付く様な、布を焼く様な匂いがして、

左腕に激痛が走りました。

そして、

私の左腕から、

肉が焼けながら溶けて行く様な説明のし辛い匂いと、

余りにも形容出来ない痛みが襲ってきました。

その痛みに耐え切れず、私は意識を失いました。

その後、意識が回復したのは、病院のベッドの上でした。

父と母と病院の医者が見守る中、父が言って来た言葉は忘れられま

せん。

『司、お前の左腕は、解かされた』

一瞬、何を言われたのか判りませんでした。

でも、私の左腕は、がっちりギブスで固定されていて、動きませんでした。

後で聞いた話ですが、あの男は、機動隊の強行突入により確保され、殺人未遂、劇薬取り扱い法違反、家宅不法侵入、等の罪で懲役１５年執行猶予無し。だそうです。

あの男が、私に掛けてきた液体は、

硫酸の原液だったそうです。

第九章第九話　～過去その5～

実際に掛けられた硫酸がどの程度だったのかは定かではありません。

ですが、入院は1年のも及びました。

その後も、リハビリは4年間掛かりました。

1年間の入院により、私の中学校生活は、通常の1年遅れで始まりました。

最初の体育等の着替えがあった時です。

右足の包帯と、左手の包帯を見せる事になり、興味本位で『その包帯は何だ?』と聞かれました。

そして包帯の中をむりやり見られ、次に待っていたのが罵倒の言葉です。

『なんだよお前。フランケンシュタインか?』

『うわぁ……何その変な腕。髪の毛だけじゃなく、手足まで変わってる…本当に人間かお前?』

などなどです。

罵倒だけではなく、日に日にやることがエスカレートして行き、

教科書を切り刻まれる、カバンにマジックペンで落書きされる、体育で着替えた時にしまっておいた服を燃やされる。

なんて事が酷くなり、遂には転校する。

などど言う事が４年間続きました。

転校の度に、祖父が激怒し、学校に圧力を掛けるなんて事も、日常茶飯事になっていました。

圧力を掛けられた方も納得いかず、私の家にまで色々悪戯等をしてきたりもありました。

祖父は、私の家族にまで被害が及ぶのを危惧し、祖父の屋敷に私達家族全員を住む様に手配してくれました。

そして私は、通常より１年遅れた形で、聖應女学院に入学し、今に至ります。

紅茶の事等の教養は、１年間の入院と、４年のリハビリの間に身に着けた物です。

私の左腕は、硫酸によって部分的とは言え溶かされ、酷い爛れが一生残る事となりました。

第九章第十話

「爛れって……そんなに酷いのですか？」

姉の一人がそう聞いてきた。

「見せられません。中学校の時に見られて、吐いた生徒がいました。『そんなゲテモノ見せるんじゃねぇよ！！』とか言われた事もありました。

…酷いですよね…自分でむりやり包帯取った癖に、見たら今度はゲテモノですよ？

そして付いたあだ名が『汚物』とか、『ゲロ』とか…」

「御免なさい司ちゃん…私達は、貴女の心の傷を土足で踏みにじっていたいたのですね…」

「最初に言ったかとは思いますが、お姉さま達は悪くありません。全部あいつが悪いのですっ。

悪びれもせず、未だに謝罪の手紙すら送ってよこさず、悪いのは全部父だと裁判で言い切った、

あいつです……私は、一生あいつを許さない。そして……あいつが私の前に姿を出す事があったら、

私は……あいつに何をするか…」

姉達が一斉に司に抱きよってきた。

「駄目ですよ…貴女をそっちに行かせる訳には行きません。私達がいます。

例え何があっても、貴女と歩んで行きます」

姉の一人がそう言うが、司の表情は優れなかった。

「この話の前に言った言葉を覚えていますでしょうか…？神加賀美の家として、お姉さま達に罪を犯している。と言った事です」

「覚えています。それは一体何なのですか？」

「私…いえ、祖父の屋敷に一緒に行った時に、私はお姉さま達に大事な話をしています」

「え？そんな話は無かった筈です」

「でしょうね……祖父の一存ではありますが、お姉さま達に、とある処置をしてしまいました。許される事ではありません。この責任を私は、神加賀美の家の代表として、取らなくてはなりません」

「ですから、何を……？」

「封印されし扉よ。これへ」

司が謎の言葉を言うと、姉達は言葉の意味を聞こうとする間もなく、一斉に頭を抱えだした。

――　姉の名前は『司』と言います　――

思い出される記憶。

――　姉は、7歳の時に他界しました。そして、その姉の脚を私が受け継いだのです　――

「どうして…」

――　忘れる代わりに母は、私を『司』と呼び、本来の私は元々存在しなかった。と誤認識しています　――

「なんで忘れていたの?」

――　私の、戸籍上の本当の名前は　――

「咲ちゃん……」

「思い出しましたか…?」

「何故?」

「何故忘れていたのか…ですか…祖父が、その記憶を封印する処置を行ったからです。
如何なる理由であろうと、他人の記憶を操作して良い訳がありません……
神加賀美の家の者として、責任を取らせて頂きます」

「責任って…どんな?」

「学院を去ろうかと思います」

「それは許容出来ません」

「では、どう責任を取れと？この場で自殺しろと言うのなら、そうします」

第九章第十一話

「何故自殺とか、そう言う物騒な話になるのかが不明です。そんな事を誰も望んでなどいませんよ？」

「ですが、罪は罪です。私はその罪を背負わなくてはいけない義務があると思っています」

「私が・・・」

紫苑お姉さまが口を開いた。

「私が司ちゃんに課す罪の償いは…今まで通り私を『姉』と呼び、暇が出来たら私の家に泊まりに来てください」

…

……

……

は？

「それは今までと変わってないのでは？」

「そうかも知れませんね。でも、私は貴女にこれ以上の重荷を背負う義務は無いと思いますわ。それに…」

「それに？」

「司ちゃんにファーストキスを捧げたのですから、責任はとってもらわないと。ね」

はぁ？

「私は…」

続いて、響姫お姉さまが言い出した。

「司ちゃんに、卒業式での送辞をやって頂こうと思います」

はい？

「それが響姫お姉さまが私に課した義務なのですか？」

「そうですね。それから、呼び方が硬くなっていますよ？今まで通り『お姉ちゃん』でお願いします」

「じゃあ、次は私の番なのですよ」

と奏お姉さま。

「今夜、一緒にお風呂へ入って、背中の流し合いをしましょう」

へ？

「そ…それだけ…なのですか？」

「はいなのです」

「あ～、奏さんに取られた…じゃあ私は明日…は無理だから、明後日のお昼を作って下さい」

とは由香里お姉さま。

その後も、一緒に寝ましょうとか、一緒に登校しましょうとか、一緒に下校しましょうとか、

そんなごく普通の事だけしかお姉さま達は言って来なかった。

「何故ですか？」

「何のこと？」

「どうして、皆さんはそんなにお優しいのですか？叱責されても、嫌われてもしかたないのに…」

「「「「「みんな、司ちゃんが好きだから」」」」」

その後、私は無意識にお姉さま達の胸に飛び込んでいた。

そして、感動のあまり泣いてしまっていた。

聖應女学院は、奇跡が余りにもあり過ぎる。

本当にここは、現実なのだろうか？

姉さん。

私はここで幸せになれるかも知れません。

第九章第十一話（後書き）

色々問題がある気がするのですが、文才的にこの辺が限度です。
予告で入れた、変な方向は無理でした。
これにて第九章は一応終わりとなります。

第十章にて完結となります。
第十章は√Aと√Bの二部構成になる予定です。

第十章　別れと新しい出会いの季節　√A　第一話（前書き）

２０１０年１２月に開始したこの話も、遂に最終話となります。

第十章　別れと新しい出会いの季節　√A　第一話

「もうすぐ3月ですね……」

奏お姉さまがそんな事を唐突に言ってきた。

「そうですね…もっと聖應にいたかったですね…」

と、響姫お姉さまが寂しそうに言葉を続けてきた。

あぁ。卒業ですか。

今まで顔を突き合わせていた学友や、寮の生徒達とのお別れですね。

「今まで一度たりとも一年以上同じ学校にいたことは無かったから、そう言う感傷に浸った事が無かったな…」

「ちゃんと聖應（ここ）なら無事に卒業出来ますですよ」

「そうですよ。それに、司ちゃんには送辞をやってもらうのですからね」

奏お姉さま、響姫お姉さまが私の独り言に反応してそんな事を言ってきた。

「噂では、紫苑お姉さまや瑞穂お姉さま、それに貴子お姉さま等も参加するそうですよ？」

はい？

「何ですかその文化祭の二の舞は…」

「それを狙ってるんじゃないの？」

香織理お姉さまがそんな突っ込み（？）をしてきた。

「急用思い出して生家に帰っちゃおうかな…」

「生家まで突撃して行きそうですよ？」

「冗談でも止めて欲しいですね」

クラスの中も、3年のお姉さま達が卒業する、と言う事で、既に涙腺が緩んでいる生徒がいる状況。

永久に合えなくなる訳でもないのに、なんでそんなに悲しむのか、私には理解出来ない。

私がまともに、一つの学園で卒業式にまで過ごした事が無い所為で、そう言う感情を理解出来ないだけなのだろう。

なんにせよ、送辞をやる事は、生徒会の手によって掲示されてしまったので、練習や文章作成でもするしかない。

「送辞。１－Ａ、神加賀美　司。卒業生のお姉さまがた、本日はご卒業誠におめでとう御座います…」

そして卒業式の日はやってきた。

第十章　別れと新しい出会いの季節　√A　第二話（前書き）

卒業式での答辞は、ＰＣ版『乙女は～』のとあるキャラの台詞を、丸ごと使っています。

第十章　別れと新しい出会いの季節　√A　第二話

「只今より、第百十一期、卒業証書授与式を執り行います」

学院長の声がスピーカーに優しく響く。

式そのものは、これと言ったハプニングも無く、卒業して行く生徒達の名が呼ばれ、
卒業証書を受け取っていった。

式中にすすり泣く様な声はあちこちから聞こえてくるが、決して不快にはなれない。

流石はお嬢様学院なのだろう。こう言った所にも礼節をわきまえている様だ。

そして、私の送辞を言う順番が来た。

「送辞。卒業生のお姉さまがた、本日はご卒業誠におめでとう御座います。
良きお姉さま達に出会い、私達在校生は幸せな一年であったと思います。
色々な思い出を糧に、私達は新しい一年を日々良く日にすべく努力していく事でしょう。
良い一年間の思い出を、本当に、本当に有難う御座いました。
在校生代表。１－Ａ、神加賀美　司」

続いて、卒業生の答辞。これは伝統に従って奏お姉さまが行う事になった。

「まずは在校生の皆様、心のこもった送辞を頂き、有難う御座いましたなのですよ。
卒業生を代表して、お礼を言わせて頂きますなのですよ。
私達はこれから、それぞれの道に向かって旅立ちますが、どうか皆さんは、
聖應の良き伝統を引き継ぎながら、その上で、新しい事に挑戦して行って頂ければ、
それは、とても素敵な事だと思いますなのですよ」

「先生方にもお礼申し上げますなのですよ。無事こうして卒業式に臨む事が出来るのも、
先生方のお陰です。そして在校生の皆様。聖應の生徒らしい礼節と節度を持って、
でも、それは保守的でつまらないと言う訳ではありません。
そう言う基本を礎(いしずえ)として、更に創造力やチャレンジ精神を持ち、
前に進み続けて下さいなのです」

「私達の代とは違う、貴女方の学院生活を、どうか貴女達の手で造って下さいなのです」

「私達は姉として、貴女達が素敵な学院生活を送れるように祈っていますです。
どうか、聖應女学院の生徒で良かった。と、胸を張って言える妹達でいて下さいなのですよ。
これを最後の言葉として、ここに答辞とさせて頂きますです。
卒業生代表。第７４代エルダー・シスター、周防院　奏」

あっと言う間に卒業式が終ってしまった。

本当に奇跡と夢の様な一年だった。

そして、風に吹かれて散る桜を後ろに、卒業していくお姉さま達と一緒の写真を取る事になった。

それは良いんですが…

何故に私が中央？

普通は卒業生が中央なのでは？

良いのかそれで？

「では皆さん撮りますよ？1たす1は？」

「「「「「「「「に～」」」」」」」」

ちょw

なにそのベタなギャグは…

「司ちゃん」

奏お姉ちゃんが呼んでいます。

「はい？」

「1年間色々有難う御座いました司ちゃん。再来年は貴女がエルダーになるのでしょうね・・・

そうしたら、瑞穂お姉さまや紫苑お姉さま達と一緒に見に来ますね」

「ぇ？」

寮に戻りまどろんでいると何時の間にか眠ってしまっていた。

久しぶりに姉さんが夢で出てきた。

「元気？お姉ちゃんはある意味元気だよ。司ちゃん、ああごめんね。本当は咲ちゃんなんだよね。

今咲ちゃんがいる世界は、ある意味現実だよ？

飛ばしたのは、私が神様にお願いしたからなの。私の我侭に巻き込んじゃってごめんね。

理由？貴女はあっちの世界では苦しみ過ぎたの。あのままでは貴女の心は壊れてしまうと思ったわ。

ただ、いきなり訳の分からない世界に飛ばされても混乱するでしょ？だから私がこの世界の事を咲ちゃんに夢で教えてあげたの。要らぬお節介だった？

後、私の事を思い出してくれるのは嬉しいけど、それに囚われているのは駄目よ？

じゃあ、又夢の中で会いましょう」

√A　END

第十章　別れと新しい出会いの季節　√B（前書き）

√Bは√A第二話の冒頭からの話です。
後半の部分が違うだけです。

第十章　別れと新しい出会いの季節　√B

「只今より、第百十一期、卒業証書授与式を執り行います」

学院長の声がスピーカーに優しく響く。

式そのものは、これと言ったハプニングも無く、卒業して行く生徒達の名が呼ばれ、
卒業証書を受け取っていった。

式中にすすり泣く様な声はあちこちから聞こえてくるが、決して不快にはなれない。

流石はお嬢様学院なのだろう。こう言った所にも礼節をわきまえている様だ。

そして、私の送辞を言う順番が来た。

「送辞。卒業生のお姉さまがた、本日はご卒業誠におめでとう御座います。
良きお姉さま達に出会い、私達在校生は幸せな一年であったと思います。
色々な思い出を糧に、私達は新しい一年を日々良く日にすべく努力していく事でしょう。
良い一年間の思い出を、本当に、本当に有難う御座いました。
在校生代表。１－Ａ、神加賀美　司」

続いて、卒業生の答辞。これは伝統に従って奏お姉さまが行う事になった。

「まずは在校生の皆様、心のこもった送辞を頂き、有難う御座いましたなのですよ。
卒業生を代表して、お礼を言わせて頂きますなのですよ。
私達はこれから、それぞれの道に向かって旅立ちますが、どうか皆さんは、
聖應の良き伝統を引き継ぎながら、その上で、新しい事に挑戦して行って頂ければ、
それは、とても素敵な事だと思いますなのですよ」

「先生方にもお礼申し上げますなのですよ。無事こうして卒業式に臨む事が出来るのも、
先生方のお陰です。そして在校生の皆様。聖應の生徒らしい礼節と節度を持って、
でも、それは保守的でつまらないと言う訳ではありません。
そう言う基本を礎(いしずえ)として、更に創造力やチャレンジ精神を持ち、
前に進み続けて下さいなのです」

「私達の代とは違う、貴女方の学院生活を、どうか貴女達の手で造って下さいなのです」

「私達は姉として、貴女達が素敵な学院生活を送れるように祈っていますです。
どうか、聖應女学院の生徒で良かった。と、胸を張って言える妹達でいて下さいなのですよ。
これを最後の言葉として、ここに答辞とさせて頂きますです。
卒業生代表。第７４代エルダー・シスター、周防院　奏」

あっと言う間に卒業式が終ってしまった。

本当に奇跡と夢の様な一年だった。

そして、風に吹かれて散る桜を後ろに、卒業していくお姉さま達と一緒の写真を取る事になった。

それは良いんですが…

何故に私が中央？

普通は卒業生が中央なのでは？

良いのかそれで？

「では皆さん撮りますよ？1たす1は？」

「「「「「「「「に～」」」」」」」」

ちょw

なにそのベタなギャグは…

「司ちゃん」

奏お姉ちゃんが呼んでいます。

「はい？」

「1年間色々有難う御座いました司ちゃん。再来年は貴女がエルダーになるのでしょうね・・・

そうしたら、瑞穂お姉さまや紫苑お姉さま達と一緒に見に来ますね」

「えぇっ？」

ーーーーーーーーーー　暗転　ーーーーーーーーーー

ベッドの上で目が覚めた。

あれ？

何でベッドの上？

ここって私の家…？

部屋を見回しても聖應女学院の制服は無かった。

どうなってんの？

扉がノックされたので返事をすると、死んでいる筈の姉さんがそこにいた。

「え？」

「どうしたの咲？」

「ね、姉さん？」

「うんそうだよ？どうしたの本当に？」

「し…死んだ筈では…？」

「はぁ？貴女よっぽど変な夢見たのね」

「辺な事聞くけど、今日って何年の何月何日？」

「本当に変よ咲？西暦２０ＸＸ年４月ＸＸ日だけど？」

え？

ありえない。

姉さんは生きているし、聖應にいた筈の１年が発生していない。

どう言う事？

「じゃあ聖應女学院は……」

「どこそれ？とにかく朝食だから早く起きてね」

見慣れた家、見慣れたテーブル、見慣れた両親の顔。

ここまでは良かった。

でも他界している姉がいるってどう言う事？

両親に聖應女学院の１年間の事を話したら笑われた。

その1年が無いのだから当たり前。

更には姉さんが死んでいると言う話には「笑えない冗談だ」と一蹴された。

後で知ったのだが、私の右脚にも、左腕にも、何も無いのである。

右脚の接続面の傷跡も無ければ、左腕の見るも無残な焼け爛れすら無かった。

部下Aは未だに元気で父の会社で働いているし、ミスらしきミスも発生させていない。

1年間の入院も、4年間のリハビリも、それに付随する地獄も、全てが夢？

そんな馬鹿な…

あの奇跡の1年間が全て夢だったなんて…

玄関のチャイムが鳴らされた。

「咲、お友達が来たわよ？」

お友達？

誰の事だか分からなかったが、とりあえず私服に着替えて出ることにした。

「咲ちゃん。今日から私達の学院へ入学です。ですのでお迎えに来たのですよぉ」

え??

「奏お姉さま…」

そんな…奏お姉さまは夢の住人なのでは…?

「どうしたのですか?今日は変ですよ?由香里さんや、響姫さん。薫子ちゃんや初音ちゃん、香織理ちゃんと勢ぞろいなのですよ。後で紫苑お姉さまや、瑞穂お姉さまも来るそうです」

夢が夢では無かった。

どこまでが夢で、どこからが現実なのかがもう分からない。

でもこれだけは言える。

『私の奇跡の学院生活は、まだ続く様である。そして私はここで生きていける』

第十章　別れと新しい出会いの季節　√B（後書き）

挿入話込みで全８２話。
これにてＦｉｒｓｔ　ｓｅａｓｏｎ　は完結致します。
いずれＳｅｃｏｎｄ　ｓｅａｓｏｎ　にてお会い出来ると思います。

尚、ミニドラマの挿入話に関しては、Ｓｅｃｏｎｄ　ｓｅａｓｏｎ
に絡む可能性が大いに発生する為に中止しました。

こんな駄文にお付き合い頂き、有難う御座いました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5931p/

乙女の世界に飛び込んで

2011年11月2日12時07分発行